海外小説の誘惑

黒い時計の旅

スティーヴ・エリクソン

柴田元幸＝訳

白水uブックス

0. 8. 3 1

CamScannerでスキャン

二十歳のゲリは流れるような金髪、端正な顔立ちにさわやかな声、明るい性格で男たちを魅了した。ヒトラーはまもなく彼女と恋に落ち、どこへ行くにも一緒に連れて回った。会合や閣議、長い山歩き、ミュンヘンのカフェーや劇場。一九二九年、ミュンヘンでもっとも華やかな大通りのひとつプリンツレーゲンテンに、九部屋から成る豪奢なアパートメントをヒトラーが借りたときも、ゲリはそこに個室を与えられた……

ヒトラーが彼の姪と結婚する気でいた可能性は大いにある。当時彼と親しかった古参の党同志たちも後日……結婚は不可避に思えた、と語っている。ヒトラーが彼女を深く愛していることは疑いなかった。彼女の方の気持ちについては推測するほかない……彼女もまた叔父を愛したかどうかは知られていない。おそらくそうではなかったであろう。少なくとも終局においてそうでなかったことは確かである。原因も本質もいまだ明らかにされていない、何らかの深い溝が二人のあいだに生じたのである……

叔父と姪の恋愛に影を投げたものが何であれ、彼らの口論は次第に激しくなっていった。そしてついに一九三一年の夏の終り、ゲリはウィーンへ戻って声楽の勉強を再開したいと言い出した。ヒトラーはそれを許さなかった。派手な喧嘩が起きた。これには隣人の目撃者もいる……翌朝ゲリ・ラウバルは自室において死体で発見された。死因は射殺。徹底的調査の末、国家検事は自殺という結論を下した……

CamScannerでスキャン

ヒトラーは悲嘆に暮れた。グレゴール・シュトラッサーがのちに述べたところによると、自殺を妨げるため、事件後二日二晩ヒトラーに付き添っていなければならなかったという。ゲリがウィーンで埋葬された一週間後、ヒトラーはオーストリア政府から特別許可を得て同地へ赴いた。そして墓の前で夜通し泣き明かした。何か月ものあいだ、いかなる慰めの言葉も彼の耳には入らなかった。

ゲリの死の三週間後、ヒトラーは帝国首相の地位を狙っていた。ヒトラーは〔ドイツ大統領〕ヒンデンブルクと初めて会見する。当時ヒトラーは帝国首相の地位を狙っていた。国家の要職を目ざす初の企てが成功するか否かを左右する、このきわめて重要な会合での彼の取り乱しぶりを見て——会見中彼は気もそぞろで、ナチの指導者としての心証を大いに悪くしたという——事情を知る者たちはみな、愛する姪を失った痛手が原因だと考えた。

……彼はのちのちまでずっと、ゲリ・ラウバルこそ自分が愛した唯一の女性だと告白しつづけている。この上なく深い敬意をこめて——しばしば涙とともに——彼女について語り……ベルリンの首相室にはこの若き女の肖像がつねに飾られ、毎年彼女の誕生日と命日が巡ってくるたびにその下に花が置かれた。

他人を愛する能力をまったく欠いていたように思える、残忍で冷酷な人間ヒトラーが、若きゲリ・ラウバルをかくも情熱的に愛したことは、彼の数奇な人生の中でも最大の謎の一つである。謎というものがみなそうであるように、この謎もまた合理的に説明することは不可能である。我々はただそれを物語ることができるだけだ。こののち、十四年後にみずから命

を絶つ日まで、ヒトラーが結婚ということを一度も真剣に考えなかったことはほぼ間違いない。

――ウィリアム・L・シャイラー
『第三帝国の興亡』

CamScannerでスキャン

1

本土の船着場とダヴンホール島を行き来するあいだ、いつも一瞬だけ、船着場も島も見えなくなる瞬間があった。その瞬間には、霧に包まれて水上に浮かぶ彼の船以外、もはや何ひとつ存在しなかった。空から太陽がなくなっても、国と名のるものがすべて消滅してしまっても、何も変わりはしなかったことだろう。この仕事にありついた当時、マークはまだこの瞬間の存在に気づいていなかった。ジーノ老人を手伝って、観光客を乗せて本土と島を日に三往復するのが彼の仕事だった。老人は彼が来た七週間後に死んだ。マークは老人の商売を受け継いで、初めて一人で船を出した。そしてその瞬間に入り込んだのだった。霧深い甲板に立ち、何も知らぬ顔の旅行者たちに囲まれて、彼はもう少しで口に出しかけた——僕は宇宙のどこにいるのだ？　と。やがてダヴンホール島の輪郭が、灰色の空間の中に現われた。その後の日々、この瞬間は船着場から島のあいだのいかなる地点でも起こりうることがわかった。まん中あたりで起きることもあれば、島に着く寸前のこともあった。そんなとき島は突如ぬっと目の前に姿を現わし、川べりの土手に船をぶつけてしまうのではないかと思えるほどだった。時には最後の最後までその瞬間は訪れず、今日はもう起こらないのだろうと思うこともあった。その瞬間が来ると、彼はいつも恐れと侘しさに襲われた。彼は船上の観光客を見回した。彼らはみんな揃って予定表と睨めっこをしている——いかなる予定表も無意味であるこの瞬間、いつか別の時間、どこか別の場所の時計から盗んできた死海文書と同じくらい無意味であるこの瞬間に。それはこの瞬間に先立つ場かもしれないし、あるいは来たるべき瞬間の

場かもしれない。いずれにせよこの瞬間の場所ではない。いまこの瞬間に属する場ではないのだ。

2

この瞬間こそが、無垢の人生における最初の転落となった。マークはダウンホール島のダウンホール・チャイナタウンで生まれ育った。彼は町で唯一の白人の子供で、母親は町で唯一の白人女だった。父親はおおかた、町にふらりと流れ着いてはいずれまた去ってゆく白人男たちの一人だっただろう。マークが永久に島を去った――少なくとも本人は永久に島を去ったつもりになった――そのおよそ二十年前に、一介の旅行者として現われた男だったろう。マークの瞳は緑色で、髪は月のように白かった。黄色いのではない。白いのだ。生まれてこのかた、その髪は一度も色づいたことはなかった。小さい頃に彼は、ホテルの二階の母の部屋にある鏡の前に座って――ホテルは本通りのまん中、グリーク・ジュディの店の向かいにあった――両目の端を横に引っぱり、町に住むほかの連中の目みたいに細長くしてみたものだった。自分の遺伝子に問題があるなどとは思わなかった。僕はただ、暗闇の中に生まれ落ちてしまっただけなのだ。暗闇では、目を細める必要もありはしないのだから。彼の髪のあらゆる色を吸い取ってしまった暗闇。きっと母親も似たような闇の中に生まれ落ちたにちがいない。だがそれは彼の暗闇ほど捉えがたくも底なしに深くもない闇だ。母の髪は彼のように純白ではないからだ。ただ一点、上唇の端の小さなあざを除けば、母にはどこも真っ白なところはなかった。やがてマークにとって、この小さなあざが母親という人間を何よりも明らかに表わすようになる。彼はあざを見て母の気持ちを推しはかるようになった。あざが伝えて

いると思えるものを読みとって、母の気持ちを読みとった気になった。鏡の前で彼が中国人の真似をしているのを母親が見かけたとき、あざは愉快と懸念の中間あたりの表情を浮かべた。それを見た彼は、それっきり中国人の真似をやめた。

夜になると彼女はミルクを暖め、奇妙な訛りで本を読んでくれた。多くの言語が織りあわされてひとつのジャングルを形成しているような訛り。本の内容には二人ともまったく興味はなかった。彼女がそれを読み上げる音だけが彼らの関心事だった。それは彼女にしては珍しく母親的な行為だった。といっても、母親としての意識が彼女に希薄だったというのではない。ただ、彼の誕生はあまりにも予想外だったのだ。彼を生んだとき、彼女はもう孫がいてもおかしくない年齢だった。理論上あり得ないことではないが、現実には疑わしい齢に達してから出産したのである。だから彼女にとって、彼はいわば理論上の子供という感があった。自分の想像力が生んだ途方もない虚構を見守るかのように、彼女は子供を観察し、吟味した。自分に対し容赦なく正直になれたときには、こんな状況で私がこの子を深く愛するということが本当に可能なのだろうか、と自問したりもした。その問いの答えを出す気になれるほど正直になれたことは一度もなかった。だが、もしそれだけの勇気が持てたとしたら、イエスという答えが出たということも大いにありうるだろう。いずれにせよ、ミルクを暖め本を読むという行為を通して、彼女は自分の想像力の中に踏み込んでゆき、臆することなくその場に参加したのだった。

やがて彼女は眠りに落ちていった。時には彼のベッドに座ったままで。マークはときどき母親が少し酔っているのではないかと思うことがあった。そんなとき彼は眠らずに考えごとにふけった。黒い天井をじっと見つめて横たわっている一人の少年。廊下から足音が聞こえてくるのは決まってそんな時だった。彼は身を起こし、ドアの下のすきまから差し込む光を見る。そして足音に耳を澄ませ、それがドアの前で止むのを聞く。彼が知る限り、ホテルにはマネージャー以外誰も住んでいない。それにマネージャーの小柄な中国人女は絶対に何も喋らず、姿さえ見せない。だいいち廊下の足音は大柄な人間のものだ。ものすごく大柄の。何年にもわたって、真夜中に、寝室のドアのすぐ向こうに、彼はこの見えない巨人の足音を聞きつづけた。僕たち以外に誰かがこのホテルに住んでいるよ、と彼は母親に言った。「誰かって?」と母は訊いた。もし母親が単に、まさか、と打ち消したなら、母が嘘をついていることに彼も気づいただろう。

夜中に廊下から聞こえてくる足音。冬の木々。米屋の裏手に置かれた製氷機が立てる、ぎいぎいと締めつけるような音。それがダヴンホール島における彼の生活の音だった。製氷機は白黒二色の、それ自体で完結した一個の機械だった。それは四角い氷の塊をペッペと地面に吐き出した。その氷を切り分け、バーで出すバーボンに入れて使うグリーク・ジュディ以外、次々に出てくる氷のことを気にかける人間は誰もいなかった。ジュディはまだ若い女で、何年か前に相続した酒場を一人で切盛りしていた。本当の名前はガルシアといって、別にグリーク(ギリシャ人)らしいところがあるわけではなかった。氷は彼女が手を出さない限り、きらきら光るガラスのように横たわって、やがて町の土にとけ込んでいった。グリーク・ジュディの酒場は、ジーノ老人の船に乗ってやって

来た旅行者たちを相手に、バーボン、ビール、ステーキ・アンド・オニオンを出した。午後四時以降、透明な東洋的沈黙のただなかにあって、凝縮された生命の赤い怒濤がバーからあふれ出た。マークは時おりこの店で、親に連れられてきたよその子供たちの姿を見かけた。そして最後の船が本土に戻ってしまうと、店内を回って、彼らが忘れていった持ち物を漁った。彼はそれを通りの向かいにあるホテルの二階の、自室のベッドの下に隠した。何年ものあいだ、彼はずっと、これら外の世界の物たちは母の意志にそむく密輸品なのだと思い込んでいた。だが実は母親は何もかも知っていた。ただ彼女は、秘密というものの魅惑が子供にとっていかに必要であるかを認識していたのである。

4

彼女は知っていた。マークがいずれ出ていくだろうということを。十一歳の時、彼は修道士になろうという考えに取り憑かれた。彼は毎日、地面に落ちた氷の塊を使って、小さな聖堂を作った。しばらくすると修道士熱はあらかた醒めてしまったが、氷の聖堂だけは後まで残った。マークは聖堂の上に寝そべり、氷の塊がぱちぱち融けていく音に耳を澄ました。それは時計がカチカチ鳴る音に似ていた。ずっと後になって、彼は母親の脚のあいだに解放を見出した男たちを許すに至る。だがそれは何年も先、船で島と本土を行き来するようになってからである。そして母を許すようになるのも、まだ何年も先の話である。

5

グリーク・ジュディがダウンホールの中国人たちと交わした唯一の交渉は、町の北にある墓地の木に吊した死体をめぐるものだった。町は本通りを六、七分も歩けば縦断できてしまう。島全体は、季節にもよるが、徒歩十二分から十五分といったところである。秋の長雨の季節になると川の水が墓地にあふれ、島の北端が縮んだ。ある日の午後、逃げる間もないほどすさまじい勢いの嵐がやって来たときの光景をマークは覚えていた。青い泡が湧き上がって墓石たちを包み込み、想像もつかないような何ものかが土の中から這い出てきた。ダウンホールの中国人農民たちのあいだでは、死者を埋葬する前に、その死体を墓場の木にしばらく吊しておく風習があった。それは数日のこともあれば、数週間に及ぶこともあった。末期の時を迎えた者が、自分の名前を口にすることなく息を引きとった場合、その人間の本性は死の訪れとともに肉体から離脱してしまう。そういう死体をそのまま埋めてしまうと、霊魂は生と死のはざまを永久にさまよいつづけねばならない——農民たちはそう信じていた。そこで葬式のたびに証人が呼ばれ、故人が死の間際に自分自身の記憶を肉体にしかと刻みつけたかどうかを確認するのである。証人が現われなければ、死体は墓場の木に吊され、宇宙がその人間の名を空に書いてくれるまで放っておかれる。空に文字が浮かべば、死者はそれを読んでおのれの名前を口に出すことができるというわけだ。時にはずいぶん長いこと吊されっぱなしの死体もあった。だがいずれは、誰かがふらりと町にやって来て、みんなに「今日あいつの声を聞いた、あいつが自分の名前を言うのを聞いたぞ」と報告し、人々はそれで満足して死

体を埋葬するのだった。夏のあいだ、とくに暑さが厳しいときなどは、死体が自分の名を思い出すのもずっと早まる傾向があった。住民たちは大きな字で自分の名前を書いた名刺大のカードを枕元のテーブルの上に常備しておくようになっていた。突如死の瞬間が訪れて、頭が麻痺し自分の名がとっさに思い出せなくなっても、カードに書かれた名前を大声で読み上げれば、近くを通りかかった人が聞いてくれるだろう、という配慮である。だが青い泡が上ってきて墓石を包み込むのを見たとき、マークは知った。ダヴンホールの沼地の冷たいじめじめした土の中でまどろむよりは、木に磔(はりつけ)にされている方がまだましだと死者たちが思っていることを。見る見る水位を上げてゆく川の下から浮かび上がった死者たちは、おのれの記憶を脱ぎ捨て、空と、淡いローズ色のしみのような日没と、宇宙の文字とを前に、記憶をなくした自由の身となってみずからを弔さんとした。その日、木造の小屋の軒下で体を丸めて雨をしのぎながら、百人の死者の青い記憶が川へ向かって漂い、ついには空しく破裂するのをマークは見た。そのとき彼は決心した。自分の中のありったけの無垢をかき集めて、それをこの町を永久に去るという目標に注ぎ込もうと。

6

母親の足元に見知らぬ男の死体が横たわっているのを見た夜、マークは十九歳だった。彼はそのまま回れ右してホテルの階段を降り、本通りに出て、桟橋に行った。本土行きの最後の船はまだ出ていなかった。こうしようかと考えてみたことはいままでにも何度かあった。が、度胸が想像に追いついたのはこれが初めてだった。彼は何年も前からジーノ老人を見守っていた。川風に痛め

つけられた赤ら顔。すすけた金ボタンのついた長い青色の外套。老人は毎日毎日、ほとんど人間を思わせる小さな船で本土と島を行き来し、長年のあいだに、数千人にのぼる観光客を、黒と琥珀色の光に包まれたグリーク・ジュディの酒場まで運んでいた。その夜、闇の中で少年が船に乗り込んできたとき、ジーノは彼を一目ちらっと見たきりだった。霧に包まれ、混みあった船上で、少年はジュディの店のバーボンが匂う息に囲まれて身を固くしていた。が、二十分を要する航路のある時点で、老人はマークのいる方に目を向け、何か一言つぶやいた。「ふうむ、ずいぶんと白い髪だのう」と言ったように聞こえた。

本土に着くと、旅行者たちはぞろぞろと船を降り、二十マイル北の町サムソンへ彼らを運ぶべく待ちうけているバスに乗り込んだ。たとえもし乗車券を持っていたとしても、マークがそのバスに乗らなかったということは十分考えられる。おそらくはまたしても度胸が想像に立ち遅れてしまっただろうからだ。いまのところはまだ、取り返しのつかない一線が越えられたわけではなかった。だがいずれにしろ島に戻る船は翌朝まで出ない。かくして彼は陸に立ちつくし、最終バスの灯がハイウェイに消えていくのを見守り、それから肩ごしに背後の川と、ぽつんと取り残されて立っている船着小屋とを眺めた。事情を察したのか、船着小屋の入口に立ったジーノは、窓のかたわらのガス灯に火をつけ、マッチを吹き消して階段に投げ捨ててから、少年の白い髪に向かって「ぜんたい、どういうつもりかね?」と呼びかけた。僕はもう、と少年は答えた。あの島に十分長く暮らしたと思う。もうあそこから遠く離れる潮どきなんだ、と。「まあ今夜は無理だな」と老人は答えた。そして少し間を置いて、「中へ入れ。何か強いやつを飲みなさい。朝一番の船で送り返してや

ろう」と言った。
中へは入るし、酒も飲む、とマークは答えた。でもあそこへは戻らないよ。
船着小屋に入った二人は、ランプの灯でトランプをした。老人は青い外套の金ボタンを賭けた。といっても彼は露骨にインチキをしたから、それを失う危険は少しもなかった。少年にさんざん非難されながら、老人は壁に寄りかかったまま寝入ってしまった。
マークは翌日サムソンに行かなかった。代わりに老人と一緒に島へ戻った。老人が予想した通りである。ただし彼は島の土を踏むことを拒んだ。三往復のあいだ、彼は老人と、相も変わらずバスから乗り込んでくる旅行者たちとともに、船上にとどまっていた。島に着いても町に出ようとはせず、ジーノがビールを買いにジュディの店へ行っても甲板の上で待っていた。一度、遠くの方に、母親が本通りを歩く姿が見えた。見覚えのある着古したサーモンピンクのドレスを着て、例によって両腕を前に組み、顔にはいつものようにきっとした、測りがたい表情を浮かべていた。町に立ちのぼる埃を背景に、母親の長い髪が見えた。かつては黄銅が褪せた感じの色だった髪も、いまはすっかり灰色である。マークは船の甲板の、川に面した側にかがみ込み、町と島から身を離していた。そして手すりごしに体を乗り出して、片手を水中に差し入れ、つかまえる気もない魚めがけてさっと手をつき出すのだった。

7

マークは次の日もサムソンに行かなかった。その次の日も行かなかった。相変わらずジーノ老

人とともに船で島へ行き、甲板に身を丸めたまま決して陸に上がろうとしなかった。ジーノは彼に、料金を集める仕事を与えた。水面に身を乗り出しすぎている客に注意したり、川の中に何がいるのか客たちに嘘をつくのも彼の役目になった。ある週はワニがいるかと思えば、次の週はピラニアだった。老人はマークに、複雑な水流の中で船を操るこつを教えた。時おり、島へ向かっている途中、霧が一瞬晴れて、島全体が見渡せることがあった。それはマークが初めて目にする島の全貌だった。島の彼方、島を囲む細長い川の彼方に、川の向こう岸が見えるような気さえした。遠くで、水上高く掛けられた鉄橋を、赤い汽車が渡っていった。向こうの草原に見える埃のような姿は、毛足の短い銀色の野牛の群れだ。世紀末の十年間のそのまた最後の時期に、どこからともなく現われた野牛たちである。「あれは食えん」とジーノは言った。「どんなに腹が減っていてもな」。目から火が出て、都会の目抜き通りみたいになっちまう」。島の先端を過ぎたあたりには、小さな避難小屋の残骸があった。木の杭に載って川の上に立つその小屋は、マークが生まれる前に起きた火事のせいで黒焦げになっていた。少年の目にも、地獄の煙がいまだに見える気がした。母親を含めて、その火事については誰一人語ろうとしなかった。火事のこと何か知ってる？ と彼は老人に訊いた。「わしが口を出すことではないな」と老人はつぶやいた。

8

何週間か経ったある夜、マークは老人に言った。これじゃなかなかサムソンに行けないよ。「わしのせいみたいに言うな」とジーノはきつく言い返した。「わしはお前を止めちゃおらんぞ」。だっ

CamScannerでスキャン

て、としばらく考えてから少年は言った。バスの切符がないんだ。「切符代ならわしが出してやる」とジーノは言った。「明日にでも行くがいい。わしは止めちゃおらんぞ」。あんた金なんかないじゃないか、と少年は言った。あんな船賃、いくらにもならないじゃないか。だいたい連中から五十セント取るだけで、よくやって行けるよな。いったいどういう商売だい、これ？「わしの商売だ、どういうも何もあるか」と老人は答えた。「船賃なぞどうでもいいんじゃ。小遣い銭だよ。わしの収入は大方ジュディのところから来とるんだ。店のあがりの歩合を受け取るんだよ。わしはジュディに観光客を連れていく、ジュディはわしが客を連れていく場所を用意する、そういうことだ。わしの商売だったら心配要らん」。彼はマットレスの下からカンバス地の袋を引っぱり出し、古びた薄汚い紙幣を数枚と、大量の小銭を中から取り出した。少年は顔をそむけ、節くれだった手に金を握って立っているジーノから目をそらしたまま、ストーブの火を起こし、ガス灯をつけた。ジーノはこれ見よがしに金を振りかざしていた。マークの頭はぼうっとし、ずきずき痛んだ。さっきの船の客たちが飲んだ酒と、船のエンジンの排気のせいだ。でもあんたはどうなる？　相変わらずジーノから目をそらしたまま、彼はやっとのことで言った。金はいまや床に放り投げられていた。「馬鹿言うな、わしはお前なしで四十年やってきたんだ」とジーノは言った。二人は腰を下ろし、一緒に酒を飲んだ。ようやく船着小屋の中が暖まってきた。だがじめじめした湿気だけは絶対になくならなかった。火が消え、少年はもう一度薪をくべた。二人がまだ寝入らないうちにふたたび火が消えると、マークは言った。あと二日。そしたら僕は行くよ。老人はうなずいて、つぶやき返した。「いいとも。何なら明日行っても構わんぞ」。ジーノが眠ったことを確信すると、マーク

CamScannerでスキャン

は言い足した。だいいちあんたはトランプでインチキするじゃないか。目を閉じると、老人の声が聞こえた。「いいとも、明日行けばいい。わしは止めちゃおらんぞ」

9

さらに二日が経った。マークはまだ去っていなかった。それから間もなく、霧の向こうから太陽がつかの間顔を出した日の午後、老人がどさっという音とともに、船の側面に置いてあった果物箱の上に倒れ込んだ。指のあいだから三十枚、四十枚の二十五セント貨がこぼれ落ち、甲板の水たまりの上をころころと転がっていった。マークはとっさに、それらを拾おうとひざまずいた。そして何気なく老人に目を止めると、そこで初めて老人の顔が自分の髪と同じくらい白くなっていることに気がついた。帽子をかぶりカメラを首にかけた太っちょの男が、「その人、大丈夫かい？」と言いながら二十五セント貨を拾いはじめた。マークはジーノの肩を揺すり、おい、と言った。反応はなかった。爺さん？　と少年は言った。依然何の反応もない。大変だ、と少年は叫んだ。ジーノを介抱するか、船の舵を取るか――いまや船は大きくコースを外れ出していた――どっちを先にすべきか、少年は迷い切ってしまった。乗客たちは訳がわからず、きょろきょろあたりを見回していた。ようやく老人の呼吸が戻ってきた。老人は顔を上げ、茫然とした目つきでまわりを見た。だが体はまだ動かなかったし、言うことも脈絡がなかった。船が陸に着いても、脚の感覚が麻痺していた。マークは老人を船着小屋の中に運び込み、マットレスの上に寝かせた。その日の残りの運行も中止した。帽子とカメラの太っちょと、二十五セント貨をくすねたくすねないのと喧嘩になった。

CamScannerでスキャン

「だいたい戻るのに金を取るのがおかしいんだ」と男は抗議した。「人は元いた所に戻る権利があるはずじゃないか」。おれの川では違うね、とマークは言った。

翌日ジーノは二往復のあいだ船に乗った。だが脚はまだ具合が悪かったし、同じことをくり返し言ってやらねばならなかった。そして今度は手すりに倒れ込み、危うく川に落ちるところだった。その後数週間、船はまったく走らなかった。いったいどうしたのかと、ジュディが様子を見にやって来た。「知らせてくれてもよかったのに」と彼女は言った。島に行くのは御免だね、と少年は言い返した。二人は医者を呼ぶ相談をした。ジーノはマットレスに横になってそれを聞いていた。「医者なんか要らん」頭が比較的はっきりしてくると彼はしゃがれ声でそう言った。

マークはその晩夜中に目を覚ました。ガス灯の光は点のように小さかった。暗闇の中でジーノの声がしていた。生が死をごりごり引っかくみたいな、ひどくか細い音だった。「あれはわしが火をつけたんだ」と彼が言うのが聞こえた。「聞いてるか？ 川の上の、杭に載った小屋だ、四十年前に……」。しばし沈黙があった。暗闇の中、船着小屋の一方の端から、マークは老人が喋ろうとしてもがいているのを感じとった。無理しないほうがいいよ、と彼は言いかけたが、その前に老人が言った。「何も言うな、黙って聞け。わしは……聞いてるか？ あれに火をつけたのはわしの手だったんだ。いまになって誰かに話さずにおれん。なぜなら人が一人死んだからだ。男が一人、焼け死んだんじゃ。都会の男だ。ギャングだか私立探偵だか、そういう奴だった……お前のおふくろさんが知っとる。その男はお前のおふくろを探しに来たんだ。あいつはあの川の上の小屋で待っておった。夜あいつが眠ってから、わしはあそこに火をつけた。なんであんなことをしたのか、自分

CamScannerでスキャン

でもとうとうわからずじまいだった。だからわしはあの男の灰を魂に抱え込んでおるんだ。誰かに話さずにおれんのだ。お前のおふくろが知ってるだけじゃ足りん。あの女は秘密を抱えたまま死ぬだろう。あれ以来わしとは一言も口をきこうとせんのだからな。こんな秘密を抱えて死ぬわけには行かんのだ……」。老人がぜいぜい喘ぐのが聞こえた。老人はいまや深い奈落に沈みかけていた。何とかしてそこから引き戻そうと、マークは彼に喋りつづけさせようとした。爺さん、と少年は呼びかけた。反応はない。爺さん？

10

老人を川に葬る――明白にして当然の行ないである。一週間も木にぶら下げておくなんて冗談じゃない。少年は真夜中にジーノを川に連れていき、泣きながらその体を船底にロープで縛りつけた。翌日、薄汚い金ボタンのついた青い外套を着て、彼は商売を開始した。彼の第一の決断は、料金を片道一ドルに値上げすることだった。何週間かが過ぎ、何か月かが過ぎた。船底に縛りつけたジーノのことを彼は次第に忘れていった。時おり水流に揺すぶられて骨がごとごと音を立てるときに、ふと思い出す程度だった。何の音だろうと、乗客たちは足元を見下ろした。だが、あの初めての瞬間、霧が四方から迫って水と蒸気以外には世界に何ひとつなくなったあの瞬間、新しい船長は老人のことをまだ忘れてはいなかった。一人取り残された彼は、僕は宇宙のどこにいるんだ？とみずからに問う。だがそれはいままでいつでも問いえた問いだ。生まれてずっと、彼はチャイナタウンという名の、水上に漂う船の上にいたのだから。にもかかわらず、これまでずっと問うことが

なかったその問いを、いま初めて問うことによって——まさにそのことによってこの瞬間が、無垢の人生における最初の転落の瞬間となったのである。

11

この転落から百の淫乱な夜が流れ出た。最初の夜がもたらしたのは、まっすぐな金髪を短く切って、眼鏡をかけた、どことなくボーイッシュな娘だった。娘は五百キロ離れた町の銀行に勤めていた。そもそも彼女がダヴンホール島にやって来たのも、まさに誰かが自分の人生を彼女の人生の中に流し込む瞬間を求めてのことだった。彼女はその日最後の便に乗った。手には両性具有の人間の模様が入ったハンドバッグを持っていた。船が島に着き、錨が下ろされ、二十分が経った。マークは甲板に寝転がって、観光客たちが戻ってくるまでの二、三時間が過ぎるのを待っていた。と、瞼の上に、彼女の暗いかたちがよぎるのが感じられた。太陽は出ていなかったから、それを影と呼ぶのは正しくないだろう。彼は目を開け、娘を見た。娘はたったいま生まれて初めて鳥を見て、生まれて初めて捕獲反応を感じた子猫のように、じっとそこに立っていた。「眠っていていいわよ」と彼女は言った。そりゃどうも、と彼は答え、しばらくうとうとしていた。が、やがて船が動いているのに気づいて目を開けると、娘はまだそこにいて、錨は切り離され、島はおよそ二十メートル向こうに漂っていた。彼女はシャツを脱いだ。「眠っていていいわよ」と娘はまたくり返し、残りの服を脱いで、眼鏡を外した。それから少しのあいだ、踏んぎりがつかぬまま膝をついていた。

彼は立ち上がり、彼女のそばへ行った。そして両手で彼女の頭を包み込み、顔を自分の顔に引き寄

せた。つかまる物を捜して彼女は手を伸ばし、はずみで甲板に倒れ込んだ。島がどこにも見えなくなるその瞬間のただ中、両手両膝をついて横たわった彼女が起き上がろうとしたそのとき、彼は彼女の中に入っていった。二人を乗せた小さな木の惑星を彼女が両の拳でごんごん叩くと、下でジーノの骨がそれに応えてかたかた鳴った。それからというもの、相手は無数に現われた。二週間に一人はかならずいた。秘書や教師、家出妻、浜辺にたむろする娘やセラピストや共産主義者、行方不明の叔父を捜す東洋人、町会議員にネックレス販売員、写真家、映画編集者、南米美人コンテスト準優勝者。美しい女たち、そうでない女たち、いかれた女たち、神経症、議論好き。しばらくずっと一人の女とつきあったこともあった。サムソンからオートバイでやって来る、気の強い小柄なイタリア娘だった。背は一メートル五十五、奔放な茶色の髪、女優ばりの脚、低い声。家族と一緒に暮らしていて、絶対に泊まっていこうとしなかった。彼女が十六歳であることをじきに彼は知った。船の甲板の上で、霧に守られ陸から切り離されて、二人は裸になって彼の青い外套の上に横たわった。彼は彼女を口に入れ、彼女を飲んだ。彼らはたがいの姿が見えなくなってしまう黒い川の中に落ちていった。指が見つけ出すあらゆる場所から、彼は娘の中に入っていった。三か月後のある日、島から戻る船の上で彼女は一人のフリーライターと知りあい、男をオートバイの後ろに乗せて、両親に引きあわせるべくハイウェイを下っていった。野性のイタリア娘がこうしていなくなり、しばらくのあいだ彼は一人の身となった。だがじきまたすべてがはじまった。時には見覚えのある気がする娘たちも混じっていた。前にも会ったことがあるかどうかさりげなく訊ねる言い方も思いつかなかったし、女たちの方もみんなあまり喋らなかったから、結局いつもわからずじま

CamScannerでスキャン

いだった。だがケリーとシリーズについては、間違いなく初めてだと確信できた。二人は隣の隣の州にある、リゾートタウンのカジノで働いていた。ケリーはぽっちゃりした体つきで、髪は赤みがかった金髪。口紅をべったり塗りたくり、彼女の口の上を漂う霧までが、赤く筋を描いて流れていくように思えた。桟橋で一ドルを受け取ったときから、彼女がすでに酔っていることを彼は見抜いた。笑い声の奥にうがいの音みたいな濡れた感じが聞き取れたし、まっすぐ立っているのも覚つかなかった。シリーズは物憂げな雰囲気を漂わせた黒髪のイラン人だった。ひどく官能的な美人で、観光客たちはみなケリーそっちのけで彼女を追いかけ回した。そのせいでケリーの酔いはいっそうひどくなるようだった。島に着いたら店じゅうの酒を片っ端から飲んでやる、と彼女は息まいた。頭に来ちゃうわよ、シリーズばかりあんなにもてて。日が暮れ、シリーズに連れられて戻ってきたときには、ケリーは船に乗り込むにも一苦労だった。本土へ戻るあいだに少しは酔いも醒めたようだったが、陸に着くと結局シリーズと一緒に船着小屋に腰を据え、変わり者の船長と一緒に酒を飲むことになった。ガス灯が低く燃え、三人はトランプをした。やがてケリーは裸になってマットレスの上に転がってゆき、なかば意識を失って横たわっていた。シリーズはほとんど悪意さえ感じさせる従順さで彼の上にまたがった。そして彼が両手一杯に彼女の壮麗な胸を抱え込むなか、馬乗りの体を揺すぶっていた。ほぼ一時間も乗りつづけたあと、彼女は陰気な恍惚に達した。彼はまだ果てていなかったが、彼の船長たる彼女は、船を見捨ててマットレスの方に移っていった。ガス灯の影の片隅で、ケリーが何かぶつぶつ言った。おれは終わっちゃいないぜ、と勃起したまま彼はシリーズに言った。シリーズは肩をすくめ、友人の方に目をやった。そして頭を一瞬傾け、ケリー

の体が床をずるずる滑っていくのを見てこっくりうなずいた。彼はケリーのぽっちゃりしたピンク色の体をつかみ、腹ばいに転がし、その体を開いて上にまたがった。いきなり後ろから犯されて、ケリーは驚いたようにぽかんと口を開けた。「押さえていてあげる」とシリーズが言って、ケリーの両手首をつかんだ。やがてケリーは大声を立てはじめた。何を言っているのかよくわからなかった。そして彼の下でさんざん手足をばたつかせたが、シリーズがしっかりと押さえつけていた。誰かがブランデーの壜を蹴飛ばした。「ケリーにはあとで許してもらうわ」とシリーズは説明するように言った。「あなたがひどいケダモノだったことを話して、二人で慰めあうのよ」。シリーズがそう言ったとき、ガス灯の光の中に彼女の顔が浮かび上がり、その瞳がたたえる深いペルシャ的な熱さの中に自分が落ちていくのを彼は感じた。彼の中から何もかもが流れ出ていった。一瞬のあいだ、それを流し入れたのは彼女の中にではないことも忘れていた。彼はよろよろと反対側の壁のところまで行った。そして恐怖の念とともに感嘆するほかなかった——彼と交わった彼女が、その熱く白い余韻を自分以外の体の中に残していったことを。その夜遅く、闇の中で彼が目を覚ますと、ケリーが半狂乱になって小屋の中をのたうちまわっていた。ケリーはドアを開け、外へ消えていった。少し経ってシリーズもあとを追った。彼はあとで、二人が戻ってくるのを聞いたかどうかも思い出せなかった。だが彼は知っていた。自分の中に、トランプでいかさまをやったことをやましく思うだけの、ほんの一かけらの無垢がまだ残っていることを。翌朝、カジノの女たちはもういなかった。横倒しに転がった空っぽのブランデーの壜だけが、昨日の夜の唯一の証拠だった。

CamScannerでスキャン

12

十五年が過ぎた。暗闇はいまやマークの人生を覆いつくしていた。それはウィーンにはじまり彼の心臓の一方の大動脈に至る秘密のトンネルを通って、彼の中に流れ込んでいた。長い年月のあいだ、彼は来る日も来る日も家へ向けて船を走らせ、そしてまた家を離れていった。陸には決して足を踏み入れず、町へも行かなかった。家を離れることにおのれの無垢を注ぎ込んだ彼は、自分の家と取り返しのつかない逃避とのはざまたるこの川の上にあって、観光客たちを運搬しつづけて生涯を過ごす運命を背負いこんでいた。自分を裏切った者たちの国に彼は追放されていた。いまや彼はぶつぶつ一人言を言う、頭のおかしい、ダヴンホールの水上修道士だった。白いたてがみ、顎ひげ、緑の瞳の狂気じみた輝き――その風貌ゆえに実際の齢よりまる一時代老いて見えた。腕に生えた白い毛は毛皮のように伸びていた。やがて娘たちも寄りつかなくなった。甲板に寝そべって観光客の帰りを待っているあいだ、たまに誰かやって来ても、自分から追い払ってしまうのだった。

彼はただ錨を上げ、無垢だった頃はあれほど恐れていた霧の中の瞬間、だがいまや我が家と呼んでいる――その言葉が思い出せなければ地獄と呼んでいる――瞬間に向かって漂っていった。時おり暇つぶしに、岸辺に沿って、島の西端まで船を走らせることもあった。そこではあの古びた白黒二色の機械が、相変わらず見守る者もなく、湯気の立つ土の上にペッペと氷を吐き出していた。はるか彼方まで伸びた川の広がりには、決して出ていかなかった。その果てにあるものに対し、古代人にも似た恐れを彼は抱いていた。やがて彼は自分が、おのれの人生の境界線の彼方に行くのを

恐れていることに気がついた。なぜ自分がいままで一度も旅行者になれなかったのか、彼は自問してみた。そしてそれから、なぜ自分がいままでずっと旅行者以外の何者でもなかったのかを自問してみた。青い外套は一つまた一つとボタンを失っていった。トランプではなく、彼が見ていないすきにふっと消えてしまったのだ。何かが彼に語りかけているように思えた——お前は何ひとつ賭けちゃいないつもりかもしれんが、実のところは年じゅう賭けてるんだぞ、それも下手糞にな、お前だけじゃない、人間はみなすべての瞬間にすべてを賭けているんだ、と。そして彼は賭けに負けつづけた。一つまた一つボタンが消えていった。船底に縛りつけられた骸骨に聞こえるようにと、彼は水の中に向けて卑猥な文句を一つまた一つと投げ捨てた。いまにも老人が船べりをよじ上ってきて、彼の足首をつかみそうな気がした。下を向くとあの指が足にしっかり絡みついているのが見えそうな気がした。ずっと以前に一度、島ぞいに船を走らせているとき、母親の姿が見えたことがあった。母親の髪はもうすっかり灰色になっていた。ダウンホールの岸辺を歩きながら、彼女は黙って彼を見ていた。お前が説明して欲しいと思っているのはわかっているけれど、あたしにはそうしてあげられないのよ——そう言いたげな表情を浮かべていた。彼は母親に声をかける勇気が出なかった。元気かい、と母に訊いてみたかったし、話が長くつづくようだったら、あんたは誰なんだ、とも訊いてみたかった。母親が歩くのと平行に、彼は黙ってゆっくり水上を進んでいった。日の光を浴びて、彼女の口の端の小さな白いあざが、まるでダイヤモンドの入れ歯みたいにきらっと光った。それを見て、彼は胸が締めつけられる思いがした。やがて母は砂の上に立ちどまった。そしてゆっくり、ほとんどおずおずと片手を上げ、彼に向かって軽く手を振った。ささやかな別れ

CamScannerでスキャン

の挨拶。彼は手を振り返した。それから彼女は、またあの毅然とした身ぶりで腕組みをして身を翻し、歩き去っていった。その後彼は二度と母親を見かけなかった。彼は甲板に座り込んで泣いた。その次に母親のことを考えたのは、グリーク・ジュディから彼女が病気だと知らされたときだった。「会いに来なさい」とジュディは陸から呼びかけた。罪の意識に責め苛まれながらも、彼は島に足を踏み入れる勇気を奮い起こすことができなかった。船べりに立った彼は、まるで崖っぷちの向こうに広がる深淵でも眺めるみたいに、呆然と陸を見つめていた。霧の中で吠える彼を残して、ジュディは立ち去った。霧に包まれたこの瞬間にあって、彼は母親の世界に向かって吠えた。そして何ひとつ見えはしない黒い川の中に落ちていきながら、何ひとつ入れはしない場所に入ろうと、つかまるべき何かを、あるいは誰かを求めて必死にもがいた。次に彼がジュディに会ったとき、母親は回復していた。だがひとまず安心はしても、罪の意識が和らいだのはずっとあとのことだった。ずっとあとになってすべては和らぎ、感情の処女膜も無垢と同じようにすり減り消えていった。ある夜、船着小屋のマットレスに横たわっていると、彼の中で何かがごろごろと立ちのぼってきた。それで彼は、感情が自分に戻ってきたのだと思った。何かがおれの身に起ころうとしている、と彼はほとんど畏怖にも似た希望を抱いて胸のうちで言った。だがごろごろという音は彼の中から出ているのではなかった。それはあの毛足の短い銀色の野牛たちだった。昼間は毎日バスが駐車している、彼の家の前の埃っぽい空地を、野牛が疾走しているのだ。彼はマットレスに貼りついた体を引きはがし、最後の一頭の野牛が夜の中に消えていく姿をかろうじて見ることができた。これを境に、感情に対する望みを彼はすっかり失くしてしまった。若き日々のあいだ、彼はずっとそ

れを失ったままだった。若者として過ごした年月、さらには少なくとも彼が理解している意味においてはもはや自分を若者と呼べない時期に近づいていった年月のあいだずっと、希望は失われたままだった。青いドレスを着た彼女が船の上に立っているのを見たその日まで、彼はそれを取り戻しはしなかった。そしてその日に彼はふたたび見出した。人生を感じる希望をではなく、人生そのものを。この日、彼の人生は二つに裂けた。彼女は名をカーラといった。

13

彼女をどうこうしようという気はなかった。彼女の髪に手を触れ、その体をそっと自分の胸に引きよせるのも悪くないかもしれない。でも彼にはそんな魂胆もなかった。彼女はせいぜい十五歳というところだった。彼がこの川で仕事に就いた夜に生まれた可能性だってある。この頃の彼は、彼女の年頃の娘たちを怯えさせるような容貌になっていた。でも彼女は怯えなかった。彼女は一人で船べりに立ち、水の中を覗き込んでいた。濡れた甲板が暗い鏡となって、青いドレスを映し、その輝きを広げていた。彼女が身を乗り出すと、髪の先端が手すりにへばりついた。彼はためらいがちに彼女の肩に手を触れた。落ちるといけないからね、と彼は言った。彼女は何か強烈な、はっとさせられる言葉でも言われたような目で彼を見た。昔はよく客に嘘をついたものさ、と彼はつづけた。この川にはワニがいるんですよってね。ピラニアって言ったこともある。彼女は笑った。みんな信じたの？　この川じゃ人は何だって信じるのさ、と彼はにっこり微笑んで答えた。それから彼は言った。君、遠くから来たの？　彼女はちょっと考えているふうだった。楽しげに笑みを浮か

CamScannerでスキャン

べて何かを考えている。そして何も言わずにこっくりうなずいた。彼女はまた水の方を向いた。それで会話は終わったように思えた。彼も自分のまなざしを眼前の島に戻した。妙に心を動かされたような、侘しいような気持ちだった。やがて彼女が言うのが聞こえた。あなたは？　あなたも遠くから来たの？　水が船べりにぴちゃぴちゃ打ち寄せた。彼はスピードにまるで注意を払っていなかった。ほかの乗客たちは彼を睨みつけていた。彼は言った。おれはね、たがいに一マイルと離れていない二つの点のあいだで十五年船を走らせてきたんだ。霧が出てきた。船はすっかり霧に包まれた。呑気な観光客たちは相変わらず予定表と睨めっこをつづけ、何の反応も示さない。あたりを見回したのはその娘だけだった。彼女は言った。星が見えないところに来ると、いつも何だか迷子になったみたいな気になるのよ。寒さで腕の毛が逆立つのも気にならない様子だった。この船から星を見たことなんてないなあ、と彼は言った。斑点みたいなのを見たような気もするけど。君、星座がわかるの？　と彼は訊いた。ええ、わかるわ、と彼女は答えた。君は天文学者？　と彼は言った。二人とも笑った。船は先へ進み、霧が後方に去り、島が目の前に現われた。最後の数分間、彼はそれ以上何も言うことを思いつけなかった。やがて彼はおそらくは意図したよりも真剣な口調で言った。でも君はなぜここに来たの？　いままでこの船に乗っていて、誰かにそんな質問をしたのは初めてだった。だがそれをいえば、地球の残りの部分が消滅するあの瞬間に気がついた人間だって、彼女が初めてなのだ。彼女はその言葉が聞こえなかったように見えた。彼としてもそれをくり返すつもりはなかった。が、島が近づき、彼が船を桟橋につけにそばを通りかかったとき、彼女は答えた。あるものを埋めるためによ。彼女は陸に出た。彼は後ろから呼びかけた。大勢いる客の誰

CamScannerでスキャン

にでもなく、ただ彼女だけに向かって——船は二時間半後に出ます、と。

14

だが二時間半経っても彼女は戻ってこなかった。ほかの客が三々五々戻ってくるなか、彼は彼女を待った。彼女の姿を捜して遠くを見回した。彼女は来なかった。こういうことはときどきある。夕方にもう一回便があるからだ。定時を十分過ぎたところで、彼はほかの乗客たちを乗せて本土に戻った。あとになって、料金を集めるのを忘れたことに気がついた。

15

その日の最終便で、彼は島が見えてくると同時に岸辺を見渡し、彼女の姿を捜した。だが彼女はいなかった。いつもなら町から聞こえる夜の群衆の音を避けて島からなるべく離れているのに、今日の彼は辛抱強く甲板に立ち、じっと島を見つめていた。これまであまりにも長いあいだ、諦念と本能のリズムに従って生きてきたせいで、彼はもうこの娘が及ぼした衝撃についてじっくり考えることもできなくなっていた。彼女が発信している運命の周波数について彼は思いを巡らし、その正体は何なのかと思案した。あれはおれの娘かもしれない、と彼はふと思った。あるいは未来の妻。だがそういうことを長く考え込んだりはしなかった。測りがたいものすべてに名をつけようとする世紀にあって、運命の周波数ばかりは確定不可能であることを彼は知っていた。時間が経ち、旅行者たちが戻ってきた。当然昼の客より酔払っている夕方の客たちのなかに、彼は彼女を捜しつづけ

CamScannerでスキャン

た。いないはずはない。何といっても島を出る手だてはほかにないのだし、この島でやれることはただ一つ、この島を去ることだけなのだから。十五年のあいだ、誰かが島で夜を明かしたり、置き去りにされたりしたことは一度だってなかった。だから彼女がいないはずはないのだ。けれども、人々がみんな戻ってきて船が出るのを待ちはじめても、彼女はまだ現われなかった。彼は五分、十分、十五分と出発を遅らせた。「バスが待ってるんだ」と誰かが言った。「いつになったら出発するのかね?」。おれが出発すると言ったときに出発するんだ、と彼は答えた。二十分が過ぎた。乗客たちはひどく不機嫌になってきた。もうこれ以上遅らせられない時間になって、彼は彼女抜きで船を出した。客を本土に返してから、彼はいままで一度もやったことのないことをした——船を出して島に戻り、船の上で夜を明かしたのである。

16

目を開けるごとに彼女が戻ってきているような気がした。夜が明けたら彼女がすぐそこにいるような気がした。島で夜を過ごした彼女は、寒さに震え、怯えているにちがいない。だが夜が明け、目を開けても、彼女はそこにいなかった。昼も近くなってくると、腹を空かせ寒さに震えているのは彼の方だった。本土では人々が第一便の船を待っている。彼は本土に戻った。晴れた日だった。彼は大急ぎで客を乗せ、間髪(かんぱつ)を入れず船を出した。はるか向こう岸から、われ知らず彼女の姿を捜して島を見渡した。船のスピードのことなどまるで頭になかった。大きな揺れに、人々は心配そうにあたりを見回し、手すりにしがみついていた。転倒した客も二人いた。濡れた甲板に倒れた妻

を助け起こしながら、夫たちは怒って彼を睨みつけた。「少しスピードを落としたらどうかね？」と誰かが言った。彼は相手にしなかった。彼女は島にいなかった。船にへばりついていた乗客たちはやれやれという顔で陸に上がり、憎悪にみちた視線や皮肉たっぷりの礼の文句を彼に投げつけていった。それも彼の耳には入らなかった。

彼は船の上をせわしなく歩きまわった。前日に彼女が姿を現わさなかったとき以来ずっと、ほかのことは何ひとつ頭になかった。たった一日のことなのに、もう何日も、何週間もこんな状態がつづいているような気がした。二時間後、遅れて戻ってきた客が待ってくれと大声を上げながら岸辺に走ってくるのも顧みず、彼はあわただしく船を出した。容赦なく川を突き進む彼の運転に、水中に投げ出されては大変と、人々は船底に縛られたジーノの骸骨と同じ要領で、自分の体を船に縛りつけはじめた。「おい、どういうつもりなんだ」と誰かが言った。「何だってこんなに速く走らにゃならんのかね？　みんな怖がってるじゃないか」。娘がいたんだ、と船長は答えた。青いドレスを着ていた。あんたたち、青いドレスの娘を見なかったか？　人々はみなかすかに首を横に振るだけだった。彼はまた黒い水に視線を戻した。船はさらにまた少し速度を上げたようだった。顔面蒼白の乗客たちは、歯を食いしばって船にしがみついていた。

今回本土に戻る便で、あるいはその次の便で、彼は気がついた。十五年もつづいていたのに、それがすぐわからなかったなんて、ちょっと信じがたいように思えた。だがようやく気がついたのは、それが数回起こってからだった。というより、数回起こらなかったのだ。あの瞬間が。あの瞬間が起こらなかったのだ。時間と空間がすべて彼の船に帰属し、行先も出発点も消滅するあの瞬間

CamScannerでスキャン

が。そしていま考えてみると、けさ島で目覚めたときもそれが起こらなかったことを彼は悟った。そしていま考えてみると、昨晩に起きたという記憶もなかった。そもそも彼女が船を降りて以来、あの瞬間が起きた記憶はなかった。そしてその日一日、それは起こらないままだった。これまで十五年間、毎日あの瞬間が起こるたびにあれほど恐れと侘しさを感じていたのに、いまやそれが起こらないことへの恐れと侘しさがどんどんふくれ上がっていった。それまで恐れていたものすべてが、まるで取るに足らぬものに思えてきた。そして彼は、彼女が船に戻ってこないのではないかという恐れを抱きはじめた。必ず戻ってくるさ、疑問の余地なんか何もないじゃないか、と昨日自分に言い聞かせていたのと同じように、今日の彼は、疑問以外何もないじゃないか、とみずからに語りかけた。島に向かって船を走らせるたび、そして島の前で待っているあいだずっと、彼女が戻ってこないことが彼にはわかっていた。まるで彼女があの瞬間を持ち去ってしまったみたいに思えた。それを持ち去った彼女は、いまやその瞬間の中で、彼が永久に去ることを誓ったあの場所のどこかで生きているのだ。青いドレスの女がいるんだ、と彼は町へくり出していく観光客たちに呼びかけた。そういう娘がいないか見ていてくれ。彼らが戻ってくると、娘を見なかったか、と彼は問いつめた。戻ってきた彼らを一人一人訊問した。船の中央に立ち、彼らをどなりつけた。人々は恐れをなして、嘘をついた。酒場で見かけたよ。ホテルで見たっけな。もう四十年以上、彼の母親以外誰一人住んでいないホテル。通りを歩いているのを見たよ、と嘘をつく者もいた。氷に囲まれていたよとか、墓地にいたよとか言う者もいた。この種の嘘を彼は一番信じた。なぜなら彼は、自分が彼女に会う前の彼女のことを考えていたからだ。彼女が生まれるずっと前の彼女、少年だった自

分が氷に囲まれ横たわっていた頃の彼女のことを考えていたからだ。それに何といっても、彼女は何かを埋めに来たのだから。

観光客たちは彼を前にして、心なしか身を寄せあっていた。彼らの嘘を一通り聞いたあと、彼はもう人々に目もくれなかった。彼はひたすら陸を、町を見つめていた。三十分、一時間と、彼は船上を歩きまわり、待った。乗客のうち誰一人として、いつ戻るのか、と訊く勇気のある者はいなかった。二時間が過ぎた。もう真夜中近かった。それから、深淵めがけて崖っぷちから飛び降りる男のように、おのれの心の中に向けて人には聞こえぬ叫び声を上げながら、彼は跳んだ——船べりからダヴンホール島までの、ほんの数センチを。そして彼女を捜しにいった。

17

彼が島に降りて十分と経たないうちに、町じゅうの人々がそのことを知った。すでに真夜中で、たいていの人間はもう眠っていたけれども、一人見た者がいればそれで十分だった。誰か一人、男でも女でもいい、窓辺で何か読んでいて、ふと顔を上げて外を見ると、白髪の船乗りが大またで歩いていく姿が目に入る——それで十分だったのだ。その瞬間、窓辺にいた人間は椅子から跳ね上がり、奥の寝室に飛び込んで、家族全員を起こしてその知らせを伝えたことだろう。十分後、それは町じゅうに知れわたっていた。大方の推測は、これはひとつの前触れであるということだった。それは白髪の少年が十数年前に家を捨て、やがて大人になり、その家から行きつ戻りつする船を走らせて日々を送るようになった。その年月のあいだに、おおかた気もふれてしまったことだろう。それが

今夜また突然姿を現わしたのだ。きっと何か恐ろしいことが起こるにちがいない。嵐が東から川を上ってくるのかもしれない。ダウンホール島全体が沈んでしまうのかもしれない。住民たちが何十年もかけて、島のはらわたにがらんどうの墓をハチの巣のようにめぐらしてきたというのに。それとも銀色の野牛の大群が押し寄せてきて、行く手のあらゆるものを一掃してしまうのだろうか？獣も鳥も、船も観光客の集団も、失われたアジアの民族も、この死にかけたゴースト・タウンのすべてのものを。

青いドレスの娘がいるんだ、と彼は酒場の入口からジュディに言った。

ジュディはカウンターを拭きながら椅子を片づけていた。そしてグラスを棚に並べ、エプロンで軽く手を拭いた。やがて彼女はカウンターから出て部屋を横切り、彼の前にやって来た。

青いドレスの娘を捜してるんだ、と彼はもう一度言った。見なかったか？

少しのあいだ彼女は何も言わなかった。あたかも二人のあいだに交わされた言葉、しかし二人のどちらも発しはしなかった言葉に耳を澄ましているかのように。やがて彼女はわずかに彼から目をそらし、平手でその顔面を思い切り引っぱたいた。

彼はいくらかよろめいた。目がぎらぎら光っていた。

「このろくでなし」と彼女は押し殺した声で言った。「母親が死にそうだってときには、あの糞ったれの船から一歩も動かなかったくせに。何年も何年も、この町に何の用もなかったじゃないか。それが何だい、青いドレスの娘目あてで帰ってきたってのかい」

彼はごくりと唾を飲み込んだが、気を取り直していつもの表情に戻った。そうだ、と彼は言っ

た。

ジュディはまたエプロンで手を拭いた。でも手はもう乾いていたし、エプロンは濡れていた。

「娘なんか見てないね」と彼女は吐き捨てるように言った。「くよくよしなさんな、娘なんかまたいくらでも出てくるさ」。それからこうつけ加えた。「気をつけた方がいいよ、世の中どんどん変わってるんだからね。ほんと、気をつけた方がいいよ」。いまにもあざけりの笑いを浴びせそうな口ぶりだった。

これはそういうのとは違うんだ、と彼は言った。そんなことでわざわざ来たりするもんか。そして彼はさっと背を向けて、酒場から出ていった。

通りに出た彼は、折りからの疾風にあやうく吹き飛ばされそうになった。彼は色あせた青い外套でしっかり身をくるんだ。最後の金ボタンを風が引きちぎっていった。本通りの向かい側に、彼が生まれ育ったホテルがあった。母親の部屋に明かりがついているのを見て彼ははっとした。誰かの人影がじっとこちらを見ている。だが彼は外套の襟を立てただけで、島の反対の端をめざして歩き出した。剃刀のような銀色の風が埃を上げて吹き荒れるなか、本通りを進んでいった。彼は一軒一軒のドアを引っぱり、蝶番をがちゃがちゃ鳴らした。どのドアにも鍵がかかっていた。彼は肱を家々の窓にあてて、一つひとつ力まかせに叩き割った。これこそダヴンホールの音だった――風の金切り声、窓が立てる水ぶくれのような音、それが通り一面から響きわたる。川から嵐が来たという中国人たちの予測は間違っていなかった。人々は家の中でじっと身を寄せあい、それが通り過ぎるのを待った。ようやく嵐は氷のあるところにたどり着き、決して停止することのない白黒二

色の機械の前で立ちどまった。暗闇の中、星明かりもない中で、目に見えぬ氷の塊が宙に舞い、夜空に突入していった。彼はそれが砕ける音を聞いた。だが彼は思っていた。これは窓が割れる音の余韻にすぎないのだ、それもおれが割った窓でさえなく、どこかよその町でよその誰かが割った窓の。曖昧で合点の行かぬ運命の周波数を発信する者たちを捜して、人々は夜の中を狂ったようにさまよいつづける。かつて訪れた別の夜に割れた窓の音が、新星の光のようにいまようやく彼のもとに到着する。氷が地面の上でぱちぱちと弾ける。嵐は北へ向かった。彼は製氷機をあとにして、墓地めざして歩いていった。あるものを埋めるために、と彼は心の中で言った。墓地では風がいっそう激しく吹いていた。川の東側に面しているからだ。ここからは川の向こう岸はよく見えないが、代わりに水上高く敷かれた線路に沿って赤い列車がこっちへ走ってくるのが見える。墓地の木々は誰の死も告げてはおらず、墓はしんとしていた。彼は影に覆われた沼地に立ち、空を見上げた。足元から蛆虫たちがもぞもぞと這い出してくる。彼は彼女の名前さえ知らない。だから彼女の名を呼ぶこともできない。こんな時間に捜したって無駄だ、こんな夜中じゃ無理だ、と彼は自分に言い聞かせた。だが暗闇の中だからこそこれだけの勇気が出せたのだし、ここまで無謀にもなれたのだ。暗闇の中だからこそあの信号も疑いの余地なくくっきりと伝わってきたのだ。彼は自分に言い聞かせた。もし彼女が泳いで逃げようとしたとしても、いまは死体を川で捜す時間じゃない。ほかにも本土に連れ戻してくれる船があると彼女が思ったとしても、いまは難破船の残骸を捜す時間じゃない。だいいちほかに船なんてありゃしないじゃないか。彼はまだ覚悟ができていなかった。彼女はここにいないのだという事実を受け入れる覚悟が。

むろん、ほかに捜すべきところはあと一つしかない。
何と言ったらいいのだろう、と彼は考えた。そして胸のうちで懺悔の文句を練習してみた。子供の頃でっち上げたあらゆる懺悔の文句、川で会った娘たちの口に流し込んだあらゆる懺悔の文句を思い出してみた。だがどれもここでは的外れだった。あの懺悔はみな、決して許されぬことを乞う懺悔だった。いまやろうとしているのは、恋人に与える懺悔でも恋人から受ける懺悔でもない。彼を生んだ灰色の髪に対する懺悔なのだ。彼が本通りにたどり着いたとき、母親の姿はもう窓辺になかった。だが明かりはまだついていた。ホテルじゅうで唯一灯っている明かり。あるひとつの予感に、彼は息も詰まる思いがした。ホテルの階段を上り、部屋にたどり着くと、ドアは開いていて、そこに二人がいるのだ——あの娘と母親が、何ごとかを語りあいながら、重々しい顔で彼を待っている。彼は悟った。青いドレスの娘の運命とは、彼をあるものに引き戻し、それと直面させることだったのだと。そのあるものとは、彼自身の失敗にほかならない。彼はこれまでその失敗を基に、ひとつの軽蔑の念を築き上げてきた——軽蔑に値する彼自身に対してではなく、それに値しない彼の過去と彼の家に対しての軽蔑の念を。彼が立ち去ったあの夜。母親の足元で死んでいた男の、新星の光のような余韻。それ以外に何に直面することになるのか、彼にはよくわからなかった。
その男は年老いていた。だが老いてはいても体はおそろしく大きく、長い年月の中でその赤い髪は、木の葉が枯れていくように金色に変わっていた。
そしていま、生涯にわたって白髪でありつづけてきた男は、ホテルの中に入り、懸命に思い出そうと努めながらよろめくように階段の下に行きつき、二階へ上っていった。そして廊下を抜け、母

親の部屋の前に行った。ドアは予想していたように開いてはいなかった。でも閉まってもいなかった。完全に閉ざされてはいなかった。押せば開くはずだ。彼はそれを押して開けた。
青いドレスの娘はそこにいなかった。母親は部屋の中央に立ち、記憶の中をじっと凝視していた。十五年前とまったく同じ場所に立っていたわけではない。だがほぼ同じ場所だった。そして十五年前とほぼ同じように、彼女が自分の記憶から目をそらし彼の方を向くまでに、およそ五秒の時間が経過した。

18

数秒にわたって、といっても彼女にはほぼ一分くらいに思えるのだが、彼女は彼がドアの前にいることに気づいている。ある意味で彼女は彼を待っていたのだ。一時間前、窓を破壊しながら通りを進んでいく彼の姿を彼女は見ていた。彼がなぜここに来たかは知らない。だが、ささいなことで島に戻ってくるはずはないことはわかっている。そしていったん戻ってくれば、彼女に会いにここに来ないということはまずあり得ない。だから彼女は驚いてはいない。それでも彼女はただちに彼の方を向きはせず、少しのあいだ待つ。それは非難の意思表示ではない。
彼はショックを受けている。それは彼女にもわかる。彼女がこんなにも年老いてしまったことにショックを受けている。当たり前でしょ、と彼女は胸のうちで言う。時間があんたの記憶の時計に合わせて動くとでも思ってたのかい? 彼女の髪はいまや彼の髪がずっとそうであったのと同じくらい白い。これで少しは親子らしくなったわね、と彼女は心の中でつぶやく。

実のところ彼女もまた彼と同じことを考え、思い出していた。あの夜のことを思い出し、考えていた。彼女もまた同じあの余韻を聞いていた。ここにやって来て彼女の足元で死んだ年老いた男の余韻を。十五年ののち、あたかも男がまだこの床の上にいるかのように、彼女は男の声を聞く。いままさにこの瞬間、男が語るのを彼女は聞く。ドアの前で黙って立っている彼女の息子もそれを聞く。母と息子はたがいに見つめあい、十五年前に死んだ男の声を一緒に聞く。その声がいまどこから出てきているのか、母も息子も知らない。実際二人とも、それは自分の頭の中の声にすぎないと思っている。その声、いまこの瞬間にもしそれが実際に語っているとしたらそれが語るであろう物語の記憶から再現されたその声が、いま自分たちに対し同じ物語を語っているとは二人とも思っていない。ずっと昔に死んだ見知らぬ男の幽霊を自分たちが共有しているとは、二人とも思っていないのだ。

　お前はおれのことを覚えているだろう、とその声が言うのが聞こえる。あるいは覚えていないかもしれない。おれは生涯お前のことを覚えていたけれど、お前はおれが視界から去ったと同時におれのことなどいっさい忘れてしまったかもしれない。それは世界を変えた。おれがお前を見たことがだ。それは文字通り世界を変えたのだ。でもまあそれは別の話だ。あるいはそれは、おれの世界を変えただけかもしれない。おれの二十世紀を変えただけかもしれない。お前の世界、お前の二十世紀、それは別の話だ。ウィーンでのことだった。お前は窓辺にいた。お前はそのときまだほんの小娘だった。せいぜい十五歳というところだったろう。一九三八年のことだった。そのときおれたちは、ずっと昔に死んだ二十世紀の死体を一緒に抱えたのだ。

CamScannerでスキャン

19

おれの名前はバニング・ジェーンライト、とその声はつづける。一九一七年、おれは生まれた。おれは覚えている。彼女のもとをあわただしく去ったこと、母親に追放(バニング)されたことを覚えている――もっとも、おれを名づけたのは彼女ではない。それはもう一人の母親だ。おれには母が二人いたのだ。

ひどく短い赤い通路を、長いあいだ落下しつづけたことを覚えている。落下しながらおれは見た。行軍する兵士たちを。炎に包まれた戦場と、陽を浴びた黒い大砲を。ロシアの町々の裏通りでの暴動と、東方の砂漠の砂丘に立つ救世主たちを。新たな時の文字盤の上に、堕天使たちが一人また一人と這い上がってくるのを。まず片手が現われ、次にもう一方の手、取っかかりを求めて爪が必死にもがき、それから頭のてっぺんが見え、ぎらぎら光る額、ぴんと見張った粗暴な目、歪んだ口がそれにつづき、堕天使はわが身を引っぱり上げる。ついに全身が現われ、堕天使は新しい時の文字盤の上に横たわってぜいぜいと喘ぐ。一人目が上がってきたあとは、残りも一人また一人と次々に這い上がってくる。彼らはすべてを変えるためにやって来た。田園の風景を変えるためだけではない。都市を一つか二つ築くために来たのでもない。都市なんかいつだっていくらでも作れる。月光を浴びた運河だの橋だのを作りに来たのでもない。彼らはすべてを変えにやって来た。人間がこの世界に自画像を描く行為そのものを変えに来たのだ。その行為を解体し、魂の中の新たな視点からそれを再構築するためにやって来たのだ。魂の部屋の中、その視点が位置する一角は、

これまで八千年にわたって、我々がずっと必要だと思い込んできた椅子によって、あるいは手放すことはむろん動かすことさえ許されぬほど貴重な家宝だと聞かされつづけてきたテーブルランプによって、その視界を妨げられてきた。椅子なんか捨ててしまえ。ずっと昔に壊れてしまったテーブルランプなんか捨ててしまえ。すべてを——すべてを解体し再構築するために彼らはやって来たのだ。部屋のどまん中の、どこに立とうとつねに何かによって、時計によって視界を妨げられてきた盲点から。もじゃもじゃの白い髪をした、一人の小柄で近眼のドイツ人、自分が書く奔放な新しい詩の素材である数さえろくに数えられぬ男が、たったいまてっぺんにたどり着き、はあはあと息をついている。

男につづいてもそもそと上がってくる大男の赤毛のアメリカ野郎、それがおれだ。ドイツ人が終わったら、次はおれの番なのだ。

こうしたこと一切合財を、おれは母親から出てくるときに目にする。生まれると同時に、おれはすでにどん詰まりまで来てしまっている。おれはしばらく気を失う。気がつくと、いろんなことが少しずつ変えられていて、事情を呑み込むのにしばらく時間がかかる。

時は一九一七年、時計はかちかち鳴っている。

20

一九二五年、八歳になったおれは親父の牧場で暮らしている。ペンシルヴェニア西部、オハイオとの州境近くにあるその家は、おれがのちに住むことになるどの家よりも良い家で、色は白と青、

CamScannerでスキャン

作りはがっしり頑丈である。だが……こういう言い方は、何だかおれが訪問客であるみたいに聞こえないだろうか？「おれは親父の牧場で暮らしている……」。家は南向きだ。親父の名はフィリップ。ジェーンライトはイングランド系の姓である。ごつい体つきをした親父は、ひどく冷酷な男で、厩舎で働く連中、特にインディアンたちを虫けらのように扱う。誰に対してであれ、親父が人に優しくふるまうところをおれはめったに見たことがない。一度か二度、親父にくっついて町へ出かけたときに、遊歩道をそぞろ歩く女たちの一人にささやかなプレゼントを買ってやるのを見た程度だ。それだってアリスがいないときの話である。

アリスは親父の結婚相手だ。彼女はおれが自分の母親として知る人物である。とこう言っておれが本当に訪問客であるように聞こえてきたなら、そちらにも実情が伝わりはじめたしるしだ。おれには兄も二人いる。オラルとヘンリー。オラルはおれより六つ上、ヘンリーは四つ上である。彼らの行動はおれの親父に似ていて、外見は彼らの母親に似ている。オラルは馬の世話をする年寄り連中を、親父よりもっと手ひどく扱う。きっと彼らのことを自分の奴隷だとでも思っているのだろう。ヘンリーは大人になったら何か本当に邪悪なことをやってのけるかもしれない。たとえば議員に立候補するとか。もっともそれだって、奴がそもそも大人になればの話だ。それについてはあとでおれが手を打つことになる。ヘンリーは口ではさんざんアリスにおべっかを使い、陰で彼女の金を盗む。奴がアリスから金を盗んでいることばかりか、アリスがそれを知っていてしかもそれを喜んでいるということまで、八歳にしてすでにおれは気がついている。ピッツバーグ育ちのアリスは、家の中を旧世界のがらくたで一杯にしたさにおれの親父の家にやって来た。彼女はわずかに紫

がかった髪を、きつく縛ってとめている。かつて黒かったその髪は、上の二人の息子に受け継がれている。オラルの口にある生まれつきの小さなあざは、アリスの場合にはもう少し上、頬のあたりにある。この家族の誰とであれおれが唯一共有しているものは、おれの親父の赤毛だけだ。

さっきも言ったように、おれは訪問客である。おれは旅行者である。このことにいつ頃から気がつきはじめるのか、自分でもよくわからない。たぶんこの時点ではまだはっきり気づいていないと思う。もちろん兄たちがおれを憎んでいることは知っている。親父がおれのことなどどうでもいいと思っていることも知っている。もっとも親父にとっては、町で会う女たちは別として、おれだけでなく兄たちだって母だってまったく同じようにどうでもいいのだ。アリスは母親としての義務という次元ではおれをないがしろにはしない。病気になれば看病してくれるし、オラルやヘンリーと同じようにおれの面倒もきちんと見てくれる。でも彼女は、言ってみれば礼儀正しいのだ。客でももてなしているみたいなのだ。異国の管理人（コンシエルジュ）みたいに、子供を暖かくもてなす母親。そもそもの初めから、彼女は自分の権利について疑念を抱いていたにちがいない。だがとにかく、自分の家族がどこか間違っていることに、子供はいつ頃気がつくのだろう？　何歳ぐらいになって、どれくらい知恵がついていればよいのだろう？　旅行者であるのが自分だけだということを、この時点でおれはまだ知らない。みんながそうだと思っているのだ。

21

とにかく自分が何か間違ったことをやっているのはわかっている。そしてこの頃は、

なのか、おれはうすうす勘づきはじめる。おれは大きいのだ。八歳なのに十歳並みの大きさだし、まだまだ大きくなりつづけている。二、三年もすれば親父より大きくなるだろうし、それからまた二、三年したらどっちの兄よりも大きくなるだろう。おれの大きさ、それはこの家庭にはそぐわない大きさなのだ。それを見るたびに、おれが彼らといかにかみ合っていないかを彼らはくり返し意識せざるを得ない。おれの手は大きく、足も大きく、腕は長い。顔だって大きい。大きくて邪気のない顔のせいで、この子は少し頭が足りないのだという結論にみんなは達する。それは知恵が釣り合っていない、獣性を暗示するたぐいの大きさなのだ。といっても、このあたりの事情をおれが理解するのはもっと先のことだ。この時点のおれはまだ八歳なのだ。だがそれでももう、自分が家族とかみ合わないばかりか、時には自分自身の本性ともかみ合っていないことに勘づいてはいる。そしてもっとあとになると、おれの本性もまたさまざまな面でそれ自身とかみ合っていないことを理解するようになる。おれは夜ベッドに横になって、階下のアリスの書斎から持ってきた本を読みあさる。おれはそれが幼い子供にふさわしい行ないなのだと考えようとしている。が、自分をだましてそう信じ込ませたのもつかの間、おれは本の背表紙を力まかせに切り裂く。それはただ起きるのだ。おれはそこに横になって本を読んでいる、大きさが飛び出してくる、読書という行為が否定しようとしている大きさがおれの両手から飛び出す、おれはベッドの上にいる、両方の手に本を半分ずつ抱えて。頭の上でページが舞う。そしてヘンリーが階下へかけ降り、おれがアリスの本を引き裂いていることを告げ口する。そのうちにおれは、本をベッドの柱に立てかけて、本に触らないようにして読書するようになる。本と、抑制不可能な大きさとのあいだに、腕一本分の距離を置い

て。

おれはやがてこの大きさを活用するようになる。おれはやがて、時には大きさの中に隠れ、時にはそれを駆動させるすべを学ぶ。どこかの阿呆を半殺しにするにも利用し、やがてある日それをやりながら数分のあいだとりわけいい気分を味わうことにもなる。おれを見て、こいつは馬鹿だと思い込む人間がいたら、それもしっかり活用して、そいつを叩きのめすのに使う。自分が利口だと思っていて、おれみたいな人間には理解できない言語を喋ると思っている連中。あいにくおれは奴らの言語を理解するのだ。そして、彼らの人生の旅行者であるおかげで、おれはじきに、彼らの秘密をかぎ出すスパイになる。これについてはいずれわかるはずだ。もちろん、時おりちょっとした芝居を打っておくのも悪くない。人が大勢集まったところでよだれを垂らすとか、時たま訳もなく片腕をめちゃくちゃに振り回すとか。それを見て、人々は顔をそむける。そうなればもはやおれはあまりに大きく、あまりに愚かな存在となり、見えなくなったも同然なのだ。

八歳のおれは、家族とともに夕食の席につき、とげとげしい会話が交わされるのを聞く。食物が親父の腹わたの中に落下する。それはほぼ二十年後、落下傘部隊がフランスの国土に降下する様子を思わせる。そういったもろもろの光景を、おれは好きなときにいつでも、寝室の九つの窓のどれかから眺めることができる。八歳のおれは、まだ世の中をあきらめていない。世界に対しまともな印象を与えようと、まだ頑張っている最中である。おれは懸命に努力する。だが夕食の席で彼らは、いったいどこからこんなでくのぼうが出てきたんだと言わんばかりの目でおれを見るばかり。アリスもオラルもヘンリーも。親父はひたすら食欲の趣くまま、肉、じゃが芋、豆と切りすすんで

いく。おれたちのことなんかまるっきり頭にない。やがておれにもわかることだが、親父はあらゆる欲求に関してこんな調子なのだ。特に、禁じられた欲求に関しては。

22

おれが十歳の年のクリスマスの日、谷間は一面雪景色だ。おれの寝室のどの窓からもそれが見える。この日の朝、おれは兄たちと一緒に寝床を出て、馬の様子を見に親父のあとについて馬小屋へ行く。親父の牧場は馬が中心である。毎年冬になると、馬たちの世話も随分骨が折れる。目覚めてみたら馬たちが首を並べて凍え死んでいた、なんてことにならないよういろいろ気を配らないといけない。ここの将来についてはほぼ決まったも同然とみんな思っているらしい。オラルとヘンリーが大人になって、親父がいなくなったら牧場を受け継ぐ。そして大方コインでも投げて、勝った方が家を取るのだ。それとも二人のうちどちらであれ、そいつと一生を過ごしてもいいと思うようなおめでたい女を先につかまえた方が家を取るのかもしれない。そして厩舎の裏手に掘立て小屋を建ててそこにアリスを放り込み、家を取れなかった方のためにもう一軒家を建てる。青写真としてはまあそういうことだ。おれがどこにどう組み入れられるのかはわからない。結果的には、一人はまったく大人にならずに終わり、大人になった方には受け継ぐ牧場も家も残りはしない。おれが十歳のクリスマスの日、我々はまだそういったもろもろのことからクリスマス六回ぶん離れている。

馬たちに異状はない。おれたちは家に戻る。おれは一番最後まで残っている。というのも、おれは馬たちが好きなのだ。納屋で彼らと一緒に過ごすのが好きなのだ。特に気に入っているのが何頭

かいて、一頭はぶち、一頭は白、もう一頭は赤砂糖色。でもいまはもう、おれは家の中にいる。中は暖かく、暖炉や食べ物の匂いがあふれている。台所にはこの家の料理人のミニーがいる。ミニーはヴァージニアの出で、おれが生まれる前からジェーンライト家で働いている。彼女は人目につかないときを狙って、精一杯おれに優しくしてくれる。だがそれと同時に、ミニーは一種とまどったような表情でもっておれを見る。これもまた手がかりのひとつである。その頃のおれにはまだ理解できない、おれの現在と過去の真実を解くもろもろの手がかりのうちのひとつなのだ。ミニーを手伝っているのはインディアン女のゲイラ。おれが台所に顔を出すと、ミニーは何かと口実を見つけてはゲイラを追い出す。白人と有色人種とは違うんだということがまだわかっていない男の子が、そういう連中と交わるのはよろしくない――ヴァージニア出の連中はそう思っているのだ。実際のところゲイラの肌はそれほど黒くない。仲間のインディアン数人と一緒に、おれの親父の土地のはずれの方で暮らしている。ゲイラというのは本名ではない。本名は何やら舌を嚙みそうな名だ。オクラホマで、インディアンの母と姉と三人で暮らして育った。親父は白人だったが、とっくにどこかへ雲隠れしてしまっていた。そしてゲイラは、姉のレイがシカゴ近郊に住む白人新聞記者と結婚したのとほぼ同時期にペンシルヴェニアにやって来たのだった。インディアンやその混血児にありがちなように、ゲイラもまるっきり年齢不詳だった。

おれが居間に入っていくと、例によって母と兄たちとの会話が一瞬途切れるように思える。彼らの小ぢんまりした心地よさの中に、おれの大きさが押し入ってきたせいだ。だがやがて彼らもそれに適応し、何事もなかったように話を再開する。ツリーは明るく、緑と銀に光っている。暖炉があ

CamScannerでスキャン

かあかと燃えている。おれは華やいだ雰囲気の中にそっと身を割り込ませる。時おりおれが何か言うと、それはどういう意味なの、とアリスがたいてい訊く。おれがごく当たり前のことを言ったとしても、アリスはまるで古代語でも聞かされたみたいな顔をする。暖炉を見ながら、「よく燃えてるね」とおれが言う、するとアリスの顔がさっとこわばり、しばらくして彼女は言う。「あのねバニング、あたしにはあなたの言葉の真意がいま一つわからないのよ」。考えてみればそっちこそずいぶん馬鹿げた言い種だ。でもこの時点でおれにわかっているのは、自分がここのクリスマスの雰囲気にとけ込もうとしている子供であって、そしてどうにもうまくとけ込めずにいるということ、それだけなのだ。家族の団欒のどこかに入り込めそうなすき間が開いているとしても、おれには入れない。かくしておれは、部屋のまん中にいながら実はいっさいの外側にいる。ヘンリーはクリスマスプレゼントに小さな人形セットをもらった。砦があって、兵隊が何人もいるやつだ。ヘンリーはオラルと一緒にその玩具で遊ぶ。しばらくするとオラルが飽きてくる。相手がいないわけにも行かないので、ヘンリーは仕方なくおれを誘ってくれる。奴は一万の部下を従えて敵陣に攻め込むサンタ・アナ将軍、おれはわずか百五十人で防衛に努めるテキサス軍である。おれは体が大きいから、戦場の向こう側まで楽に手が届いてしまう。おれの腕がヘンリーの歩兵大隊を六つ、七つと一掃する。「この馬鹿野郎」とヘンリーは金切り声を上げる。「死ぬのはお前の方なんだぞ！　お前の軍が全滅することになってるんだ！」。ヘンリーはぷんぷん怒ってセットを片づけ、ふたたびオラルとアリスの会話に加わる。おれは二階の寝室にかけ上がろうとする。その途中、アリスのがらくたを何やら叩き落としてしまう。旧世界が瓦礫となり果てる。椅子とか、テーブルランプとかが。

「まったくどこまで馬鹿なんだ」とオラルが苦り切ったように言う。ヘンリーは軽蔑の念にただただ首を横に振る。アリスは深い、傷ついたようなため息をつく。こんな椅子なんか捨てちゃえばいいんだ、とおれは言い返す。でも彼らに対してではない。これから先おれの声を聞くことになる誰に対してでもない。

23

おれは階段を上りつめる。クリスマスの暖炉の煙と食物の匂いが後ろから立ちのぼってくる。おれは廊下を大またで進み、ドアに体当りするようにして寝室に入る。そしてさらに二、三の物を叩き落としてしまう。しばらくのあいだおれは寝室の暗闇の中でじっとしている。自分がそこで泣くかどうかは覚えていない。いや待てよ、思い出した、おれはそこで泣くのだ。だがしばらくじっとしているうちに、じき何もかも忘れてしまう。おれはまっ暗な部屋のまん中に座り、九つの窓から外を見る。頻繁に見る窓と、あまり見ない窓がある。あとになっておれは、ここ以外の世界じゅうのあらゆる部屋にいかに窓が少ないかを思い知ることになる。自分の寝室にだけ正しい数の窓があるという事実が、おれにはどうしてもピンと来ない。もちろんそれは要するにおれが鈍いというだけの話かもしれない。こんなにたくさん窓のある部屋に入れられたのには、ちゃんと訳があるのかもしれない。どの窓からでもいいから、さっさと飛び降りちまいな、ということ。でもおれは飛び降りもせず、窓から見えるもののすべてを飽かずに眺める。あの窓にはおれの誕生の年が見え、またある窓には死の年が見える。もっとも自分の誕生や死がはっきり正確に見えるわけではない。その中

CamScannerでスキャン

間の七つの窓に、おれに割り当てられた七十年の歳月が見える。おれの人生ではない。おれの時間が見えるのだ。

　そしておれはそこに座って、ある音を聞く。おれの時間の音だ。おれの時間の音ともなれば、怒濤のような激しい音が予想されるところだろう。世界の核から湧き上がる怒濤。あるいは、機械が立てるがちゃがちゃという騒音でも不思議はない。さもなければ南部の畑かビヤホールか軍幹部会議かで男たちがわめき散らす声の喧騒。ルイジアナで一本のロープがぴんと張られる音でもいいし、ドイツ製の斧が人の首を切り落とす柔らかく湿った音でもいい。たがいに密告しあうロシア人たちのささやき。それとも、物質の深淵があたかも一個の木の実のようにぱっくり弾けて口を開け、まわりのあらゆるものがその中に落ちていく音。そういう音が予想されるところだろう。だがおあいにくさま、そのどれとも全然違う。まるっきり別の音なのだ。それはネズミかコウモリかが立てるような、ひどく甲高い、きいいいという音だ。そしてそれは空や地面のどこから出ているのでもない。外部のどこからでもなく、おれ自身のはるか下から立ちのぼってくるのだ。おれは足元を見回す。だがそこには何もない。椅子を持ち上げてみても同じ。部屋の反対側へ移動してみると、やはりそれはおれの下にある。おれの腹部の、生まれるまで母親とつながっていたところの下あたりに。それはおれの内臓の中で鳴る笛だ。

　おれはこの夜、生まれて初めてものを書く。おれは窓から二十世紀を見つめている。もっともこの時点ではまだ、それがおれの二十世紀なのかどうかはわかっていない。ある窓を通して見える一九一七年、この窓を通して見える一九二八年、最後の窓を通して見える一九八九年、それらがお

れが知る、おれがかつて知っていた、おれがやがて知るだろう一九一七年や一九二八年や一九八九年であるのかは、まだわからないのだ。だからおれは窓を開け、ただ単に雪を見る。そして納屋にいる白い馬についての物語を書く。雪は月の光を浴びて青い。三年前に親父が作った排水溝が、光の中でごろごろ小さな音を立てている。氷が少し割れはじめている。クリスマスの夜にしては相当珍しい。いったいどこからジャングルの熱風が吹いてきて、氷を割り、排水溝の水を流しているのか？　月の光に照らされて、溝はいまや銀の糸となり、ほぐれるように谷間を走る。おれは白い馬が雪の中を走る物語を書く。もちろん馬は実際にはそんなことはしない。雪が降ってくる、だが溝は何ものにも押しとどめられぬ熱をもって、心臓が鼓動をやめてもなお体内を循環する血のように依然としてその糸をほぐしつづける。夜降る雪の白さと、流れる溝の銀色の中で、白い馬もいまやその赤い目が見えるだけだ。その赤さが蛍のようにひらひらと谷間を舞う。雪の中でその赤さが燃えあがるなか、やがて馬は眠りに落ち、立ったままそこに凍りつく。

24

その翌年のこと。ある朝おれは目を覚まし、いままで一度も会ったことのない一人の女のことを考える。五秒後にはもうどんな女かも忘れている。女を覚えているのは唯一、おれの中央にあるものだけだ。そしてそれはベッドのシーツにその記憶を垂れ流すまで、思い出すのをやめない。この時点以降、おれはアメリカのように勃起している。その年の暮れ、アメリカ中のほとんどすべてのものがあっけなく地面に崩れ落ちるときも、おれのペニスは依然として屹立しつづけている。

一九三一年、おれは十四歳になっている。親父の牧場も大恐慌で痛手を受けたが、破産だけは何とか免れた。我々のまわりで農場が次々と人手に渡っていく。どこも銀行に融資を受けた農場だ。不穏な空気が谷間に広がる。農場主たちも、その使用人たちも、絶望が生む悪意の虜になっている。毎日夕方になると、丘から煙が立ちのぼる。時おり窓から見てみると、まるで丘そのものが動き出したように見える。だがじきにおれは気づく。あれは単にやけっぱちの男たち、何千人というやけっぱちの男たちで丘が息づいているだけなのだ、と。男たちが手に手に松明(たいまつ)を持っているときなど、まるで世界そのものに火がついたみたいに見える。だがおれはその後一生そういう火を見つづけることになる。いまから七年後のウィーンの街路にそういう火がある。おれにはいますでにその火が見える。そしておれが感じている匂い、十四歳の鼻孔から出ている血、それはみな二年先の火事のときのものだ――おれ自身の手で起こした火事、おれ自身の手で流した血。これらの火はそれぞれ見かけは違っているかもしれない。絶望の火、おれ自身の解放の火、ウィーンの街路での勝利の火。だが火の憎しみはみな同じだし、熱は残忍で冷酷だ。

おれは窓から身を乗り出し、肺一杯にそれを吸い込む。

親父は厩舎の使用人とインディアンたちの手にライフルを預ける。丘が牧場の縁まで動いてきたら戦うのだ。息をするものが近づいてきたら何であれ親父は喜んで殺す気でいる。親父がこれまでにもいろんなものを殺してきたかどうかはわからない。でもおれ自身の才能から判断して、ぜいた

いの見当はつく。

丘は飢えている。間違いない、厩舎にいる馬を皆殺しにする気だ。雪に埋もれた馬たちの赤い目以外、何ひとつ残らなくなるまで。

危機が過ぎると、親父は町へ酒を飲みにいく。オラルとヘンリーもついて行く。おれが朝の四時に目を覚ますと、家の車が道路を上ってくる音が聞こえる。オラルとヘンリーが両脇から親父を支え、家の中に運び込む。親父は居間でうんうん唸（うな）っている。オラルとヘンリーは笑いながら、もぐり酒場で会った娘の話をする。おれは明け方近くまで眠りに戻れない。まもなくオラルが部屋に入ってきて、厩舎へ出る支度をしろとおれに言う。

26

おれは十五歳になっている。毎朝おれはよたよたと台所に降りていく。おれの中央は夢の女たちの記憶をたたえて鋼鉄のように固く、大統領の記念碑のように大きい。その光景にショックを受けて、家族の連中は文字通り顔をそむける。小麦粉の並んだ棚のかたわらにいるアリスは、まるで動悸でも起こしたみたいな様子だし、兄たちは憤慨したような表情を浮かべている。親父だけが呆然と凝視しつづける。その口は食物を嚙むのも忘れ、かすかに下に垂れたままである。だが親父以外の連中にとっては、この光景ほどおれの大きさを不気味に思い知らされる眺めもない。こんな化け物と一つ屋根に暮らすなんて耐えられない——みんなどうやらそう思っているらしい。

CamScannerでスキャン

27

おれが書くものにもアリスは耐えられない。彼女はおれの寝室でそれを見つけ、全身が麻痺せんばかりの恥ずかしさを覚えながら、その一語一句を読み通す。彼女は夫に相談する。連中は家族会議めいたものを開く。親父と、アリスと、兄二人。彼らは状況分析を行なう。おれの心理、道徳観、精神の安定度を考察する。兄たちは病院送りを強く推す。が、結局親父は、厩舎で鞭打ち、プラスそのまま馬と一緒に寝かせる、という決定を下す。「馬と変な真似するんじゃないぞ」とおれを鞭で打ち終えた親父は言う。親父の怒りはほかの連中の怒りよりも感情的な感じがする。「人に言えた義理かよ」とおれはひるまず言い返し、親父はさらにおれを鞭打つ。

一九三三年。断層線が時代を貫いて走る。ここにはローズヴェルトがいて、海の向こうベルリンにはあの男がいる。ロシアにはあの男。

おれは十六歳になっている。寝室の窓から見える光景はどんどん訳がわからなくなってきた。まもなく、それ自身の断層線を従えた新しい動きが現われて、おれは反対側に足を踏み入れるだろう。そしてそっち側に移ってからは、相当長いあいだ——名も知らぬ島の小さな町で一人の年老いた女の足元でおれが死ぬ瞬間まで——何ひとつはっきり見ることのできない時間がつづくだろう。

もちろんそれはお前のことだ。それはあの日の午後ウィーンで、お前がまだ娘だったときにはじまったのだ。それ以前、それ以降、目を覚ます瞬間に見るどの夢の女たちも、お前に触れはしなかった。おれだってお前に触れはしなかった——お前を一目見たことですべては変わってしまった

けれども。文字盤から数をいっさい葬り去ってしまったあのもじゃもじゃの白髪の小男のドイツ人も、このおれも、お前には指一本触れることができなかったのだ。

でもそれはもっと先のことだ。これは今夜、一九三三年、おれの親父の牧場でのこと。もっといえば、そのはずれの、インディアンたちが住んでいるあたりでのことだ。

そして今夜こそその夜なのだ。

28

ヘンリーが部屋に入ってきて、おれを起こす。十一時頃のことだ。満月が出ている。九つの窓にはカーテンが引いてあるが、月明かりはカーテンを貫いて流れ込み、九つの白いパッチのように壁に浮かんでいる。おれが目を覚ますと、ヘンリーの顔がすぐ目の前にある。「よお大将」とヘンリーは言う。数秒経って、おれはいまが夜中であることを悟る。「起きたか?」とヘンリーは言う。「大砲の調子はどうだ?」。おれは暗闇の中で体を起こし、顔をごしごしこする。頭はまだぼうっとしている。「大砲って何だよ?」とおれが言うと、ヘンリーは「ほら、お前化け物みたいの持ってるじゃないか」と答える。

「何の用だよ?」

「バニング、お前いくつだ?」。おれがいくつかくらい、ヘンリーだって知っているはずなのに。少なくともおおよその見当はつくはずだ。おれは体を起こしたまましばらく耳を澄ます。家の中はしんと静まり返っている。ヘンリーの態度は妙に親しげだ。いかにも兄貴っぽい感じの声である。

CamScannerでスキャン

「何の用なんだよ」とおれはもう一度言う。

「女だよ、バニング」とヘンリーは答える。「今夜な、バニングちゃんを待ってる女がいるんだよ」。彼はベッドから毛布をはぎ取り、たんすの上からズボンを投げてよこす。「さあ、行こうぜ」

おれはヘンリーの兄貴っぽい態度を怪しく思っている。と同時にわくわくしてもいる。おれは長いことこういうものを欲してきた。女を知りたいと思うよりも前から欲してきたのだ。まあここ一、二年は、女を欲しいと思う気持ちもずいぶん激しかったけれど。「どこへ行くんだよ？」とおれは訊ねる。

「レディに会いに行くんだよ。お前、レディに会いたくないか？　その大砲が自分の手以外のものにも合うかどうか、いっちょう試してみなって。お前きっともてるぜ、弟よ」

「でも誰なんだよ、それ？」

「服を着るのか、着ないのか？」。おれはゆっくりと、寝室の暗闇の中でズボンをはきはじめる。九つの白いパッチがおれのまわりで舞っている。「オラルの友だちなんだ。俺の友だちでもある。親父の友だちでもある。ま、ジェーンライト家の男たち共有の友ってところだな」

「でもどうして？　どうして友だちなんだよ？」

ヘンリーはしばし間を置いて言う。「金を払って友だちにさせてるのさ。ほら、このポケットに金があるんだ。来りゃわかるって」。きっとまたいつものようにアリスから盗んだ金だ。「さ、シャツを着な」とヘンリーは引き出しからシャツを一枚取り出しながら言う。そして彼は部屋を出ていく。おれは靴をつかんであとを追う。どうもいま一つしっくり来ない。でも一晩のうちに大人に

CamScannerでスキャン

なれるチャンスと兄弟仲よくできるチャンスの両方があるのに、みすみす見逃すなんてできやしない。階段の前まで行くと、ヘンリーの姿が階下に見える。彼は顔を上げ、指を一本唇に当てる。居間からぼんやりと光が洩れている。おれは靴を抱えたまま裸足で階段を下りる。居間の椅子に座って、アリスが毛布を顎まで引っぱり上げて眠っている。きつく縛った髪が額のあたりにずり落ちかけている。ヘンリーはそっと彼女に近づいて、その前に立ちはだかる。それから肩ごしにふり返りおれを見て、家の裏手を指さす。おれはできるだけ音を立てないように台所を抜ける。テーブルに正面衝突し、調理台から鍋を一つ叩き落としたものの、どうにかそれを空中で受けとめる。

オラルが裏戸の外で待っている。暖かい夜だというのに、両手をぐっと深くポケットにつっ込んでいる。ヘンリーがおれにつづいて裏戸から出てきて、オラルに顎で合図する。オラルは何も言わずに、ついて来いというふうに合図する。おれたちは出発する。前方には満月の光に青く洗われた谷間がある。ぎざぎざに伸びた牧場の柵が、傷口に残った白い縫いあとのように広がっている。おれたちは納屋と厩舎を通り過ぎる。馬たちが足音を耳にしてごそごそと体を動かし、何か言うのが聞こえる。おれたちは三人とも黙ったままだ。やがて厩舎を過ぎたあたりで、おれが「どこへ行くんだよ?」と訊く。兄たちは二人とも答えない。おれたちはまた静かになる。とうとうおれが「その女、金を取ってそういうことやるのか?」といったようなことを言うと、オラルが「少し黙ってられないのか?」と言い、ヘンリーが「そうとも、バニング、金を取ってやってるのさ。さっき言った通りだよ」と言う。それからおれたちはもうしばらく歩きつづけ、やがて牧場のはずれに行きつく。

CamScannerでスキャン

ここはインディアンが暮らしているところだ。この時点ではインディアンはもうあまり残っていない。両親と小さい子供が二人、それに祖父が一人という家族が一つの小屋に住んでいる。もう一つの小屋には齢とった女が一人で住んでいる。前には夫もいて牧場で働いていたが、もう死んでしまった。そして三番目の小屋に、台所の雑用係の混血女ゲイラがいる。おれたちは暗闇の中をゲイラの小屋へ向かう。三人ともあたりをきょろきょろ見回す。もっとも何のために見回しているのかおれにはよくわからない。月が乳のような光を木に浴びせかける。オラルがポケットからドライバーを取り出して、ゲイラの小屋のドアの鍵を外す。何が何だかさっぱりわからない。鍵は壜の栓を抜く程度の力で造作なく開く。二人は小屋の中にさっと飛び込む。中から何かくぐもった音が聞こえる。「入ってきな」とヘンリーが言うのを聞いて、おれは中へ入る。

小屋には見るべきものもあまりない。月光がくっきりと中を照らし出し、隅のベッドにインディアン女がいるのが見える。女はまぶしいのか、片腕をかざして目を覆っている。でももしかしたら、何かほかの、見たくないものから目を隠しているのかもしれない。おれにはわからない。「ドアを閉めろ」とオラルが言い、やがてもう一度その言葉をくり返す。おれはドアをいくぶん閉めるが、女の姿が見えるように、完全には閉めない。オラルは女の両腕を押さえている。ヘンリーがおれに言っている。「さあ来い大将、こっちへ来な」。そしておれに向かってさかんに手招きし、もっと近よれと合図する。おれはドアのそばに立ったまま動かない。「何なら服も破いちまっていいんだぜ」とヘンリーが言うのが聞こえる。ゲイラが悲鳴を上げる。ほかの小屋にいるインディアンたちにも聞こえているにちがいない。でも誰も様子を見に飛んできたりはしない。容易に想像は

つく。みんな寝床の中で身を丸めて、ことが終わるのをじっと待っているのだ。おれが相変わらず立ったままでいると、ヘンリーが女の服を破りとる。

「金を取ってやってるんじゃなかったのかよ」とおれは言う。

「もちろん金を取ってるさ」とヘンリーは白を切って言う。「これも料金に入ってるんだよ。ゲームのうちってわけさ。遊びみたいなもんだって。お前もそういうの年じゅう書いてるじゃないか。さあさあ、来いよ。化け物を用意しときな。まず俺たちがウォームアップしてやるからさ」

「俺が先だ」とオラルが命令口調で言う。ヘンリーはちょっとためらうが、結局言う通りにして、オラルがゲイラを犯すあいだ彼女の両腕を押さえている。オラルは二十秒くらいで果てる。そしてうめき声を上げ、よろよろとあとずさりしながら、ヘンリーに顎で合図する。ヘンリーの番のあいだ、今度はオラルが女の両腕を押さえている。ヘンリーの方がいくらか時間が長い。ゲイラはもう声も上げない。ヘンリーの体が影になって、彼女の顔はおれには見えない。もしかしてこれは本当にゲームなのかもしれない、とおれは思いはじめている。ヘンリーはことを終え、どっと後ろへ倒れ込み、それから息をぜいぜい言わせて「さあさあ弟よ、あとはお前のもんだぜ」。だがおれは自分が立っている場所からどうしても動けない。じきオラルがせかす。「早くしろ、一晩じゅう押さえちゃいられないぜ」。ヘンリーも言う。「なあ弟よ、お前のためにずいぶん骨折ってやったんだぜ。ここまで来てがっかりさせるなよ」。おれはのろのろとズボンを脱いで、女に近づいていく。おれはまだ十分用意ができていない。おれの体は頭の混乱を反映して、上がっても下がってもいない。だがとにかくおれは女の前へ行き、女の目に体をさらす。そのとき、女の沈黙が破れる。女は

悲鳴を上げる。
　女は悲鳴を上げる。はじめおれは、女がおれの大きさに悲鳴を上げているのだと思う。おれは屈辱と怒りを感じる。一瞬のあいだ、おれの中の一部分が彼女を殴りたいと思う。ちょうどそう考えている矢先に、ヘンリーが「殴りたかったら殴っていいんだぜ。向こうもその気でいるんだからさ」と言い、それでおれは殴る気をなくしてしまう。なぜなら、どうにも様子が変だからだ。悲鳴を上げる女はおれの中心を見ていない、おれの目を見ているのだ。おれの顔を見て叫び声を上げているのだ。そしてその悲鳴は肉体から出てきているのではない。それは彼女の中のどこか別のところから湧き上がっている。女の頬を涙が流れ落ちる。彼女の恐怖は優しい恐怖だ。
　そしてその瞬間、おれは知る。
　どうしてわかったのか、と訊いても無駄だ。おれだってどうしてわかったのかわからない。彼女の顔を見ても、それらしい手掛かりは何もない。強いていえば目のまわりに浮かぶある種の荒々しさ。あるいは平べったい鼻。見たところおれに似たところはほかに何もない。もしもっとよく見えたなら、口にも何か見つかるかもしれない。手の線が同じかもしれないし、肩のカーブが似ているかもしれない。おれの足跡を雪野原に残したら、彼女の歩みがそれにぴったり一致するかもしれない。だが、彼女はおれの中に完璧に収まるはずだ。かつておれが彼女の中に完璧に収まっていたなんてとても信じられないほど完璧に。とにかく、おれは知る。この瞬間におれは知る。
　そして……ここから先、話は混乱している。物事はのろのろとかつ目まぐるしく進行し、暗い小屋の中で我々のあいだに何が起きているのか見きわめるのは難しい。我々の頭の中で起きているこ

と、我々の手の中で起きていること、それらはいまやひとつになっている。おれが知ったということにオラルとヘンリーがいつ気づくのか、確かなことはおれにはわからない。

おれの中には大きな暴力がある。

それはひとつの音を立てる。おれが両手でヘンリーの頭を抱え込み、脳味噌を潰す音だ。たぶんこの瞬間、膜組織と血とのどろどろした塊が両耳から流れ出る寸前の瞬間、ヘンリーはおれが知ったことを悟るのだろう。彼は悲鳴を上げる。大した悲鳴ではない。ぎゃっという、軽いうめき声というところだ。苦痛のさなかに、その声はふっと途切れる。もしここでおれがもう少し落着いていたなら、この瞬間をもう少し引き伸ばしたことだろう。おれが知ったのだということをヘンリーにはっきり知らせるために。誤解なんかではないことをはっきりわからせるために。おれは両手を放す。ヘンリーは床に崩れ落ちる。オラルが月明かりを浴びたヘンリーの残骸を見る。オラルの目に浮かんだ表情におれはひどく満足する。オラルはヘンリーからおれに視線を移す。その目は一ドル銀貨のように大きくなっている。オラルはドアめざして突進する。おれはドアのはるか手前でやすやす奴をつかまえる。オラルは悲鳴を上げている。谷間の向こう側にまで届くようにと、ありったけの力で叫んでいる。だがその音の足どりはあまりにのろく、事態を何ひとつ変えはしない。

おれはもういくらか落着きを取り戻している。おれはオラルの片手をつかむ。一握り、二握り、それで手の骨が全部砕ける。おれはいくらか落着いている。「なあオラル、俺のことなんて気にしなくていいんだぜ」とおれは言う。「俺なんかどうせ、図体ばかり大きいうすのろだからさ。愉快な冗談のカモにはもってこいのうすのろ坊やだからさ。要するにそういうことだよな、そうだろ。

これみんな、なりばっかり大きなうすのろ坊やのための愉快な冗談なんだろ」。おれにめちゃめちゃにされた手を見ながら、オラルが口から泡を飛ばし訳のわからない言葉をわめき立てている。「何なら首もこうしてやったっていいんだぜ」とおれはオラルに言う。「そうして欲しいっていうんなら別だけど、そうじゃないんだったら、全部説明しろ。なりばかり大きなうすのろ坊やにもわかるように、ちゃんと全部説明しな」。おれはオラルの首をつかんで揺さぶる。自分の脊髄（せきずい）の震える音がオラルの頭の中に聞こえてくるまで、ぐいぐいと執拗に揺さぶりつづける。

彼は説明する。なりばかり大きなうすのろ坊やにもわかるように、ちゃんと全部説明する。そしてそれは実によくできた冗談である。なりばかり大きな坊や以外、誰もがそれを知っていたのだ。もちろんオラルの話はところどころ混乱している。ジョークがぴしっと決まるように喋ってはいない。出来事の順番もいくらかこんがらがっている。だが、いくらなりばかり大きなうすのろ坊やだって大体の見当はつく。おれにだって大体の見当はつくのだ。どうやら要するにこういうことらしい。おれの親父は、いわばおれたち二人分の種を植えつけたのだ。それもオラルのこんがらがった話から察するところ、どうやら同じ晩に。おそらく十七年前の同じ晩、親父はアリスを妊ませた。そしてまだ女を抱き足らなかった親父は、妻のベッドを出てインディアン集落に直行し、ゲイラの中にも種を植えつけたのだ。要するにそういうことらしい。女たちは二人とも妊娠した。たがいに一キロと離れていないところで、ともに腹の中に親父の種を宿したのだ。しばらくのあいだ親父は、自分こそそこの冗談の笑い者だと思っていたにちがいない。何度もくり返し、インディアン女を集落から追い払ったからだ。だがゲイラはそのたびに戻ってきた。ゲイラの妊娠を、アリスは

一種の恐ろしい偶然とみなした。もしかしたらアリスもアリスで、自分こそ笑い者だと思っていたのかもしれない。ことの真相は誰の日にも明らかだったし、事実みんながそれを口にもしたのに、アリス一人は頑なに真実を認めようとしなかった。オラルはちょうどいまそのあたりを説明しようともがいている。おれの怒りと好奇心とにはさまれて、あがくように身をよじらせている。どうやら二人の女は、たがいに一キロと離れていないところで、六時間と離れていない時間に出産したと思われる。時計仕掛けの秩序と精密さとをもって、秩序正しく精密なる十九世紀が、二十世紀に対して仕掛けた最後の愉快なジョークというところか。アリスの陣痛はことのほかひどく、結局子供も死産に終わった。「さあさあ、オラル」とおれは言う。「先を話せよ。わかるぜ、ここからがいいところなんだろ」。オラルは唾を飛ばし、よだれを垂らす。アリスは意識を失ったまま横たわり、懸命に生にしがみついている。ここで親父が一世一代の名案を思いつく。親父はこれによって、まさに今日生まれたもう一人の赤ん坊の問題、インディアンの血が四分の一混じった私生児の問題を一挙に解決する。しかも実に白人の男らしいやり方で。これ以上はないというくらい狡猾な手口である。あんなに腰の定まらぬ男に、よくこんなアイディアが思いつけたものだ。あんなに腰の定まらぬ男のくせに、親父はどうにかして見抜いたのだ。いくら追い払ってもかならず戻ってくるあのインディアン女は、きっと彼に子供を渡してくれるだろう、そしてそれについて一言も言わないだろう、と。親父はどうにかして見抜いたのだ。夫に裏切られたとはいえ、もし妻がこのまま生きのびたなら、妻はきっとその子供を受け入れるだろう。恐ろしい疑惑を抱いたまま、何も言わず、答えを聞きたくもない質問などいっさい口にせずただその子を受け入れるだろう、と。親父にどうして

そんなことが見抜けたのか、正直言っておれにはわからない。とにかく親父は馬を走らせインディアン集落へ出かけ、ゲイラから息子を取り上げ、その赤ん坊を抱いて牧場へ戻り、ほんの数時間前にもう一人の赤ん坊が死んだベビーベッドに寝かせる。「よく思いついたもんだよな、なあオラル」とおれは小屋の闇の中で言う。かたわらでおれの母親がすすり泣く声がする。「でもまったくお前の言う通りだぜ。いやいや、実によくできたジョークさ」。ヘンリーと同じように、オラルも床に崩れ落ちる。だが彼からはまだ生命のうめきが洩れている。

インディアンの女はもう泣きやんでいて、両手で顔を押さえている。おれの一部分はなおも彼女を殴りたがっている。なぜ親父におれを渡してしまったのか、おれはそれを白状させたい。一番腹が立つのは、もしかしたら彼女は本気でその方がおれのためだと思ったのかもしれない、という可能性だ。白と青の、堅実で、確固とした家の、窓が九つある部屋で暮らした方がこの子のためなのだと。おれはベッドから毛布を取って、彼女の体に掛けてやる。「すぐ戻ってくるよ」とおれは彼女に言い残す。

29

おれは彼女にそう言い残す。だが彼女には聞こえていないかもしれない。おれの体はすでに半分ドアの外に出ている。白く巨大な月が青い丘の上に漂い、おれは牧場のはずれを走る。自分のなかにある大きさを駆り立てて、大またで厩舎を過ぎ母屋へ向かう。何も考えてはいない。何も計算していない、ただ動いているだけだ。連中は家の中で眠っている。この先何が彼らを待ち受けている

のか、夢にも知らずに。
あっと驚く何とやら、だ。
おれは家の裏手にたどり着き、蝶番を引きはがさんばかりの勢いでドアを開ける。それは怒りの行為ではない。怒りなどもはや関係ない。それは怒りよりも意図的な、意図よりは本能的な行為だ。おれは台所に入っていく。ミニーがその横の、寝室代わりに使っている部屋から飛び出してくる。暗闇の中でも、おれを一目見ただけで彼女は悟る。溶鉱炉から出てくる爆風のように、彼女の中から恐怖が吹き出す。ほの暗い月明かりでも、恐怖の爆風の白さがはっきり見える。
「やあやあミニーじゃないか」とおれは笑って言う。「なつかしミニー、生まれも育ちもヴァージニー」
彼女は家の中に駆け戻る。おれはそれを止めはしない。彼女なんかに構っている暇はない。家の沈黙をつき破って、ミニーが金切り声を立てはじめる。でも別にどうだっていい。実際その方が公平というものだ。連中にも身構えるチャンスができるのだから。
アリスはもう居間の椅子で布団にくるまってはいない。きっと寝室に上がったのだろう。おれも二階に上がっていく。と、親父がよたよたとした足どりで寝室から出てくる。おれが階段を上りつめると、親父は廊下に立っている。根っからの暴君である親父には、いまここで何が起きているのかが理解できない。どうせライフルで片がつくことだと思っているのだ。あるいは厩舎の鞭打ちで片がつくことだと。「いったい何の真似だ、こんな夜中に？」と親父は言う。
「やあ父さん」とおれは答えて言う。逃げた方が身のためだと親父が気づく間もないうちに。お

れはもう目の前に来ている。一瞬均衡を失った親父の体をつかまえ、そのまま持ち上げて、壁に叩きつける。おれにはこのくらい造作もないことだ。うんざりすることに、親父はいっこうに状況が呑み込めない。かくしておれは何度も何度も親父を壁に叩きつける破目になる。何としても親父に事態を悟らせなくてはならない。それは絶対に必要なことだ。そうしないことにはこっちの気持ちが晴れない。親父を怒らせたっておれには何の意味もない。その怒りが消え去るまで、おれは何度も何度も親父を壁に投げつけねばならない。怒りが消え去ったとき、親父はようやく何かを恐れはじめるだろう。そしてようやく何かを恐れはじめたとき、親父はすべてを恐れはじめるだろう。そうすればおれの気分もすっきりするのだ。アリスが寝室の前で悲鳴を上げている。

親父とおれは、おれの寝室のドアの前にいる。おれは親父を部屋の中に放り込む。おれは汗まででかきはじめている。「俺にも冗談がわかったぜ」とおれは親父に言う。無駄だ。こっちがどれだけ長く、懸命に頑張ったところで、親父にすべてを恐れさせるのはどうも無理らしい。ほとほとうんざりして、おれは、親父をもう一度投げ飛ばす――九つのうち最初の窓めがけて。夜の中へ、一九一七年の彼方へ向けて、親父を投げ飛ばす。親父の体が窓の下のひさしにぶつかる音、地面へ転げ落ちてぼんと弾む音、おれとしてはそれで満足するしかない。この闇では、親父が生きているかどうかも見きわめがたい。たぶん背骨は折れただろう、それもあちこちで。といったところで満足するほかない。

アリスはまだ寝室の前で悲鳴を上げている。アリスの寝室は親父の寝室とおれの寝室のあいだにある。一階ではミニーがヒステリーを起こしている。おれは廊下に出て、今度はアリスを持ち上

CamScannerでスキャン

げ、投げ飛ばす。彼女の体が相当な勢いで壁に衝突する。きつく巻いた小さな紫色のカールはもうすっかりほどけてしまっている。「俺にも冗談がわかったぜ」とおれはアリスに言う。「俺にもわかったぜ。そして俺はいずれこういう真似をしてかすことになってたんだろう？　いずれ俺はどうしようもなく大きくなっちまって、化け物以外の何ものでもなくなっちまうことになってたんだ」。壁ぎわでアリスがめそめそと泣いている。聞いていて苛々する泣き声だ。顔は一面鼻汁と血。「あんたは俺を自分の子にして、俺に名前をつけた。それがあんたの、俺たちみんなへの仕返しのつもりだったのか？　あんたはそうやって、冗談の仲間入りをしようとしたのか？　愛でもない愛と、信頼でもない信頼を抱えて？　見ろよ、あんたの化け物はここにいるぜ」。今度はおれはそっと彼女を持ち上げる。おれに触れられて彼女は悲鳴を上げる。おれは彼女をベッドの上に降ろす。「オフルとヘンリーが今夜連れていってくれたのさ。俺の母親とファックさせにね」とおれは言う。「でも結局ファックされたのはあいつら二人だったよ。俺はヘンリーを殺したんだよ、母さん」。おれはまだ彼女をそう呼ぶ癖が抜けていないのだ。おれの話を聞いて、彼女はまた悲鳴を上げる。それからいっさいの抑制をなくしてわあわあ泣き出す。おれが嘘をついているのではないことが彼女にもわかるのだ。「俺はヘンリーを殺したんだよ」とおれは言う。「ヘンリーが死んじまって俺も残念だよ。生きてりゃもういっぺん殺してやるものを」。そしておれは彼女を持ち上げ、その体を肩にしょって、一階に下りていく。彼女はもうほとんど虚脱状態だ。ミニーは台所に戻っていて、両手をもみ絞っている。アリスを背負ったおれの姿を見ると、ミニーは裏戸に体当たりするようにして外へ飛び出す。月光の中を彼女が走っていくのが見える。おれはアリスを外の地面に下ろす。親

父が仰向けに倒れてのたうち回っているところからさして遠くない場所に。それからおれは家の中に戻り、十分間かけて家具を壊し、たっぷりとした山を居間のまん中に積み上げる。そしてミニーが寝室に使っている横の部屋から灯油を探し出し、親父が自動車に使うガソリンを持ってくる。おれはそれを家じゅうに注いでまわる。一滴残らず注ぎつくす。

家はあっという間に燃え上がる。おれ自身外へ逃げる暇もろくにないくらいだ。白と青の、堅実な、確固とした光。

炎の光と、月の光を浴びて、アリスは地面に横たわっている。フィリップは相変わらずのたうち回っている。

これほどの光を見るのは、連中だって初めてだろう。

30

迎えに戻ると、彼女はもうそこにいない。すぐ戻ってくるよ、とさっきおれが言ったのが聞こえなかったのかもしれない。とにかく彼女はそこにいない。インディアンたちは誰一人そこにいない。おれが生まれる前からずっとここに住んでいたインディアンたちが、すべてを残したまま、小屋を捨て、あっという間に消えてしまったのだ。北の方でジェーンライト家を葬る炎がバベルの塔のように立ちのぼる。夜明け前の静けさの中で、その炎に向けてあたり一帯が叫び声を上げているのが聞こえる。叫びと笑い、神を讃える喝采。

神なんか全然関係ないのに。

おれは歩きつづける。雲が出てきたせいで、目の前の月光がまだらに変わる。おれは谷間を去る。おれは恥ずかしく思う。化け物のような体の、化け物のような本性に屈したことを。おれはそういう本性をこの谷間に捨てていきたい。一緒に肉体まで捨てていけるものなら、喜んでそうするだろう。ピッツバーグの十キロはずれで、おれは東行きの汽車に飛び乗る。

31

貨物車両の暗闇に包まれて、おれはほかの四人の男とともにうずくまっている。我々はそこに長いこととどまりはしない。なぜならピッツバーグの駅に着けば、鉄道会社に雇われた男たちが車両を巡回し、浮浪者や放浪者や流れ者を、すなわち一九三三年におけるアメリカの人口の半分を、追い出してまわるからだ。だからピッツバーグの町に近づいてきたあたりで、汽車から飛び降りねばならない。汽車のスピードが緩むまで待ってはいられない。棍棒を持った連中が町はずれに立って、虎視眈々我々を待ち構えているからだ。したがって手順としては、町からまだ十分外にいるあいだに列車を降り、それから町の反対側まで歩いていって、今度は町を出てきた汽車をつかまえる、ということになる。これはピッツバーグに滞在する気がないとしての話である。おれはピッツバーグに滞在する気はない。おれには別の目的地がある。そこはニューヨーク・シティという名前だ。

32

CamScannerでスキャン

丸一日かかっておれはピッツバーグの反対側にたどり着き、ほかの何人かの男たちと一緒に草むらに身を埋め、ハリスバーグ行きの汽車を待つ。ハリスバーグへ行ったらまた同じ手順をくり返すことになるだろう。うまく行けばそこからスクラントン行きの急行列車がつかまるかもしれない。スクラントンからはもう一本急行があって、それがニュージャージーの上端を横断し、おれの最終目的地に行きつく。かくして夜の八時頃、ハリスバーグ行きの列車がやって来る。我々一ダースばかりの男たちは、列車めがけて猫みたいに突進する。何とかして飛び乗ろうと、みんな必死で走る。汽車は速い。おれはひとつの車両の把手に狙いを定め、全力をふり絞って脚を前へ前へと押し出す。闇の中、必死の思いで把手をつかむ。車両の側面にへばりつくと、風がものすごい勢いで体の中を通り抜けていく。おれは夜の冷気を体内いっぱいに吸い込む。心臓が凍りつく。肩ごしに後ろをふり返ると、ずっと後方に男が八人、まだ地面の上にいる。おれと同じに死に物狂いで走ったものの、脚力が及ばなかった八人。草原に浮かぶ彼らの暗い影がおれを見送るのが見える。おれは十分ばかり車両と車両のあいだのすき間に身を隠し、体力の回復を待つ。それから車両の屋根によじ上り、蜘蛛（くも）みたいに這っていって、三、四台先の、ドアが開いていると覚しき貨物車両をめざす。おれは百九十センチ、百キロ。だがちょっと強い風が吹けば、ひとたまりもなくオハイオまで吹き飛ばされてしまうだろう。

車両には先客が三人いる。ピッツバーグの外の草むらで一緒に汽車を待っていた連中ではない。二十四時間かかっておれは学んだ。放浪する者たちのあいだの連帯感なんてものは、十六歳の子供が感じるたぐいの絵空事にすぎないのだと。二日前、おれは十六歳だった。二日前だったらそれを

信じただろう。だが今日のおれは自分の手で異母兄弟を殺した人間だ。殺戮(さつりく)の大学に学び、もう何も教わることがなくなって卒業したのだ。貨物車両にいる男たちには、いい奴もいれば悪い奴もいる。どいつがどっちかを見分ける公式などありはしない。こっちが寝ついたとたん、おれの持ち物を目当てに、ここにいる誰かがおれの喉をかき裂かないという保証はどこにもない。おれのベルトのバックル、おれの靴。おれのコート。おれの耳とか、指とかを欲しがる奴だっているかもしれない。おれは少しのあいだうとうとする。果たせるかな、目を覚ますと一人の男がナイフの刃を光らせておれの頭上をうろうろしている。さっきまで車両の反対側にいて、暗闇ごしにこっちをじっと見ていた奴だ。おれが壁により掛かって身を丸めているせいで、男にはおれが大きいのか小さいのかもろくに見えていない。おれが子供みたいな顔をしているのが見えるだけだ。というわけで男はおれの目の前にやって来て、おれの顔に息を吹きかけている。おれはさっと両手でそいつの顔をわしづかみにする。命を惜しむ暇も与えぬくらいすばやく。「問題はだな」とおれは暗闇の中で男に講釈する。「あんたが俺の指を一本切り取ったら、残り九本も切らなくちゃならんということなんだ。そうするしかないんだよ。そして残り九本も切ったら、絶対に手も切らなくちゃいけない。そして手を切ったら――」男は茫然とおれを見たまま目をぱちくりさせている。「――そうしたら足も切らないのは重大な間違いなんだ。そういうのがいったいどこで終わる?」。顔をぎゅっと押さえつけられているせいで、男は答えることもできない。もっともどうせ何の答えも思いつきやしないだろうが。「あんたには暴力ってものがまるっきりわかっちゃいない。俺の両手は近頃そういうので一杯でね」。おれは貨物車両の床から身を起こし、汽車の動きに一瞬よろめいた体の均衡を取

CamScannerでスキャン

り戻す。そのあいだも男を押さえた手は緩めない。男の脚がしばし宙に浮かぶ。それからおれは砲丸投げの要領で、開いたドアの外に男の体を投げ飛ばす。おれはほかの二人の男と一緒に、夜の中に響きわたる悲鳴を聞く。悲鳴は少なくとも三秒か、四秒かつづく。そう、少なくともそれくらいは。男が死んだかどうかはわからない。ハリスバーグのはずれで乗った次の汽車では、おれははじめから、自分がどんな人間なのか誰が見ても歴然とするようにふるまう。マンハッタンに着く頃には、おれは自分の心から暴力をいっさい流し去ってしまっている。

マンハッタンではおれの心も、別の、もっと強い何ものかを必要とするはずなのだ。

33

ニューヨークでの初めての夜を、おれは路上で過ごす。自分と似たような境遇の男たちの群れに混じって、ゴミ収集の缶を使ったたき火の前で背中を丸めて過ごす。場所は西三十四丁目と八番街が交叉する近辺の、四つ角と四つ角のちょうどまん中あたり。やがて夜も明け、ニューヨークの建物が見えてくる。夢の中を貫いて進む波の水位線のように、都市の建物は黒く、湿っぽく連なっている。朝になると群れはいくらか散らばり出す。ロールパンかスープにありつけないかと、おれはあちこちの行列を見てまわる。ほとんどまる一日、おれは腹を空かしている。というのもおれはまだいろんなことを学んでいる最中だからだ。行列には早くから目をつけておかねばならない。朝になって何かにありつくためには、ずっと前の方に並んで待っていなければならない。夜通し待つくらいの覚悟が要るのだ。それから今度は簡易宿泊所のベッドにありつくために、また一日じゅう並

CamScannerでスキャン

んで待つ。グリニッチ・ヴィレッジの方にいい宿泊所があるという話をおれは聞かされる。そこなら床も清潔だし、ほぼ一晩中暖房も入っているという。でもヴィレッジとはそもそもどこなのか、それを知るにもしばらく時間がかかる。

それから仕事の見つけ方を学ぶ。朝の六時、日雇いの人間を漁りにどことどこにトラックが来るのかを学ぶ。連中が雇うのは、ほとんどただ同然の給料で働くくらい切羽詰まっていて、かつ働く気力をまるっきり失うまで打ちひしがれてはいないように見える男たちだ。トラックが来る場所は毎週、時には毎日変わる。いつどのように変わるかは、噂がどれくらい広まり、どれくらいの人数が集まってくるかによる。仕事を求める怒れる男たちの大群、これはまことに秩序を欠く、というわけだ。でもおれが見たところ、ニューヨークじゅう秩序なんてどこにもありはしない。二日もいればそれくらいわかる。いったい誰がこの場を把握しているのか。いくらあたりを見回したところで、それらしい人間なんかどこにもいない。警官たちはただ、馬に乗ってセントラル・パークや五番街を行ったり来たりするだけだ。五番街みたいな金持ち通りのどこに怒れる人間なんかがいる？

黒い車に乗った、マシンガンを抱えた男たちが、笑いながら走り去っていく。マシンガンの甲高い銃声が一晩じゅう響きわたる。ブロードウェイのまん中に立ってみるがいい、暗闇に銃炎が野生のひまわりのように花開くのが見えるはずだ。大統領のローズヴェルト。市長のラ＝ガーディア。彼らは英雄である。でもそれは神が英雄であるというのと同じ意味でだ。誰かがどこか上の方にいるのはわかっている。でもその誰かが、おれたちの人生みたいにちっぽけなものに少しでも関係あることを、いつの日にか何かしてくれるのか、そんなことまるっきりわからないのだ。代わりにど

この街角にも、おれたちに向かって叫びつづける組合の連中があふれている。電報配達の少年たちがグランド・セントラル駅から流れ出て、おれたちが決して出会うことのない人々の名を叫びながら四十二丁目を走りまわる。忘れられた年月から発せられた、何の言葉も書かれていない電報を携えて、誰に配達することもないまま少年たちは走りつづける。日暮れどきにはどぶの溝が電報で一杯になっている。何も書かれていないウェスタン・ユニオンのメッセージ。どれもみな、町をさまよい、道に迷って、結局はコニー・アイランドに行きついてビールを飲んでいる電報配達の少年たちが捨てたものだ。仕事にありつきそこなったおれたちは、何をするともなく通りをほっつき歩き、電報配達の少年たちを眺め、組合の連中の話を聞く。あるいは誰かを相手にジョークを話して聞かせる。でも大方その誰かは、ほんの五分前に我々にそのジョークを教えた本人なのだ。時には誰かがゴミの山からラジオを拾ってきて、みんなでヤンキースの試合を聞こうとごそごそいじくり回す。暖かくなってくると、事態はいくらかましになる。だが街角はもう飽き飽きだし、腹がぐうぐう鳴る音もうんざりだ。それに毎日、一晩じゅう並んで翌朝スープか仕事にありつくことをめざすか、それとも昼のあいだずっと並んで夜に宿泊所の寝床にありつくことをめざすかを選ばねばならないことも。むろん宿泊所で寝れば、仕事やスープの列に並ぶことはできない。どれが最悪か、つねにそれを考えて選択しなくてはならない。空腹。疲労。漠然たる未来を抱えた明日に賭けてみる気になるほどの絶望。そのうちどれが最悪なのか、年中そんなことばかり考えていなければならないのだ。

34

こんな暮らしが十日ばかりつづく。よくわからないがたぶんそれくらい経ってから、おれは仕事にありつきはじめる。まず言えることは、おれは人混みの中でも目立つのだ。トラックがやって来る。現場監督は重労働に耐えられそうな大男を探している。おれはその望みにぴったりというわけだ。それから三週間、おれはダウンタウンにある食品包装会社の冷凍庫で積みおろしの仕事をする。この仕事は三十分ごとに休憩を取らねばならない。寒さで腕や指の感覚が麻痺してしまうからだ。勤務時間は朝七時から夜九時まで。食べ物を買う金もできたし、宿泊所に金を払って泊まる余裕もできた。もっとも仕事を終える頃にはもうどこの宿も満員になってしまっている。いま貯めている金で、まるまる一週間分のベッドを予約してやろうか、なんて景気のいいことを考えたりもするが、どうもいま一つしっくり来ない。仕事、プラス食事、プラス寝床、それが全部いっぺんに手に入るなんて、何か間違っているような気がするのだ。やがて我々はいっせいにお払い箱になる。おれは今度は繊維会社で配送の仕事にありつく。だが今度は八日くらいしか持たない。客から苦情が来たせいである。おれが配送員というより、ゆすりに来たごろつきみたいに見えるというのだ。

かくしておれは街なかをぶらぶらする暮らしに逆戻りする。今回はそれが一月ばかりつづく。それだけ体が大きければ何か仕事に就けるはずだということで、福祉の恩恵も受けさせてもらえない。トラックから降りて人材を漁る現場監督たちの視線は、おれを貫いて素通りするようになる。変な話だ。思いつく説明は一つしかない。こういう世の中では人はいろんなことに屈服しなくては

ならないのに、おれのような大男は大人しく屈しそうもないように見える、ということだ。それとも近頃じゃ、とにかく大きなものは何であれ間違ったものということになっているのかもしれないい――少なくともこういう街角では。まあわからないでもない。この都市全体のことを考えてみるといい。都市の中のどこへ行こうと、いつこの都市に来ようと、都市の総体が頭上に浮かんでいる。でもその中でこっちの味方といえるのは、水位線の下の、目の高さに存在しているものだけだ。残りは敵だ。あるいはこっちにとっては死んでいる。おれは時おり、ふとした衝動に駆られて路上に立ちつくし、頭上何マイルにもわたって浮かぶように思えるこの巨大な都市を見上げてみる。我々の大半が決してその中を見通すことのないあの無数の窓のずっと奥の無数の部屋に、いったいどんな顔をした奴がいるのか、思いを巡らしてみる。だがいくら想像しても、建物の中は空っぽのままだ。あるいはせいぜい、たった一人取り残された人間が、みんなどこへ行ってしまったんだろうと思案しながら部屋から部屋をさまよい歩く、といった光景が思い浮かぶ程度。そもそも都市のてっぺん全体が、ここにありさえしない。いまにありさえもしない。それは何年も前にあった、もう一つの別の都市だ。その生の残像が、いまようやく我々のもとに届いているのだ。その絶滅の光はすでにどこかほかの場所で生じてしまったあとだ。我々はただ、すでに生じてしまった光がここにたどり着くのを待つしかない。たぶんトラックの連中もそんなふうにしておれを見ているのだろう――死んでしまった一つの大きさとして。その死の姿はいまなおせわしなく時間を旅し、おれを含む我々みんなが見ることのできる瞬間に向かって動いている。おれの大きさそのものは彼らにとってすでに死んでいる。だが冗談じゃない。見ているがいい、そうなるにはまだたっぷり時間がある

のだ。

35

いまは一九三四年の春。そしてある日、何かが起きる。ごくささいな、起きた時点ではやがてそれが重要な意味を持つとは誰一人知りえないような小さな出来事が起きる。おれは四十九丁目とブロードウェイの角の新聞スタンドのまわりにたむろしている。何人かの浮浪者仲間も一緒だ。みんなスタンドで煙草を買った客から一本せびろうという魂胆である。スタンドを経営している男はジェリーという。おれたちがあたりをうろつくのをジェリーは愉快に思っていない。時たま彼はスタンドから出てきて、猫でも追っ払うみたいにしっしっとおれたちを追い払おうとする。でもみんなポケットに手をつっ込んでそこにぼさっと立ったままだ。おれは煙草よりもむしろ、新聞や雑誌の方に興味がある。だがこっちがそれに指一本でも触れようものなら、ジェリーはすごい剣幕で怒り出す。おれは仕方なくそこに立ち、ラックに入った新聞の第一面を読む。厳密にいえば読めるのはその上半分だけだ。下半分は勝手に想像するしかない。雑誌についてはただぼんやり眺めるだけ。黒と赤と青の表紙、服をずたずたに引き裂かれたおそろしく美しい女たち、つねに誰か他人の死の影が顔にさしているギャングたち。おれはときどき、そういう雑誌を一冊買ってみようかと考えてみる。十セントだか、十五セントだか、いくらだか知らないがとにかく本当に金を払ってそれを買う贅沢を想像してみる。でも結局一度も実際に買いはしない。おれはただ、ほかの連中と一緒に、四十九丁目とブロードウェイの角に立って、まわりの人生を眺める。その大半はおれのそれと

大差ない人生だ。だが時には、劇場関係の人間たちの人生が、タクシーに乗って通りかかったりもする。昼のリハーサルに出かける女優たち。夜のショーに向かうパトロンたち。実業家やビジネスマンたち、スーツに身を包み黒塗りの車に乗った男たち。

ささいな出来事というのはこうだ。ある日誰かがジェリーのところに走ってきて、あんたの奥さんが卒中を起こして病院にかつぎ込まれたよ、と知らせる。ジェリーは半狂乱になる。「なあジェリー、よかったら俺代わりに店番するよ」とおれは言う。もしジェリーがまともに物を考えていたなら、たぶんあっさり店じまいしていただろう。そしておれもあっさり別の街角に移っていき、おれの残りの人生は違ったものになっていただろうし、世界も二十世紀も違ったものになっていただろう。だがいまのジェリーはまともに物を考えていない。それにこういう時代だから、一日店をたたむだけでも相当な痛手なのだ。というわけで、十秒前には気狂い沙汰に思えたおれの申し出も、いまやそれなりに期待できなくもない賭けに変貌している。ジェリーは大きく息を吸い込み、スタンドの中にせかせかと戻り、そこにある金を大方しまい込む。そして釣銭用としていくらかの小銭を残し、おれに向かって首をたてに振る。いつ帰るかとか、もし帰って来なかったらどうしたらいいかとか、何ひとつ言い残しはしない。もしかしたら言ったって仕方ないと思っているのかもしれない。どのみちこいつが残らず持ち逃げしてしまうだろう、あとで戻ってきて何か少しでも残っていたらそれで御の字と思わにゃなるまい、ぐらいに考えているのかもしれない。だが結果的には、御の字どころか、彼にとっては上々の結果に至ることになる。女房は卒中を持ちこたえ回復するし、おれだって持ち逃げしようなんてこれっぽちも考えていない。いくら払ってもらえるかもどう

だっていい。おれはただここにある雑誌が読みたいのだ。新聞の第一面の上半分以外のところが読みたいのだ。たとえばこのフィラデルフィアの新聞。十一ページあたりにこんな話が載っている。ペンシルヴェニアで、気の狂った子供を捜している。子供は兄を一人殺して、もう一人の兄を片輪に、父親を半身不随にし、母親を極度の恐怖に陥れ、家に火をつけ燃やしてしまったというのである。何だかまるっきりおれみたいな気狂いじゃないか。それからおれはその気狂いの名前が書いてある箇所にたどり着く。そのとき初めて、それが誰のことなのかをおれは悟る。

36

おれは三日間スタンドの店番をする。その間一度もスタンドを離れず、寝るときもカウンターの後ろにいる。三日後にジェリーが戻ってくる。おれがまだそこにいて、金がまだそこにあるのを見て、ジェリーはわが目を疑う。

「奥さんの具合はどうだい」とおれは言う。だいぶよくなった、でもしばらくは付き添ってやらにゃならんみたいだ、と彼は答える。「お前、しばらくここで働くか?」と彼は訊ね、いいよ、とおれは答える。おれは二週間ばかりそこで働く。悪くない仕事だ。たいていの時間、おれは雑誌を読んでいる。

毎日パッカードに乗ってやって来る客で、ジョン・〈ドギー〉・ハンクスという男がいる。ハンクスはマンハッタン北部の大半、ハーレムあたりまでの一帯を取りしきっている。以前はギャングだった。だが一年くらい前に禁酒法が廃止になって、ギャングたちはみんな法によって居場所を追

CamScannerでスキャン

われるか、あるいは法の枠の中に取り込まれた。ハンクスはひとまず取り込まれたクチである。少なくとも彼にとって我慢できるぎりぎりまで合法的な身だ。上等のスーツを着たハンクスは、車の運転は他人にやらせて後部席にふんぞり返っている。四十代前半、ウェーブのかかった金髪、こめかみのあたりのあばたを別とすれば水泳選手の脚みたいに顔じゅうつるつるに剃ってある。運転している男の髪はブラシみたいにぴんと逆立ち、鼻は磁石の針のように尖っている。もっとも頭はいくらか南の方向に傾いているようだが。「ジェリーはどうした?」とおれが働き出した最初の日にハンクスは訊ねる。奥さんが病気なんです、とおれは伝える。薬代の足しにしな、とハンクスはおれに金を渡す。「もしこの金をジェリーが受け取らなかったと聞いたら」とハンクスは言う。「ただじゃ済まんからな。その図体じゃ見つけるのは訳ないぜ」。ジェリーが戻ってきたとき、おれはその金を渡す。たいていの人間はそうだが、ドギー・ハンクスのような人物をめぐるジェリーの気持ちはいささか混乱している。この金にしても、畏敬と恐怖の念が強すぎて、素直に感謝できないのだ。「いいか、ミスター・ハンクスに伝えるんだぞ」と彼はおそろしく丁寧におれに指示する。「俺が本当に、本当にありがとうございましたと申しておりましたとな。わかったか?」

「わかったよ」とおれは答える。

「本当に、本当に――」

「わかった、わかったよ」。まったくやれやれだ。ハンクスがその日のうちにやって来る。「ジェリーに伝えるように言われました。『本当に、本当にありがとうございました』とのことです」

「オーケー」車の窓ごしに新聞を受け取りながらハンクスは言う。

「口調までちゃんとわかってもらえましたか?」とおれは訊く。「『本当に、本当に』ってとこ。お心遣い痛み入ります、って感じ」
「お心遣い痛み入ります?」ハンクスは運転手の方を見る。「聞いたかビリー、この小僧『お心遣い痛み入ります』だとよ」
「聞きましたとも、ミスター・ハンクス」鳥のくちばしみたいな鼻をした運転手が言う。
「お前どう思う」とハンクスは言う。
「大したもんじゃないスかね」とビリーがつっけんどんに答える。
ハンクスが笑う。彼はビリーを指さしながらおれに言う。「ビリーが大したもんじゃないスかねだとさ。ビリーはな、お前みたいな連中を見ると、いつも何からまいこと言うんだ」。少しして彼は笑うのをやめる。「お前、いくつだ?」
「はたちです」
「ははは」とハンクスは笑う。そしてビリーに向かって言う。「こいつ、数をあやつるのもうまいじゃねえか、え? ま、せいぜい十八ってとこかな」。彼は笑ったまま手を振り、車は走り去る。
それから毎日、後部席に乗って新聞を買いに来るたび、彼は「さ、今日の名文句を行ってみようじゃねえか」とおれに言う。おれは思いつくままでたらめを並べる。これが十日ばかりつづく。
ハンクスは時たま「お前、今日はいくつだ?」と訊く。おれはだんだんうんざりしてきて、「今日はもう隠居のトシですよ、ミスター・ハンクス」と答える。「フロリダにいる孫の家に厄介になろうかと思いまして」。ハンクスはすっかり上機嫌で、「聞いたか、ビリー?」と笑いながら言う。ビ

リーが言う。「この小僧、いっぱしの口をきくじゃないスか、ミスター・ハンクス」。ハンクスはさらに愉快そうに笑う。「ビリーはな、お前のことをあんまり気に入っちゃいないんだ」と彼は説明する。「お前みたいなナマをビリーが俺の前で言ってみろ。いっぺんで袋叩きさ」。とうとうある日の昼下り、ハンクスが話を持ち出す。まず葉巻を買ってから、おもむろに「俺はだな、アッパーウェスト・サイドでクラブをやってるんだ」と彼は言い、おれに名刺をよこす。〈トップ・ドッグ〉。その下に所番地が書いてある。「ドアマンが一人要るんだ。壁みたいにでかくて、見かけより賢い奴がな。よかったら今夜七時頃に来な。もちろん、この仕事をやるんならお前は二十一だ。街頭の葉巻売りよりは出世だぜ、どうだ?」。彼は答えも待たず、まるで話は決まったと言わんばかりに、敬礼めいた仕草をおれに送る。おれはカチンときて、いっそ行くのをやめようかとも考える。でもそれも愚というものだ。おれは後任を選ぶ。つい最近までおれがやっていたみたいにその辺をたむろしている連中の中から一人を選んで、おれの仕事をそいつに与える。さっきも言った通り、今日のおれは隠居のトシなのだ。おれは『夜ごとの乱交』という題の読みかけの大衆雑誌を丸めて、コートのポケットにつっ込む。

いひだのあるベルベットのカーテンが張りめぐらされ、樫のカウンターがあって、ヨーロッパの絵画があちこちに飾ってある。ブースを仕切るガラスは、端っこがバラの花のかたちに彫ってある。女たちは象牙と銀でできた小さなシガレット・ホルダーで煙草を喫い、九時頃になるとタキシードを着た男が店の一角に置かれたピアノを演奏しはじめる。ベランダが光に揺れる。窓の前に立っていると、おれは時おり、これと同じような窓から自分の一生が見えた頃のことを思い出す。でもこの窓からはそんなものは見えない。見えるのはニューヨーク・シティだけだ。

38

リオーナはトップ・ドッグのクローク係をしている。黒髪でえくぼがあって、クラブのほかの女たちみたいにすごい美人てわけじゃないが、決して不器量でもない。リオーナを初めて見た瞬間、そしてそれはおれが初めて店内に入ってからだいたい五分後のことだが、その瞬間におれは知る。おれはこの女を物にするだろうと。この女はおれの初めての女になるだろう。それなりに手間はかかるかもしれない。でもすごく苦労することはあるまい。女は一晩じゅう、呆然とおれに見とれている。

かくしてドギー・ハンクスの店のドアマンとしてのおれのキャリアがはじまる。これについてはあまり言い立てても仕方ない。どのみち一年と二か月しかつづかないし、その間に一度だって格別面白い目に遭うわけでもない。「この店ってどれくらいやばいんです?」とある晩おれが訊くと、「禁酒法はもう廃止されたんだぜ、坊や」とドギーは答える。答えになってない。でも言わんとし

ていることはわかる。ここの客層は、どこから見ても申し分ない上品な連中と、ほんのわずかにうさん臭い連中が半々というところだ。うさん臭いといっても大したことはない。ドアマンだってどう見ても就業年齢に達しちゃいない。その程度だ。誰かを外に連れ出す出番がおれに回ってくることは一度もない。せいぜい二度ばかりドギーに言われて、面倒を起こしそうな気配のある奴の方にそれとなく目を向ける程度だ。どうやらおれの姿が見えるだけで十分らしい。ドギーにとってもそれが一番都合がいいのだ。「それにこいつは頭もいいんだぜ」と彼は誰彼となく言う。「じゃひとつ頭のいいとこ見せてもらおうじゃねえか」と相手が言うと、ドギーは言い返す。「そんなことやらなくたっていいんだ。俺が頭がいいって言ったら頭がいいんだよ」

おれは二週間目にリオーナを物にする。ある晩、クラブが閉まってからのこと、おれたちは酔払った客連中が忘れていったコートの蔭にいる。初めてなのでおれは少し緊張している。たぶん一世一代の名演とは行くまい。それでもリオーナは、まるで槍でも刺されたみたいに悲鳴を上げる。おれがやめようとすると、彼女がしゃがれ声で耳元にささやく。「何してんのよ、やめないでよ」。明かりを消してと彼女は言うが、おれの方はそうは行かない。暗闇の中では、見たくない物が見えてしまうからだ。インディアンの女たちの顔。聞きたくない音も聞こえてしまう。ドアの向こうの暗闇から聞こえてくる声。だから明かりはつけたままだ。

仕事が終わるとリオーナは、うちに来なさいよとおれを誘う。でもおれにはその気はない。一か月か二か月のあいだ、おれはクラブの上のオフィスに寝泊りする。アパートを借りる金がたまるまで、毎晩そこのソファで眠る。そしておれは、前からずっとやりたかったことをやりはじめる。最

初はしばらく、クロークルームのテーブルの上でやる。やがてクラブから七ブロック離れたあたりにアパートを借りると、今度はそこでやるようになる。縦三メートル、横四メートル、ベッドと小さな化粧だんすのある部屋で、窓ぎわにテーブルがあるのだ。それから今度は勇気を奮い起こし、ハンクスの仕事部屋のタイプライターを拝借する。朝早く、六時、七時に、おれは独学でタイプを練習する。一本指で、ゆっくり一字ずつ。そうやって、すでに手で書いた文章をようやくタイプし終える。オフィスにおれがいるのを見つけると、ドギーはとたんに不機嫌になる。おれは初めて彼の前で怖くなる。運転手のビリーがたまたま居合わせていて、ひどく愉快そうな顔をする。「すいません」おれはそう答えるのが精一杯だ。「そんなつもりじゃなかったんです」。ハンクスはかんかんに怒っている。「すいません」「そんなつもりじゃなかったんです」とおれはくり返しつぶやくように言う。何度も何度も「すいません」と。ハンクスはビリーに向かってうなずく。「お心遣い痛み入ります」とハンクスは言う。ビリーがはははと笑う。

「何だ、こいつは?」タイプライターの脇に置かれた、ぼろぼろに読み古した『夜ごとの乱交』をハンクスは手に取る。そして首を横に振り、ビリーに向かって「ドアマンのくせして言葉なんかで遊んでるぜ」と言う。それから雑誌を放り出し、大きくため息をつく。「なあ坊や、タイプライターを使いたいんだったら使っても構わん」とハンクスは言う。「だが俺の部屋で使うのはよせ。クロークルームに持っていって使え。お前がうちのクロークの娘とおまんこしてるところでだ」。おれはぎょっとしてハンクスを見る。彼は言う。「そうさ、そのことだってこっちはちゃんと知ってるんだ。いいかおい、こいつはひとつハンクスの旦那には秘密にしておこう、なんて料簡起こす

んじゃねえぞ。俺は何だってお見通しなんだからな」。彼は肩ごしにビリーの方をふり返り、それから笑顔を浮かべてまたおれの方を向く。「タイプライターを使い終わったら、ビリーが上の階に戻しといてくれるからな」。喜色満面だったビリーの顔から笑みがさっと消える。今度はおれががははと笑いたい番だ。

おれがクロークルームでタイプを打っていると、ガールフレンドだか仕事仲間だかと一緒に空っぽのクラブのブースに座っていたハンクスが、時おりクロークに顔をつっ込む。おれがタイプを終えて、ビリーがふうふう青い顔でタイプライターをオフィスに運んでいるときなんかも、ふと目を上げると、開いたドアごしにドギー専用の洗面室の中が見えることがある。ドギーは片手に剃刀を持って立ち、その顔は一面クリームで真っ白だ。剃刀を顔にあて、それから刃についたクリームを水で流しながら、どうだうまく書けてるか、と彼はおれに声をかける。何か月かのあいだ、おれはクラブにやって来る連中をモデルにあれこれ物語をでっち上げる。一度か二度、ちょっとしたリサーチのつもりで、おれはうっかり、してはならない質問をハンクスにしてしまう。あんたはいままでに何人も人を殺したのか、とかそういった質問だ。ハンクスはどう見ても生真面目な男には見えないが、この時ばかりは奴も生真面目に答えた。「ずいぶん子供じみたことを訊くんだな。いいか、俺が誰を殺したのかとか、そもそも俺が人を殺したことがあるのかとか、そういうのは冗談じゃ済まんのだぞ」。そう言われておれは、自分がひどく恥ずかしくなる。だが八年先からふり返って、それ以後に訪れることになるさまざまな屈辱に較べるなら、こんなのはまるで物の数じゃない。

39

やがて一九四二年、おれは自分を恥じるという気持ちをすっかり忘れてしまう。あるいは自分ではそんな気持ちなどまるで感じていないのに、逆に理念的にその存在を認めたりすることもある。一九四二年の段階ではたぶん、おれはまだウィーンのあの部屋以外は何も頭にないのだと思う。この世の誰よりも邪悪なあの男に見守られながら、おれが何度も何度もお前を凌辱したあの部屋のこと以外は。たぶんおれは、いわばお前とおれを救う代償として、おれの妻と子供が忘却へ向かって身を投げるのを見守った夜が来るまで、何ものにも本当に心を揺さぶられはしないのだ。お前という、おれの妻も子供も決して知ることのなかった一人の女と、おれという、その魂の深みを妻も子供も決して感じ取ることのなかった一人の男を救う代償として、二人が身を投げる夜までは。おれが選び取ったのかもしれない、あるいはそうではなかったのかもしれないひとつの契約からおれたち二人を救う代償として。

おれの行為の結果なぞどうでもいい。おれが愛し、おぞましく思うのは、おれの言葉のもたらす結果だ。おれはそれらをあたかも縄のように男の首に巻きつけ、真珠の粒のように並べて糸に通して女の子宮に突き通す。

ペンシルヴェニアでの出来事をやましく思うべきなのか、おれにはわからない。わからない、ということがわかるだけだ。おれはそれを心の中であっという間に片づけて、来たるべき悪のために場所を空けたのだ。まあたしかに、自分があの事件をほとんどまったく思い出さないのには、我な

からいささか愕然としてしまう。もちろんヘンリーは死んで当然だったし、親父やアリスやオラルがああいう日に遭ったのも自業自得だと思う。だがそうはいっても、おれの心の中には奇妙な沈黙がある。おれの良心がそれと格闘してしかるべき、だが実際には格闘していない、ひとつの奇妙な沈黙があるのだ。それはまるで、一人の男が何十万という大人や子供を無に変えてしまったかのような沈黙だ。おそらくは日本で、日本の二つの小さな都市で、おそらくは何か正義めいたものの名において、より大きな残虐を終えるという名目において。そして男は主張する、私には一瞬たりとも、何の迷いもないのだと。私は一瞬たりとも罪の意識に眠りを失ったりはしないのだと。男は暗闇の中で誰かの顔を見たりはしないし、誰かが自分を呼ぶ声を聞いたりもしない。だがそれはお前の二十世紀での出来事だ。おれのではない。

この頃ではおれがいろんな物を見たり聞いたりするのは、暗闇で女とファックしているときか、白いページの上に言葉を書きつけているときだけだ。といってもおれの指に暴力がみなぎるのが感じられなくなったわけじゃない。ヘンリーの頭を潰したときのべちゃっという音楽に合わせて、おれは書く。ドギー・ハンクスのトップ・ドッグのクロークルームで書いた、おれの初めての小説。それはニューヨーク・シティの裏街で恋人を殺す男の話だ。男は物語の冒頭で女を殺す。でもそれは男についての物語ではない。それは女についての物語だ。物語を語っているのは女であり、男に殺されたあとも女はそのまま語りつづける。いまもなおどれほど男を恋しく思っているかを、女は語りつづける。男が夜眠っているあいだに、女は男の服を脱がせ、シャツで男をベッドの手すりに縛りつけて、口を使って男と交わる。男は目を覚ます。男に見えるのは、自分がベッドに縛られ

て血を流している姿だけだ。太腿も腹も血だらけだ。死に瀕して、男は恐怖の叫びを上げる。だが違う、男は死に瀕してなんかいない。それは男の血じゃない。それは女の血なのだ。頭のてっぺんの、男に殴られた箇所から、女はいまもずっと血を流しつづけているのだ。だが男には女の姿は見えない。自分の血だと思い込んでいる血が見えるだけだ。血の光景。自分自身の死と男が思い込んでいるもののイメージ。その光景が、説明しようのないフェラチオによる訳のわからない謎の絶頂と相まって、男の心臓を文字通り停止させる。そういう物語の随所に、おれはマンハッタンの街をめぐる社会的観察を盛り込む。

おれは自分の書く一語一語におののきながら書く。書くことによっておれは解放されはしない。おれの中には依然として深淵が口を開け、おれは重荷を背負ったままだ。横になって眠ろうとするとき、おれは自分が書いた紙を、手の届かない、見えないところにしまわねばならない。書き上げると、一分と間を置かずにそれを雑誌社に持っていく。それをおれの人生の外に追い出すために。

40

雑誌社はおれの原稿を四十ドルで買い取ってくれる。というのが結論なのだが、実はそこに至るまでに何週間もすったもんだの騒ぎがつづく。まず第一に、連中はおれが小説を書いているということを信じようとしない。おれは小説を書きそうな人間には見えないのだ。次に彼らは、おれがこの小説の作者だということが信じられない。そして今度は、このような小説をどう扱ったものか、考えあぐねてしまう。まあとにかくそんなふうにして、あの日の午後ジェリーの女房が卒中で

倒れたときにスタンドのあたりをうろついていたことに端を発する、おれの第二のキャリアがはじまる。そして第一のキャリア、ドギー・ハンクスの店のドアマンとしてのキャリアは、この新たなキャリアをつづけていく上での当面の資金源になってくれる。第二のキャリアはやがて第三のキャリアにつながってゆく。その第三のキャリアは三十年以上にわたっておれを祖国から引き離すことになる。でもそれはまだ二年近く先の話だ。いまは一九三五年初頭。おれは大衆雑誌に載せる小説を書いている。小説の出来栄えは水準以上で、一篇四十ドルだった原稿料もじき五十ドルに上がる。だが成功の秘訣は、とにかくたくさん書くことだ。おれにはそんなエネルギーはない。悲しいかな、おれは何も知らないのだ。いったいおれに何がわかる？　あふれ出てくる自分の若さを、一夜のうちに破壊しつくすこと、それだけだ。それを題材におれは小説を書く。自分で両手に持つのさえほとんど耐えがたい物語を書く。書き終えたあと何日も、おれは自分自身の黒い時間の中を旅している。

41

そもそもの出発点において、おれは決定的な決断を下す。十分に自覚した上での決断だ。それは、自分が書いた小説の上にバニング・ジェーンライトの名を冠することである。いずれこの名はおれに追いつくに決まっている。新聞を読んでいればわかる。フィラデルフィアの新聞では何度かあの事件が記事になった。フィラデルフィアといえばここからそう遠くない。そう遠くないところで人々はバニング・ジェーンライトという名を知っているのだ。あるいはもしかしたら、おれは

もうこれ以上旅行者でいる気がしなくなったのかもしれない。これ以上訪問者でいたくないのかもしれない。よかれ悪しかれ、どこへ行こうとその名はおれについてまわるのだ。もしかしたらおれは、奴らへの挑戦のつもりでその名を捨てずにいるのかもしれない。あの小屋の中にいるオラルとヘンリーに対する挑戦、炎を上げて燃える家のかたわらの地べたでのたうちまわる、アリスと親父に対する挑戦。あるいはそれは、夜の闇に消えていったおれの母親への挑戦であったかもしれない。十六年前に消えてしまうべきだった、おれを連れて消えてしまうべきだった母親。そうすればおれはバニング・ジェーンライトなんかにならずに済んだのだ。

遅かれ早かれ誰かがやって来るだろう。小男、大男、誰かが来るはずだ。実際おれはすでに彼らを思い出している。連中が来るのはまだ一年八か月ばかり未来の話だ。だがおれはすでに、夜の中から現われた奴らが、おれに向かって通りをやって来る姿を思い出している。「あんた、ジェーンライトって男を知らんか?」と闇の中から奴らはおれに言う。小男。大男。おれは奴らに背を向け、走り出す。奴らが追いかけてくる足音が聞こえる。その足音が一九三六年の最後の四つ角を曲がるのが聞こえる。

だがいまはまだ一九三五年の春だ。ドギーに雇われて一年近くが経ったある晩、おれはクラブにいる。時間はまだ早く、客もそれほどいない。これといった動きもない。ドギーは通路をぶらぶら歩いている。ビリーも彼と一緒だ。ビリーは懸命に何かを考えている。ものすごく懸命に、首が肩からもげてしまいそうなくらい懸命に考えている。二人はおれのそばを通りかかる。と、ビリーが出し抜けに言う。ハンクスにもちゃんと聞こえるような声で、「よお、ジェーンライト」と。ただ

それだけ。ビリーがおれの名前を口にするなんて初めてだ。おれは悟る。奴はその名についてどこかで何か嗅ぎつけてきたのだ。

おれはドアに寄りかかって新聞を読んでいる。第一面はドイツのニュース一色だ。おれはビリーに目もくれない。

爪楊枝(つまようじ)をくわえたビリーは、楊枝の向こう側から声を出す。「ピッツバーグじゃジェーンライトって名前の奴を捜してるそうじゃねえか。身の丈百九十センチかそこらの赤毛の小僧をさ。ある晩に暴れ出して、一家全員皆殺しにしたって話だぜ」。そこまで言うと、ビリーはちょっとのあいだ視線をそらす。そっちを向いたってどのみちバーには人なんかいないし、見るべきものといってもバーボン・グラスが一個あるだけだ。ドギーはとまどった表情でビリーを見て、それからおれを見る。

今度はおれも新聞から顔を上げる。「近頃じゃ新聞もずいぶん面白いよな」とおれは言う。「たとえばこのドイツの野郎どもだ。俺はてっきり、ちょうど俺が生まれた時分にこいつらたっぷり焼きを入れられたと思ってたんだがな。まったく目が離せないぜ」

「バニング・ジェーンライトっていう名前の赤毛の大男」とビリーが言う。

「バニング・ジェーンライトっていうのはおれのペンネームさ」とおれは言う。「あんたが聞いたのはきっと本物のバニング・ジェーンライトのことだよ」

ビリーはおれの方に視線を戻す。どうやら少し面喰らった様子だ。「本物のバニング・ジェーンライト？」

CamScannerでスキャン

ドギーはおれを見ている。それからビリーを見る。「いまこいつがそう言っただろうが」とドギーはビリーに言う。「本物のバニング・ジェーンライトってさ。きっとフィラデルフィアにはそういう名前の奴が何人もいるんだろうよ」

「俺も十六人か十七人知ってるよ」とおれは言う。

ビリーは啞然としている。奴はハンクスを見て、それからおれを見る。奴の表情が険悪になる。鼻の穴が目に見えて拡がり出す。

「なあおい、散歩にでも行ってきたらどうだ」とハンクスはビリーの肩に手をかけて、言う。それからハンクスはこっちを向いて、おれの腕を引っぱってクロークルームに連れていく。おれはその間ずっと肩ごしにビリーを見ている。ビリーもずっと肩ごしにおれを見つめ返す。

リオーナがクロークルームでおれを待ち構えている。おれの上着を半分脱がしたあたりで、ようやく彼女はボスがいることに気づく。そして真っ赤になって、しどろもどろに何か見当外れな文句を口にする。「なあシュガー、ちょっとのあいだ俺たち二人にしてくれるかな？」とドギーが言う。リオーナがそそくさと出ていくと、ドギーは長いあいだじっとおれを見つめる。あたりは真っ暗だ。おれたちはたがいに相手の目くらいしか見えない。一瞬のあいだおれは、そこにじき恐怖が見えるはずだ、と思う。一瞬のあいだ、この男はじきおれのことを怖がるはずだ、という予感がする。おそらくは彼もおれの目の中に何かを読みとるのだろう。「一家全員か？」と彼はやっと言う。

言い訳みたいに聞こえるのは嫌だ。「俺は思うんだが」とささやくようにおれは言う。「俺は思う

んだが、一家の一部って言った方が正確じゃないかな」
「なるほど」とドギーは言う。暗闇の中で奴がうなずいているのが見える。「一部だけか」。ドギーはまたうなずく。
おれは手の中でドイツの首相の写真を何度も何度も丸める。そして言う。「俺のお袋は俺のお袋でさえなかったんだ」。我ながら間が抜けた口調だ。
「わかった」とドギーはようやく言う。いまや予感は確信に変わっている。いくらかではあれ、奴は明らかに怖がっている。まだ事態が完全には呑み込めていない。自分の疑念を、どうにか耐えうるかたちに飼い慣らそうと算段している最中なのだ。彼はくるっと身を翻し、おれを置き去りにして部屋を出る。クロークルームの闇の中におれはしばしとどまり、あれこれ思案を巡らす。リオーナが入ってきて首に抱きついてくるが、おれは相手にしない。おれはクラブに戻り、ビリーを捜す。奴に言ってやるつもりなのだ。そうだよ、おれはお前のバニング・ジェーンライトだよ、これからだってずっとそうだよ、と。だがビリーはそこにいない。

42

おれはその後まもなくトップ・ドッグを辞める。辞めるのにはいろいろ訳がある。でもビリーのせいじゃない。あんな奴は関係ない。厄介になってきたのはむしろリオーナだ。年じゅうおれにまとわりついているのだ。おれは二度ばかり、よその女に手を出す。一人は七番街の安食堂のウェイトレス、もう一人はクラブの娘だ。それでちょっと面倒が持ち上がり、ドギーも御機嫌斜めに

なる。だが諦めた一番の理由は、第三のキャリアが現われたことだ。ある日の午後、雑誌の編集長が、妙に秘密めいた口調で話を持ちかけてくる。本を書く仕事なんだがね、と編集長は言う。本なんて書けませんよ、とおれが答えると、いや、君ならこの手の仕事は得意だと思うがね、と彼は言う。君の小説には、ほら、雑誌に載せるために削除せざるをえない箇所がたくさんあるだろう。ああいうところだよ。あの手の話でまるまる一冊。先方はそういうのを欲しがっているんだ。編集長が何を言わんとしているのか、おれはまだ呑み込めない。「つまりだね」と編集長は言う。「店の棚に並べる本じゃなくて、カウンターに行って請求すると机の下から出てくるたぐいの本だよ」。ここまで来てようやく彼の言わんとしていることはわかった。でもまだいま一つしっくり来ない。彼はさらに言う。稿料は一ページ一ドルからスタートする。先方が気に入れば、だんだん上がっていくはずだ。

「先方」というのが誰なのか、はじめはどうもはっきりしない。まずそれは名なしの仲介業者である。その仲介の向こうにはまた別の仲介がいて、その向こうには……会社にふらりと現われる客がその場で買っていくこともあれば、個人の蒐集家からあらかじめ注文を受ける場合もある。どうやらこの商売に関するおれの知識は、ギャングについて以上に乏しいらしい。だがじきに、知らない方が身のためだということはよくわかってくる。おれはただひたすらタイプライターの前に座り、首がちぎれんばかりにげらげら笑う。うまく書けるのはそういうときだ。

ものを書くのも、たぶんそのせいだと思う。自分が怖くないものを書くためなのだ。おれはスケジュールを決める。朝起きるとまず、この一か月ずっと本棚の上に載っているコーヒーかすで何と

かもう一杯絞り出す。それから、何についてであれ誰についてであれ夜のあいだずっと自分の頭にあったことを三ページ分叩き出す。そうやってあらゆる悪夢、あらゆる誤解された衝動を、自分が笑い飛ばせるものにすり替えてしまうのだ。毎朝三ページずつ、誰かがモリーやらアマンダやらとファックする。今朝はギャング、明日はプロシアの軍曹、あさっては人食い人種の酋長。来週は火星人、その次の週は死人。昼寝を終えると、今度は雑誌の仕事に取りかかる。それから自分の気持ちを抱えて街に出る。歩きながらそれを発散させる必要があるのだ。そして夕食を食い、ダンスホールやジャズクラブの前に立って中の音に耳を澄ます。リオーナが非番の夜に会うこともある。ほかの女と会うこともある。とにかくこの重たい体だ。女たちはそれにしびれるか、一目散に逃げ出すか、そのどちらかだ。肝っ玉の小さい女は軒並み失格だ。ことがうまく運ばなくてもおれは別に構わない。アパートに帰って、もう二ページ書くだけのことだ。こんなペースで仕事は進行し、本は一か月で書き上がる。おれはそれを抱えてアパートを出て、ウェスト・ヴィレッジのチャールズ通りとブリーカー通りの角にあるビルの裏の部屋に届けに行く。

43

これが六か月ばかりつづく。その間におれは薄い本を四冊書き上げる。一冊書き終えるたび、決まって金をめぐって一悶着がある。チャールズとブリーカーの角の裏の部屋にいる男は、ずんぐり太った小男で、ものすごく度の強い、まるで顔をばらばらに分解してしまいそうな眼鏡を掛けている。男はおれをうすのろ扱いする。お前がこの本を書いたなんて信じるもんか、と言わんばかりの

CamScannerでスキャン

態度で、いつも決まって、君の「雇用主」にこれこれの伝言を伝えてくれたまえ、といった口のき方をする。要するにおれはそいつの使い走りか何かだろうということらしい。「俺の雇用主は俺自身だよ」とおれは説明するが、男はいっこうに聞こうとしない。「俺の雇用主に言われてきたんだが」とおれはある日男に言う。「これからは一ページ一ドルじゃお断りだそうだ。俺の雇用主は雑誌じゃ一ページ三ドル稼いでるんだ」

「一ページ一ドルというのはずいぶんいい条件のはずだ」と男は静かに、だがきっぱりと答える。

「お断りだね」とおれは言う。すったもんだのあげく、おれの雇用主とおれはこの仲介業者を抹消してしまう。というのは、よくよくわかってくると、やはりおれの雇用主はおれ自身ではないらしいのだ。それはクローネヘルムという名の男である。なぜそのことがわかったかというと、あるとき例によってチャールズとブリーカーの角のオフィスに原稿を持っていくと、原稿を受け取った眼鏡の男が、すぐさまそれにクローネヘルムと印刷された名刺をクリップで止めるのが見えたのだ。ということはつまり、この顔をばらばらに分解する眼鏡を掛けた男は、ある特定の依頼人におれの原稿を売っているにちがいない。そしてその依頼人は、どういう奇妙な趣味か知らないが、とにかくおれの書く物語を格別気に入っているのだ。だとすれば、こんな仲介なんかは切り捨てて、ミスター・クローネヘルムとおれのあいだで、両者いずれにとっても好都合な協約を結ぶのが得策というものではないか。

ドイツ式にヘア・クローネヘルム、と呼ぼう。彼が住むグラマシー・パークの高級アパートの郵便箱にはそう書いてある。おれが階段を上ると、廊下全体が反響するみたいに足音が響く。ヘア・クローネヘルムがドアを開ける。彼はおれを見て身をすくめ、見る見る小さくなっていく。齢は中年、おそろしく薄く透明な肌の内側にはほとんど何もないみたいに見える。頭には血管の青い筋がぼんやり浮かび上がり、何やら中国料理の肉饅頭を思わせる。実際のところそれほど小男ではないのだが、いかにも小男のように動き、小男のような口のきき方をする。赤いバスローブを着ていて、ホルダーに入れた煙草を持っている。匂いからするとアメリカ煙草ではないらしい。我々は彼のアパートの中に入る。実に広々としていて、家具も揃っている。これで時おり掃除するなり、月に一度カーテンを開けるなりすれば、まったくもって堂々たる部屋に見えることだろう。クローネヘルムはソファの一方に腰を下ろし、反対側を手で示す。だがおれは手近な椅子を選び、そこに腰かける。ヨーロッパ風の華奢な作りの椅子が、おれの体の重みにぎいぎい音を立てる。クローネヘルムは顔をしかめる。

我々は本題に入る。おれは前もって電話で、自分が『処女航海』『愛のトンネル』その他数冊の現代文学の名著の作者であることを知らせてある。明らかに彼は、目の前にいるおれと、それらの作品とをうまく重ねあわせられずにいる。おれたちのあいだの空間に霧が広がっているみたいな感じだ。おれは何か月ものあいだ、この霧の向こう側へ言葉を投げつけてきたのだ。そして向こう側にはこのヘア・クローネヘルムがいて、それを受信し解読していたわけである。だがその霧も、いまや急速に晴れはじめている。彼はまずおれを試験する。一連のわが名作に関し、取りとめのない

質問をするのだ。それでようやく彼も納得し、おれの原稿とおれとが一体であることを信じるに至る。「あなたはいくらかの広い経験を持っているのですね？」とヘア・クローネヘルムは訊ねる。強いオーストリア訛りの英語だ。「しかしとにかくあなたは何年ですか？」

年齢を訊かれることにおれは飽き飽きしている。いつもなら生意気な答えのひとつも返すところだが、今日はそれもやらずに、はなからその問いを無視する。「いいですか、ヘア・クローネヘルム」ぎしぎしきしむ小さな椅子の上で身を乗り出しながらおれは切り出す。そしてなるべく自分の立場を明かさずに、相手の立場に探りを入れながら話を進める。驚いたことにクローネヘルムは格別隠し立てもせず、チャールズとブリーカーの角の男からおれの小説を一ページ六ドルで買っていることを認める。そのうちおれの取り分がいかに少ないかをほのめかしても、取り立てて憤慨した様子も見せない。だがそのうち、こっちの言わんとしていることが彼にもだんだん見えてくる。つまりもしおれが彼に直接原稿を届けるようにすれば、一ページに三ドル五十ももらえばおれとしては十分だし、もちろんクローネヘルムにとっても好都合であるということだ。彼はこの提案のプラスとマイナスを天秤にかける。表面的にはむろん得策だ。だがチャールズとブリーカーの角の男と面倒なことになる恐れもある。それにどうやら、面倒が起きそうな相手はほかにもまだいるらしい。だがやがて、この提案の新たな側面に彼は思いあたる。実に魅力的な側面に。

「え？」

「こうすれば」と彼は言う。「我々はそれをいわば特殊化にできます」

「こうすれば」と彼は言う。「我々はそれをいうなれば特別仕立てにできます」

CamScannerでスキャン

いうなれば、いわば……要するにこの男は、自分の趣味にぴったり寸法通りの話を書けと言っているわけだ。そして一瞬のあいだおれは、これはもう笑い事では済まなくなるのだろうか、と考える。一瞬のあいだおれは、またあの恐怖が戻ってくるのだろうか、と考える。おれはその恐怖をほとんど感じかける。おれはいまや、目の前にいるこの男の偏執やら熱情やらの中に自分をとじこめてしまったのだろうか。見れば見るほど、未だ形成の完了していない人体組織のしみのように見えるこの男、頭蓋も未完成、未完成の口にはシガレット・ホルダーをくわえたこの男の。いまにもあの恐怖が戻ってくる気がする……だが違う、そんなことはない。断じてそんなことはない。おれはいまよりもっと大声で笑ってやる。いままでにないくらいいい気分になるのだ。おれの母親の小屋へ行ったあの夜よりもっといい気分に、浮浪者を車両の外に放り投げたときよりもっといい気分に。人生で最高の気分を味わうのだ。ひょっとするとあんまり愉快で腹がよじれて、一字も書けなくなっちまうかもしれない。おれは腹を抱え、さぞ気持ちよく笑い転げることだろう。「いいですとも、ヘア・クローネヘルム」とおれは言う。「ばっちりですよ。特殊化で行きましょう。特別仕立てで行こうじゃないですか」

おれがあまり乗り気なので、クローネヘルムはかえってあわててしまう。「どうぞ理解して下さい、もちろん私などが」と彼は口をはさむ。「もちろん私などが芸術家に命令できません」。おれが椅子に腰かけたときと同じように、彼はまた顔をしかめる。「私の英語は上手でありません」

「大丈夫、心配は要りません」とおれは励ますように言う。「万事よくわかりましたから」。あと細かい点を詰めていくだけだ。創作意欲にはずみをつけようと、前金百ドルということで我々は

CamScannerでスキャン

合意に至る。取引き成立を祝って乾杯しましょう、とヘア・クローネヘルムは誘うが、おれはそれを辞退する。何しろいまこの瞬間にも創造の霊感が沸騰寸前なんです。あふれ出すときにはぜひ家に戻っていたいですからね、と。階段を半分も降りないうちから、おれの頭が猛烈に働き出す。モリーとヘア・クローネヘルム、アマンダとヘア・クローネヘルム、モリーとアマンダとヘア・クローネヘルム。奴さんをちょっとした制服で飾り立ててやろう。小さな剣、勲章がいくつか。さぞや有頂天になることだろう。両足を包む黒い革ブーツの感触、胎児肉饅頭みたいな頭にかぶせた小さなとんがり帽子、もうそれだけで天にものぼる心地になるにちがいない。すっかり一人で興奮して、恍惚のあまり精力も使い果たし、モリーとアマンダの出番さえなくなってしまうかもしれん。もう一度奮い立たせるには、相当サービスしてやらねばなるまい。心配しなくていいよモリー、心配しなくていいよアマンダ。おれが埋め合わせしてやるからね。気絶してぶっ倒れてる奴なんか放っといて、三人でばっちり楽しもうじゃないか。

45

一九三五―三八年。おれは一年半のあいだ笑いつづける。ニューヨークの中で、目の高さよりわずか下あたりまでおれは上昇する。過去はもう過ぎ去ったものとおれは思っている。おれは現在の中を、悠々と自由に動きまわる。スペインの大草原から聞こえる殺戮のうめき、イングランド王が洩らす愛のすすり泣き。おれはそれらの音を川の浅瀬のごとくに渡ってゆき、オーストリア人の依頼人の指図通りに妄想を築き上げる。一語一語、特殊化した、特別仕立ての言葉で、苺色の乳首を

した、この上なく官能的な金髪女を作り上げる。おれがあまり大声で笑うものだから、道行く人々は歩みを止めておれの部屋の窓を見上げる。二か月ばかり経った時点で、ヘア・クローネヘルムはおれの手に六百ドルの金を押し込み、その後何か月も行方をくらます。おれはそのまま仕事をつづけ、笑いつづける。彼はある日突然戻ってくる。説明はいっさいなし。黙って特別仕立ての妄想をおれから受け取るだけだ。おれは口を手で押さえて街を歩く。いったい何がそんなにおかしいのかと、人々はいぶかしげにふり返る。決してカーテンの開かれることのない部屋の中で、残酷にして濃艶なるモリーを前に、クローネヘルムは満足げに萎えていく。さらに二か月が過ぎる。彼はまたおれに前払いを渡して姿を消し、四か月後わが新作喜劇を受け取りにふたたび現われる。おれはリオーナと決定的な喧嘩をする。おれたちの仲もこれまでだ。リオーナはおれの部屋の外で泣きわめき、物でも壊すみたいに罵倒の言葉を投げ散らす。モリーとアマンダは言われた通りにやって来て、言われた通りに去っていく。彼女たちが奴隷だというのではない。二人はほかにもすることがあるのだ。もっとましな用事があるのだ。二人はプロフェッショナルなのである。

二度目の帰還の際、ヘア・クローネヘルムの秘密の失踪の目的がおれにもいくらか見えてくる。どうやら奴さん、おれの小説を売る市場をオーストリアとドイツに開発したらしい。おれの作品をあちらに持っていき、翻訳を作らせ、写しを作る。そして一部を手元に置いてもう一部を売りさばくのだ。もちろん大量生産とかそういう話ではない。ごく限られた人間にしか手に入らないということも、この商品の魅力のひとつなのだから。きっとおれはあちらの顧客のあいだでは、アメリカにおけるもっともセンセーショナルな作家の一人、とか何とかそういう触れ込みで通っているのだ

ろう。黒い髪は流れるように長く、身にはマントをまとったおれに、クローデット・コルベールもひそかに熱い思いを寄せる。おれは結核を病み、ひょっとしたら阿片中毒にもなっているかもしれない。とにかく、間のびした馬鹿でかい顔、身長百九十センチの田舎者なんかじゃないことは確かだ。クローネヘルムが五ページずつ書けたごとに原稿を届けろと言うので、おれは一日置きに街を横断してグラマシー・パークへ通わねばならない。だが原稿料も一ページ四ドルに上がる。この業界じゃ前代未聞の高額だ。

その調子で素晴らしくアメリカ的な話を書くことです、と彼はおれに助言する。モリーとギャング、モリーとカウボーイ、モリーとタイクーン。

一九三六年の終わり。いろんなことが終わろうとしている。おれ自身はまだよくわかっていないのだが、おれの頭はいまや水位線のわずか上あたりを漂いはじめている。これで背丈があと三十センチ低かったら。最近おれたちはニューヨークに住むことの是非をめぐって議論を戦わした。クローネヘルムはウィーンの翻訳者のところに五、六ページの束を何度も送るのにうんざりしてきている。そしてそれにもまして、ニューヨークという街にうんざりしてきているのだ。本国に拠点を移したい、と彼は持ちかける。おれはといえば、オーストリアがどこにあるのかさえ知らない。スイスかどこかの中か？「オーストリアはどこの中でもありません」とクローネヘルムは苛立たしげに説明する。「オーストリアはオーストリアの中です」。彼の帰国の決意は固い。いまのままでいいじゃないスか、とおれは言う。何ならおれはここで仕事をつづけて、ウィーンのあんたのところに原稿を送ればいい。あんたは約束の額を電信で送金してくれればいいんだ。だが彼はいい顔をし

CamScannerでスキャン

ない。おれは肩をすくめ、彼を一人でふさぎ込ませておく。

実はおれも、もう笑うのにうんざりしてきている。おれは古い物語を語り直しているだけだ。他人の物語に、彼らが言い残したことを添えて語り直しているにすぎない。女たちは眠りの中でおれにぶつぶつ文句を言うようになってきた。おれたちはたがいに対する欲望を失ってしまった。禁じられた行ないにも慣れっこになってしまった。でも笑うのをやめて代わりに何をしたらいいのか、おれには見当もつかない。笑うことがすっかり習慣になってしまって、喉がつっかえても笑いで取り除くくらいなのだ。それにまた、雑誌用の小説を書くときに訪れる恐怖にもうんざりしてきた。本数もどんどん減っていく。何か月ものあいだ一本も書かない。とうとうある日、おれは雑誌社に出かけていく。新しい原稿を届けにではなく、未払いの原稿料を受け取りにだ。と、編集長がちょっとしたニュースをおれに伝える。

「男が二人、君を捜しにここへ来た」と編集長は言う。何だか興奮している様子だ。

「どんな二人だ?」とおれは訊く。

奴はずる賢そうな顔をして肩をすくめ、少し間を置いてから「昨日来たんだ」と言う。まる一日経ってもまだ震えが止まらないってわけか。「連中はバックナンバーで君の名前を見つけたんだ。というか誰かほかの人間が見つけて、それを奴らに教えたんだろうよ。あんまり読書家には見えなかったからね」そう言って奴はぎこちなく笑う。

「何しに来たか言ってたか?」

「まあ思うに」と奴はゆっくり答える。「家族の訪問ではなかったろうね」。これはよく考えてみ

ると笑える科白と言えなくもない。なぜならある意味では、それはまさに家族の訪問だったからだ。

「あんた、奴らに何て言ったんだ?」

「何も言わないわけにも行かんからね」と彼は言う。「だからなるたけうまく――」

「奴らに何て言ったんだ?」

「その男ならジョン・ハンクスのトップ・ドッグで働いてますって言ったのさ」。奴はそこでまた間を置き、おれが奴の首の骨を折ろうとするかどうか見守っている。そしておれが何もしないとみると、その機を捉えてぺらぺら言い訳を並べ立てる。「いや何ね、君はもうあそこに勤めてないわけだし、現住所を教えるよりいいだろうと思ってね。それに何も言わなかったり下手に嘘をついてばれたりしたらきっと連中は戻ってきて――」

「お前の首の骨を折ったろうな」とおれはうなずいて言う。だがまあこいつの言う通りだ。これはおれの問題であって、奴の責任じゃない。「こないだの原稿料の残り分を取りに来たんだ」とおれは言う。「五十の約束だったのに、経理の連中はまだ四十しか出してないぜ」。奴はいそいそと十ドルを差し出す。要求すれば百ドルだって出すだろう。「もしそいつらが戻ってきたら」とおれは立ち去り際に言う。「お前はほかには何も知らない。忘れるなよ、お前は最近ずっと俺に会っちゃいない」

「元気でな、バニング」ほとんど聞こえないくらいの小声で編集長は言う。

CamScannerでスキャン

おれは町の反対側に向かって歩く。電車かタクシーに乗ろうかとも思うが、実を言うとおれの足、おれの心臓にまたあの暴力が戻ってきたのだ。二十四、四十八、七十二時間のあいだにすべてが変わりはじめた。物事はとかくこういうふうに起きるものだ。クローネヘルムがアメリカを出ると言い出す、誰かがおれを捜しに来る、そしておれは時代の暴力に適応しなければならない。だがおれはまだ、時代の暴力と自分の中の暴力がひとつなのかどうかがわかっていない。

町の反対側をめざしながら、おれは精一杯すばやく頭を働かせる。

おれのアパートがある通りに着く頃には、あたりはもう暗くなっている。街灯もついていて、家々の窓からは食べ物の匂いが漂い、ラジオの音が聞こえ、人々はキッチンテーブルを囲んで語りあっている。おれのアパートの前に男が二人たむろしている以外、通りには誰もいない。

小男と、大男。

はじめおれは、奴らの姿が見えても別に何とも思わない。が、細長い通りを下ってゆくにつれ、奴らが動いていないこと、待っていることがわかって、おれは歩みを緩める。おれが歩みを緩めたとたん、奴らはさっとこっちを向く。おれは道のまん中でほとんど立ちどまる。排水溝を水が流れる音を別にすれば、あたりは何の物音もしない。ラジオも話し声もいつの間にか止んでいる。そして夜の闇の中から連中の足音がこっちへ向かってくる。奴らは立ちどまり、おれの動きを待つ。おれが動かないのを見ると、小男の方が言う。「あんた、ジェーンライトって男を知らんかね」

ええもう、ずっと。一心同体ですとも。

おれは精一杯すばやく頭を動かしている。でもそれはおれの精一杯すばやい体の動きについて行くのがやっとだ。おれは泡を食って駆け出す。奴らは泡を食って走るおれにぴったりくっついて、何ブロックも先まで追いかけてくる。おれは懸命に、どこへ行けば奴らを撒けるかを考えている。セントラル・パークも一つの手だ。でもあんなに遠くまでこのスピードを保つ自信はない。連中がどこまで、どれだけ速くついて来れるかも見当がつかない。奴らは執拗に追いかけてくる。やがておれはある考えを思いつく。あまり気の進まない案だが、ほかに何も思い浮かばないし、とにかくいまのおれには助けが要るのだ。

アパートから七ブロック走りつづけて、おれはブラウンストーン造りの建物にたどり着く。そしてエレベーターではなく階段で上から二番目の階に直行する。小男と大男も仕方なく階段を上って追いかけてくる。エレベーターに乗ったら逃がしてしまうに決まっているからだ。おれはクラブに行きつく。かつておれがしていた仕事をやっているドアマンは、おれを見ても誰だったかよく思い出せずにいる。この男に関してはドギーも、こいつは頭もいいんだぜと自慢したりはしないのだ。二人の男がおれのすぐ後ろに現われる。おれは強引に店の中へ入る。ドアマンは何やらわめいているが、奴としてもまずは目の前の二人組を何とかしなくてはならない。大男の方はおれとほとんど同じ体格だ。

騒ぎは大勢の目を惹きつける。おれだってこんなのは気が進まない。ハンクスの機嫌を損ねることがわかっているからだ。これじゃまるで、初めて家を出た小僧っ子が、トラブルに巻きこまれ

たとたんにほうほうのていで逃げ帰ってきたみたいじゃないか。自分ではすごく賢いつもりで、偉いものなしって顔をしていた青二才が、しっぽを巻いて戻ってきたみたいじゃないか。ハンクスの姿はなかなか見つからない。いまここでビリー相手に気のきいた口を叩きあっている暇はない。やがてハンクスが、連れの金髪女が手に持った象牙と銀のシガレット・ホルダーから立ちのぼる煙の向こうから姿を現わし、我々のところにやって来る。まわりの連中がいったい何の騒ぎだろうという顔で見守る。案の定、ボスは御機嫌斜めだ。「どうかしたのか、小僧」と彼はおれを見ながら言って、それからおれの肩ごしに二人組の方を見る。「ここに寄ろうと思って歩いてたら」とおれは息をはあはあ言わせながら答える。「こいつらがくっついて来て、どうしても離れないんだ」。おれは小男と大男を指さす。三人とも肩でぜいぜい息をしている。みんなずっと走ってきたことは誰の目にも明らかだ。

「だもんでこいつらをうちへ連れてこようって思ったわけか」とハンクスが言う。彼は不機嫌を隠さない。「なあ小僧、お前ここで働いてた頃はもっとましななりしてたじゃないか」おれのシャツを指でもてあそびながら彼は言う。カウンターからの光を浴びて、大きな汗の輪がおれの腋の下にくっきり浮かび上がる。小男は顔に滝のような汗を流し、大男は鼻から妙な音を立てている。

「たかがこんなチンピラ二人始末できんのか？」とハンクスが言う。ビリーが二人の上着を検査している。ありがたいことに、小男の上着からピストルが出てくる。これでおれの立場もいっぺんに有利になる。こんなにうろたえるのにもそれなりに訳があるというわけだ。とはいえ連中が銃を持っているなんて、おれだって考えもしなかった。なぜ駆け出したのか、自分でもわからない。ハ

ンクスの言う通りだ。ピッツバーグから汽車に乗ったとき、おれはこの手の連中を相手にちゃんと渡りあってきた。なのに今回に限って、何も考えず走り出してしまったのだ。

というのも、知らない人間から名前で呼ばれるなんて生まれて初めてだったのだ。

ふと我に返ると、おれは大男をじっと見つめている。喋っているのは小男の方だ。彼は自分からジョンソンと名のり、こっちはブレーン、と大男を指しながら話す。ジョンソンは赤いもじゃもじゃの口髭を生やし、鎖のついた懐中時計を持っている。ジョンソンが言うには、奴らはこの町で営業している私立探偵で、おれを見つけて連れ戻すよう、よその州の客から依頼されたのだという。「あんたら何考えてるのかね」とハンクスは二人に向かって言う。「こいつはただの子供じゃないか、それくらい見てわからんのか？『連れ戻す』？ どこへ連れ戻すっていうのかね？」。家へだ、とジョンソンが答える。「それじゃ人違いだね」とドギーは言う。「俺は生まれたときからこいつを知ってるんだから」

「そりゃ違う」両足をもぞもぞ動かしながらジョンソンは言う。「そりゃ違う、この男はバニング・ジェーンライトといって、三年前にペンシルヴェニア州ピッツバーグから逃げてきたんだ」

ハンクスは両手をぴしゃっと叩き、「なるほどそれでわかった」といっぺんに陽気な口調になって言う。「この小僧はバニング・ジェーンライトじゃないんだよ。バニング・ジェーンライトってのはこいつのペンネームなんだ」。冗談にすっかり気をよくした彼は、おれの背中をばんと叩く。「でもまあよくある勘違いさ」と彼はジョンソンを慰めるような口ぶりで言う。おれは依然として大男のブレーンをじっと見ている。と、ブレーンの後ろにリオーナの姿が一瞬見えるが、次の瞬間

CamScannerでスキャン

にはもうコートの影に隠れてしまう。おれはリオーナがひどく哀れになってくる。なぜならいまやすっかり事情が呑み込めたからだ。雑誌の編集長と話したあと、この二人組はリオーナのところに行ったのだ。そしてリオーナからおれの住所を教わったのだ。はじめはビリーかとも思った。ビリーはカウンターのかたわらに立って、例のごとく爪楊枝をくわえている。だが三秒間リオーナを見つめているうちにおれは悟る。おれに対する憎しみ、彼女自身に対する憎しみゆえに、彼女が自分を見失っていることを。そしてこの瞬間、彼女は初めて理解する。おれたちがもう決してよりを戻さないだろうということを。そしておれは、それが彼女にとってどれだけつらいことかを、このとき初めて理解する。と、大男のブレーンがたまたま後ろをふり返り、おれの視線が注がれている先に目を向ける。元の方を向き直った顔には何の表情も浮かんでいない。この男の姿を見ただけで、その無表情の顔を見ただけで、おれの中の暴力がいっぺんに煮えたぎる。それはおれの体内じゅういたるところを駆けめぐり、やがて口のあたりに行きついて止まる。

これだけ敵意に囲まれていながら、ジョンソンの態度は揺るぎなく、落着いている。「ミスター・ハンクス、俺たちはあんたと冗談をかわしに来たんじゃない」と彼は言う。「どのみちミスター・ジェーンライトはペンシルヴェニアの親父さんのところに戻ることになるんだ。俺たちが内々にお連れするにしろ、警察に訴えて逮捕、引渡しという手段に出るにしろね」

「どうせなら親父さんが手前(てめえ)で迎えに来たらどうなんだ」とハンクスは言う。

「ミスター・フィリップ・ジェーンライトは近頃あまり体を動かされないものでね」とジョンソンはおれの目をじっと見据えて言う。隣にいるブレーンは一言も喋らない。顔もぴくりとも動かな

い。図体ばかり大きい、感情のない、でくのぼう。両足はしっかり床を踏みしめ、両腕はだらんと横に垂れている。齢は三十なかばあたりだが、髪はすでに薄くなりはじめ、顔にはそこらじゅう古傷がある。一週間前に飲んだみたいな感じのジム・ビームの匂いを、まるで熱のように毛穴から発散している。「いいですか」まだ喋りつづけているジョンソンの視線が、おれの目からハンクスの目に移る。「みんなこの子のことを三年前から捜してるんだ。何しろこれだけ大きい子だ。三年のうちには誰かの目にとまるに決まってる。これだけ大きくて三年間見つからずにいるには、相当運がよくて、大都市に身を隠して、しかも誰かにかくまってもらわなけりゃとうてい無理だ。この子にその種の手助けをしてやった人間がいるとすれば、法の目から見てそいつも幇助罪ってことになるだろうね」。彼の視線はずっとハンクスの目に注がれたままだ。「ふん、そうかね」とハンクスは憎らしげに言い返す。もうこんな騒ぎはうんざりだという顔だ。「なら引渡し令状を持ってきな」と彼はきつい口調で言う。「ここはお前らの領分じゃない」。だがジョンソンも負けてはいない。
「私らの領分じゃないって？　いったいここがどこだと思ってるのかね」と彼はクラブの中を見回して言う。「メキシコだとでも？」。それからハンクスがジョンソンの後ろに立っている大男の方を向いて言う。「おい、お前ちょっと相棒に講釈してやったらどうだ。はっきりさせてやりな」
「そいつに話したって無駄だ」とおれが口を開く。みんなはまるで、お前は誰だ、お前なんかこの話に何の関係があるんだ、とでも言いたげな顔でおれを見る。だが暴力はおれの顎から流れ落ちる。「そいつに話したってまるっきり無駄だよ。この仕事の頭脳が誰なのか、どう見たってはっきりしてるじゃないか。こいつのわけがないだろう」。ブレーンは両腕を横に垂らしたまま、じっと

CamScannerでスキャン

動かず、無表情につっ立っている。体のどこも緊張しているようには見えない。「こいつはこの仕事の筋肉さ。それだけの奴なんだよ。二歩と歩かないうちに必ず何かにぶつかって壊しちまうたぐいの人間なんだ。見てみろよ。おれがいま言ってることだってわかっちゃいないんじゃないのか？」。ハンクスとジョンソンは、まるでおれが発狂したとでも思っているみたいな顔をして、おれの頭の割れ目から奇妙な黒い液体が流れるのでも見るように、おれの中からあふれ出る暴力を眺めている。おれはすでに自分とブレーンとのあいだの空間を横切り、爪先をくっつけ合わせるようにして奴の前に立っている。たぶんブレーンはおれより二センチばかり背が低い。でもそれ以上の差はない。おれにほとんどひけを取らない体格の人間なんて初めてだ。奴の大きさを、奴の脳味噌の大いなる空っぽさをおれは憎む。奴のグロテスクな巨体をおれは憎む。「この阿呆の間抜けのでくのぼう」顔をくっつけんばかりに近づけて、おれは低い声で言う。「大男、大男。何か言ったらどうだ？　お前なんかに話したって無駄だよな、誰が見たってわかるよな」。ハンクスがおれの腕をつかもうとするが、おれはそれをふり払う。まわりの連中はみな茫然として声も出ない。「それを使うんだ」とおれは大男に言う、でもいったい誰にその言葉の意味がわかる？　ましてや奴に？　それとは暴力のことだ。お前の中にある大きな暴力、「それを使うんだよ」。奴は身動き一つしない。目は死んだように濁っている。ハンクスがおれの腕を乱暴につかみ、ブレーンの顔にへばりついたおれを文字通り引きはがす。ハンクスの顔には狼狽と動揺が現われている。ジョンソンも同じだ。

ビリーはただただ唖然としている。残りの連中もみなそうだ。でもこんな連中なんかどうだっていい。リオーナ、お前もだ。おれは部屋の反対側に向けてそう叫びたい。おれはいまや暴力のかたま

りだ。

「階上に行きな」とドギーはそれだけ言う。ささやきとしゃがれ声のあいだのような声だ。

しばらく経って、階上のオフィスにドギーが入ってくる。おれは窓から外の街並を眺め、かつて見えていたものをもう一度見ようとしている。「お前、ここを出ろ」入ってくるなりドギーは言う。きっぱりと落着き払った声だ。もう戻ってこないよ、とおれは答える。彼は言う。「クラブを出ろってことじゃない。この街を、この国を出ろって言ってるんだ。カナダへ行く手もあるけどな、カナダじゃ連中もきっと追っかけてくる。南米の方がいい」

南米？　南米なんか行って何するんだ？

「もうお前には会えん、小僧」と彼は言って、机から札束を取り出し、さっさとめくって五百ドルをさし出す。要らないよ、とおれは言うが、彼は首を横に振る。「これはビジネスなんだ」と彼は言う。「これは俺が二度とお前に会わないって意味の五百ドルだ」。彼はそこで言葉を切る。「親兄弟を殺しちゃ逃げられん。他人を殺したとか、敵を殺したとか、それならうまくすりゃ逃げられるかもしれん。だが親兄弟じゃ駄目だ」

おれの親兄弟は他人だったんだよ。おれの親兄弟は敵だったんだよ。

「そうだったかもしれんし、そうじゃなかったかもしれん」と彼は言う。「俺は審判を下してるんじゃない。お前の親父はろくでなしかもしれん、そうじゃないなんて言わん。そうだとすれば逃げるのは余計厄介だぞ。逃げ切りたかったら、よほどいろんな場所をあいだにはさむことだ。多けりゃ多いほどいい。だからその資金と、足をやる。おいビリー」。ビリーが部屋の中に入ってく

CamScannerでスキャン

る。ビリーはおれを見ようともしない。「この小僧を乗せてってやりな」とハンクスはビリーに言う。「変な真似するんじゃないぞ。ニューヨークじゅうどこでもこいつの好きな所へ行ってやれ。駅でも波止場でもいい。わかったな、変な真似するんじゃないぞ」。ビリーは少しのあいだ何もせず、何も言わない。だがボスが返答を待っているのに気づいて、あわててうなずく。おれは窓から目を離してハンクスを見る。オフィスの中は、暗くて遠い場所のように見える。おれの耳が時間にうずく。時間の勢いに耳ががんがんと鳴る。電話をかけたいんだが、とおれは言う。

クローネヘルムが電話に出る。やっぱりあんたの言う通り商売を本国に移す潮時みたいだ、とおれは言う。受話器を置いて顔を上げると、もうドギーの姿はない。ビリーがドアに寄りかかって待っているだけだ。変な真似するんじゃないぞ、とドギーは言った。だがどのみちビリーは笑っている。真夜中の街に車を走らせながら、グラマシー・パークまでずっと笑いつづけている。

47

その後四十八時間は、ヘア・クローネヘルムとともにおれのアメリカ脱出計画を練ることに費やされる。思わぬ展開に、クローネヘルムはすっかりあわててしまう。奴自身は、今後二週間かけて身辺を整理し出発の準備を整えようと思っていたのだ。こっちはそんなに待てん、とおれは断固言い張る。二週間だなんて冗談じゃない。おれの頭の中にはすでにシナリオができ上がっている。シナリオ通りに行けば、ジョンソンとブレーンが遅かれ早かれ姿を現わすのだ。アパートにある服、タイプライター、本、ここ一年で貯めた金、すべて失われたも同然だ。取りに戻る危険を冒すわけ

にはいかないし、誰かに取りに行かせるのもやはり危ない。してみるとドギーからいやいや受け取った五百ドルは、少しばかり恥ではあるが、実に有難い。もちろんこの金のことはクローネヘルムの前ではおくびにも出さず、彼からも前貸しをせびる。

昼間のあいだ、クローネヘルムはいろんな人間と連絡を取り、着々準備を進める。おれが貨物船に乗り込む手はずも整えてくれる。船は明日の夜明けに出発し、だいたい五週間後にシェルブールに着く。シェルブールではクローネヘルムの知りあいがおれのビザを用意してくれている。そこからパリ行きの汽車に乗り、パリからたぶんミュンヘン経由でウィーンに行く。ウィーンではクローネヘルムに雇われた翻訳者がおれを待っているはずだ。それからまもなくクローネヘルム本人も姿を現わす、という段取りである。どうやら何から何まできちんと決めてあるらしい。知らない国の知らない街に行けば、おれも大人しく言うことをきくものと思っているのだろう。いままでとまったく同じように、おれたち二人は——というか、翻訳者も入れておれたち三人は——ウィーンの街の、カーテンを閉め切った心地よいアパートでくつろぎ、バスローブを羽織って部屋の中をぶらぶらしながら、愛とギャングとアメリカをめぐる文学を創造するのだ。そしていま、ここニューヨーク・シティで、おれはカーテンのすきまから眼下の通りを眺める。宝石店があり、レストランがあり、三番街の角に小さな花屋がある。ジョンソンもブレーンもそこにはいない。この四十八時間のあいだに、いままで一か月近く身をひそめていた冬がにわかに姿を現わす。鳥をつかまえた猫のように、冬はその歯で秋をがっしりくわえ込み、きいきいと音を立てながらそれを地面に叩きつける。やがて血と羽根だけを残して、秋は影もかたちもなくなってしまう。みじめったらしい風が残

CamScannerでスキャン

骸を一掃してゆく。数時間後には窓が氷をかたづくる。

おれはあと十八時間隠れていなければならない。

ついに出発の時が来る。朝の五時、あたりは真っ暗だ。クローネヘルムはベッドを出て、電話でタクシーを呼ぶ。彼はおれに貨物船の船長の名前を伝え、何がしかの金をよこす。金の大半はオーストリア・シリングである。おれは窓ぎわに立ってタクシーが来るのを待つ。やがてそれは三番街の角を曲がってきて、スピードを落とし、停車する。おれは何の荷物も持っていない。いま着ている服と、ポケットにつっ込んだ金だけだ。クローネヘルムはロープを体にぴったり巻きつけ、テーブルランプの薄あかりに照らされて立っている。もしおれに裏切られたら、そう脅えている表情だ。おれの中のある部分が、そのままの顔をさせておけ、とおれに言う。が、残りの部分が奴に言う。「じゃ、ウィーンで」と。クローネヘルムは安心したような顔つきになる。きっといまは藁にもすがりたい気持ちなのだ。おれは首を軽く横に振り、その場を離れる。

おれは通りに出て、タクシーに乗り込む。そのあいだもしじゅう後ろをふり返り、通りをくまなく見回す。あくまで迅速に、目を皿にして小男と大男を捜す。タクシーに乗り込むと、おれは運転手をじっくり観察する。知らない男だ。奴はふり返り、こんちは、とか何とか一言言う。もしこいつがふり返らなかったら、あるいは何も言わなかったり言ったとしても妙な口調で言ったりしたら、おれはきっと、パーク・アヴェニューあたりまで出るのを待って車から飛び降り、別のタクシーを拾っただろう。そこまではしなくて済んだわけだが、いずれにせよ行先をすぐに告げたりはしない。ダウンタウンへ、と大まかに方角を言うだけだ。いつ車から飛び降りる破目になるかわか

らない。おれとクローネヘルムと船長以外、誰一人おれの目的地を知らないに越したことはない。その余地は最後まで残しておいた方がよいのだ。

車はブルックリン橋を越え、ブルックリン桟橋に着く。五時四十五分。船はあと十五分で出る予定だ。船着場は寒く、荒涼としている。左手にある古い倉庫は、夜のあいだにすっかり凍りついてしまい、ドアや屋根からつららが垂れ下がっている。船着場の先端にいる船は、水上をわずかに揺れ動く。誰かが船着場に立っている。船長かもしれないが、たぶん誰か下働きの人夫だろう。おれはタクシーの運転手に金を払う。タクシーは走り去る。おれはコートの襟を立て、タラップに向かって歩いていく。おれがいまいる時間の果てに向かって。タラップまであと九十秒というところで、ジョンソンとブレーンが倉庫の角を曲がって現われる。

二人の姿を見て、たぶんおれは憤慨し、そして同時にほっとするのだと思う。もし奴らの姿をここでもう一度見なかったら、おれは自分の人生を信じられなくなってしまっただろう。どこへ行こうとも、いつもいつも彼らがじき現われるのを待ちつづけることになっただろう。そしていま、二人が倉庫から現われた瞬間、このあいだとは違って、逃げ出そうという衝動などおれにはこれっぽちもない。それどころかおれは、ここはひとつとっちめてやろうか、ちょっと相手になってやろうか、とまで考えている。だがそのときだ。連中はすべてを台なしにしてしまう。よりによってピストルを出してしまうのだ。親父はおれを生きたまま戻ってこさせたいと思っている。そのことはこっちも承知している。少なくとも承知しているつもりである。そしておれがそれを承知していることは、連中だってわかっているはずだ。だが話はそれで終わらない。おれが国外に逃げるとなる

CamScannerでスキャン

と問題は別なのだ。連中としてはそれだけは何としても避けねばならない。息子さんは国を出てそれっきり行方をくらましてしまいました、では絶対に許されないのだ。それを阻止するためなら、おれを不具にすることも殺してしまうことも連中は辞さないだろう。そしていま、おれは暴力を求めている。暴力が湧き上がってきて欲しいと思っている。でも暴力はやって来ない。だからおれは何とか知恵を絞って、あと五分以内に船に乗る手だてを考え出さねばならない。おれが小男と大男とのトラブルを解決するのを、船は待ってはくれまい。船長にしろほかの誰にしろ、そんなことのために時間や身の安全を犠牲にするわけはないのだ。銃を握った手が現われると、おれは左手の倉庫の方に走り出す。一番近いドアめざして。

倉庫の中は、木箱が何列も天井まで積み上げてあるだけだ。列と列のあいだにまっすぐな空間が伸びている。どうやってこいつらを捲いて船まで行ったものか、おれは懸命に頭を働かせる。一人の足音が後ろから聞こえてくる。もしもう一度ニューヨーク・シティに逃がしてもいいと思っているのであれば、連中はタラップでおれの行く手をさえぎろうとするはずだ。こっちへ来るということは、ここで決着をつけようという気でいるのだ。時間はほとんどない。おれはもう船に乗れないだろう。どう考えたって無理だ。だが不思議なことに、おれには自分があのタラップを上る姿が見えるのだ。おれはすでに五分先の未来にいて、タラップを駆け上がり、船の中に飛び込んでいる。そしてほんの一秒のあいだ、おれの心がすうっと和む。おれはただひたすらこの来たるべき瞬間のあとについて行く。一本の糸をたどるようにその瞬間に従い、暗い倉庫の木箱の山のあいだを走り抜ける。だがその一秒間を、銃声が聞こえ、弾丸が顔のすぐ横を通り抜けるのを感じるとともに終

CamScannerでスキャン

わってしまう。
　こんなに近くで発砲を聞いたり感じたりしたのは初めてだ。ニューヨーク・シティ有数のギャングの下で働いているあいだだって、こんなことはなかった。でもたぶんそれはむしろギャングとしての有能さの証しなのだろう。きちんとすべてを統制しているしるしなのだ。銃声は鞭がふり下ろされる音のように冷たく、冷気の中でいっそう鋭く響く。だが匂いには熱がある。そしてこの熱がおれの中のあらゆるものをひっくり返す。いまにも嘔吐と下痢がいっぺんにやって来そうな気分だ。おれの中の何もかもが引火点に達し、おれの両端でいまにも爆発が起ころうとしている。それを恐怖と呼ぶのは、それを矮小化してしまうことだ。弾丸が貫通してもいないのに皮膚の焦げる匂いがするとすれば、貫通したときにはいったいどんな匂いがするのか？　おれは木箱の山に正面衝突しようとしている。もはや五分先の未来は見えない、どんなに目を凝らしてもその映像は浮かんでこない。寒々とした倉庫にいろんな反響音が響きわたり、どれがおれの立てる音なのかもわからない。それどころか、自分がどっちの方向へ行きたいのかもわからない。誰が前にいて何が後ろにあるのか、それさえわからないのだ。
　そして、そいつがそこに現われる。奴はただ単に片手を前に出し、おれはそこへ走り込む。次の瞬間、おれは床に這いつくばっている。奴はおれの上に立っている。どろんとした、死んだように表情のない顔をおれの顔のすぐそばに近づけて。おれは奴の毛穴から立ちのぼるバーボンの匂いを嗅ぎ、その鼻に浮かぶ切れた血管の数を数える。
　おれの頭の中のすべてのものが終わる。おれはしばしあたりを見回す。船とタラップが見える。

人夫たちがタラップを引き上げる準備をしているのが見える。太陽が出てきた。陽の光は冷たい大気の中では青く、海の上では黄金色だ。それはすべておれから十秒かそこらの距離にある。おれはもう一歩のところまで来ているのだ。おれはいま倉庫の反対側にいる。おれとブレーンとが。いまのおれに思いつけるのは、二日前の夜におれがこいつに言ったことだけだ。そしてこいつもいま、そのことを考えている。ひょっとしたらおれ以上にはっきりと覚えているかもしれない。

　奴はおれの頭を両手で抱えている。おれがヘンリーの頭に対してやったのと同じことを、おれの頭にやろうとしているのだろうか。奴は自分自身のジョークのことを考えている。きっとそれは、生まれてこの方ずっと奴にまとわりついてきたジョークだ。牧場に住む子供だったおれにずっとまとわりついていたジョークのように。遠くのほうでジョンソンの呼ぶ声が聞こえる。人夫たちがタラップを引き上げはじめるのが聞こえる。船の汽笛が聞こえ、男たちがたがいに指令をどなり合うのが聞こえる。海上の鷗（かもめ）たちの声が聞こえる。おれは待つ。おれの頭を両手に抱えた大男が、おれにも冗談がわかったぜ、と言うのを。大男は言うだろう。そうだとも、おれはみんながいつも言った通りの化け物なんだよ。そうだよ、化け物はここにいるんだよ、と。そしておれの頭の中でぐしゃっと音がして、それですべてが終わるだろう。おれは少しのあいだ考える。少しのあいだなおも策を練る。ジョンソンはどれくらい遠くにいるだろうか、ここでおれが大声を上げたら飛んできてブレーンがおれを殺すのを止めてくれるだろうか。だがそれも望み薄だ。おれが大声を出すより先に、ブレーンがこの頭蓋をへこませてしまうだろう。

　ブレーンはおれから両手を離す。奴は言う。「逃げな」

一瞬のあいだ、実のところしばらくのあいだ、奴が何と言っているのかおれにはうまく呑み込めない。

「逃・げ・な」と奴は言いながら船を見て、それからまたおれを見る。

これはワナだ、おれに思いつくのはそれだけだ。素手で殺してしまったのでは言い訳が立たない。でもきっと、船に逃げ込もうとするのを射殺したのなら申し訳も立つのだ。

ジョンソンはなおも叫んでいる。ブレーンはジョンソンの声がする方をふり返り、それからまたおれの方を向く。その表情は相変わらず少しも変わっていない。

おれは逃げる。

おれはあたふたと立ち上がり、走る。おれは甲板にいる人夫たちに手を振る。タラップがゆっくりと陸地に戻る。おれは銃声を待つ。熱の匂いを待つ。おれの中のあらゆるものを粉々に爆発させる熱の匂いを。だが聞こえてくるのは鷗の声と汽笛と、濡れた、なかば凍ったタラップをおれの足が駆け上がるざくざくという音だけだ。おれは船の中に飛び込む。そしてそのまま数分そこに横たわっている。甲板の凍りつく冷たさが背中を通って体内に伝わってくる。まわりに立った外国人たちがおれを見下ろして笑っている。おれが重い体を持ち上げて手すりごしに陸の方を見る頃には、船はもう動き出している。手すりに載せたおれの両手の中を、陸地がすり抜けて行く。侵犯されたばかりの水が鼻先でしゅうしゅう音を立てる。

桟橋のジョンソンの姿はすでに小さくなりかけている。水の音、足下で轟くエンジンの音で、もうその声もほとんど聞こえない。ジョンソンは地団駄を踏んでいる。いまにも帽子を地面に投げ捨

CamScannerでスキャン

てて、思い切り踏んづけでもしそうな剣幕だ。ブレーンがその後ろ、食堂の入口のところに立っている。両手はポケットにつっ込まれ、その視線はどこにも向けられていない。おれは船の側面に立ち、一度でいいから奴がこっちを見てくれればと思う。奴の姿が見えなくなってしまう前に、一度でいいからその目を捉えておきたいと思う。

だがおれは奴の視線を捉えられないだろう。奴はおれの方を見ないだろう。奴に何か言う最後のチャンスをおれはついに与えられないだろう。最後の一言は奴のものになるのだ。それがおれのを払う代償の一部なのだ、最後の一言が奴のものになることが。どのみち奴はただのでくのぼうなのだ。誰が見たってわかる。この仕事の頭脳なんかじゃない。

船は波止場を去り、ニューヨークはおれの人生の中であと一時間つづく。船は一か月半つづく。そのあいだに年が変わる。この街、この時間をもう一度目にするまでに、おれの人生は年の変わり目を何度も見ることになるだろう。

48

シェルブールでは予定通りビザが待っている。おれは予定通り汽車でパリに行き、そこで凍てつくような、訳のわからない四日間を過ごす。別に一刻も早くウィーンへ、という気はない。この時点のおれには、どの場所もみな同じに思える。どこもみな旅行客のための場、観光地に思える。「何だってよりによっていまあんな所へ行くのかね？」と人々はおれに訊ねる。おれには何のことかわからない。「まあとにかく」とアメリカン・エキスプレスの男がおれに言う。「少なくとも

チューリッヒ経由で行くことだ。ミュンヘンはやめとけ」。何か違うんですか？　とおれは訊く。
「違うとも」と男は答える。「一方にはドイツ人がいるのさ」
チューリッヒ経由、ウィーン行きの列車には暖房が入っていない。おれは三人のスペイン娘と相席になる。娘たちはウィーンに住んでいて、そのうちの一人の家族がパリにいるので、クリスマスをみんなでそこで過ごしてきたそうだ。少なくとも内乱が収まるまでは、三人とも亡命者の身の上である。親はそれぞれ金持ちだから、みんな悠々ボヘミアン暮らしを送っている。身なりにしてもいかにもボヘミアン的で、三人ともここから半径千五百キロ以内で話されるあらゆる言語を喋る。ただし英語を除いて。彼女たちと同席になって有難いのかどうか、自分でもよくわからない。少なくとも体を伸ばすスペースが減ってしまうことは確かだ。だが午前一時頃、本格的に寒くなってくると、どのみち誰も身を伸ばしちゃいない。おれは切れ切れにうとうとし、暗闇の中で何度も目を覚ます。夜明けの一時間ばかり前に目覚めると、娘のうち二人がおれにぴったり寄り添って眠っている。
チューリッヒでは停車時間がたっぷりあるので、おれたちは十五分ばかり汽車を降り、駅でコーヒーを飲む。陽の光は剣のように薄い。ふたたびウィーンに向けて出発する頃には、汽車は満員になっている。おれたちのコンパートメントに二つあった空席もすでに人が座っている。一人は四十代半ばのオーストリア女で、仰々しいグレーの帽子を髪につき刺すみたいにしてかぶっている。女はおれなんかろくに相手にしないし、遊び人のスペイン娘たちとなるともうはなから無視している。旅程の半分くらいまで、女は一度も口を開かない。が、リンツに来たところで窓の外を向き、

正確な、だが訛りのある英語で「ここが総統が幼年時代を過ごされた町です」と言ってうなずく。おれはこの情報を丁重に受け入れる。何しろこっちは、オーストリアの総統が誰なのかも知らないのだ。でももちろん彼女が話題にしているのはオーストリアの総統ではない。少なくともいまはまだ違う。

コンパートメントのもう一人の乗客は、おれと同じ年ごろのアメリカ人だ。トゥールーズからウィーンに来て、駅で夜を明かして次の汽車を待っていたのだという。この男はあとで、トゥールーズの伝説的ジャズ・クラブを空しく捜し歩いた経験を、おれたちを相手に物語ることになる。名前はカール、身長は百六十五センチといったところ。何とかして眠ろうとする男の足が、何度もおれの足の邪魔をする。おれはそれを腹立たしい思いで睨みつけている。時おり男は目を開けて、窓の外に顔を出し、なだらかにうねったバイエルンの丘陵風景を眺める。汽車はしばしばがたんと停車し、誰かが汽車を降りて線路に積もった雪をどけに行く。丘に立つ小さな家々の暖炉が赤々と燃えている。親父の牧場にいた白い馬の赤い目を思い出す。グレーの帽子をかぶったオーストリア女がリンツについて発言したところで、男は初めて身を起こし、混乱した面持ちで目をしばたたかせながらおれたちを見る。

「ここはどこです?」と男は訊ねる。

「リンツ」とおれは言う。実はおれもこのとき初めて、男がアメリカ人であることを知ったのだ。

「リンツ?」混乱しきった男は鸚鵡(おうむ)返しに言う。そして眉間にしわを寄せてスペイン娘とオーストリア女を見渡し、それからまたおれの方を見る。「この汽車、イタリアに行くんじゃないの?」

CamScannerでスキャン

「ウィーン」

「ウィーン！」。男の体からすうっと力が抜ける。男はオーストリア女の方を向き、ドイツ語で何か言う。女は悪い知らせを裏づける。男はへなへなと座席に沈み込む。冗談じゃないぜ、という表情。だがそれだけではない。動揺と脅えの色もそこには浮かんでいる。冬が比較的温暖ということで、男はイタリアに行くつもりだった。イタリアに着けば電信で金も届いている手はずになっている。それがなけなしの金を間違った汽車に使ってしまい、目下のところ一文なしなのだ。だがそれだけではない。おれにまだそれがわからないだけだ。おれはまだあの地点に達していないのだ、汽車の窓から、いやあらゆる窓から、来たるべき時間が見えるようになるあの地点に。四つんばいになったユダヤ人たちがケルントナー通りのひび割れを歯ブラシで掃除し、オーストリア社交界の御婦人方が先の尖った黄色い靴でもって彼らを蹴飛ばし、彼らが掃除し終えた場所に唾を吐く。おれにはまだその光景が見えていない。そもそもおれには、その光景が起きる以前にそれを予見できないばかりか、起きているさなかにもあまりはっきりとは見えないのだ。要するにたいていの人間と変わらないということなのだろう。だがカールには、いま汽車の座席に座り込んでいるこの男には、すでにそれが見えている。自分が途方もなく大きな過ちを犯した気がしている。ひょっとして俺はわざとこんなことをやったんだろうか、カールはそう自問せずにはいられない。

「ウィーンはいい街らしいよ」そう言っておれは肩をすくめる。

ウィーンに着いた頃には日はもうほとんど暮れている。五時間のはずの旅程が、天候のせいで十時間に延びたのだ。その間、ほんの三十分か四十分のあいだ、銀と赤二色の太陽が我々の背中を訪

れる。草原に積もった雪がバルカン地方の薄あかりの中できらきら光る。夕暮れの薄暗がりが、もぞもぞと嚙み進むようにしてあたりを侵食し、やがておれたちの乗った汽車を浸し、汽車があとにしてゆく内臓のように伸びた線路を覆いつくす。空は灰と動物の匂いがする。水面に張った灰色の氷の下でうごめく黒い湖のように、空は奥の方でゆらゆらと揺らいでいる。スペイン娘たちは通路に出て、窓から身を乗り出している。オーストリア女は席に座ったまま身動きひとつしない。西駅にのろのろと向かいながら、汽車は霧に包まれた街を通り抜ける。千ものバルコニーが、切断された古い手のようにそれぞれの窓にしがみついている。モンゴル風の丸屋根が夜に向かって舞い上がる。ジプシーの笛の音が運河の水辺のホールから流れてくる。悪態をつくような音を立てて汽車が停止すると、我々を待ち受けていた人波がわっと押し寄せる。アジア人の乞食やアーリア人のエリート、ギリシャ人の仕立屋やミラノ人の銀行員や山岳地帯の遊牧民。初めて目にする生命のジャングルだ。おれはあっというまにカールやスペイン娘とはぐれてしまう。プラットホームをいくらか行ったところでふり返ると、オーストリア女がおれたちの乗っていた車両のドアのあたりにいて、人波に触れぬようそろそろと進むのが見えるだけだ。おれは駅を出て市電に乗り、旧市街のはずれまで行って下車する。市庁舎の不気味な影の中におれは取り残される。去っていく市電の立てるスパークを頼りに、おれはクローネヘルムから渡された住所を読む。

49

旧市街を囲む環状道路（リング）をおれは一晩じゅうさまよい歩き、クローネヘルムが書いてよこした番地

を捜す。道路は凍りついてかちかちになっている。あたりは次第に暗くなり、雪が降り出し、赤いケープを着た人々が広場の中を花びらのように舞う。リングの円形の道路は、タクシーのオレンジ色の光や、馬車の黄色い窓の光にあふれている。きびきびと走る馬たちに引かれて、馬車はやっとの思いでついて行く。幌馬車が一台通りかかり、ホーフブルク宮のアーチを抜けていく。中に乗った人々は、おれの姿がオベリスクの壮観を冒瀆する光景をじっと見つめている。午前二時、おれは歩道橋の下で震えている。枯れた蔦が裸のつるをおれの目に叩きつける。三時頃、おれはシュテファン聖堂の東側に開いた扉を見つける。寺院の奥で、乞食や不具者や浮浪者が大挙して眠っている。夜が明けると、みんなよたよたと外に出る。冷たい太陽の中で見るウィーン。白く、くっきり彫り刻まれた建築。それを見ておれは理解する。この街があざけりの笑いとともに日々屈辱の儀式を遂行していることを。このみじめったらしい連中が、感謝の念とともに賤民の境遇を受け入れていることを。こいつらときたら、花嫁のごとく美しいウィーンの雪のガウンにちょっとでもしみをつけるくらいなら、喜んで自分の臀部に血を流し、自分の口めがけて小便を飛ばすのだ。乞食どもがみずからの汚物を食らうなか、ドナウ川の水路は銀色に澄みわたって流れる。

おれはリングの川べりに行きつく。東の方、ヨーロッパとアジアが縫い合わされる、歴史のちょうど縫い目のところで、プラーター公園の観覧車が空っぽのまま風の中を回っている。ハンガリーの怒号の下、観覧カゴがかたかたとこわばった音を立てる。おれの目的地がようやく見つかる。運河の南、大通りを折れたところにある、リングから一ブロック離れた路地裏。クローネヘルムの住所が記された家の窓の向こうで、一人の男が机の前に座っている。齢はおれより少し上といった程

度だ。道路を渡ると、男が何やら帳簿をつけているのが見える。まっ白な顔には血の気というものがまるでない。男は帳簿から顔を上げる。そしておれの姿に目をとめ、手を振る。男の表情は何ひとつ変わらない。まるでおれが何年も前から、毎日この通りを歩いてこの建物に通いつづけてきたみたいな手の振り方だ。おれにとっては生まれて初めて見る男なのに、向こうはまるで顔なじみみたいに手を振るのだ。こつこつと帳簿をつけながら男はおれを待っている。おれが誰なのか、少しも迷ってはいない。おれが玄関にたどり着くと、階段を降りてきてドアを開けてくれる。笑顔も見せず、握手も事務的。ヘア・ジェーンライト、と彼はおれを呼ぶ。彼の名はペーター。あなたの翻訳者です、と自己紹介するが、風采からするとむしろ会計士という感じだ。我々は階段を上り、アパートメントに入っていく。中はグラマシー・パークからそのまま空輸されたと言っても通りそうだ。ペーターがおれの来るのを見張っていた場所を除いて、カーテンも全部閉じられている。

ペーターとおれは、たがいに話すこともあまりない。おれは全身すっかり冷え切っていて、何もかもにうんざりしている。とにかく何か食べてから眠りたい。眠ってから食べるのも悪くない。だがその前にまず風呂だ。暖かい湯を張った、おれの体の半分の大きさの浴槽に、体を折りたたむようにして入る。ようやく暖まってきた頃にはもう昼だ。眠りにつくと、おれは自分が寒さに震えている夢を見る。夢の中でウィーンの環状道路をぐるぐる歩く。目が覚めると、いまは夜だとおれは感じる。部屋のカーテンは閉め切ってあり、確かなことはわからないが、枕元にはランプがついている。八回ばかり寝返りを打ったあと、ようやくおれは、ペーターが部屋の隅に置いた椅子に座ってこっちを見ていることに気づく。ペーターの両手は膝の上にきちんと重ねられている。何もかも

を捜す。道路は凍りついてかちかちになっている。あたりは次第に暗くなり、雪が降り出し、赤いケープを着た人々が広場の中を花びらのように舞う。リングの円形の道路は、タクシーのオレンジ色の光や、馬車の黄色い窓の光にあふれている。きびきびと走る馬たちに引かれて、馬車はやっとの思いでついて行く。幌馬車が一台通りかかり、ホーフブルク宮のアーチを抜けていく。中に乗った人々は、おれの姿がオベリスクの壮観を冒瀆する光景をじっと見つめている。午前二時、おれは歩道橋の下で震えている。枯れた蔦が裸のつるをおれの目に叩きつける。三時頃、おれはシュテファン聖堂の東側に開いた扉を見つける。寺院の奥で、乞食や不具者や浮浪者が大挙して眠っている。夜が明けると、みんなよたよたと外に出る。冷たい太陽の中で見るウィーン。白く、くっきり彫り刻まれた建築。それを見ておれは理解する。この街があざけりの笑いとともに日々屈辱の儀式を遂行していることを。このみじめったらしい連中が、感謝の念とともに賤民の境遇を受け入れていることを。こいつらときたら、花嫁のごとく美しいウィーンの雪のガウンにちょっとでもしみをつけるくらいなら、喜んで自分の臀部に血を流し、自分の口めがけて小便を飛ばすのだ。乞食どもがみずからの汚物を食らうなか、ドナウ川の水路は銀色に澄みわたって流れる。

おれはリングの川べりに行きつく。東の方、ヨーロッパとアジアが縫い合わされる、歴史のちょうど縫い目のところで、プラーター公園の観覧車が空っぽのまま風の中を回っている。ハンガリーの怒号の下、観覧カゴがかたかたとこわばった音を立てる。おれの目的地がようやく見つかる。運河の南、大通りを折れたところにある、リングから一ブロック離れた路地裏。クローネヘルムの住所が記された家の窓の向こうで、一人の男が机の前に座っている。齢はおれより少し上といった程

度だ。道路を渡ると、男が何やら帳簿をつけているのが見える。まっ白な顔には血の気というものがまるでない。男は帳簿から顔を上げる。そしておれの姿に目をとめ、手を振る。男の表情は何ひとつ変わらない。まるでおれが何年も前から、毎日この通りを歩いてこの建物に通いつづけてきたみたいな手の振り方だ。おれにとっては生まれて初めて見る男なのに、向こうはまるで顔なじみみたいに手を振るのだ。こつこつと帳簿をつけながら男はおれを待っている。おれが誰なのか、少しも迷ってはいない。おれが玄関にたどり着くと、階段を降りてきてドアを開けてくれる。笑顔も見せず、握手も事務的。ヘア・ジェーンライト、と彼はおれを呼ぶ。彼の名はペーター。あなたの翻訳者です、と自己紹介するが、風采からするとむしろ会計士という感じだ。我々は階段を上り、アパートメントに入っていく。中はグラマシー・パークからそのまま空輸されたと言っても通りそうだ。ペーターがおれの来るのを見張っていた場所を除いて、カーテンも全部閉じられている。

ペーターとおれは、たがいに話すこともあまりない。おれは全身すっかり冷え切っていて、何もかもにうんざりしている。とにかく何か食べてから眠りたい。眠ってから食べるのも悪くない。だがその前にまず風呂だ。暖かい湯を張った、おれの体の半分の大きさの浴槽に、体を折りたたむようにして入る。ようやく暖まってきた頃にはもう昼だ。眠りにつくと、おれは自分が寒さに震えている夢を見る。夢の中でウィーンの環状道路をぐるぐる歩く。目が覚めると、いまは夜だとおれは感じる。部屋のカーテンは閉め切ってあり、確かなことはわからないが、枕元にはランプがついている。八回ばかり寝返りを打ったあと、ようやくおれは、ペーターが部屋の隅に置いた椅子に座ってこっちを見ていることに気づく。ペーターの両手は膝の上にきちんと重ねられている。何もかも

かひどく不自然だ。七週間のあいだ窓辺でおれを待ちつづけていたのと同じように、いままたこの男はおれの目覚めを待っている。「あなたの作品を翻訳できて光栄です」と、おれが十分目を覚ましたのを確認してから彼は言う。英語は上手だ。

おれはベッドの中で身を起こし、いやこちらこそ翻訳していただいて光栄ですとか何とか礼儀正しく言い返す。いったい俺は何を言ってるんだ、と自分でも不思議になってくる。ペーターはただうなずくだけで、青白い顔の表情は少しも崩れない。それから彼は机の上に置いた何かを軽くとんとんと叩く。暗がりの中で目を凝らしてみると、どうやらタイプライターらしい。そのかたわらには紙の束らしきものが見え、騎兵隊のマスケット銃みたいにきちんと一列に並べられた数本の黒いペンも見える。

「お仕事の準備はすべて整っています」と彼は言う。そりゃどうも、とおれは答え、もうひと眠りしようとふたたび横になる。あわてることはない、じきはじめるさ。そうだな、四月になったら。おれはしばらくうとうとする。たぶん二十分かそこいらだ。目を覚ますと、彼はさっきの位置から動いていない。相変わらず同じところに座っている。「そうです」と彼は言う。「お仕事の準備はすべて整っているのです」。屋根に降る雪のようにひっそりした声。おれががばっと起き上がり机に飛んでいってタイプを打ちはじめないのを見てとったところで、ようやく彼も「でもしばらくは旅の疲れを癒されたいでしょうね」と言い足す。おれは身を起こし、この男をまじまじと眺める。そしてしばらく経ってから枕元のランプを消し、相手を暗闇の中に置き去りにする。ペーターが動く音はいっこうに聞こえてこない。朝になって、彼がいなくなっているのを見て、おれは内心

CamScannerでスキャン

ほっとする。

50

ペーターが会計士みたいに見えるのは、事実そうであるからにちがいない。この男は翻訳と同時に、事務サイドの仕事も受け持っているのだ。その後の一週間、窓辺の机に向かって仕事をしているペーターを見ても、アマンダと乳繰りあっているのか、十進法と戯れているのか、はたからは判断がつきかねる。表情はまるで変わらないのだ。この数字の管理者によって翻訳された我が作品がどんな代物になっているのか、おれとしては見当もつかない。もちろんこういう男こそ翻訳者には理想的ということも考えられる。情熱面はおれにまかせて、自分はひたすら正確を期しているのかもしれない。ペーターとアマンダとモリーとおれ。何というチームだ。

クローネヘルムは一週間前に電報をよこした。あと四、五日でこっちへ着くということだ。文面から露骨に感じられるところでは、どうやらおれは旅行による時間のロスを埋め合わせることを期待されているらしい。ウィーン、ミュンヘン、ベルリンの顧客たちが、おれの新作をいまかいまかと心待ちにしているというのだ。最初の一週間、仕事はあまりはかどらない。ただ、パリからの列車で会ったスペイン娘たちのことを考えたおかげで、二、三刺激的な可能性が拓けてくる。だがペーターはがっかりする。依頼人たちはパリから来たスペイン娘を求めてはいません、と彼は諭すように言う。彼らはアメリカーナを求めているのです——ギャングとか、インディアンとか。彼の話では、依頼人Xはアステカの神秘主義が格別お好みだという。そこでおれはスペイン人の征服

者が出てくる物語をいくつかでっち上げる。依頼人Xはドイツ政府の高官で、その地位は非常に高く、ゆめゆめおろそかにしてはならぬ人物だという。ペーターもクローネヘルムもXについてあまり多くを語らないが、二人とも彼を死ぬほど恐がっていることはすぐわかる。ある日の午後、たまたまクローネヘルムが「あの出来損ないのチビ助」という言葉を口にするのが隣の部屋から聞こえる。一瞬のあいだ、手で触れられるほどの沈黙がおれの部屋にまで伝わってくる。クローネヘルムもペーターも、じっと息をひそめてその発言の無謀ぶりをひしひしと感じ、この暴挙が招くであろう結末を待っている。まるでいまにもドイツ警察が窓を破って入ってきそうな雰囲気だ。

こんな状態が一か月か二か月つづくのだが、この時期が四分の一くらい過ぎたあたりで、おれは限界に達する。アパートメントにいるのにも我慢できないし、冬のウィーンと渡りあうというのも考えただけでぞっとする。おれはもうただただうんざりしている。一人で日々悶々としている。ペーターという男は実に気の滅入る奴なのだ。だからクローネヘルムが着いた日など、彼の姿を見ておれはほとんど嬉しいと言ってもいいくらいの気持ちになった。トランクや木箱を携え、滑り込むように入ってきたクローネヘルムは、まずただちにカーテンをいっそうぴっちりと閉め、どんより灰色のヨーロッパの光が一筋たりとも入ってこないようにした。それからおれの体に両腕を回し、嬉しさのあまり泣き出したのだ。どうやら本当におれが現われるとは思っていなかったらしい。さらに数日が経ち、おれは確信する。このままではいずれ何かが崩れてしまうだろうと。考えてもみるがいい、三人の化け物が二つの暗い部屋をのそのそと徘徊して、五百キロ離れたベルリンにいる畸形の小人たちの蒐集に供すべく猥褻な書物を作っているのだ。これではいずれ、どこか一

CamScannerでスキャン

点か二点にその歪みが集中してしまおうというものだ。おれがウィーンに来てから八週間後、亡命者のようにひっそりと、春が街なかに出てきはじめる。おれもまた、もう一人の亡命者のように、ひっそりと外に出られる機を待つ。

51

一九三七年三月。雪はとけ、排水溝で氷が割れる。人々はケルントナー通りをせかせかと行き来し、カフェからカフェへと渡り歩く。絵描きたちがシュテファン聖堂の周辺にイーゼルを立てる。冷気で絵の具が固まらぬよう、彼らは小さな火をたく。時おりパレットが炎に近づきすぎて、絵の具が引火してしまう。そのぽんという小さな色つきの音が、広場じゅうから聞こえてくる。砂糖と香水とキャベツの匂いがする。ホーフブルク宮が環状道路の中央にそびえ立つ。あたかも水中の山脈が海底からわが身を引きちぎり、水面まで浮かび上がってきたような姿だ。野良犬たちが群れをなして通りを駆けめぐる。政治犯の仕掛けた爆弾がカフェの人波に悲鳴と眩暈(めまい)を引き起こす。怪しげな軍隊の連中が長い黒ブーツと茶色の軍服に身を包み、噴水と噴水のあいだをくり返し行進する。

おれは朝のうち、クローネヘルムが目を覚ます前に書くように努める。ペーターは眠るという行為を知らないらしい。おれがいつ顔を上げても、ほとんど決まって部屋の反対側に座ってこっちを見ている。彼らは二人とも、おれが新しい章を書き上げるのを文字通りじっと息をひそめて待ち受

れは何度も自分に言い聞かせる。ペーターの翻訳はおれが書くのよりも速いし、翻訳が出来上がるとすぐクローネヘルムがそれを抱えてドイツに直行し、おれが次の乱交の構想を練り上げる間もなく戻ってきてしまう。最近では誰かが原稿を取りにアパートメントにやって来るようにもなった。長い灰色のコートを着た男で、顔はペーターと同じくまっ白、あちこちにきびができている。愛想のない、やたらと偉そうな態度。依頼人Xとかいう奴の使い走りを務めることがよっぽど得意らしい。クローネヘルムはいつもこの男の足元にひれ伏し、一時間でも二時間でもひたすらへいこらしている。使い走りはおれを見てちょっと驚く。無理もない。どう見たっておれは、内閣高官のリビドーを意のままに操るさっそうたる人物には見えないのだから。浮世の経験ということでは、クローネヘルムとペーターとおれと三人合わせたところで、ザルツブルクでの暇な晩の夜ふけを満たす程度のものしか持ちあわせていない。我々はまるっきりペテン師みたいに見えるにちがいない。当然だ。事実ペテン師なんだから。とにかく原稿取りの男は新作を受け取り、帰りぎわにドイツ式の敬礼をする。糞を舐めんばかりのあわてぶりでもって、クローネヘルムもペーターも敬礼を返す。おれはただ、三人の男が腕を宙につき出してつっ立っているのを眺めている。おれは笑い出す。笑いは止まらない。やめようにもやめられない。親父の家に火をつけた晩のようにおれは高笑いする。それくらいおかしいのだ。使い走りの小僧はかんかんに怒り出す。顔がトマトのように赤くなり、破裂せんばかりの剣幕だ。クローネヘルムの方はすっかり脅えてしまい、いまにも泣き出しそうな顔。「いいや、別に悪気はなかったんだよ」とおれは彼らをなだめる。「いいともさ、やりたきゃ好きなだけやっとくれ。ほら、俺もやるからさ」と言って、さっそくおれはそれをやり出す。

CamScannerでスキャン

部屋の中を飛び回りながら片腕をあちこちにつき出し、やがて家具の上に崩れ落ちてげらげら笑い転げ、またすくっと立ち上がってさらに何度か敬礼をする。そして窓を一杯に開け、この糞ったれの街全体に敬礼を送る。ここへ来て初めて味わう愉快な気分だ。

数分後、おれが出ていく頃には、クローネヘルムはすっかり動転してしまっている。ペーターは熱いお茶だか何だかを抱えて走り回っている。いまにもクローネヘルムの脈を測って瞼の裏を覗きこみそうな様子だ。おれはもうこれ以上ないというくらい上機嫌で、騒ぎを見ても少しも動じない。二人で勝手におろおろさせておくことにして、さっさと外へ出ていく。天気の良い午後である。おれはフォルクス公園まで散歩に行く。それから王宮を抜け、カフェハウスに座る令嬢たちが抱く流血への欲望を満たすべく今日は誰の人形が焼かれているのか、あるいは誰が袋叩きにされているのかを見に、カールスプラッツまで出向くことにする。果たせるかな、ベルリンから来た使い走りの小僧との一件は、さらなる幸運の前触れだった。というのも、ホーフブルク宮の外壁沿いを歩いていると、通りの向かい側から誰かがおれを呼ぶのが聞こえるのだ。おーい、でかいの、とそいつは呼ぶ。見ると、カフェ・セントラルの入口のところにカールがいる。カールとはウィーンに着いた晩以来だ。おれに向かって手を振っている。と、今度はカフェの窓をどんどんと叩く音がする。そっちを見ると、あのスペイン娘のうちの二人がやはり手を振っているではないか。おれは通りを渡り、カールと握手する。二人でセントラルの店内へ入っていくと、スペイン娘たちは飛び上がっておれに抱きつく。正直言っておれとしてはそんなに仲良くしたつもりはなかったのだが、よく聞いてみると、どうやらあの寒い汽車の中でおれにくっついて暖を取れたことを二人ともとて

も感謝しているらしい。みんなに会えておれもすごく嬉しい。同居人の二人の気狂い以外にもこの街に知りあいがいるんだと思うと、じんと来てしまう。おれは午後の残りをカールとスペイン娘と一緒にセントラルの丸天井の下で過ごす。店内には革命家や新聞記者やイタリア人旅行者がたむろし、白い上っぱりを着たウェイターたちが幅の広い大理石の階段を駆け足で上り下りしている。

カールはウィーンに来てしまったことをいまだに喜べずにいる。でも話を聞いていると、どうやら三人娘のうち少なくとも一人は、いろいろと彼の面倒を見てやっているらしい。まあ最悪の事態というわけでもなさそうだ。イタリア行きの望みは依然捨てていないようで、いまもアメリカン・エキスプレスから金を受け取ろうとしている。テーブルに座った我々は、角砂糖の包みを片っ端から開けて遊ぶ。ウェイターは我々を無視する。いろんな外国語に通じているカールが通訳を引き受ける。話を適当に端折り（はしょ）つつ、おれは三人に向かってクローネヘルムとペーターとの狂気の沙汰を話して聞かせる。「だったら俺たちと一緒に暮らせよ」とカールはあっさり言ってのける。そして娘二人の方を向いて、スペイン語とドイツ語で話のあらましを伝える。娘たちも同意見だ。おれがみんなと一緒に住むことがまっとうな解決策である、ということで話はまとまる。おれのために本当に空いた部屋があるのかどうか、それさえおれは訊きたくない。そんなことはどうだっていい。彼らがどんなところに住んでいるのかも知りたくないし、断った方がいい理由が何かあるかどうかも考えたくない。おれの頭の中にある問題はただ一つ、どうやってクローネヘルムに話を切り出すかだ。どうやって切り出したら、奴がピストルを口につっ込みアパートメントの壁一面に自分の脳味噌を飛び散らせる事態を防げるだろう？　今晩のうちに話すしかない、とおれは判断する。

カールと娘たちもついて来てくれて、おれが二階へ上がりすでにベッドに入ったクローネヘルムを起こすあいだ、通りで待っている。「ねえ旦那（マイン・ヘア）」奴の目がきらっと光るのを見たとたんおれは喋り出す。「俺はビジネス上の決断をしたんだ。俺はここを出ていくよ」。奴は目を覚まそうと目をごしごしこすり、おれの顔を見ながら、いったい何の話かと呆然としている。「俺は寝ぐらを変えることにしたんだよ。それが一番いいと思うんだ」。今度は頭の中の霧を振り払おうとするかのように頭をぶるぶる振っている。「でもじきに連絡はする。なぜって俺たちはまだパートナーなんだからね、そうだろ、パートナーさんよ」。どうやらやっと奴にも事態が呑み込めてきたようだ。「とにかくだね、俺がここに住むのはどうも良くないと思うんだよ。つまり、その、ま、創作意欲が萎えてしまうとでも言うか、まあ要するに」。奴はなおも首を振っているがおれは構わずつづける。「要するに俺がここにもう一晩、もう一分でもいたらだね、たぶん俺は、その、あんたをぶっ殺しちまうと思うんだよ。たぶん、ね。だってあんたといると俺は頭がおかしくなってくるんだよ。だがビジネスはビジネス、そっちは終わっちゃいない。つまり俺には商品があって、あんたには市場がある。だからそれについていちゃ心配は要らん。たぶんこれからはいままで以上にビッグに書けるんじゃないかな。そういうふうに考えてくれよ」。そしていまや、恐れていた通り、奴はおれの服にすがりついてくる。ノーノーノーノー、と奴は喋り出す。はじめはとても低く、落着いていると言ってもいい声で、ただ単にノーノーノーノー、と。おれは奴の手をつかみ、その指を一本ずつおれのコートからはがそうとする。と、奴は金切り声を上げる。依頼人Xがどうした、依頼人Xがこうした、とさんざんわめき立てる。考えてみると、今日の午後のドイツ人の使い走りとの敬礼ごっ

このことを思えば、いまこんな話を持ち出すのは時期的にもベストとは言い難い。でもいまさらあと戻りもできない。このままおれがここで夜を過ごしたら、クローネヘルムとペーターは一晩じゅう眠らずに、おれを逃がさないための作戦を練り上げるだろう。奴らはおれをタイプライターに縛りつけ、おれの指をキーに糊づけするだろう。だからいま出ていくしかないのだ。依頼人X、依頼人Xとクローネヘルムは喉を詰まらせながら言いつづけ、おれの足首にしがみつく。おれは奴を引きずったまま部屋を横切り、ドアに向かって歩いていく。情けない光景だ。やがて奴のバスローブがすっぽり脱げ、おれは裸になったクローネヘルムを引きずって歩く。胎児みたいな肌をした、なかば寿命も尽きた肉体を抱えた老いぼれが、おれの足首にしがみついたまま床の上をずるずる滑ってゆく。ペーターはドアのかたわらに立ちつくし、呆然とした表情で我々を見つめている。とうとうおれはクローネヘルムを蹴飛ばしてしまう。奴はおれの足元でぶるぶる震えている。そしておれは、誕生と死産の中間状態で分娩（ぶんべん）された生物を安楽死させようとするかのように、片足を奴の頭上に上げ、いまにもそれを振り下ろそうとする。そのときだ。ペーターが音のない悲鳴を上げる。彼の体全体を、音のない悲鳴が貫く。何ひとつ外には出てこない。血の気のない白い顔はいまや青色に変わっている。おれは足を下ろす。だがクローネヘルムの上にではなく、床の上に。そしてぜいぜいと息をしながらドアぎわの壁に寄りかかる。おれたちは三人とも誰も動かない。しばらくして、ようやくおれが口を開く。「二、三日したら連絡する」とペーターに言って、それからよろよろと通りに出る——おれ自身の人生の中へ。

CamScannerでスキャン

52

おれはスペイン娘たちのアパートに引越し、しばらくそこに居候する。アパートの中は、あっという間に見慣れた風景になる——部屋の片隅に転がった本やワインの空瓶、壊れた木の椅子、壁に貼られた古い家族写真、グレタ・ガルボやルイーズ・ブルックスのポートレート、テーブルの下に積まれた革命思想の論文、二時五分前で停まったままの年代物の柱時計、窓の下に置かれた小さな水槽。スペイン娘たちは気ままに生きている。ありとあらゆるたぐいの連中が、部屋にやって来てはまた出ていく。喋るだけ喋って帰っていく奴ら、精神病院から外出許可をもらって出てきた昔の恋人たち、哲学者の卵、ヌードの自画像を撮るオランダ人の女写真家、ブリュッセルから来たバーテン、そしてボイラーを修繕に来るたびにフランスのシャンペンを持ってくる配管工。直った祝いにベッシー・スミスのレコードを聴きながら乾杯しようというのだ。奴らはみんな同時にべらべら喋りまくり、ロースト・ラビットを食い、一時間ばかりうとうとし、目を覚ますとさっき喋っていたセンテンスのつづきからもう一度喋り出して、とっくに誰かが引きついでしまっている会話を終える。連中はすさまじい剣幕で言い争い、おれの目の前で自分たちの人生を組み立て直す。連中の頭にはおそろしく奇妙な考えがぎっしり詰まっている。一人残らず全員が煙草を喫い、その灰はいつも長さ十センチほどに達し、やがてぽとんと床に落ちる。連中はそれをカーペットにごしごしすり込む。世界は彼らの灰皿なのだ。実際のところ、街全体がじきにくすんだ色を帯びはじめ、空までが冷えた燃えさしの色になってゆく。

CamScannerでスキャン

彼らの大半は自分のことをトロツキストの無法者と考えている。彼らはさまざまな手段で食いつないでいる。三人のスペイン娘は毎日おれに、警官や税務署員や電気・ガスの検針員についてこまごまと指示を与える。そういう連中がドアをノックして、偽造書類やら税金の滞納やら料金を抑えるために細工したメーターやらについてあれこれ質問していくのだ。このアパートは大勢のいかがわしい人間のための中継地点といった感がある。たぶんおれもそういう人間の一人ということになるのだろう。おれが転がりこむ前には、ホモセクシャルの男が一人居候していた。そいつは二か月ばかり前にウィーンのホモセクシャル向けの新聞に広告を依頼した。広告が出たとき男はもういなくなっていた。かくしておれは毎日たくさんの手紙や電報や秘密の暗号を受け取る。廊下で面接のごときものを受けることもある。うっとうしい感じの男の声がこんにちはとささやき、しゃがれ声であれこれ約束したり涙声で非難したりする。ティエリー？　と彼らは呼びかける。ティエリーはもうここに住んでませんよ、とおれは答える。相手はしばし沈黙し、それから姿を消すか、もしくは構わず言いたいだけのことを言い残して帰っていく。お願い、お願い、と彼らはうめくように言い、ドアをごりごり引っかく。要するにこいつらはみんな頭のネジが一本外れているのだ。おれはうぶで禁欲的な人間だと思われている。部屋に誰かが入ってくるたびに三秒以内にそいつとファックしないからだ。おれとしても、この場の人口がインド並みじゃなかったらもう少し抑圧を解いてもいいかなとは思うのだが。連中はおれが作家だということを知っているが、具体的にどういうものを書いているかまでは知らない。知ったらたぶん面白がるだろうが、確かなことは何とも言えない。プロレタリアートの反逆者にしては、連中はずいぶん洗練されている。最高の食べ物を食い、

最高の酒を飲み、高価な美術品を買う。市電に乗っているところを見られるくらいなら死んだ方がましだと思っている。まったくのところ、革命家が群れをなしてタクシーに乗って、ウィーンの街を走り回る姿ほど奇怪な光景もちょっとない。まあもちろん、両腕一杯に春本を抱えたクローネヘルムとペーターがアパートメントの中を行進する姿もいい勝負だが。

一週間後、おれはペーターに伝言を送る。金曜の午後にカールスプラッツの北東の角に来られたし。新作を渡す。ただしクローネヘルムは連れて来ぬこと。金曜日の午後、ペーターはクローネヘルムを連れてやって来る。クローネヘルムは全身をすっぽり包み込むような巨大なコートを着て、帽子をかぶり、黒眼鏡をかけている。これだけ輪郭のはっきりした、劇的なコスチュームにくるまっていると、奴の肉体はいつにもましてかたちが定まらなく見える。それに戸外でこいつを見るのも初めてだが、誓ってもいい、奴の体を日光が貫通するのがおれには見える。こっちがまだろくに近づきもしないうちから、奴はもう泣き言を言いはじめている。「お願いです」。「ああ、バニング、お願いです」そう言って奴はかたちの定まらぬすすり泣きを発する。ペーターは憎悪の念を目にみなぎらせている。彼の師を見捨てたおれに対する憎悪、おれに見捨てられたことを悲しんでいる師に対する憎悪。「めそめそするのはよせ」とおれはきつい口調で言う。「やめないんなら、俺はいまここを立ち去る。そして二度と、絶対に二度とあんたに会わない」。クローネヘルムは顔を両手に埋めている。おれは原稿をペーターの腕の中に押し込む。「ビジネスはまだつづいているんだぜ」とおれは言うが、もう優しい口をきいてやる気にもなれない。こいつらにはほとほとうんざりしているのだ。だいたいおれだって、ほかに何ができる? 動こうにも動きようがない。アメリ

かに戻るわけにも行かないし、ほかにこれほど割りのいい商売もまずあるまい。おれとしても書くしかないのだ。「一週間したらまた出来上がる。そしたら連絡する」とおれは言い捨て、二人を残してそそくさと歩き去る。おれはひどく恐れている。いまにも一人の未形成の人間がおれの足首にすがりついてくるんじゃないか、裸になったそいつを引きずってカールスプラッツを歩く破目になるんじゃないかと。おれは歩きつづけ、少なくとも角を四つ曲がるまでふり向きもしない。それから方向転換してカフェ・セントラルに引き返し、ペンと紙を前に夜の十時までそこに座り、アマンダとモリーが来るのを待つ。いくら待っても二人は来ない。

53

アマンダとモリーはおれにとって単なる知りあいになってしまう。二人はしょっちゅうおれに待ちぼうけを食わせ、おれには何も言わずによそで危険なアバンチュールを楽しんでいる。おれたちの関係はだんだんぎくしゃくしてくる。以前なら二人が必要なときには、呼べばすぐ来たのに、いまはもう駄目だ。おれはもう彼女たちと一緒に笑いはしない。もっともクローネヘルムは何も気づいていないみたいだ。奴にとっては依頼人Xさえ満足して下さればあとはどうでもいいのだ。気狂いじみた連中が出入りする気狂いじみたこのアパートメントにスペイン娘たちと一緒に住んでいることも、執筆にはプラスに働かない。アマンダとモリーはそういう連中と一緒に過ごすことを好まないのだ。いまは一九三七年の夏。スペインからのニュースが暗い影を投げる。六か月のあいだに原稿料もいくらか貯まったし、おれはここを出て自分の部屋を借りることにする。一緒に住ま

CamScannerでスキャン

ないか、とカールに持ちかけるが、カールは苛立たしげな表情を浮かべるだけだ。僕はじきここ街を出にゃならんのだよ。ユダヤ人がここにとどまるわけには行かないんだ。カールは何度も、僕はそろそろウィーンを出た方がいいと思うかい、とおれに訊く。おれはそのたびに嘘をつく。でもやがて嘘も限界に達してくる。ようやく例の金も一部イタリアから届いた。いよいよ街を出る段になって、足りなければ残りはおれが出してやるつもりだ。この頃では一日置きに街のどこかで爆弾騒ぎが起きている。カフェにたむろする人々は、現在の首相が何日の何時に前任者と同じ運命を迎えるかをめぐって賭けをする。その前任者というのは、三年前の夏に、首相室で黒ブーツの連中に首を撃ち飛ばされたのだ。今度同じことが起きれば、ドイツ人がやって来るだろう。それについてウィーンの連中はさほど気にしていないようだ。むしろそうした事態を想像してわくわくしている節（ふし）さえある。おれにとっては、爆弾騒ぎもだんだん退屈になってきた。単なる気晴らしといったところだ。政治なんて何がどうなろうとおれとしてはまるっきりどうでもいい。ウィーン市民全員がこの惑星から吹き飛ばされようと、おれの知ったことじゃない。だが娘たちが怖がって寄りつかないのは困る。そう、アマンダとモリーの後釜（あとがま）となるべき娘たちだ。おれは旧市街から市電で十五分くらいの、どこか静かな一画に部屋を捜す。やがて、長ったらしい、大ざっぱに訳すと「犬たちの嵐」となる名前の通りにアパートが見つかる。小さな一部屋だけの、共用のトイレが廊下にあるアパートだ。二つの大きな窓が表通りに面し、三階分隔てた眼下に街並が見える。ここ犬嵐横丁で一人禁欲生活を送っていると、娘たちがドアをノックするのが聞こえるようになる。時にはおれが外から帰ってくると彼女たちが待っていることもある。はじめ娘たちの姿はいま一つはっきり見え

ないが、じきにだんだんと近寄ってくるようになる。彼女たちの境遇についておれは何も知らないし、知りたいとも思わない。名前はローレンとジーニン、ジャネットとキャサリンとリー。みんなおれの望み通りのことをしてくれる。これでいい。アマンダやモリーみたいにわがままを言ったりもしない。新たなチーム全員を、おれは自分の好み通りに一から調教する。過去の過ちをくり返しはしない。窓の外には浮浪者たちがいる。奴らは別にローレンやキャサリンに興味があるわけではない。だが、あの最初の日の夜明けに連中とシュテファン聖堂からよたよたと表に出て以来、おれはあらゆる場所でこいつらを目にしてきた気がする。爆弾からは逃れられても、浮浪者から逃れることはできない。浮浪者や乞食がウィーンじゅうを走り、跳ね、這い、暴れ回る。脚をなくした奴、目が見えない奴、顔が無残に崩れた奴、奴らはみな諸国を渡り歩く国際人である。それがみんなこの花の都に流れついてきたわけだ。何とも悪趣味な、きつい冗談ではないか。爆弾の閃光に照らされて、連中一人ひとりの痙攣（けいれん）やチックを人は見ずにはいられない。ウィーンの中でも一番ハイカラな社交の場で、連中は畸型の肉体をその華やかな光にさらし、暖めているのだ。街全体がそういう人間たちであふれ返っている。奴らとしてはせいぜい、次に誰かに蹴飛ばされるときには、その靴が柔らかいことを祈るしかない。おれは窓から外を見る。連中はそこらじゅうにいる。大した機動力だ。襤褸（ぼろ）をまとった女たち、眼のない乞食たち、自分の尻の下の水たまり以外生きている証しを何ひとつ持たぬ男たち、箱に入った連中。環状道路は隅から隅まで流れ者、宿無し、悪臭ふんぷんたる輩（やから）で一杯だ。彼らは街路を綿密に実地調査し、退却のルートをすべて切断した上で、おれを待ち伏せている。他人に一シリングを乞う度胸なんておれにはない。そういう恥知

CamScannerでスキャン

らずの行為をするには、おれ程度の勇気ではとても足りない。乞食をするくらいなら、おれはきっと盗みをするだろう。あてもなく物乞いをするというのは、いわばおのれの人間性に向けてのあまりに急激な一歩である。おれにはとてもそこまで行けない。おれはそれを自覚している。そしてこの連中はおれが自覚していることを知っている。だから奴らはおれに付きまとう。部屋を出るたび、おれはまずあたりを見回し、誰かがちっぽけな車輪を転がしこっちへやって来ないことを確認せねばならない。おれにはわかっている。ある朝おれが犬嵐横丁に出ると、連中はそこにいるだろう。人間の残骸の大群がおれの足元に押し寄せてくるだろう。言うまでもなく、この問題を解決する道は二つしかない。ひとつは時間である。この街に長いこと暮らしていれば、いずれは心の痛みを止めるすべを覚えるだろう。有難いことにこの過程はすぐにはじまっているみたいだ。有難いことに、まったく何も感じずに浮浪者たちの前を通り過ぎることが、おれはだんだん得意になってきている。まあ時には、ふと弱気になったときなど、これほどみじめな人間の標本もないというくらい絶望的にみじめな奴に向けて、ついつい同情の表情を浮かべてしまうこともある。だがキャサリンなりローレンなりと楽しい一夜を過ごしたあとには、おれの冷酷さも強化されている。ここしばらくは、前のような腹の底からの馬鹿笑いこそしていないが、ちょっとしたくすくす笑いくらいはできるようになった。部屋の窓を開け、四つ角の果物屋台のゴミに埋もれて眠る体の麻痺した子供を見て、からからと笑うこともできる。化け物どもとの葛藤を解決するもう一つの道は、ある事実を認識することだ。ドナウ川に沿って、夜と壊疽とに浸された、夢のごとき波止場のかたわらを歩きながら、おれははたと認識する。かつてまさにこの街を、まさにこの浮浪者たちに混じって、世

界でもっとも邪悪な男がさまよい歩いていたことを。二十五年前、男はこれらの街並を、これらの浮浪者や乞食や不具者たちとともに歩き回り、おのれの悪が排泄する汚物を喰らって生き、カールスプラッツに腰を下ろしては聖堂を模したみじめったらしい絵を描いていた。そして世界もまた、おのれの悪が排泄する汚物を喰らって生きていた。世界は男の中に同胞を見出した。いまや男はベルリンにおいて一大スポーツ祭典を開き、いくつもの都市を築き上げている。男は新たなる千年王国の建設を企てている。彼の悪は、子供を一呑みで喰らいつくしてしまう悪ではない。まずはじめに子犬のようにその手を舐め、それからじきもぞもぞと噛みはじめ、あわてふためく子供をなおも執拗に噛みつづける悪なのだ。そして今度は世界が彼の手から血を舐める番だ。彼はもうすぐこの浮浪者たちのもとに戻ってくるだろう。あるいは来年、あるいは来月、あるいは来週に。みずからの青春の日々を見に戻ってきて、それを喰らいつくすことだろう。黒ブーツをはいた彼の手下たちがすでにその作業を開始している。彼らは街並をくまなく歩き、彼らの指導者の青春の日々を砂粒とどぶ屑とに擦りつぶして、彼と彼の悪とを生んだ始源的時間の形跡がいっさい残らぬよう手を尽くしている。ウィーンの浮浪者を目にするとき、おれはその一人ひとりの中に二人の男を見る。一人は総統、一人はおれだ。おれは毎日、キャサリンなりローレンなりその折々で気の向いた相手を連れてウィーンの街を歩き、家に帰ったらみんなで何をしようかと思案する。遅かれ早かれおれは、黒ブーツの若僧たちがどこかの哀れな人間の残骸を痛めつけている場に行きあたる。その残骸もまた、神の宇宙においてここにもう一匹の獣（けだもの）が放たれ、恍惚に包まれて許しがたく生きていることの動かぬ証拠なのだ。獣はすべて抹殺せねばならない。みずからをドイツと呼ぶあの肥溜め（こえだめ）から

CamScannerでスキャン

世界を支配せんと意図する、あの獣以外はすべて。そしてそんなある日の午後、ウィーンに着いた夜に歩いた環状道路の一角からさして離れていないあたりで、連中が蠟燭店の外で年寄りのユダヤ人を叩きのめしているとき、おれはふと目を上げる。そして通りの上の部屋の窓辺に、おれを見つめているお前の姿を見るのだ。

54

お前はおれを覚えているはずだ。何といってもこれは二十世紀がまっ二つに切り裂かれる瞬間なのだ。この一見何の変哲もないある日の午後、お前は窓から身を乗り出し、その下では男たちが歴史の無数の破片のひとつの中で小ぜりあいをくり広げている。略奪された哀れな犠牲者を救いに、何人かの仲間が現われる。浮浪者たちの小隊。この街で初めて目にする、黒ブーツの若僧たちに対する抵抗だ。浮浪者の戦争。あたかもそれが窓辺にいるお前を楽しませるための闘いであるかのように。あたかも歴史が這いつくばり蛮行を行ない血を流すのもすべてお前の顔のためであるかのように。おれはお前の美しさを思い出せない。おれはお前の美しさの記憶を思い出す。だがそれが同じではないことはお前もおれも知っている、なぜならおれの記憶がお前を美しくしたからだ。そこにいる浮浪者たちもお前のことを美しいと思っているかどうか、おれには見当もつかない。奴らはいままでキャサリンやローレンにはさして関心を示さなかった。そして彼女たちはもっと美しい。もっとずっと美しい。そう、もしかしたらお前は砂のように不器量なのかもしれない。お前の長い髪は鉄錆のようにみっともなくくすんだ黄色かもしれないし、お前の瞳は泥みたいにありふ

れた茶色かもしれない。お前の顎はごくごく月並みなカーブでしかないかもしれない。目の前の情景に対し、お前は何も言わない。だがお前の顔はすべてを語っている。黒ブーツの奴らに対する軽蔑。いばりくさった奴ら、歴史を我がものと思い込んでいる奴らに対する嫌悪。奴らはあたかも、歴史とは首輪をつけられ電柱につながれた犬であるかのようにふるまう。浮浪者たちは歴史を持っていない。歴史を知りもしない。奴らは歴史に恐れ入ったりはしない。そしてお前は顔を上げ、通りの向かい側に目を上げる。おれの目がお前の目と出会う。おれたちがたがいの視線をたどるなか、おれは歴史の破片の前を通り過ぎる。なのにお前は覚えていないと言う。おれには信じられない。五十年経ったいま、おれはそれを信じない。お前を見た瞬間がおれに取り憑き、おれを束縛するというのに。おれには信じられない。ひとつの世紀を縦一直線に切り裂いた、この傲然(ごうぜん)たる、そしておそらくは美しくない瞬間が、お前の世紀がさらに五分と経過しないうちにお前の記憶から消え去ってしまったなんて。

彼らは通りで好き放題に暴れている。蠟燭店の窓が粉々に砕け散り、蠟燭が窓枠から転げ落ちる。と、誰かが投げた石がお前に当たる。すべてが静止したように思える瞬間が生じる。そしてそのすきに、乞食たちは年寄りのユダヤ人を騒動から救い出し、通りをずるずる引きずっていく。黒ブーツの若者たちは得意満面勝ち誇った顔をしている。彼らは去ってゆく乞食たちの方になおも石を投げるが、連中をもう一度戦う気にさせるほど本気で投げはしない。彼らとしてもこれでもう十分なのだ。しばらくのあいだ彼らはその場にとどまり、勝利を祝してユダヤ民族およびドイツ帝国をめぐる一般論を弁じ立てる。石が当たるやいなや、窓辺のお前はさっと横を向き、片手を上げて

顔をそむける。お前が横を向いた瞬間、お前の血が見えたことをおれはほとんど確信する。お前のけものか、石がお前の皮膚を切り開いたところが見えたことを。我々はそれ以上たがいを見はしない。相互に向けられた我々の視線はその傷の中に失われ、傷の血によって洗い流されてしまう。もしかしたらあの瞬間そのものも洗い流されてしまうのかもしれない。お前は横を向き、それっきりふり返らずに——少しでもいい、もう一度ふり返ってくれたら——窓辺から姿を消し、窓をぴしゃりと閉める。若僧たちは歌い、浮かれ騒いでいる。おれは連中がいなくなるまで通りにとどまっているだろう。傷を洗い終えたお前が戻ってきてまた窓辺に立つのを、あるいは玄関まで降りてきてドアを開けるのを待って。でなければおれは自分から玄関に行きドアをノックするだろう。おれは待つだろう。いまや黒ブーツ以外でそこに残っているのはおれ一人だ。奴らはすっかり興奮し、拳をふりあげ歌を歌いながら歩きまわっている。と、通りのずっと向こうの方に、次第に歩みを緩め、やがて立ちどまる人影が見える。カールだ。カールがあそこにいる。カールは立ちどまり、おれはカールを見る。彼がおれに気づくのをおれは待つ。それからおれはくるっと背を向けて歩き去る。おれは知っている。カールもおれと同じことをしたことを。

55

そのとき、おれが部屋に戻ると、部屋はもぬけの殻である。ローレンにジーニン、キャサリンにジャネットにリー、誰一人いなくなっている。みんなわかってくれているのだ、彼女たちがここにいることをおれがもはや望んでいないのを。おれは明かりが我慢できない。おれは暗闇が我慢で

きない。血よりも酔った何ものかがおれの体内を駆けめぐる。おれはベッドでシーツのあいだにぴったりはさまれている。窓の外で、爆弾とパレードの光が夜をかき消す。光が弱まり、おれは眠りにつく。そして一時間後に目を覚まし、暗い部屋の中で身を起こす。見れば灰色のハンガリーの月はいまや空から落ち、川を渡ってここにやって来ている。円環をなす街路を越え、運河の水辺を上って犬嵐横丁にたどり着き、いまこの瞬間におれの部屋の窓のすぐ向こうにぶら下がっている。月はまるで、低い枝から垂れた、ぱっくり割れたできそこないの果物みたいに見える。おれには見えない場所から、月は部屋の左隅に影を投げている。そしてその影の中でドアが開く。そしてそのドアにお前がいる。おれたちはほんの子供だ。おれは二十歳。お前の胸は十五歳、お前の脚は二十五歳、お前の眼と陰部には年齢がなく老いてもいないし生まれてもいない。お前はすでに、お前そのものから、おれが覚えているお前に変わりはじめている。お前は月が影を投げる戸口から歩み出る。お前の顔が四分の一だけ光の中に入る。おれは見る。お前の子宮からぐるぐる円を描きながら、濡れた長い蔓(つる)が陰毛の丘を抜けて伸びてくるのを。臍(へそ)の緒の蔦(つた)、それがお前に先行して出てくる。それはお前の前を進み、我々を隔てる空間を横断してベッドの側面に行きつく。そしておれの足首に巻きついて、じわじわ脚を上っておれの腰をぐるりと囲み、おれの勃起を縛りつける。犬嵐横丁が青い馬車に軋む。白いロバたちのひづめの音が聞こえる。湖を失くした白鳥たちは家々の壁に体を打ちつけて死ぬ。月の体液が窓を流れ落ちる。東の丘の向こうから大草原の芳香が匂ってくる。お前の中心からくるくる伸びておれを捉える濡れた長い蔓の先端には、花弁を落とすはしからまた新たな花弁を生み出す一輪の黒い花がある。ベッドはまたたく間に黒い花弁に覆いつくさ

CamScannerでスキャン

れる。べとべとに湿った花弁をおれは自分の太腿から引きはがす。おれはお前が処女であることを知っている。当然そうだと思っていた。でもお前がこんなふうにベッドにやって来て、崩れ落ちる花の濡れた黒い茂みの上にピンクの肉体を横たえるなんて予想もしていなかった。おれにはすでに聞こえる。いまから五十年後、あの中国人の島でお前がつく嘘の一言一言が。一言一言、はっきりと、スラブの鐘楼（しょうろう）の歌にもかき消されることなく聞こえてくる。お前が黒い花を口一杯に詰め込もうとも、おれを否定するお前の偽りを黙らせることはできない。花はいつまでも生長をやめない。おれはお前の両の手首をつかみ、おれの方を向かせようとお前の体を揺すぶる。と、まるで電流の通った電線を握ったような感触。お前の冷たい電圧に、おれは声も出ない。手を離したくても離せない。おれの指を引きはがせるのはお前自身の指だけなのだ。そうしながらお前は微笑む。やがておれは目を覚ます。ベッドは黒い花の露にぐっしょり濡れている。蔓はお前の内部に戻っている。おれの両脚にその跡が残っているばかりだ。お前は灰色のハンガリーの月のドアの中に戻って、後ろ手にそれを閉めていったのだ。おれはふたたび眠りに落ち、目覚めたときにはお前の湿り気がおれをすっぽり包んでいる。日光を浴びた机の上に、お前がここにいたことを記録するこれらのページがある。

56

おれはお前を奴らに売る。あたかもお前の足首に鎖をつけ、ケルントナー通りにそってロープで引きずっていくみたいにして、おれはお前を奴らに売る。いつもの値段で。どうやらペーターは何

たかクリーネヘルムを説き伏せてきたらしい。約束の時間と場所に、翻訳者は一人で待っている。奴らにはお前の値打ちがわからない。お前は奴らが払う金なんかよりずっと値打ちがあるのだ。次の待ちあわせのとき、ペーターは文句さえ言う。「ヘア・クローネヘルムか」と彼は冷ややかに言う。「前回の最後の章は不十分だとのことです。それはあまりに……」彼は言葉を捜している。「曖昧なのです」

「文句があったら別のパートナーを見つけりゃよかろう」とおれは答え、金を受け取りその場を立ち去る。

このあいだおれは、お前の住む通りをもう一度捜しに出かけた。リングの端、おれが七週間暮らした通りからさして遠くないところだ。おれは道から道を歩き、蠟燭店を捜した。地図を吟味し、その一角の住民に訊ねてまわった。実際、大して広い一角ではない。通りの数だってそんなに多くないし、蠟燭店の数だって知れたものだ。でも店は見つからなかった。お前が住む通りも見つからなかった。もしかしたらおれは、本当にお前を鎖でつないでロープで引きずりまわしているのだろうか？　それともおれは、お前がよその場所へ逃れるための通用門、影のドアにすぎなかったのか？

だがお前は毎晩おれのもとに戻ってくる。ほかにどこへ行こうとも、お前はおれのところにやって来る。そしておれたちが夜を終えると、おれはそれを売る。奴らが払う高値から察するに、きっとおれはお前を愛しているのだ。

CamScannerでスキャン

57

夏が終わると、カールはとうとうウィーンを出る。スペイン娘との仲も最近はあまり上手く行っていなかったし、おれからも早くここを出た方がいいとせっつかれていたのだ。ここは彼には危険な街になってしまった。いまとなってはイタリア行きも賢明とは言いがたい。そこで彼は夜行列車でパリに戻る。いくらドイツ人どもだって、さすがにパリを占領しやしないだろう? おれはスペイン娘と一緒に西駅までカールを見送りに行く。カールと握手し、彼の乗った列車が消えていくのを見守る。

スペイン娘は神妙な顔をしている。彼女は今晩、もう一人のスペイン娘がつき合っているスコットランド人からディナーに呼ばれている。あらゆる言語を話す彼女のエスコートはたったいま汽車に乗って彼方へ消えてしまった。かくして彼女は、下手糞な英語で、一緒に来てくれとおれに頼み込む。ちょっとのあいだでいいから、と。カールに対しておれにそういう義理があるかどうかはわからない。少なくともこの娘に対して義理なんかないことは確かだ。駅の窓から見る街が、散乱する炎とガラスで燃え上がる。あたかも無数のシャンデリアが空から街路に落下したかのように。

我々はタクシーに乗って、ブルクリングの、博物館の並ぶ一帯の裏手まで行く。この界隈に家を持っているということは金がうなるほどある証拠だ。我々はその家の階段を上って二階へ行く。すでに四、五人先客が来ている。みんな若くて金持ちで美男美女である。オーストリア人は一人もいないらしく、大半はドイツ人。窓からはフォルクス公園の黒くべっとり湿った木々が、西の空に残

る陽の光を背にそよいでいるのが見える。ドアのところに、着古したくしゃくしゃの服を着て、三日前からの無精髭を生やした男が立ち、スコッチを壜からラッパ飲みしている。浮浪者が一人迷い込んだらしい、とおれは考える。ドイツ人の客たちはいずれこいつを鞭打つのだろうか。何しろこいつだけは、おれと同じくらいむさ苦しい身なりなのだ。やがて、この男がこの家の持ち主であることが判明する。

一方のスペイン娘はカールを想ってふさぎ込み――夏の後半ずっと、あんな人なんか愛しちゃいないわと言いつづけてきたのに――もう一人のスペイン娘はドアのところに立ったこのルンペンみたいな奴と結婚しようと目論んでいる。みんなでディナーに出かける段になって、一緒に来なさいよ、と娘たちはおれを誘う。こっちは金もないし、こんな連中と話が合うわけもないのだが、とにかくみんなで二台のタクシーに乗り込み出発することになる。歩いたって六分もあれば着くあたりにある高級アパートメントの前で車は止まる。我々はエレベーターに乗る。エレベーターを降りると、そこはニューヨークのドギー・ハンクスのクラブなど足元にも及ばぬ豪華な続き部屋（スイート）である。旧市街に面した、十八世紀のアパートメント。女主人は若くて美しい。手首を痛めたらしく、小粋な吊り包帯で片手を胸の下あたりに吊している。女は優雅そのものの物腰で客一人ひとりに挨拶するが、おれの番が来るとちょっと不思議そうな顔をする。この人はアメリカ人なんですよ、と誰かがそっと彼女に耳打ちする。

おれに唯一できることは、バーに行って何か飲むことだけだ。それからオードブルのテーブルに行って、そこにある食べ物を半分くらい平らげる。これこそおれに期待されているふるまいなの

だ。いまや二十人か、三十人くらいに達した客たちは、感嘆の眼でおれを見ている。みんなおれのことをジェロニモの直系の子孫だと思っている。テーブルの前にぽっちゃりしたイギリス人の娘が一人立っている。身の丈は一メートル四十といったところ。娘の体はおよそ十五センチばかりの服に押し込まれている。腰は華奢（きゃしゃ）で細く、そこから発して残りの部分がふんわり丸く広がっている。悪くない眺めだ。髪は燃えるような赤毛、おれのよりも赤い。顔にはそばかすがある。「よく食べるのね」と彼女はおれをじっと見つめて言う。おれは部屋から部屋をぶらぶら眺めてまわり、窓を開け、他人のグラスの酒を片っぱしから飲み干す。やがてまた場所を変えようということになって、みんなで半ダースのタクシーに乗り込んで環状道路を下っていく。そしてホーフブルク宮のそばの暗い裏道に着く。そこから先は車が入れないので、タクシーを降りて旧市街の中心近くまでぞろぞろ歩いていく。行先はストリッパーや娼婦たちが住む薄暗い通りである。行きついた建物は倉庫みたいに見える。窓は一つもなく、ドアが一つあるだけ。ドアが開き、暗がりの中で誰かが何かごそごそ言い、我々は中に入る。

ここはウィーン一エレガントなナイトクラブである。おれの経験から判断する限り、世界一と言ってもいいかもしれない。これに較べればトップ・ドッグなぞ月とスッポンだ。クラブの中は何もかもが深い青色である。自分を見なくても済む金持ち連中には一番人気のある色だ。ドイツ人の一人がおれに、ここはヨーロッパ一高級な会員制クラブなのだと教えてくれる。おれはバーボンのダブルを注文する。オン・ザ・ロック、水はなし。と、おれの持っているはした金なんかここでは何の役にも立たないことに思いあたる。メニューには値段が書かれていない。でもおれは招待客

じゃないか、と開き直ることにする。二人のスペイン娘はテーブルをはさんでおれと向かいあわせに座る。例のスコットランド人も一緒だ。さすがに酒場はどこかに置いてきたらしい。おれはそいつと話をはじめる。話してみると案外悪い奴ではない。もっとも訛りがひどく、何を言っているのかはよくわからない。おれの右側にはオランダ人の金髪美人がいる。左側にはさっきの豊満で赤毛のそばかすイギリス娘がいる。みんなわいわい喋りまくり、何もかもがすごく上手く行っている。いまやテーブルに座った連中はみんな、おれのことをこの部屋一番の金持ちだと思い込んでいる。話も服装もふるまいも無茶苦茶、何がどうなろうと知ったことかという顔で平然と社交界を歩きまわれるからには、さぞかし大金持ちにちがいない、ということらしい。きっとアメリカのフロンティアで綿花か石油かで一財産築いたんだわ。そしてクローケーのボールでもよけるみたいに、大恐慌の荒波からもあっさり身をかわしてきたのよ、と。彼らはこう結論を下す。この人はもうくさるほど金があって、たぶんこのクラブの常連でもあるのだと。ここの料理は何がいいでしょうかね、とおれに助言を求める奴まで出てくる。おれは指でメニューを適当に指さして、これがいいあれがいいと出まかせを並べ、訳知り顔のウィンクを相手に送る。ほどなくして、おれはワインとチーズの注文までやってのける。ウェイターを大声で呼び、シャトー何とかの一八九六年物をもう一本注文する。みんなすごくいい気分になっている。彼らはたがいに言いあっている。ヤンキー連中って見かけは大したことないけど、なかなかどうして洗練されてるじゃないか、と。スペイン娘たちは周囲の話題などどこ吹く風で、スコットランド人だカールだとべらべらべらべら喋りまくっている。カールも運さえよければいま頃はもうスイスだろう。だがただ一人、おれをじっと見つ

め、全然だまされていない様子の人物がいる。おれの隣に座った小さなイギリス産プディングである。娘は誰よりも愉快そうな顔で、訳知り顔のウィンクを、もっぱらおれに向けて送る。
晩は深まってゆく。豪華な食事が出るが、おれは恐れ入った顔をしないよう気をつける。裏ごし人参をさりげなく、だが誤解の余地なく批判し、ブランデー・ムースを口にしたときも小馬鹿にしたような顔をしてみせる。ただ一つ気になるのは、ほかのテーブルにいる客たちのことだ。男がやたら多いのだ。もちろんおれたちの一行には女もいるのだが、ほかはどうやら全部男同士のカップルらしく、小さなテーブルに仲むつまじく座っている。流れてくる声に耳を澄ましていると、明らかに聞き覚えのある声がいくつか混じっている。じきにおれはその全部に聞き覚えがあることを確信する。ついこのあいだまで、スペイン娘たちのアパートに居候していたとき、おれはドアの外でこいつら全員と言葉を交わしたのだ。おれはこの事実を無視することに決める。またたく間に食事が終わり、おれはコニャックを味わいながら隣のオランダ人の金髪女と話している。と、隣の隣に座ったドイツ人の姿がおれの目に入る。そいつはぺちゃくちゃ喋りながら数字をあれこれ足したり割ったりしている。見れば手には勘定書を持っているではないか。ちょうどそのとき、下の階のダンスホールを見てみたいわ、とスペイン娘たちが言い出す。そいつはいい、いますぐ行こう、とおれは機を逃さず言う。我々はダンスホールに降りていく。スペイン娘たちはじきいなくなる。勘定書の計算が終わるのを待って、おれはしばらくそこでぶらぶらする。と、男が一人おれのところに寄ってきて、おれをダンスに誘う。は？　とおれは言う。男はもう一度おれを誘い、おれは首を横に振る。ええと、駄目です、駄目です、残念ですが。するとまた別の男が寄ってきて、そいつ

もおれをダンスに誘う。ほどなく二人はどっちがおれと踊るかをめぐって口論をやり出す。おれは全速力で上の階に駆け戻り、元のテーブルを目ざす。ところがそこではまだみんながシリング札を引っぱり出している最中である。そこでまた下の階に避難すると、二人の男は依然ぎゃあぎゃあ言いあっている。その上、連中の声を聞けば聞くほど、聞き覚えがある声のように思えてくる。じきにおれは、少なくとも二人のうち一人は何か月か前にアパートのドアの外でおれを相手に長広舌をふるった奴にちがいないと確信するに至る。ここであまり喋ると、おれがかのティエリーであることがばれてしまうだろう。捉えがたき欲望の対象、新聞に広告を出し戯れに男たちの気を惹くつれないティエリー!。おれは上の階に取ってかえし、悠然と元のテーブルの元の席に戻る。どうやら計算も済んだらしい。金はすでに勘定書とともにトレーの上に載っている。もう誰も支払いのことなど気にしていないようだ。あのけちな大金持ちのアメ公はどこだ、金も払わず逃げやがって、などと言いながらあたりを見回してる奴もいない。やれやれ。おれはゆったりと腰を下ろし、会話が地中海の波のように自分の上を洗っていくに任せている。と、さっき計算係をやっていた隣の隣のドイツ人がトレーをおれに渡し、氷のように冷ややかな口調で言う。「失礼ですが、もう一度お席を離れられる前に、御自分と御婦人の分のお支払いをなさりたいかと存じまして」

　御自分と御婦人の分?　いったいどの御婦人だ?　スペイン娘のどちらかのことか?　おれのことをたかり呼ばわりするのはまあ許せる。事実まるっきりのたかりなんだから。だが御婦人の責任まで押しつけるとなると話は別だ。実際奴もまずい科白を口走ったものだ。御婦人という一言が出るまでは、こっちはぐうの音も出なかったのに。「気にするなって、ヴィルフリート」とおれ

は言って、効果を高めるため椅子から立ち上がる。「あんた、もうちょっとほかにも考えることがあるんじゃないのかね？　表に出りゃユダヤの老いぼれが一人や二人はいるだろうが、あんたと黒ブーツの連中とでとっちめてやったらどうだ？　それによたよた足を引きずって歩いてるジプシー女もいるぜ、いっちょう可愛がってやったらどうだい、ぷんぷん匂う茶色のドイツ産精液をぶち込んでやれよ」。部屋はしんと静まり返る。これでいい。この瞬間、おれは完璧にいい気分である。もっと早くこうすべきだったのだ。この瞬間、おれはほぼ確信する。自分がじきまた誰かを殺すだろうということを。もうずいぶん長いこと、あまりに長いこと人を殺していない気がする。この阿呆なぞは実に手頃である。この八か月のあいだおれが見てきたドイツの糞ったれを全部合わせたみたいな奴だ。いっちょう叩き潰して、肥料にでもしてやろう。もっともその前に、こいつの排泄する小さな白い蛆虫（うじむし）どもがあらかた喰いつくしちまうだろうが。男の顔はまさに白い蛆虫そのものの色だ。虫どもの小さな頭が、魂のない小便色の目からもぞもぞはみ出しているのが見える。「いいかよく聞け、ハインツリー」とおれは言う。「その勘定書をだな、お前の国の宣伝大臣に送ってやりな。ほらあの、馬肉みたいな足のチビ助のことよ。いいかい、あいつは俺の依頼人なんだ。あいつは俺のために働いているんだよ。それでだな、俺からの伝言だと言ってあいつにこう伝えろ——どうかこの男にたんまりチップをはずんでやって下さい、何しろこいつはウィーンじゅうのケツの穴を舐めてまわってるんですから。実際俺も八か月この街に住んだけど、お前らときたら古きよきウィーンの灯（ともしび）なんてものはすっかり吹き消しちまったんだからな。きっとチップをはずんでもらえるぜ。あいつはな、俺が飛び上がれって言ったら喜んで飛び上がる奴なんだ」指をぱちんと鳴ら

しながらおれは言う。「確かにあいつはお前らの宣伝を書いてる。だがあいつの宣伝を書いてるのはこの俺なんだ。あいつはそれを片手で読んで、もう片っぽの手でせがれを引っぱり出して、ベルリンじゅうべとべとにしちまうんだよ」。男の目の中の白い蛆虫たちは、もういまではほとんど尻尾で立って踊っている。おれはそれをじっと睨みつけ、あくまで目をそらさない。部屋にいるほかの男たちが立ち上がり出したのがうすうす感じられる。たぶんみんなドイツ人だろう。そして奴らは、おれがかのティエリーであることを、奴らみんなを満たされぬ渇望に迷い込ませた謎の情熱の使者ティエリーであることをいまや確信している。だからおれに対する奴らの憎悪も、いっそう募るばかりなのだ。

「ちょっと、そこの人」と誰かがおれの後ろで言うのが聞こえる。ふり返らずともわかる。あの赤毛のイギリス娘だ。もっとも娘がおれたちのどっちに話しかけているのかはよくわからない。だがどうやらドイツ男の方らしい。というのも娘は、おれのかたわら、おれの視界の端っこに歩み出てきてこう言うからだ。「この方は私のお客様です。今晩はここに来れば、この方にウィーン流の歓待をお見せできるものと思っていました。明らかに私の勘違いでした。でもウィーンの人たちのせいじゃありません。外国人を一人か二人追い出せば済むことです」。外国人という言葉はドイツ男に向けられている。男の顔から血の気が失せる。でも考えてみれば気狂い沙汰だ。こいつなんかより、彼女やおれの方がよっぽど外国人なのだ。男は金の話を持ち出したことを心底後悔している。さっさと自分の札束を取り出して払ってしまえばよかったと思っている。イギリス娘が何をたくらんでいるのか、おれにはさっぱりわからない。わかるのはただ、彼女がこの場を、この興奮気

味の男たちで一杯のナイトクラブを、いまやすっかり支配しているということだけだ。ほんの数秒前までは、おれがこのドイツ野郎を殺すということが、胸躍る不可避の結末であるように思えていた。だが、彼女が喋るのを聞いているうちに、この娘に助け出してもらえるのならその方がよほどいいかなという気もしてくる。娘はおれのすぐそばに近づいてくる。そして、一度もおれを見ずに、相変わらずほかの連中を睨みつけたまま、おれのコートの内ポケットに手を入れる。「私が思うに、あなたは私たち全員に謝罪する義務があります」と彼女はドイツ人に言う。「けれどももしあなたが謝罪したら、私たちはそれを受け入れなければなりません。何といっても私たちはあなたには勿体ないくらいの礼節を持ち合わせているのですから」。おれのポケットから彼女は一かたまりの紙幣を引っぱり出す。シリング、ポンド、スイス・フラン、フランス・フラン、イタリア・リラ、ドイツ・マルク。おれにとっては生まれてこのかた持ったことも見たこともない大金である。すごい手品だ。たぶんおれもほかの連中と同じくらい唖然とした顔をしているにちがいない。「あんたたちは自分のことを世界の支配者だと思ってるだろうけど」と娘は言う。「本当はあんたたちなんか人前で食事をする値打ちもないのよ。だからいいこと、文明人らしい行ないはあたしたちに任せてくれていいのよ、わかった?」。そして娘は札のかたまりを、まるで鼻をかんだチリ紙でも捨てるみたいに、無造作にテーブルの上に放り出す。札の半分が部屋じゅうに飛び散る。誰一人それを拾う度胸のある奴はいない。誰一人音も立てない。娘はおれの手を握る。そして、少しもあわてることなく、あくまで落着き払ったまま、おれの手を引いてクラブを出る。沈黙の怒号がおれたちの背中に立ちのぼる。ドアのところまで来たところで、娘はそっとささやく。「行きましょう、

「大きな坊や。ここのトラブルはあんた以上に大きいのよ」

58

我々は表に出る。彼女はおれの手を引っぱり、リングめざして走り出す。リングに出ると、我々はタクシーを拾い、運河をはさんで犬嵐横丁と反対側の一角に向かう。タクシーの中でおれは息をぜいぜい言わせている。もうくたくただ。彼女は窓の外を見ている。そして後部席の暗がりの中でおれを見る。我々は彼女のアパートに着く。彼女は車を降りる。おれも降りるようにと、ドアは開いたままだ。そこでおれもつづいて降りる。彼女から料金を受けとって、タクシーは走り去る。おれとしてはそのままタクシーで自分のアパートに帰ろうかとも考えていたのだが、彼女の意向はどうやら違うらしい。この間彼女は一言も喋らない。彼女にははっきり目的があるのだ。そしてその目的通りにことは起ころうとしている。彼女が玄関の鍵を開け、我々はアパートに上がっていく。

悪くないアパートである。明るい光の中で、彼女は髪をとめたピンを一部分外す。髪はこれまでにも増して赤く、長く見える。「私はメーガン」と彼女は言って、お茶の仕度をはじめる。この調子だととことんイギリス風に、ショートブレッドなんかも出てきそうだ。「バニング・ジェーンライト」とおれは言う。「楽になさって、バニング・ジェーンライト」と彼女は言う。小さな、蜂に刺されたみたいな感じの愛らしい口をしている。でもその口と、一面に広がったそばかす以外、顔にはこれといって特徴はない。これまで見た限り、今晩の出来事に彼女は少しも怯えていない。このくらいの騒動は年じゅう切り抜けてきていると言わんばかりの落着きぶりだ。彼女は二十四歳。

我々がともに過ごす短い時間のあいだ、四年の年齢差は一度ならず痛感されることになるだろう。

おれたちはアパートの隅の小さなソファに腰かける。彼女にとっては快適、おれにしてみれば人形の家の中に体をつっ込んだみたいだ。我々はあれこれと世間話をする。何しろこの女はおれを難局から救ってくれたのだ。そっけなく帰るわけにも行かない。彼女の父親はロンドンを拠点に一大船舶会社だか何だかを経営している。話を聞いていると、現在水上に浮かぶ船の半分は父親の所有であるらしい。もっとも彼女の口調には、それを自慢するような感じは少しもない。どうもこの娘には、少しも威張ったりすることなく状況を完璧に支配する才能があるようだ。俺は作家なんだ、とおれは彼女に言う。だがそれ以上はおれとしてもあまり話したくない。どんなものを書いているかとか、誰のために書いているかとか。そういう気持ちはたぶん見た目にも明らかなのだろう、彼女もそれ以上訊ねはしない。もしおれが話したがっているそぶりを見せれば、彼女の方から糸を投げてくるだろう。食いつかなければまたリールを巻き戻すまでだ。「さてと、私はこれからあなたをどうすればいいのかしら、バニング・ジェーンライト?」と彼女は言う。

「俺をどうすればいいかって?」とおれは言う。

これはおれの責任ではない。この単純明快混じり気なしの誘惑は。彼女のやり方は実に巧みだ。つねにおれがどうにか対応できるぎりぎりの地点まで攻めてくる。いや厳密に言えば、つねにその一歩手前の地点で止まる。でもおれは……おれは決してお前を忘れてはいない。おれはいつだってお前のことを考えている。彼女が両手をおれの髪に入れ、そのぽっちゃりした小さな口でおれの顔に触れるときも、お前はまだそこにいる。影の中、お前の顔がはっきり見えたことは一度もない

し、窓辺でお前を見てからもうずいぶん時が経っている。でもお前はまだそこにいるのだ。おれの脳はお前の面影を求めて手を伸ばす。でもその手がつかみ取るのは、おれのベッドの上で黒い花弁に包まれているお前のピンクの体だけだ。おれがそれにしがみつこうとするなか、彼女は自分の服のボタンを外す。巨大で真っ白な彼女の乳房が宙に浮く。おれは目を丸くしているにちがいない。彼女が笑うからだ。「ほらほら、何て顔してるのよ」と彼女は冗談めかして言う。「あんたには大きすぎるってわけでもないでしょ」。そしてその瞬間、それ以外は何ひとつおれの目に入らなくなる。それ以外におれが何を見ようとしているにせよ、おれの心の目が何を捜しているにせよ、見えるのはそれだけだ。おれはこの馬鹿みたいに小さなソファの上で横になっている。やがて彼女がおれにまたがり、前に後ろに体を揺さぶる。おれは彼女の中の奥深くまで入り込んでいる。おれの先端が彼女の心臓の下側をくすぐるのが感じられるほどに。ああああ、と彼女はうめく。

そしてそうやっておれが彼女の中に入るとき、もちろんそのときだ、お前がおれの上に覆いかぶさるのは。お前もおれも知っている。これが不貞であることを。その小さなソファに埋もれ、彼女がおれの上にへばりつくあいだ、おれは哀しみと苦痛をよそへ追いやっている。だがそれも長くはつづかない。彼女が寝ついたのがわかると、おれは彼女を動かし、抱き上げてベッドに寝かしつける。彼女は自分の赤毛の中に口を埋めたまま何かささやく。おれは彼女が好きだ。彼女がどれほど大した人間なのか、この時点ではおれはまだ何もわかっていない。いまから十週間後におれは彼女と結婚することになる。だがこの時点ではもう一度会うとさえ夢にも思っていない。おれはひっそりと出ていき、犬嵐横丁に戻る。そして部屋に入る。きっとお前は彼女の匂いをおれの体に嗅ぎつ

CamScannerでスキャン

けるだろう。お前がおれのもとにやって来たとき、おれはまず、指でお前の顔の線をたどる。それが二度とおれの手の届かぬところに行ってしまわぬように。泥みたいにありふれた茶色をしたお前の眼、くすんだブロンドのお前の髪、そしていま初めておれははっきりと見る、お前の口もとの、初めてお前を見た日に石が当たったところにあるあざ。あざは小さく、白く、歯の中のダイヤモンドのようにきらっと光る。おれはおれの下にいるお前の体を開き、お前の非難を覚悟する。だがお前は喜んでいる。お前はすでに知っている。あの小さな赤毛のイギリス娘の襞の中に残された種が、お前なら決して選ばないかたちでその愛を認可してしまったことを。私はむしろ、と風が乱暴に窓を開けるときお前は言う。あなたの妻よりも愛人でいる方がいいわ、その方がずっと荒々しくあなたとファックできるもの。私はむしろ、と窓がばたばた音を立てて開閉するときお前は言う。あなたの愛の中の、秘密の、呪われた部分を持っていたいのよ。あなたはそのために私を創り出したんですもの。

おれはそれを真っ向から否定する。お前に対するおれの嘘。

「ほかに誰かいるの?」とやがてメーガンがおれに訊ねる。いやしないさ、とおれは答える。彼女に対するおれの嘘。

59

昨日おれはペーターに会いに待ち合わせの場所へ行った。奴はそこにいなかった。おれはクローネヘルムのところに使いを送り、今日の同じ時間にカールスプラッツの同じ場所で待っていると伝

えた。だが今日もまた誰もいなかった。お前とおれは自由気ままな身となったのだ。おれたちは解放され、扉は開かれたのだ。

今夜おれは灰色の月の光の中で、机の前に座っている。一台の車が角を曲がって犬嵐横丁に現われ、おれのアパートの玄関前で止まる。呼び鈴が何度か鳴るのが聞こえる。窓枠ごしに外を覗くと、玄関のドアが開いたのか、細長い長方形の黄色い光が路上に現われる。しばらくやりとりがあって、やがてドアが閉まる。階段を上る足音がする。おれが椅子に座ったままそっちを向くと、部屋のドアの下のすきまの光が、誰かの足の影にさえぎられる。おれはノックを待つ。今夜ばかりは、何が起こるのかおれにも見当がつかない。

ノックの音がする。これで二度目のノック。おれは立ち上がってドアを開け、部屋の暗闇の中に立つ。「ミスター・ジェーンライト?」と一人の男が言う。おれは男の顔を見きわめようと、額に手をかざして光をさえぎる。ほかの連中とは違い、男が「ヘア」ではなく「ミスター」を使ったことに、おれはすぐさま気がつく。彼は言う。「ホルツと申します。少しお話ししてよろしいでしょうか?」男がそこまで言って、ようやくおれはドイツ訛りを聞き取る。最近ウィーンにいるドイツの連中みたいに、ずかずか入り込んできたりはしない。招かれるのをちゃんと待っている。おれは後ろに下がり、男のためにドアを開けてやる。

男は明かりをつけてくれとは言わない。おれとしてもおれのやり方で話を進める方が好都合である。暗闇の中で座って話す、というのもおれのやり方の一つなのだ。おれが椅子を勧めてやるまで、男は座ろうともしない。それから男は長い外套を脱ぐ。その下には軍服が見える。どうやら相

当の偉いさんらしい。陸軍元帥、とまでは行かずとも、きっとかなりの地位だろう。「大佐です」闇の中で微笑を浮かべながら、おれが訊ねてもいない質問に男は答える。おれは窓枠ごしに外を覗く。車はまだそこに駐まっている。たぶん中に誰かが乗っているのだろう。玄関にも誰か立っているのだろうが、それはおれには見えない。「と申しましても」と男は言う。「ただのホルツで結構です」。こんなに礼儀正しいドイツ人は初めてだ。いまのところおれはまだ一言も喋っていない。

「何の用だ?」

「ベルリンから参りました」と彼は言う。「ベルリンからあなたにお目にかかりに参りました」

「無駄骨もいいところだな」とおれは言う。

「それは意見の分かれるところでしょうな」と彼は答える。「あなたは御自分を過小評価していらっしゃる。あなたは私の国ではきわめて重要な作家です」と彼は言う。「あなたの作品には熱心な読者がついています。それはあなたも御存知でしょう。ただちに本題に入った方がよろしいでしょうか?」

「俺にとっちゃどっちだって構わんがね。その方が話が短くなるのかな?」

「用件を申し上げます」と男は言う。三十代後半、あるいは四十代前半あたりだが、おれを見下したような態度を示したりはしない。おれは外の車の方にちらちら目をやる。「表の兵士たちでしたら、どうか御心配なく」と彼は言う。「誰もあなたを逮捕しにきたわけではありません」

「どうして心配なんかする必要がある? ここはドイツじゃないんだぜ」

「まあ現時点ではたしかにその通りですな」と彼は答える。やっとドイツ人らしい物言いだ。だ

がその反面、この男の話し方には、最近のオーストリア人たちを思わせるところも大いにある。無表情な顔、これといって捉えどころのない美顔、額の髪がいくらか薄くなりかけている。彼は煙草に火をつける。喫いたいということもあるだろうが、暗闇の中で明かりが欲しくもあるのだろう。
「ここ数か月間、あなたはクローネヘルムという名の人物のもとで仕事をなさってこられた」と彼はふたたび話し出す。「クローネヘルムはあなたの作品を、内閣において非常に、非常に大きな権力を握った人物に手渡してきました。あなたもこの人物については、X、もしくは依頼人Xという名で御存知でしょう」。彼はおれが何か言うのを待ち、おれが何も言わないのを見てとると、先へ進む。「我々の側の状況に少しばかり変化が生じたのです。もっともそれは、これから御説明いたしますように、あなたの側にとっては全面的に好ましい変化です。単刀直入に申し上げれば、ヘア・クローネヘルムはもはやこの取引きにおける仲介者ではないのです。私の申し上げていることをお察しですか？」
「何を察しろと言うんだ？　仲立ちを消した、それだけじゃないか」
「それについてどうお考えになります？」
「気に入らんね」
「クローネヘルムとはお親しい間柄で？」
「あんな奴はなめくじ同然だ。だがそれはこの際関係ない」
「では何がお気に召さないので？」
「わかってたまるか！　この頃じゃもう、何が気に入らんのか、なぜ気に入らんのか、自分でも

わかりゃしないよ。仲介者を消すことなら俺だって前にやった。実際、クローネヘルムと俺とで、俺たち二人のあいだにいた仲介を消したのさ。だけどクローネヘルムを追い出すってのは、何ていうか、そりゃ不公平だ。コネがあったのは向こうだし、市場を開拓したのも俺をウィーンに連れて来たのもあいつなんだから」

「あなたは本当に御自分を過小評価なさっておられる、ミスター・ジェーンライト」とホルツは答える。床に煙草の灰を落とさぬようにと、彼は灰皿を捜している。おれはコーヒーカップを押し出す。「恐れ入ります。よろしいですか、我々はあなたに、クローネヘルムに払っていたのと同額をお支払いします。あなたの忠誠心が満足するものなら、我々の目から見れば市場を開拓なさったのはあなたなのだと申し上げてもいい。そしてクローネヘルムは、あなたをダシに稼いだ儲けのほんの一部をあなたに支払っていたにすぎないのです」

「どうやら市場の……客層がいくらか上がったらしいな」

ホルツは暗闇の中でじっとしたままだ。やっとのことで彼は言う。「あなたは本当に何もわかっておられない」

おれは言う。「そうかもしれんし、そうじゃないかもしれん」

「依頼人Xとは具体的に誰なのか、ヘア・クローネヘルムはあなたに説明しましたか?」

「依頼人Xが死んだのか? ラジオじゃ何も言っていないぜ」

「いいえ、死んではおりません」とホルツは言って、もう一本煙草をつける。おれは椅子から立ち上がり、空気を入れ替えようと窓を開ける。外に身を乗り出すと、思った通り玄関に誰かいる。

おれが椅子に戻ると、大佐は言う。「しかし現時点ではあなたは依頼人Xのために仕事をなさっていません」

おれは笑い出す。「そんなふうに思ったことははじめからいっぺんもないね。奴が俺のために仕事をしてるんだと思ってたよ」

ちょっと間を置いて、ホルツも笑い出す。「とりあえず」と彼はつづける。「あなたに新しい依頼人がついた、ということにしておきましょう。よろしいですか？　かりにその人物を依頼人Zと呼びましょう」

「Z？　そういう話はまずXと相談した方がいいんじゃないのかね。さもないとじき秘密警察がやってきて、奴らがあんたと相談せにゃならん破目になると思うがね。あんた、要するに自分もひとつおこぼれにあずかろうってわけか？　こんな取決めをして、Xの御機嫌を損ねたりしないのかね。そもそもXは依頼人Zのことをどう思っているのかね」

「依頼人Xは」とホルツは穏やかに言う。「この取決めのことを完璧に承知なさっています。依頼人Xは」と彼は言い足す。「依頼人Zのしもべとして行動なさるのです」

その最初の瞬間、彼がその言葉を口にする瞬間、おれには話が上手く理解できない。でもおれの心の奥にいる何ものかはそれを理解しているにちがいない。というのも最初の瞬間、そして第二の瞬間、さらに第三の瞬間、おれは何も言わないからだ。それから、ようやくおれは、相手の言葉を鸚鵡返しに言う。それが精一杯なのだ。「依頼人Xは」とおれは、彼にというよりむしろ自分自身に言う。「依頼人Zのしもべとして行動する？」

「その通りです」さっきと同じ穏やかな口調でホルツは答える。そして手を伸ばしてコーヒーカップを取り、二本目の煙草を消す。彼はおれが何か言うのを待っている。おれが何か言うまでは、自分は何も言わずに、一晩じゅうだって待っているだろう。

「それじゃ依頼人Zは」とおれはやっと訊ねる。「誰のしもべとして行動するんだ？」

灰で一杯になったコーヒーカップをホルツはおれに返す。「依頼人Zは」と彼は椅子から立ち上がりながら言う。「歴史のしもべとして行動なさるのです」

60

おれは彼の話を信じない。

61

そしてその瞬間、運河を上ってこっちへやって来る灰色のハンガリーの月がおれの目をくらませる。おれはすべてを忘れてしまう。自分が明かりを消した部屋に座っていることにおれは気がつく。おれは自分に問いかける。なぜ明かりがついていないんだ？　空気を入れ替えようとさっき自分で開けた窓を見て、おれは考える。誰が窓を開けたんだ？　相手の男が何も言わずに椅子からコートのところへ移動したのを見て、おれは考える。ここに誰かいるのか？

「信じられんね」彼がドアの前まで行ったところでやっとおれは言う。言ったと思う。

ドアを開けながら彼は言う。「それで構いません。もしかしたら信じてくださらない方が好都合

かもしれません。もしお望みなら、私は何ひとつ新しいことを申し上げていないのだ、ということにしておきましょう。もしお望みなら、私が最後の方で申し上げたことには何の意味もないのだ、ということにしておきましょう。結局のところ、大事なのは作品だけです。依頼人はしょせん依頼人です」

彼はおれを暗闇の中に置き去りにする。おれのやり方にふさわしい場だと思っていた、暗闇の中に。

62

奴の話には何の意味もない。歴史のしもべ？　誰だって歴史のしもべに決まってる。そんなことはどうだっていい。大事なのは作品だ。おれはアメリカ人、依頼人はしょせん依頼人だ。

窓は開いたままだ。表の車が走り去る。おれは一人取り残される。月がここにやって来る。

63

「新しく誰かが入ってきたみたいなんだ」おれはようやく切り出す。「新しい依頼人が」。お前は起き上がって、おれに身を寄せる。「新しい友だち」。お前は両手でおれの顔を包み、それを動かす。やがておれの顔は、お前が見ているもの、お前が知っているものの網目の中に捉えられてしまう。おれは何とかして顔をそらそうとする。それくらい私にもわかっていると思わないの、とお前は笑いながら言う。私には何もかもわかってると思わないの？「笑うなよ」とおれは真顔で言

う。お前は自分の口でおれの口を攻めたてる。
もしそいつが歴史のしもべなんだったら、とお前は答える。それなら歴史は私たちのしもべなのよ。

64

お前とおれと二人。ホルツが来てから一日が過ぎ、二日が、一週間が過ぎる。三軒離れた店に食事に出かける以外、おれはいっさいアパートを出ない。おれはずっと思っている。おれがいなくなって誰かが困っているはずだ、と。おれはずっと思っている。おれはどこかで待ち合わせをすっぽかしたのだ、と。だが誰もおれがいなくなって困ってなどいないし、おれが会うべき人間も一人としていない。先週までのおれの人生とつながっていたあらゆる鎖が、いまや断ち切られてしまった。現在の後ろをまっすぐ一直線に進んでいたあらゆる瞬間が、新たな風に吹き散らされてしまう。コンパスは狂ったようにぐるぐる回転し、もはや北を指しはしない。どこか遠くの方に、おれがジェリーの新聞スタンドの前に立って、ラックに入った安雑誌をたまらなく欲しがっている瞬間がある。もっと遠くには、ベッドのかたわらに立つヘンリーに起こされて、ヘンリーとオラルにくっついてインディアンたちの小屋に出かけていく瞬間がある。自分が本当にこれらの瞬間を見ているのか、それとも現在の瞬間がつき進む海の水面のきらめきがおれの目に錯覚を生じさせているのか、それはわからない。おれたちはいま新しい依頼人、新しい友だちを待っている。おそらくおれにはすでにわかっている。そいつはほかの連中みたいにただ単にお前を買ったりはすまい。おそ

らくおれにはすでにわかっている。ほかの連中と同じように、ただ単にそいつにお前を売り飛ばしてはならないのだ。その週の終わりになって、依頼人なんてしょせん依頼人だ、という結論におれは至る。それとも、もっと前からそう決めていたのだろうか？　前からそう決めてはいた、だが今回おれは、自分になかばそれを信じさせるところまで行くのだ。そういうことなのだ。本来ならここで安堵のため息のひとつも洩らすところだろう。だがいかなる息であれ、息を洩らすことは生命の証しにほかならない。そしておれが自分の中に抱えつづけてきた生命もまた、もうひとつの別の風に吹き散らされてしまったのだ。いまやおれの中には、まったく違った種類の幽霊が住んでいる。お前と、その幽霊とが一緒に。

65

五週間が過ぎる。ウィーンはもう秋だ。すっかりすり切れ、静まりかえった秋。おれは彼女に会いに行く。アパートの前で、彼女が帰ってくるのを待つ。跳ねっかえりで奔放、ぽっちゃり小柄な、アングロサクソン産の小娘。黄昏どきに、彼女は玄関の鍵を開ける。おれは彼女の後ろに忍び寄る。影が彼女を包み込む。彼女ははっとふり返り、鍵を地面に落とす。おれはそれを拾ってやる。「やあ」とおれは言う。彼女は肩で大きく息をしている。夕暮れの光の中で、顔が髪と同じくらい赤く見える。彼女は何と言うだろう。元気？　それとも、このあいだは何も言わずに出ていったわね？　帰ってよ？　だが彼女は言う。「私、妊娠してるの」。そう言ってすぐ、その言葉があらわにしてしまった絶望を、彼女は心底苦々しく思う。それは俺の子かい、とおれは訊いたりはしな

CamScannerでスキャン

い。そんなことを言えば、彼女とおれ自身とを侮辱するだけだ。「俺は君と結婚する」とおれは言う。そしてその言い方の響きにぞっとして、「俺と結婚してくれ」と言い直す。玄関先に立ったまま、彼女は笑う。苦々しい思いはまだ残っている。そしてじきに、あたかも自分自身に向けられたかのような、もの哀しげな微笑みを浮かべる。一瞬のあいだ彼女は、あっさり鍵を受け取りそれを鍵穴に差し込みドアを開けて中に入り自分をおれから遮断してしまう気でいる。が、次の瞬間、彼女はおれに襲いかかる。巨体の威圧感を和らげようとおれが一歩下がった地点に彼女は飛び込んでくる。そしておれに殴りかかる。わあわあ激しく泣きながら、拳でおれの胸を叩く。通りの反対側で人々が立ちどまり、こっちを眺めている。おれは彼女の手首を押さえる。すると彼女は脚を使ってくる。それをやめさせようと、おれは彼女の体を引き寄せる。彼女はおれのシャツに顔をつっ込んですすり泣く。「メーガン」とおれはささやく。「メーガン。それは俺のためなんだ」とおれはささやく。「俺のために頼んでるんだよ。君が俺の同情なんか要らないことはわかってる。これは俺のためなんだ、なぜなら……このごろは何ひとつうまく行っていないんだよ。これは俺の良心が投げてくれた救いの糸なんだ。これだけはたった一つ俺にもできる、まともな人間の行ないなんだ、あとはみんな……うまく言えないことがいっぱいあるんだよ。とにかくこのたった一つ、まともな、ノーマルな行為を俺にやらせて欲しいんだ。そうすれば俺は、俺がやることだって全部が全部腐り切ってるわけじゃないんだって思えるんだよ」。我々は数分にわたって通りに立ちつくし、それからようやく彼女の部屋に上がっていく。おれは夜が更けるまで彼女と一緒にいて、十一時頃に帰る。眠っている彼女に、明け方には戻るよ、とおれは約束する。狂気の月の下で、おれは運河の

橋を渡る。いまから三十五年後、おれは老人の小舟に乗り込み、彼に連れられてお前の島へ行く。島と本土の船着場を行き来するあいだに、そのどちらも見えなくなる瞬間が存在する。

66

冬が来る。グラマシー・パークのように、理不尽に、一夜にして訪れる冬。グラマシー・パークの冬を思い出そうと、おれは懸命に頭をひねる。たしか三年か四年前の冬だったはずだ。やがておれは、それがまだ去年のことだったのを思い出す。メーガンとおれは冬の訪れと同じくらい唐突に結婚する。最後の最後になって、船舶会社の親方と、その女房たるメーガンの母親とが、我々の結婚を阻止しようとあれこれ手を打つ。だが結局母親が、結婚を承認しにウィーンへやって来る。母親はおれを見てショックを受ける。おれはそれでますますこの母親が気に入る。「何よママ、嫌なら帰ってよ」とメーガンは言う。仕送りを打ち切ると脅かされても、「とっくにそうしてるべきだったのよ」と言い返すだけだ。結婚式はある土曜日の午後、宗派も怪しい、メーガンと同じくらい小柄な牧師によってとり行なわれる。おれは婚礼の場におけるガリバーだ。でもことの重要性を考えれば、このくらい大きくてしかるべきなのだ。メーガンは小さなベールのついたピンクのドレスを着る。とても可愛らしい。彼女の目に浮かぶ敬虔の念を見ていると、こっちまで謙虚な気持ちになってくる。おれたちが教会を出ると、彼女のベールが風に飛ばされて、あっという間に屋根の向こうに舞い上がり、郵便局の尖塔の彼方に消えていく。我々は彼女がいままで住んでいたアパートの、一つ上の階の部屋を借りる。これまでの所よりいくぶん狭いが、代わりに今度は部屋が二つ

CamScannerでスキャン

ある。入口のドアのすぐ外に、屋上まで通じる階段があり、上るともう一つドアがあって、そこも同じ鍵で開くようになっている。夜になると、丘の方で集会の喚声が響きわたり、おれたちはそれを聞きながら眠りに落ちる。街ではドイツの話で持ちきりだ。冬が終わる頃、政府が国民投票を公示する。オーストリア人が今後もオーストリア人でいるべきかどうかを選挙で決めるのだ。選挙をしないとそんなこともわからないなんて、オーストリア人くらいなものだろう。そしてそれを傲慢だといって憤(いきどお)るなんて、いやそもそもそれを傲慢と呼ぶなんて、ドイツ人くらいなものだろう。おれはメーガンの小さな豊満な体を自分の頭に引き寄せ、彼女の核に耳をくっつける。彼女の中で救済が育まれつつあるのをおれは聞く。七か月経って彼女が破水したら、おれはその水を自分の頭にふりかけて洗礼を施すつもりだ。我々は赤ん坊が女の子であることを知っている。二人でその子をコートニーと名づけたのだ。「ああ、大きな坊や」とメーガンはおれの髪の中にささやく。「私を愛して、少しでいいから」。おれは彼女をぎゅっと抱きしめる。犬嵐横丁のアパートはいままで通り借りてある。おれは毎日、夕方になるとそこへ出かけていく。仕事に、とおれは彼女に言う。慎(つつし)みと、恐れから、彼女は何も訊かない。どこへ行くのとも、何しに行くのとも。その代わりにおれの方も、朝になって彼女が目を開けたときにはちゃんと隣に戻っていなくてはいけない。

67

おれは冬じゅう仕事をつづける。週に一度、車が通りに現われて、アパートの前で止まる。そして誰かが金の入った封筒を抱えて部屋のドアまで来て、おれから完成原稿を受け取ってホルダーに

はさみ、引換えに金を渡していく。支払いがドイツ・マルクであることに、おれは抗議する。仲介者は抹殺された。だが時おりおれはふと、ペーターも抹殺されたのだろうか、と考えてしまう。結局のところ、誰かが翻訳をしているにちがいないのだから。クローネヘルムに対する裏切りに怒りをたぎらせながらページに向かう、ペーターの姿が目に浮かぶ。いかなる憤怒の念を、ペーターはこれらのシーンに注ぎ込むだろうか？　おれがお前を愛する想い、それを政治的に誤って解釈することによって、彼はおれの仕事を妨害する。我々は彼の手中にある。その誘惑に彼は気も狂わんばかりになっているにちがいない。別の翻訳者に偽りを発見される可能性だけが、どうにか実行を引きとどめている。

三月初旬、ホルツがふたたびやって来る。

今回は何か大事な用があるにちがいない。いつも車が来るのとは違う曜日だからだ。たしか今日は水曜のはず。表で車の音がすると、おれは座ったままノックを待つ。手を伸ばし、机の上の明かりを消して待つ。ようやくホルツが自分でドアを開け、暗い部屋に足を踏み入れる。そしてしばし立ちどまり、おれが何か言うのを待つ。「ミスター・ジェーンライト」と彼はとうとう沈黙を破る。「お仕事の邪魔をして申し訳ありません」。椅子に座ったまま、おれはやっとホルツの方を向く。彼は後ろ手にドアを閉める。おれはすでに窓を開けている。中に入ってきたホルツは、このあいだと同じ椅子に腰を下ろす。このあいだと同じ落着き、同じ礼儀正しさ。「お仕事は順調でしょうか」と彼は訊ねる。第一の質問。その後もいくつか質問がなされるが、おれはそのどれにも答えない。ホルツは部屋が寒いことに気がつき、スチームに手を触れる。「暖房が十分でないようです

CamScannerでスキャン

な」と彼は言う。「こちらで何とかしましょう。手が冷たいとお仕事も大変でしょうから」
「手が冷たいといろんなことが大変だよ」
彼はうなずく。「これまで何か問題はありましたでしょうか」と彼は言う。「もし何か私に――」
「ドイツ・マルクで払われるのは気に入らん」
「アメリカン・ダラーの方がよろしいですか？　わけないことですが」
「オーストリア・シリングでいい」
ホルツはさっと手を一振りし、この一件を脇へ追いやる。「お好きなように」。彼は両手をこすり合わせる。今日は長い外套を着たままだ。その中に手をつっ込み、もぞもぞと煙草を捜す。「お知らせしておきます、ミスター・ジェーンライト」とホルツは切り出す。「最近のあなたの作品に対し、私どもの依頼人が非常な熱狂を示されていることをお伝えするよう、申しつかってまいりました」。その言葉を強調して、彼は感じ入ったように首を横に振る。「あなたの書かれたものに非常に喜んでおられます。深く感動なさっています。みずから芸術家である人間として、私どもの依頼人は、その真価を理解する眼を持ちあわせているのです」
「寝言もいいところだ」
「彼はあなたにご留意いただきたいのです、彼にとってこれがいかに――」
「何しに来た？」
ようやく煙草が見つかる。部屋が寒いので、それに火をつけるのも一仕事だ。彼は何度も窓の方を見る。それが閉まっているといいのに、と思っているらしい。といってもそう思うのは、寒いか

らではないようだ。「私が思いますに」とホルツは言う。「ここ六か月のあいだに、作品に新しい展開が生じたのではないでしょうか」。彼は煙草を使って身振りを加える。
「何しに来た？」
「つまりですね」。ホルツは何度も窓を見る。「ミスター・ジェーンライト、私は作品についてお話をしにうかがったのです。私どもの依頼人のコメント、いわば一人の芸術家からもう一人の芸術家に送られたメッセージをお伝えしに。具体的に申し上げるなら、私は彼女の話をしにうかがったのです」
「彼女？」
「大したことではありません」と彼はこともなげに言い、首を横に振る。これだけのことを伝えにわざわざベルリンからやって来たのだ、と言わんばかりに。「ごく些細なディテールについてです。あなたのこれまでの作品に対する、わが依頼人のとどまるところを知らぬ熱狂を、いわば補強するための二、三の修正とでも申しましょうか。もちろんいよいよとなれば、と申しますかあなたがそう望まれるとあれば、当方で変更を加えることもできないわけではありません。しかし……しかし私が思いますに……何と申しますか、芸術家のヴィジョンに勝手に手を入れるというのは、どうにも良心が――」
「阿呆らしい、もうたくさんだ」
「たとえば、眼です」とホルツは言う。「眼は茶色ではなく、青であるべきです。それから髪。髪はもう少し金髪がかっていて欲しい。陽光の糸、とでも申しましょうか」

CamScannerでスキャン

「陽光の糸？」
「言い方は何でもよろしいのです」。彼は座ったまま煙草をふかしている。
「そんならさっさと、依頼人の望み通りに書ける人間を捜したらどうだ？」
しばらくして、ホルツは静かに言う。「それはできません」
「もしかしてこれは人違いじゃないのかね。もしかして俺たちは別々の娘の話をしているんじゃないのかね」
「いいえ」とホルツは言う。「私たちは同じ娘の話をしています」。ホルツは唇を舐める。暗闇の中でもそれが見える。そしてもう一度窓を見て、「彼が愛したただ一人の娘です」と言う。そして椅子から立ち上がり、窓のところへ行ってそれを閉める。寒さのせいではない。ホルツはドアのところに行ってそれを開け、外で待っている見張りに何か言う。見張りは階段を下りていく。彼はドアを閉め、ふたたび椅子に腰かける。そして椅子をぐるっと回転させ、脚を開き、両腕を椅子の背にまわす。
ホルツは煙草を大きく一喫いし、三か月前と同じコーヒーカップでそれを消す。「彼が愛したただ一人の娘です、ミスター・ジェーンライト」とホルツはもう一度言う。おれが黙っているので落着かないらしいが、だんだんそれにも慣れてきているようだ。「私がこれからお話することは、記憶の短い人々にとっては、まあ秘密と言えなくもない出来事です。そして幸い、私どもの依頼人から見ますと、世の人々の大半がそうなのです。しかし、十年前にはその出来事はそれほど秘密ではありませんでした。党内ではむしろ周知の事実でしたし、その出来事が起きたミュンヘンの街でも

そうでした」

ホルツがなぜ窓を閉めたのか、これでわかった気がする。なぜ見張りを外に出したのか、これでわかった気がする。

「彼女の名前はゲリ・ラウバル」とホルツはつづける。「ウィーンに住む歌い手で、彼の姪でした。彼女と出会ったのは、率直に言って政治家としての彼の立場が最悪だった時期のことでした。党は選挙で大敗を喫したばかりでしたし、実際、もし、事態がもう少しうまく進展していたなら、彼としてもあそこまでは……あそこまではのめり込まなかったかもしれません。何とも言えませんが。とにかく間違いないのは、彼は彼女と恋に落ち、会ってから一年後に二人は一緒に暮らすようになっていた、ということです。この恋愛が具体的にどういうかたちを取ったのか……」そこでホルツは口ごもる。「つまり、その……彼らの心の愛が肉体的な愛というかたちで表現されたのかどうか、それは誰も知りません。この点をめぐる彼の願望に彼女が同意しようとしなかった、もしくはしたくてもできなかった、という事実が二人の仲をぎこちなくしてしまったとも考えられます。あなたの御執筆に関連して、おそらく申し上げておくべきなのは……」。冬の夜の光に照らされて、ホルツの額のつやが浮かび上がる。「私が思いますに」とホルツはふたたび、ゆっくりと話し出す。「肉体的な愛をめぐるZの願望は、どうやら相当に具体的なものだったようで……まだ二十歳、彼の半分の年齢の娘には、いささか洗練の度が過ぎたものだったと思われるのです。私の申し上げていることがおわかりでしょうか？」

「わからんね」

「まあとにかく」とホルツはつづける。「かいつまんで申し上げれば、三年後、二人の仲は悪化したのです。この頃にはむろんすでに恐慌が訪れておりました。政治家としての彼の地位は急上昇していました。その頂点が訪れるのも、わずかその一年半後のことです。しかし恋愛の方は、政治面における成功と同じ道をたどりはしませんでした。彼女はほかの男たちと恋愛するようになりました。私どもの依頼人のボディガードにまで手を出し、あげくのはてにウィーンに帰りたいと言い出したのです。ある日の午後、二人は口論になりました。そして翌朝、胸に弾丸の貫通した彼女の死体が発見されたのです。検視官は自殺と結論を下しました」

「自殺する人間が普通撃つところじゃないな、胸ってのは」

ホルツは肩をすくめる。「致命的にならないように撃とうとしたとも考えられます」。彼は椅子から立ち上がり、部屋の中を歩きまわる。「あなたが何を言わんとしていらっしゃるかは、もちろんわかります。同じことを言おうとした人はほかにも大勢います。これもまた、何とも言えない問題です。彼が撃ったのかもしれない。誰かに命じて撃たせたのかもしれない。スキャンダルを恐れた彼の支援者たちが、誰かに命じて撃たせたのかもしれない。あるいは彼の政敵たちが、彼の心をかき乱そうと誰かに命じて撃たせたのかもしれない。誰にもわかりません。いずれにしろ、事実たしかに彼の心はかき乱されました。それについては疑いありません。しばらくのあいだ、側近の者たちは、一日じゅう彼に付き添っていました。というのも彼らは本気で」……自分にその先が言えるとはホルツにはとても思えない。だがホルツはそれを言う。「というのも彼らは本気で、彼がみずから命を断ってしまう可能性があると考えたからです。彼はそれほど悲しみに打ちひしがれていま

した。彼が自分を取り戻すには、何か月もの時間が必要でした。彼は二度と女性に対し情熱を抱くことはありませんでした。つねに女たちをまわりにはべらせてはいましたが」。ホルツは窓の前で立ちどまり、ぼんやりとした表情で、ガラスをとんとん叩きはじめる。「つい最近まで、それは彼の中にひとつの空洞を残していたのです」

おれの反応が求められているかのように、長い話がここでしばし途切れる。

彼が叩いた振動で、上の方の窓枠から雪がかすかに落ちる。「でもいまは」とホルツは言う。「彼女は戻ってきたのです」。彼はふり返り、おれを見る。

おれの両手のなかの暴力は、もうずっと前から、おれの夢のなかの暴力になっている。「戻ってきた?」

「もうおわかりでしょう」

はじめおれはそれが理解できない。あるいは理解はしても、あんまり驚いたせいで実感できない。「そんなことがあるもんか」ようやくそう答えるのが精一杯だ。

「青い眼」と彼は言う。「陽光の糸のような髪」

「これは何かの間違いだ。人違いだ」

「だとすれば間違えているのはあなたです」。彼は窓を開ける。さっきよりも大きく、さっきよりも寒く。

「何ひとつ変えるつもりはないね」

「口もとの小さなあざ、もちろんあれもいけません」

CamScannerでスキャン

「何も変えんぞ」

「さしつかえありません」と彼はたやすく言う。「私どもの側で処理いたしますから」

「やってみるがいい。彼女は俺の言うことだって聞かないんだ。お前らの言うことなんか聞くもんか」

「もう一つあります」と彼はドアの前で言う。「あなたにベルリンに来ていただきたいのです。あちらで仕事をなさっていただいた方が、我々みんなにとって好都合なのです。ベルリンはいまや世界中でもっとも刺激的な街です。ベルリンは私たちの世紀の中心なのです」

「俺たちの世紀の中心は」とおれは答える。「ここだよ、ここ」。そう言っておれは自分の股間をつかむ。「ベルリンに連れていきたきゃ連れてくがいい、句読点ひとつ書くもんか」。おれは無力感を隠し切れない。「俺はウィーンに女房がいるんだよ」ほとんどすがるようにおれは言う。「子供もじき生まれるんだよ」。だがそう聞かされても、ホルツは表情一つ変えない。

「では、あなたが依頼人のもとに来てくださらないのなら」廊下に出たホルツは、微笑を浮かべて言う。「それなら依頼人があなたのもとにうかがうしかありませんな」。そしてホルツは立ち去る。

68

今日、依頼人がやって来た。

彼の軍隊がリングを行進し、オーストリア人たちは選挙を中止して併合を承認した。彼らはド

イツ人になるのだ。公園という公園が新ドイツ人であふれ返った。メーガンと一緒にアパートにいたおれの耳にも、行進する兵士たちが立てる、一定間隔を置いて次々に行なわれる銃殺のような、ざっくざっくという足音が聞こえてきた。おれがアパートを出て旧市街の方に歩いていくと、その轟きはいっそう大きくなった。一キロ離れたあたりからすでに、地面が揺れるのが感じられた。人々は交通は停止し、スタンドの新聞はすべて売り切れ、ビアホールやカフェは空っぽになった。人々はフォルクス公園やブルク公園に押し寄せ、市内へ通じるあらゆる大通りを通って彼の軍隊がリングへ流れ込むのを見物した。市庁舎の薄っぺらなみすぼらしい花崗岩が、まるで凍りついた白い炎のように、青と銀の空を背景に立っている。誰かが炎に包まれて、か細い悲鳴を上げるのが聞こえる気がする。ホーフブルクに行って、その中のひとつの建物の階段を上ってあたりを見渡すと、リングの弧が広がる限りどこまで行っても兵士の列である。おれのまわりで、男たちは酒とアドレナリンで荒々しい気分になっていた。女たちは劇場の柱廊を埋めつくし、歩道の石壁にぴったり体をくっつけていた。彼の姿が見えると、暗い、ぎらぎら光る恍惚が女たちの中央からあふれ出た。女たちが壁を離れると、そこには丸い、濡れたしみがいくつも残っていた。気を失って地面に崩れ落ちる女も大勢いた。道路にそっていたるところで女が歩道に横たわり、壁に頭をつけて立つ女たちは隷属の濡れた叫びを発していた。旧市街の、誰もいなくなった裏道で、無数の犬たちが交わった。旧ウィーン全体が犬たちのものだった。浮浪者、ジプシー、ユダヤ人は一人も見あたらなかった。聖堂の尖塔から、千枚の号外がふわふわと降ってきた。

依頼人はブルクリングの向こう側にある閲兵台に立っていて、おれのいるところからはいま一つ

はっきり見えなかった。腹が心持ち出ていて、前腕はやたらと細いみたいだったが、その日、あそこに力が宿っているのだとみんなが言う目までは見ることができなかった。おれの隣で誰かが、あの人は神だよ、と言った。みんなが同意のつぶやきを洩らした。おれは笑った。連中はおれの方を向いた。おれはまた笑い、自分の脚をぴしゃぴしゃ叩いた。みんなが憎悪と恐怖の目でおれを睨みつけた。

おれは奴らに言ってやった。なあ、俺はな、あんたたちの神様の最大の妄想を生き返らせたんだぜ。とすると、俺はどういう神ってことになるのかね?

おれはいま大嵐横丁に戻ってきている。

歓楽と、憤怒が街を包む。夜が来る。我々はひっそりと夜を過ごす。お前はおれを真夜中に向けて吸い寄せ、新たな一日の中へ吸い寄せる。だが何も生まれてはこない。おれは天井を見つめ、お前の髪に指を走らせる。もうそろそろ家へ帰る時間だ。そのとき、車が着く。こんなに早く来るとは思わなかった。まだ最初の晩じゃないか。

一人の兵士がドアのところでおれを待つ。ついて来い、とおれは命令を受ける。従うしかあるまい。ここはもうドイツなのだ。我々は階段を下りていく。下宿のおかみがドアの黒いすきまごしにこっちを覗いている。おかみがおれを追い出さないよう、ホルツに一言言ってもらわなくては。おれは外で待っている車に乗り込む。車はじきにリングの、オペラ座から二、三ブロックのあたりに着く。おれはホテル・インペリアルの裏口を通され、裏のエレベーターに乗せられる。たぶん十四階か、十五階あたりまで上ると思う。ほぼてっぺんまで来たみたいだ。エレベーターのドアが開

く。おれを迎えに来たのと同じ兵士がそこに立ち、おれが降りるのを待つ。

廊下は暗い。奥に小さな明かりがあって、そこがラウンジになっている。貴賓室に通じるとおぼしき両開きのドアがあるが、いまは閉まっている。おれはそのドアの反対側、ラウンジの一番手前にある椅子に腰かけて待つことにする。

二十分経って、ドアが開く。男が一人背中をこっちに向けている。男はドイツ流の敬礼をしている。部屋の中、男より向こうの部分は、照明もぼんやりと薄暗い。話し声がする。ドイツ人のドイツ語だ。オーストリア人のドイツ語よりも固い。少なくとも今日までは。断言してもいい、いずれ新ドイツ人たちも、それを喋るに必要なだけの野蛮さを自分の中に捜しあてるにちがいない。

ドアのところにいる男がこっちをふり返る。ホルツだ。

ホルツは後ろ手にドアを閉め、静かに、慎重な足取りでこっちへ歩いてくる。そして片手をおれにさし出す。ホルツと握手したことなんかいままで一度もない。犬嵐横丁だったら無視するところだが、ここでは受けておいた方がよさそうだ。ふたたびドアが開き、ドイツ人将校が何人か出てくる。はじめ彼らは我々を見てもまったく無視するが、やがてまたこっちを見て、それから廊下を先へ進みながらたがいに顔を見合わせる。廊下のずっと向こうまで行っても、まだふり返っておれを見ている。

「やあ、バニング」とホルツは言う。握手もそうだが、おれをバニングと呼ぶのもこれが初めてだ。こんばんは、大佐、とおれも応じる。「夜中に呼び出して済まないね」とホルツは言う。ほとんどささやきというに近い声だ。「依頼人が、あなたに、会いたいと、おっしゃるのです」と、お

そろしくていねいに、一言一言はっきりと彼は言う。おれは彼の顔から、口にされていない言葉を読みとることができる。私たちは二人ともダイナマイトの上に座っているのだよ、彼はそう言っているのだ。私をこやし扱いするのは構わない、だが今夜は依頼人が相手なんだぞ、と。おれはただうなずき、彼もうなずき、我々はたがいにうなずき合いながらそこに立っている。おれは口を開き、きっとお忙しいでしょうから、またの機会にしたらどうですかね、といったような科白を口走る。と、それから、恐怖が認識に変貌し、認識が怒りに変わる。おれはこんなことを知りたくなんかなかったのだ。こんな約束じゃなかったはずだ。相手は最後までただの依頼人Z、姿も見えず声も聞こえぬ依頼人でいるはずだったのだ。名前だの顔だのなんかは、いや何があっても名前と顔だけは、持つはずじゃなかったのだ。そんなものを抱えて生きるなんておれは御免だ。

「駄目だ、無理だよ」とおれは出し抜けに言う。

ホルツはおれの腕を握っている。その手はおれの腕をどうにか一周できる程度の大きさだ。背丈だっておれより十五センチは低い。だが彼はおれの腕をすさまじい力で握りしめている。彼が糞も出ないほど脅えているのがわかる。恐怖に気も狂わんばかりになっている。彼だってできることなら、こんなことはやらずに済ませたいのだ。「動くんじゃない、喋るんじゃない」とホルツは上ずった声で言う。「明日目が覚めたら、あれはみんな夢だったんだ、そう思うがいい。それはあなたの勝手だ。だがいまは……」。彼はドアを見る。「私は中に戻らなくてはならない。ここで待っていなさい。逃げようとしても無駄だ。見張りの者に取り押さえられるだけです」

ホルツは貴賓室の中に姿を消す。おれは言われた通り座って待っている。何時だかはよくわか

CamScannerでスキャン

らない。たぶん午前二時頃だろう。あるいはもう少し遅いだろうか。そのうちに、もう一晩じゅう待った気がしてくる。だがあとで思い返すと、せいぜい一時間半くらいのものだったろう。将校たちがまた、貴賓室を出たり入ったりしていく。彼らはたいてい、通りすがりにおれを見ていく。何も知らずにただ不思議に思って見ているのか、それともちゃんと話を聞かされていて、そうかこれがその男か、としげしげ見入っているのか、どちらだかは判断しがたい。たぶん前者だろう、とおれは考える。が、その後の数年間、だんだんと後者の方が有力に思えてくるようになる。やがて人の行き来もとだえ、おれは一人で暗がりに座っている。ホルツは長いこと現われない。ドアの向こうからは物音一つ聞こえてこない。あの貴賓室にいた人間が、向こう側の出口からこっそり出ていってしまっていても不思議はない。じき朝になるだろう。俺は不法侵入者として射殺されるかもしれん、とおれはふと思うが、べつだん怒りも感じない。そしてしばらくラウンジの中を眺める。バロック調のタペストリーが壁に掛かっている。メッテルニヒやモーツァルトの肖像画、ハプスブルク家の誰かの即位だか埋葬だかの場面。ここはおれのどちらのアパートよりも暖かい。宙ぶらりんにされたまま、辛抱強く、おれはさらに深く椅子に沈み込む。

ホルツがようやく出てくる。さっきと同じように、まるで中で寝ている人間を起こすまいとしているかのように、そろそろと慎重にドアを開け閉めする。あまりにそっと閉めるので、ドアは完全には閉まり切らない。彼はこっちへやって来る。おれは立ち上がる。彼はほっとした表情を浮かべている。「申し訳ありません」彼はきびきびと物静かに言う。「今夜は駄目なのです。総……依頼人はウィーンを出ることになったのです」。だってまだ来たばっかりじゃないか、とおれは胸の

うちで思う。「一週間ほどしたら戻ってきます。また新たに選挙が行なわれますから。たぶんそのとき、ということになるでしょう」。そうならないかもしれません、と彼は口にすることなくつけ加える。緊張で彼の顔は疲れ切っている。おれはただ、結構、とうなずくだけだ。おれたちの後ろで、きちんと閉まらなかったドアが、ひとりでにいくらか開く。

一瞬のあいだ、おれは見る。ドアの向こうの部屋のほのかな光の中で、依頼人もこっちを見る。依頼人は机の向こう側に立ち、机の上に両手を置いて、目の前に散乱した書類の上にかがみ込んでいる。半分食べ残した食物の皿がかたわらにある。一晩じゅうそこに置いてあって、時おり思い出したようにつまんでいた様子だ。彼の後ろのソファに、一人の金髪女の姿がかすかに見える。美人だが、非常に月並な感じのする美人である。女は体を丸めて眠っている。あるいは眠りかけている。彼がベッドに誘うのを待っているのかもしれない。あるいは、先にベッドに入ってよろしい、という合図を待っているのかもしれない。と、彼が書類から顔を上げる。髪が顔にかかる。彼はむっとした顔で開いたドアを見て、それからホルツを見て、それからおれを見る。このささいな行動の各段階を通して、彼の顔が少しずつ変化していく。おれの姿を見たところで、それは蒼白になる。口がわずかに下に開く。彼の目の中には何の力もない。我々はたがいの目の中を覗き込む。彼の目には懇願の色が浮かんでいる。自分が今日この日にこの街を征服したのと同じように、どうか自分を征服して欲しい、そう頼み込んでいる。おれが彼と同じくらい無慈悲であることを、その目は恐怖し、期待している。おれには想像できる。この男が一晩じゅう、机の向こう側に座って、食べ物をつっつきながら、落着かなげに書類に目をやり、おれに何と言ったらいいかを思案している

CamScannerでスキャン

姿が。そしてとうとう勇気が彼を見捨て、彼は断念した。おれは彼にとって無名の存在であり、彼はおれにとって無名の存在である。そのことはおれにとっても、彼にとっても、等しく威圧的なことなのだ。そう、これはどう考えても間違いだったのだ。

ホルツはおれの視線を追い、後ろをふり返って、ドアが開いているのを目にする。顔からすっと血の気がひく。ホルツはあわてて飛んでいき、おそろしく早口に何かもごもご言いながらドアを閉める。Zは最後までおれから視線をそらさない。おれもZから視線をそらさない。やがてドアが閉まり、今後三十年間にわたって我々二人のあいだを遮断する。三十年後、イタリアの、とある地下室で、おれは老人になっていて、Zは生きた化石になっている。そのときおれは思うことになる。この男はあの瞬間を覚えているだろうか、そもそもおれに会ったことがあるのを覚えているだろうか、と。

ホルツはエレベーターまでついて来て、何も言わずにおれを見送る。扉が両側から閉まるとき、彼はまだそこに立っている。顔には妙な表情が浮かんでいる。車がおれを待っている。犬嵐横丁へ、とおれは言う。朝にはメーガンのもとに戻る義務がある。だがこのドイツ人どもに彼女の住所を知られてはまずい。それにこっちのアパートでの用事もまだ済んでいないのだ。お前は今晩まだおれを終えていない。そしていまおれはすっかりその気になっている。階段を上りながら、ズボンの前のボタンを外す。それほど気がせいているのだ。宿のおかみが見ていないといいが。

おれが入っていくと、お前は口紅を塗っている。流しの前に裸で立って、鏡に映った自分の口をじっと眺めている。彼は何て言ったの？　とお前は訊ねる。俺たちにひれ伏したんだよ、とおれは

答える。お前は何げなく、我知らず、自分の体に手を触れる。

窓のところで、何かがおれの中から出てくる。笑い、とも思えないのだが、お前がくすくす笑い出すところをみると、やはり笑いなのだろう。窓の前に立ったおれは、自分の体がその音でぶるぶる震えるのを感じる。それは部屋いっぱいに広がり、窓から外に出ていく。外では四つ角に一人の男が煙草を喫いながら立っている。男はこっちを見上げている。さっきおれが車で帰ってきたときも、あそこにいたのかもしれない。たぶんドイツの手先だろう。今日生まれた新ドイツ人ではなく、元祖ドイツ人。男は何くわぬ顔をしている。だがおれから出てくる音は歩道を通って男の方に向かう。男はせわしなくもう一本煙草に火をつける。そしてそそくさとそれを投げ捨て、コートの襟を立てる。通りをはさんで向こう側の鐘楼にいる一人の女が、何ごとかと窓を開ける。通りのあちこちで、窓が次々に開く。夜明けにはまだ一時間ある。音はなおも出てくる。もしこれが笑いだとすれば、これは普通とは違うウイルスの笑いだ。かつておれが、娘たちと一緒になってニューヨークの窓から発した笑いとは違う種類の笑いだ。階下の部屋でおかみががたごとと音を立てている。お前はベッドの上に腰かけて、くすくす笑いながら口紅を塗りたくり、おれの笑いの高まりに合わせてじきに大声で笑い出す。

それは街じゅうでじわじわと高まってゆく。ドアマンたちは宿屋の軒先の持ち場を離れ、椅子がどぶに転げ落ちる。人々は玄関先にバリケードを築き上げ、板で窓をふさぐ。ハンマーの音が響き、通りの先では鋼がぱちぱち焦げる音がする。下の部屋で宿のおかみが闇雲に暴れまわり、四方の壁にどしんどしんぶつかっている。あたり一帯の窓で、次々に明かりがつく。だがやがてそれも

一つまたひとつと、笑いによって抹殺されていく。アパートの前をはだけ、口にバターをべたべたくっつけた女が、街灯に正面衝突する。ドアマンたちはほかのドアマンたちと交代する。輪に通した、骨みたいに大きくて白い鍵束が、彼らのベルトでじゃらじゃら鳴っている。おれは窓辺で服を脱ぐ。わざわざお前を呼ぶまでもない。呼ばれなくてもお前はやって来る。後ろからおれにぴったり寄り添い、おれの胴に腕をまわす。笑いに体が痙攣して、おれたちはたがいに抱きあうのがやっとだ。おれの音が死にたえ、痙攣だけがあとに残る。だがお前の音はいつまでも止まない。お前は腕を前に伸ばし、片手でおれをつかむ。おれの中の音は死んでいる。笑うなよ、とおれは言う。お前は片手でおれをつかみ、まだ笑っている。そしてもう一方の腕をぐるっとまわし、おれの体全体を抱きしめる。お前はおれの背中に顔を埋めて笑う。細いピンクの両腕が、おれのまわりをかろうじて一周する。笑うなよ、とおれは言う。おれがそう言えば言うほど、お前は笑う。笑えば笑うほど、いっそう激しくおれを愛撫し、いっそう激しくおれを叩く。窓枠に積もった雪の中で、おれの愛が爆発する。いいからもう笑うなよ、とおれは窓辺でうめくように言いながら、床に倒れ込む。お前は髪で自分の体をベッドに縛りつけ、歌い出す。

69

救済はおれの娘というかたちで訪れる。

コートニーは一九三八年の夏に生まれる。子宮から出てくるやいなや、彼女の頭は火がついたような様相を呈する。おそろしく血色のいい肌、赤毛。おれたち二人から受け継いだ髪だとメーガン

は言い張る。だがおれにはわかる、それはメーガンの髪だ。コートニーは体全体がひとつの大きなそばかすである。その肌はぶーんと無垢のうなりを立てる。大きな瞳は、ある原初的な遺伝子、彼女の父親を素通りしていった遺伝子が伝える叡智をたたえている。おれは彼女を片手で抱くことができる。片手で彼女を頭上に掲げたまま、階段を走って上り下りすることができる。アパートの屋根から彼女をぶら下げることもできる。彼女は少しも怖がらず、きゃっきゃっと笑うばかりだ。彼女にとっておれは世界で一番愉快な人間である。おれは彼女の道化師に生まれついたのだ。おれの胸は彼女のことでいっぱいだ。彼女を見ているだけで、胸がはり裂けそうになる。

　こんなに素晴らしいものが、それを手にする値打ちなんてまるでない人間に与えられるなんて。この宇宙もまんざら捨てたものじゃないということなのか。

　おれはお前を捨てようとしている。

　お前のせいじゃない、メーガンがおれにコートニーという素晴らしい贈り物をしてくれたのは。もちろん、この救済のうずきのさなかにも、暗闇はおれに接吻しつづける。それはおれも否定しない。お前と、おれの娘、その両方を愛するに十分な愛がどこかにあるはずなのだ。太陽と空の下に開いた井戸の口から、湿った、真っ暗な、熱い底に向けて吊されたたった一本のロープのように、まっすぐに垂れ下がる愛。同じ一本のロープ。だがおれは善良であろうと努力する。わが子の母親の中心に射ち込んだこの瞬間を確固たるものにしようと、おれは努力する。その瞬間が生んだ子供が、いまおれに返されているのだ。数か月前に爆発した星の光。それがいま訪れたのだ。

もうここに来ないでほしい。

大鼠横丁のおかみには伝言を送ってある。もうあの部屋は要らない、と。

70

夏は過ぎていく。我々の金が底をついてくる。メーガンの両親が、報復に仕送りを打ち切ったのだ。孫娘が生まれたと聞いたら、向こうの出方も変わるかもしれないが、当面はメーガンの貯金と、もうやめてしまったおれの仕事からのささやかな蓄えでしのいで行くしかない。おれは子供と一緒に家にとどまり、メーガンが職捜しに行く。普通とはあべこべだが、おれが真っ昼間から街をうろうろするわけには行かない。ホルッとその部下たちが見張っているからだ。メーガンはウィーンを出られたら、とも思うが、そんなことを企てても逮捕されるのが関の山である。メーガンは何も質問しない。不透明な部分はいろいろあっても、とにかくおれを一人占めにできて幸福なのだ。彼女は最近、盗みを働くようになった。食べ物、食器、家具、本、何でも万引きしてくる。ドレッサーやベッドやソファを抱えて家に帰ってくるのだ。おれが部屋で待っていると、階段から今日の犯罪の収穫の音が聞こえてくる。降りていくと、下にはテーブルやらトランクやらが、身の丈百四十センチの彼女の背中に載っている。かくして我々のアパートに、ウィーンの最高級の店の調度品が揃う。犯罪生活に移行するにあたって、彼女はさしたるためらいも示さなかった。まあ独墺（どくおう）併合が決断を楽にしてくれたことも確かだ。結局のところ、オーストリア人からではなく、ドイツ人から盗んでいるのだから。政治的行為として見ればいいのよ、と彼女は説明する。だがおれとしてはそういうふうに考えてこの行ないを安っぽくしてしまうつもりはない。おれは一日の大半を洗濯に費や

CamScannerでスキャン

している気がする。毎日洗濯物を抱えて屋上に上がり、ロープに干す。屋上からは西駅が見える。二キロと離れてはいない。おれは一日じゅう策略を練る。だが何のアイデアも生まれてこない。出ていってくれ。

時おり、向かいの家の窓から、誰かがじっとこっちを見ているのが見える。スパイだ、とおれは思う。奴らのスパイ、お前のスパイ。

チェコスロヴァキア人ももうすぐドイツ人になるだろう。我々みんなが、お前を愛する神に触れられ、ドイツ人魂に目覚めるのだ。

コートニーはおれの肩の上で暮らしている。そこだけが彼女にとって十分高く、十分正しい場所なのだ。ほかの場所はどこも地面に近すぎる。屋上に上がり、スパイたちに見守られながら、おれは彼女を空中に投げ上げる。彼女はきゃっきゃっと笑う。彼女はおれの目ほどの大きさの手でおれを目隠しする。そしておれに挑む。あたしが創造した暗黒の世界で生きてみてごらんなさい、と。おれは恐怖を装い、悲鳴を上げる。彼女はますます大声で笑う。その声を聞いて、おれは彼女をぎゅっと胸に抱きよせる。何かが見えてくる。彼女をおれの大きさで護ろうと、彼女をおれの大きさの中にとけ込ませようと、おれは彼女を抱きしめる。何かおぞましいものが見える。それはおれの視界をさっとよぎり、次の瞬間にはもう消えている。彼女は胸に抱かれるのを嫌がり、おれの背中から世界を見たいと駄々をこねる。ほんの一瞬、おれはその要求を無視し、そのまま彼女を抱いている。心のうちにとどめようもない光景、とどめておきたくもない光景を見て、おれの中で何かがすうっと落ちていく。まるでおれの腰より下は単なる夢にすぎないかのように。おれが本当は、

虚空に根を下ろした一本の木であるかのように。

71

夏の終わりのある晩、おれは真夜中に目を覚ます。何かが屋上で待っているのが感じられる。メーガンの隣に横たわったおれは、その感触を無視しようとする。おれはメーガンの方を向き、眠ったままの彼女の中に入る。だが、天井に背を向けているあいだも、メーガンの中に入っているあいだも、屋上に何かが囚われているという感覚は消えない。とうとうおれは、固くなったまま彼女から身を離す。おれはベッドを出る。メーガンが眠そうな声でおれを呼ぶ。何でもないよ、とおれは答える。月明かりで、まだ固くなっているのを見られないように、おれは彼女に背を向ける。おれは寝室を出て、コートニーの揺りかごのかたわらを通りすぎる。ドアを開け、裸のまま階段を上ってゆく。そして屋上に通じるドアを開ける。おれは依然として勃起している。さらに階段を上り、てっぺんまで来たところで立ちどまり、耳を澄ます。屋上から何か音がする。おれは屋上に足を踏み入れる。ウィーンは光の膜に覆われている。屋上は白く、四角い。覚えのある感覚が波のようにおれを襲う。おれはじきこの波に溺れてしまうだろう、という思いがする。どこかの水底まで沈んでいって、どこかの潮に流されて水中を漂うのだ。おれはそれがたまらなく待ち遠しい。一刻も早くそうなってほしい。おれは屋根をよじ上る。溺れ死に、凍りついたおれは、いずれ誰もいない桟橋にぶつかって、粉々に砕けてしまうだろう。屋根の一角の、奥まった空間の隅に、一羽の鳥がいる。さっき聞こえたのはこの鳥の声だ。おれは鳥に手を伸ばす。と、もうひとつ別の音が

CamScannerでスキャン

して、おれはふり向く。尖った屋根の裏側から、取り澄まし、落着き払ったお前が出てくる。これも当然の報いなのだろう。お前を追い払った罰なのだろう。きっとお前はいままでずっと、下の部屋でおれが妻とベッドを共にしているあいだ、この屋上で眠っていたのだろう。俺には妻がいるんだ、とおれは言う。娘もいるんだよ。「私はあなたの妻になりたいと思ったことなんか一度もないわ」とお前は答える。「あなたの娘になりたいと思ったことだって」。お前はおれに近づいてくる。そして我々のあいだの煙突のところで立ちどまり、煙突の上にかがみ込んで、おれの目の前で身をくねらせる。お前の暗い中心がおれに向かって開く。「お望みなら、私を妻と呼んでいいのよ」とお前はささやく。「お望みなら、娘と呼んでも」。お前の中に入るまで、おれはほとんど息もできない。我々の前のどこかで、靄に包まれたウィーンが目くばせし、うめき声を上げる。「お好きなように、何と呼んでもいいのよ」。ああ、ゲリ、とおれは陽光の糸のようなお前の髪の中にささやく。おれはお前の腰を抱え、お前を抱きよせる。お前の喘ぎが、くねくねと、地面に滑り降りていく。ああ、ゲリ、とおれはもう一度言う、お前の青い目に向かって。おれはお前の胸をぎゅっと握り、両手をお前の首や肩に走らせる。おれの指がお前の顔に触れる。お前の口もとに、あざがひとつある。精液が混沌の中でおれから泳ぎ出る。でもどこで、と、あざに触れながらおれはうめくのがやっとだ。でもどこでこんなあざができたんだ?

72

今朝おれは大風横丁に戻る。メーガンはひどく悲しそうな顔で見送る。通りからおれが顔を上

げると、まだ窓辺にいる。おれは何の釈明もしない。前のアパートに戻ると、ドイツ人たちが待っている。一人の兵士がおれを見て、あわてて電話をかける。もう一人の兵士が銃を持って玄関先から顔を出し、最初の兵士の姿を捜す。おそらくこいつらは、おれを見つけ次第逮捕するよう命令を受けているのだろう。そしておそらく、いかなる状況においてもおれに危害を加えてはならないという命令も。二人は近づいてくる。おれは一人を殴り飛ばす。撃てるもんなら撃ってみろ、とおれは奴らをあざ笑う。奴らとしては、ホルツが来るまで待つしかないのだ。おれは二階に上がっていく。おれの部屋には誰か別の人間が住んでいる。太った新ドイツ人の男だ。おれがドアを開けると、男はベッドから飛び出す。おれはそいつの持ち物を片っ端から手に取り、窓の外に放り出す。ハイル、とおれは男に敬礼する。そして階下の兵士たちに敬礼する。宿のおかみが階段を駆け上がってくる。おれを見て、おかみの目が大きく開く。彼女は悲鳴を上げる。おれは彼女にも敬礼を送る。またたく間にホルツがやって来る。ちょうどおれが太った新ドイツ人を階段の下に投げとばそうとしているところで、ホルツは階段を上がってくる。彼はおかみをなだめ、心配は要らないからと階下に追い払う。そしておれの方を向いて言う。バニング、何て騒ぎだ、と。彼はおれにひどく腹を立てている。だがその反面、もう二度と逃がしてはなるものかとも思っている。彼は言う。私たちは契約を結んでいるのですよ。滑らかな、がっかりしたような声。奴に伝えろ、とおれは言う。俺は彼女とファックしているんだと。奴に言え、俺は年じゅう彼女とファックする、彼女は俺のためにベッドで歌ってくれる、自分の髪でベッドに縛りつけられて。俺はいろんなやり方で彼女とファックする。奴にそう言うんだ。奴に伝えるんだ、とおれはホルツの顔に自分の顔をくっつけ

んばかりに近づけて言う。俺が彼女を何度も何度も凌辱していることを。一瞬のあいだ、ホルツは何も言わない。かすかに微笑むだけだ。でもバニング、とようやく答えが返ってくる。彼はそれを当てにしているのですよ。

73

一九三九年。愛は荒れ狂う。怒濤のように、真っ赤に煮えたぎってお前の中から出てくる。つのる一方の欲望を抱え、おれは何度もお前のもとに戻っていく。これらドイツの夜にあって、おれたちは井戸の底に座り、衝動に貫かれた身を合体させる。朝が来るとおれは、愛のロープをつたって光の方へ、おれの子供が待つところへ、上っていく。メーガンはだんだんふさぎ込みがちになっていく。孫がきっかけとなって両親は仕送りを再開し、彼女は犯罪生活と縁を切る。街はひっそり不気味に静まりかえっている。オーストリアの新聞は「ポーランドの挑発」について書き立て、スイスの新聞は別の見解を示す。九月にイギリスが宣戦布告を行なう。メーガンの悲しみが、枕の上の彼女の髪のように広がってゆく。祖国とも家族とも、いっさいの連絡は断ち切られてしまった。いまは戦時中なんだよ、とおれはお前に言う。そう聞かされたお前の顔に、見逃しようもない恍惚の酩酊（めいてい）が浮かぶ。汚辱を求めて、お前は甘い声を出す。「彼は見ているの？」とお前はおれの下でつぶやく。おれは部屋の影の中に彼の姿を捜す。お前の内部の熱が、おれの雷管を爆発させる。年の暮れも近づいてくると、人々はこの戦争もじき終わるものと確信するようになる。が、訪ねてきたホルツを見ていると、彼はどうやらそこまで楽観してはいないようだ。むしろ事態がここまで進

展してしまったこと自体に呆然としているのだ。ほどなくして、ふたたびドイツ人が急増する。デンマーク人、ベルギー人、オランダ人。一九三九年秋のある日の午後、もう一歳半近い、よちよち危なっかしい足取りの娘と一緒におれはフォルクス公園にいる。けだるい時間を散歩して過ごすウィーン市民たちを眺めながら、ふとまわりを見ると、おれは小舟に乗っている。小舟は水上に浮かび、あたりにはほかにも千あまりの小さな舟がひしめいている。ひとつの都市が背後の沼の上に漂い、東の方でアドリア海がきらきら光る。小舟の反対の端には一人の漁師がいて、わかっているよと言っているような顔でおれを見つめている。おれの中の何もかもが痛む。おれは老いている。おれは顎ひげを生やしている。それは三十年後のことだ。船底には、茶色のマントにくるまれて、真っ白な細い髪、死んだ目をした、一人のひどく年老いた男が横たわっている。老人はじっとおれを見上げている。これは幻覚ではない。夢でもない。小舟が揺れているのがこの上なく確かに実感できる。おれは老人に目を向け、それが誰だか思い出そうとする。なぜなら、おれにはわかるのだ、前にもこの老人を見たことがあることが。そして三十年前のかすかな記憶がよみがえる。ホテルのドアごしに、何秒間かのあいだ彼の視線を捉えたときの記憶が。

74

一九四〇年。こっちへおいで。お前にしてやりたいことはまだ山ほどあるんだ。パリはすでに陥落した。おれは一度パリに行ったことがある。おれにはパリから来た知りあいがいた。それとも我々が別れたときにそいつがパリへ行くところだったのかな？　そいつは何という名前だったろ

う？　我々はどこかの駅のプラットホームで握手をした。まさか奴らだってパリに攻め込みやしないよ、とおれは言った。そして彼は行ってしまった。大嵐横丁の部屋の窓に、飛行機の編隊がその黒い姿をよぎらせる。おれが生まれる前の時代と同じだ。お前がおれの下で喘ぐのが聞こえる。窓から吹き込んでくる風に、お前の髪はくしゃくしゃに乱れる。ここはパリだよ、ゲリ。モンマルトルに煙が上がり、ヴァンドームの円柱に派手な色の口紅がべっとり塗られている。

　ホルツは落着かない。おれはつねにドイツ人に見張られている。アパートを出て家族のもとに帰るときなど、奴らを追い払うのが一苦労だ。ホルツはおれがまた行方をくらますのを恐れているのだろうか。それとも何か別に理由があるのだろうか。最近彼はよくおれの部屋にやって来て、何時間もじっと座ったまま、バルバロッサとかがどうのこうのと、一人で取りとめのない話をしていく。おれとお前にしてみれば邪魔もいいところだ。彼が早く帰らないものかと、お前がじれったそうに足をとんとん叩いているのが見える。お前が自分の体に触れ、舐めるのをおれは眺める。それが要するに何の話なのか、ホルツはなかなか明かさない。「依頼人の生涯の夢のひとつです」と大げさにほのめかすだけだ。どうせ何か恥知らずの背徳行為だろう、とおれは考える。

「しかし……」とホルツは言う。

　しかし？

　一晩じゅう、ホルツは煙草に火をつけてはそれを消す。椅子から立ち上がり、部屋の中を歩きまわり、また腰を下ろす。「依頼人は心をかき乱されているのです」とホルツは言う。心をかき乱されている？　おれは笑う。ホルツはおれが笑うのを好まない。お前は奴の心をかき乱しているそう

だよ、ゲリ。お前のせいで、生涯の夢に身が入らないんだとさ。「バニング」とホルツが言う。そしてその瞬間、問題が深刻であることをおれは悟る。「バニング」。おれは笑うのをやめて、彼の言葉に耳を傾ける。「わかって下さい、私の言おうとしていることを」と彼はつづける。「致命傷になりかねない問題なのです。ことは政治的次元に入ってしまったのです。彼は以前のように集中できなくなっています。バルバロッサはこの戦争にとってきわめて重要です。そのタイミングも非常に微妙なのです」。彼はまた部屋の中を歩きまわっている。「それが春に起こらなければ、それがあまり延びてしまえば、次の春まで待たねばなりません。逆にもし彼が待ち切れなくなって、あまりに性急にことを進めようとするならば、ますます具合が悪いのです……」。彼は言葉を切り、おれの方を向く。「九年前に彼女が問題となったとき、彼らは彼女を取り除きました。今度もまたそうするでしょう」

彼女を取り除く？　暗闇の中で目をぱちくりさせながらおれはホルツを見る。「どういう意味だ？」とおれは訊ねる。「彼女を取り除くって？」

「その意味は」ベッドの上で体を伸ばしながら彼は言う。「私を取り除くということです。あなたを取り除くということです」

「じゃ俺をクビにすればいい」とおれは笑って言う。「じゃなけりゃ俺があんたをクビにしてもいい」

ホルツが夜の中でジェスチャーをする。「ところがですね」と彼はまた話し出す。「ところが、彼らの中でも、一部の人々は」おれはただちに彼自身もその一人であることを悟る。

CamScannerでスキャン

「一部の人々は、バルバロッサが大失敗に終わる可能性があると考えています。破局の引き金にもなりかねない、と。そしてそういう人々は、彼がバルバロッサのことなどきれいに忘れてくれれば、と願っているのです。歴史をこれ以上、許されうる以上に押し進めてしまう前に」。また取りとめもない話がはじまった。独り言か、あるいは誰か全然別の人間に喋っているような調子。「ナポレオンも歴史をこれと同じところまで突き進めました。そして歴史に突き返されたのです」。ホルツの奴、すっかり神経が参っている。「私たちの一部にとっては、彼女こそ国を救う女性なのです。彼女こそ彼を彼自身から救う女性なのです」

「明日の晩は特にすごいのを考えるよ」とおれはとりなすように言う。

ホルツは眉間に皺を寄せる。ここで何か適切な文句さえ思いつけば、彼はおれに説教なり脅迫なりをするだろう。あの人もう帰らないかと思ったわ、と彼がいなくなってからお前が言う。

コートニー、そばかすのチビ助。お前をもってしても、これぱかりは救済できないのだね。

75

一九四一年。バルバロッサは中止される。ホルツがおれにそれを伝える。それがドイツにとって良いことだと彼が考えているのがおれにはわかる。そして、彼にとってはそれほど良いことではないかもしれない、と考えているのも。ベルリンに安堵と憤怒が広がる。政治的バリケードをはさんで安堵と憤怒が睨みあう。頭上に飛びかう十字砲火を避けるように、ホルツは身をかがめて走る。十五年間、依頼人はソビエトをドイツにすることを夢みてきた。いまや彼は敵どもの[illegible]

かまけ、仲間たちは絶望する。俺はソビエトを救ったんだぜ、とおれは笑って、お前に言う。俺は世界を救ったんだよ。お前は手のひらにおれをぎゅっと握り、おれを愛撫する。「ほんとにいい子だこと」とお前は答える。我々はお祝いをする。お前の脚がお前の瞳と同じようにきらきらと光る。部屋の外の階段で、結核気味の男たちがごほごほ咳込む。床や排水管が街路のようにごろごろと鳴る。ドナウ川から立ちのぼるロシアのささやきが、すすり泣きに高まる。「彼はここにいるの？」とお前は訊く。見ると、その通り、彼がいる。おれはたぶん、まさか彼がここに来るとは予想していなかったのだろう。でもお前ははじめからずっとそう言っていた。お前の言う通りだったのだ。彼が欲しいかい？　お前は顔を上げて彼を見る。彼は部屋の隅でごそごそ音を立て、身を縮めて暗がりに隠れ込む。「ずいぶん安っぽい男でしょ？」。そうだな。この男なら前に見たことがある。大した男じゃない。「あなたと同じくらい大きいかしら？」。とんでもない、何てこと言うんだい、とおれは笑って言う。おれはお前の中に入ってゆく。彼は壁の角をぎゅっと握りしめる。あんまりきつく握ったせいで、指のあいだから血がしたたり落ちるのが見える。ゲリ、ゲリ。「ああ、ああ、ああ」お前はほとんど悲鳴に近い声を立てる。でもそれはおれに向けられた声だ。彼にではない。

76

一九四二年三月。おれはソビエトを救ったが、イギリスに災いをもたらした。今日、ブリテン島への侵攻がはじまったのだ。いままでソビエトに向けて蓄積されていたドイツ的狂乱が、今度は海峡の向こう側に向けて放たれた。かつては太平洋進軍を狙っていた日本も、アジアの英国植民地に

CamScannerでスキャン

目を向けはじめる。数か月前ついに戦争に引きこまれたばかりのアメリカは、目下のところイギリスの命運を見守るしかない。電話連絡も不可能となり、家からの沈黙にメーガンは痛ましく身をよじらせる。おれは時おり、自分がある種の明晰さを獲得したように感じる。何もかもがはっきりと見えるようになった気がする。犬嵐横丁のアパートを見回し、ここには誰もいやしないんだ、と自分に言い聞かせる。街なかでは、降伏のニュースがいまにも訪れるものと、人々が息をひそめて待ちうける。と同時に、内閣でいろいろ陰謀があるらしい、という噂が不安げにささやかれる。何かが起きているんだよ、と人々はおれに言う。べらべら説明をはじめぬよう、おれは懸命に自分を抑えねばならない。いいかいあんたたち、奴はいなくなっちまったんだよ。行方不明になっちまったんだよ。そう言ってやりたい欲求をやっとのことでこらえる。奴はもう内閣にいないんだよ。奴はここに、ウィーンにいるのさ。俺のアパートに住んでいるんだ。部屋の隅につっ立って、俺たち二人ともが愛している女が、俺と一緒にいるところを見守っているんだよ。

時おり、おれはすべてを、何の障害もなしに見ることができる。おれの部屋の窓から見たあの二十世紀のすべてを。たとえば今日、ラジオからニュースが聞こえてきたとき。窓から外の通りを見たときのことだ。いつもと同じ街路、いつも見ている建物、おれの部屋に視線を投げ返すいくつもの窓。でもそれは違っていた。それは違った瞬間だった。違ったいまに属する、違った瞬間だった。おれが窓から見たのは、おれの二十世紀と並んで、ちょうどひとつの川が細長いナイフ形の島によって二つに裂かれるように、その隣を流れていくもうひとつの二十世紀だった。同じ川、だが別の川辺、別の土手のかたわらを通り過ぎていく。それはあのときに分岐した二十世紀の川だっ

た。蠟燭店の向かいの家の窓に、おれがお前の姿を見たときに。お前の下であの乱痴気騒ぎが起こっていたときに。今日、おれの部屋の窓の向こうに見えた二十世紀の中では、お前の姿はどこにも見えない。その中でおれは決してお前を見ず、決してお前のことを書かず、お前の創意が特別な依頼人たちの関心を惹くこともない。その中では邪悪な精神が過去の激しい愛の再来によってかき乱されることもなく、バルバロッサが中止されることもなく、したがって悪は世界を支配するに至る。いや、あるいは侵攻計画は延期されたのち実行され、それによってホルツが予測した通りの破局が訪れ、したがって悪は全面的に破滅するに至る。部屋の窓からこの二十世紀を見ながら、おれはそれにたまらなく憧れた。なぜなら、その世紀の中では、おれもまた自分の二十世紀の一部を贖（あがな）われているからだ。だがおれは知っていた。そんな二十世紀の姿など、まったくの偽物でしかないことを。おれは知っていた、このような世紀にあって、悪の支配も、悪の破滅も、等しく例外的事態でしかないことを。なぜなら、この世紀とは、もう一人のドイツ人が、もじゃもじゃの銀髪の小男が、その新たな狂おしい詩情でもって、あらゆる絶対を書き去ってしまった世紀だからだ。世紀の黒時計が、針をはぎ取られ数字をはぎ取られた場だからだ。神が理解しうるいかなる時の尺度も持たない時間。そのような時間において、記憶とはそれらの記憶を捏造する熱情以外の何ものも意味しない。それらの記憶の前で、それらの時計の彼方で、善は悪を、走りすぎていく汽車に乗った男を眺めるように眺める。男は自分の目には少しも動いていないが、通りすぎる田園の目には、飛ぶように走り去っていくように見えるのだ。こんなことはありえない。断じてありえない。たしかにこうだったら素敵だと思う。悪がいまもなお破滅しうるものならば素晴らしいと思う。だがおれは

あの窓にお前の姿を見てしまった。そして真の二十世紀がそれ自身を発見し、それが生きたかもしれない嘘を捨てたのだ。お前がもしあそこにいなかったら生きていたかもしれない嘘を、二十世紀は捨ててしまったのだ。

ここから西、ドナウ川の美しい川辺、マウトハウゼンの村に収容所がある。屋上でコートニーの洗濯物を干していると、その煙が見える。おれはやっと彼の名前を思い出す。カール。毎日スイスから、逃亡したユダヤ人を乗せた列車が入ってくる。スイス人は律義に彼らを追い返してくるのだ。

今晩ホルツはある案を持ちかけてくる。このアパートに来るようになってからの四年半のあいだに、ホルツは二十歳は老け込んでしまった。ヨーロッパ流の礼儀も気品も、その顔から見る見る剝げ落ちていく。目は恐怖にどんより曇り、肌は黄色に変わった。髪は束になって抜けていく。煙草で体もぼろぼろだ。街ではいろんな噂が流れている。「彼女を殺しなさい」とホルツは言う。え?「彼女を殺しなさい」。冗談じゃない、とおれは答える。書くのをやめろというんだったら考えてもいいんだぜ。俺と家族が国外に出られるように手配してくれ。そうすりゃあっさり消えてやるよ。「それでどこへ消えるというのです?」とホルツはぞっとするようなしゃがれ声で言う。「彼の手の届かないところがどこにあります? 唯一考えられるのはアメリカだ、でもあなたはアメリカに帰れない」。ホルツはおれをじっと見る。「あなたのアメリカでのことは我々も知っています」。ホルツはベッドの縁に腰かけている。目の焦点がいま一つ定まらない。「翻訳者は軟禁状態にあります」とホルツはようやく言う。「目下新しい一章一章が武装兵士によって運搬されているので

す。事態はそこまで来てしまっているのです。Zはあの貴賓室の中を歩きまわりながら待っているのです」。四年前にあそこで金髪の女を見たがな、とおれは言う。「あんな女は何でもありません」とホルツは答える。「あの女のことなど、彼は何とも思っていません。彼の心にあるのは、あなたが彼のもとに連れてきた女だけなのです。彼女を殺してしまいなさい」。数分のあいだ、我々は二人とも何も言わない。とうとうおれが口を開く。翻訳者にやらせるんだな、俺はやらん。ホルツはうなずく。その顔はどうやら、もしかりにおれが同意したとしても、もはや事態を元に戻せはしないことをはじめから承知している様子だ。おれはこのとき初めて、ホルツが少し気の毒になってくる。奴はすっかりおかしくなってしまっている。たぶんおれだって同じなのだろう。窓の外を見ろよ、とおれはホルツに言う。我々は暗闇に座り、窓の外の人気のない街を見る。おれは彼にもうひとつの世紀を見せてやりたいと思う。こうしたことといっさいが起こらない世紀。ホルツが王国における自分の地位か祖国の死か、そのどちらかさえ考えていればいい世紀。だが彼にそれが見えるとは思えない。

77

おれとお前のあいだの隔たり。最近おれたちはよく喧嘩をする。ひとまずそれは彼をめぐっての喧嘩ということになるだろう。彼は部屋の片隅にじっと座っているばかりだ。我々三人が退屈しているというのではない。というよりもむしろ、我々の悪の足し算が、我々の肉体の足し算によってねじ曲げられてしまっているのだ。おれは我知らず娘を恋しく思い、アメリカを恋しく思う。

メーガンのもとに帰る時間が日ましに早くなる。メーガンはますます自分の悲しみの中に沈み込んでいく。おれが帰ってきても、もうおれを見ようともしない。おれは彼女を抱きよせ、イギリスは絶対なくなりやしないよ、と嘘をつく。

78

一九四二年八月。イギリスは降伏する。激戦の四か月だった。ドイツ軍も被害甚大だったが、それももう終わりだ。ロンドン、マンチェスター、バーミンガム、エジンバラ、みんななくなってしまった。グラスゴーの海港だけがどうにか包囲を持ちこたえている。今晩、おれがお前の足首を抱き、お前を貪り、お前がおれの唇に速射砲撃を浴びせている最中に、ラジオからニュースが流れてくる。その内容を察しているドイツ軍が、ロンドンで受信した電波を妨害したりもせず、逆にみずから全ヨーロッパに向けて送り出しているのだ。イギリスの首相が喋っている。「我々は爆弾にも生き残れる」と彼は言う。「戦車にも生き残れる。剣にも、銃弾にも生き残れる。我々は千年の歴史に生き残り、政治の嵐の気まぐれにも生き残る。だが、敗北に生き残ることだけはできない。国民諸君よ、敗北はすべてを終わらせてしまうのだ。申し訳ない。私が犯した愚行に永遠の呪いが訪れることで、わが国をこの事態から救えるものなら、喜んでそれを受け入れたいと思う。だがいまや、永遠の呪いをもってしても、何ひとつ贖うことはできない。神よ、王を救いたまえ。神よ、帝国を救いたまえ」。黒い静寂の一瞬があり、それから、くぐもった、ぼん、という音がする。首相の重い体がマイクにぶつかる音。千キロ以上の彼方で、何かが彼の中からにじみ出てくるのが聞こ

える。その黒い静寂の中で、彼はおそらく醒めた笑いを発したことだろう。彼は思い知ったにちがいない。かつて自分が、ここにこそ世紀の良心があるのだと思っていたところには、実はたった一言の洒落た科白、寄席の作り笑いがあるだけなのだと。おれは恍惚に喘ぐお前を置いて立ち去る。

「どこへ行くの?」とお前が訊くと、メーガンのところへ、とおれは答える。行ってやらなくちゃ。

「行かないで」とお前は言う。行かないでくれ、と片隅から彼が呼びかける。この糞ったれ、とおれは彼に言い返す。おれが階段を半分下りたあたりで、お前がもう一度、行かないで、と呼びかける。

79

放送があってからいくらも経たないうちに、街は人波であふれ返る。ヨーロッパの戦争は終わった、と人々は叫び、喚声を上げ、抱擁を交わす。今度はアメリカに宣戦布告するのだろうか、と口に出す者もいる。浮かれ騒ぐ人々をかきわけ、クラクションを鳴らす車をよけながら、メーガンとコートニーのもとへ、おれはひたすら走りつづける。街角に配置された非戦闘員の歩哨たちが、五分前にイギリスから戻ってきたばかりであるかのような喝采を浴びる。運河の桟橋では、小さな凱旋パレードがいくつも突発的に発生している。アパートのある通りにたどり着くと、おれたちの部屋に明かりが灯っているのが見える。喧噪のただなかでぽつんと光る沈黙の光。

おれは階段を駆け上がる。ドアが半開きになっている。何かがあったことをおれは知る。

明かりはみんなついている。すべてはいつもの場所にある。おれは二つの部屋を見てまわる。お

れは彼女の名を叫びはしない。メーガン、と普通の口調で言うだけだ、ただ単に答えが返ってこないことを確認するために。答えは返ってこない。コートニーの姿はない。

おれは思っている。暑い晩だし、表はにぎやかだ。きっと出かけたんだろう、と。おれはそう思う。だがそんなのが嘘っぱちであることをおれは知っている。おれはアパートで待つ。十分、十五分、二十分と、時間が痛みを引きずりながら過ぎていく。やっとのことでおれが顔を上げると、同じアパートの住人が一人、ドアのところに立っている。下の階に住んでいる老人だ。おれを見たとたん、老人は逃げ出す。おれが下の階にたどり着いた頃には、もう自分の部屋に逃げ込み、中から鍵をかけてしまっている。開けろ、とおれはドアを力いっぱい叩く。おれはノブをがちゃがちゃ回し、いまにもそれをドアからむしり取ろうとしている。静かにしてよ、と廊下の向かい側の女が抗議する。

「俺の家族に何があったんだ」とおれは言う。

「兵隊が来たわ」と女は言う。

おれはまた外に出る。人々は歩道を走りまわり、ビールをがぶ飲みし、大声を上げている。通りの向かいに、一目でスパイとわかる男がいる。初めて見る奴だが、この五年間おれをつけ回してきた奴らと同じ顔をしている。こいつらはみんな同じ顔をしているのだ。おれは道を渡ってスパイのところに行く。ほかのあらゆる有能にして聡明なるスパイと同じく、奴は顔をそむけ、おれのことなどまるで気づいていないみたいにふるまう。こっちがすぐ前まで来ても、なおも知らん顔で、おれなぞ目に入っていないふりをつづける。おれは奴の腰を抱え込み、頭上に持ち上げ、街灯にぶら

CamScannerでスキャン

下げる。そしてその顔にびんたを喰らわせ、「ホルツを連れてこい」と命令する。浮かれ騒いでいた連中が、何ごとかと集まってくる。これはきっと何か政治的な行為にちがいないと連中は思っている。事実いまこの瞬間には、すべてが政治的なのだ。「ホルツを連れてこい」とおれはもう一度言う。おれの言葉の訛りを聞いて、連中の顔が険しくなる。シャベルでこいつの頭を殴ってやろうか、と思っている奴もいるだろう。いっそひと思いに撃ち殺してやれ、と思っている奴もいるかもしれない。「そいつに手を出すな！」とスパイが連中に向かって金切り声を立てる。おそらくいまこの瞬間、おれは世界の誰にもまして無敵の存在であるにちがいない。

おれはスパイを街灯から下ろし、地面に立たせる。「あそこで待ってるからな」とおれは言って、アパートに戻る。

四十分くらいして、ホルツがやって来る。ひどい顔をしている。おれを見ても、その顔は少しも晴れない。ホルツはアパートに入ってくる。おれはここに着いたときと同じ場所に座ったきりだ。ホルツは室内を見回し、何が起きたかを悟る。彼がおれと同じくらい驚いているのを見て、おれの中で何かが沈む。やっとおれにもわかってきた。ホルツは状況をコントロールできる立場にはいないのだ。「連れていかれたよ」と、おれは座ったまま言う。

ホルツはしばらく何も言わない。大英帝国を占領した直後の国の国民にしては、あまり晴れがましい顔とは言いがたい。「バニング」と彼はやっとのことで言う。まずい切出しだ。奴におれをそう呼ばせるのはまずい。切出しとしてはもう一つまずいことがある。明かりがついているのだ。

「バニング」と彼は言って、哀れっぽく肩をすくめる。

「奴らに伝えろ」とおれは言う。「今夜交換をしようと奴らに伝えろ」
彼は狐につままれたような顔をする。「交換？」
「そうするか、さもなけりゃ奴を殺す。奴らにそう言え。待つ気はないからな」
彼は相変わらず、さっぱりわからないという演技をつづけている。「いったい何の話です？」
おれは首を横に振る。「待つ気はない。Zと俺の家族と引換えだ。一時間以内に」
「Z？」。まったく大した役者だ。それは認めていい。「バニング、あなたは何か……あなたはどうやら動転しているようですね」。一言一言、ゆっくりと彼は喋る。まるでピンのゆるんだ手榴弾を慎重に処理しているみたいに。「Zはベルリンにいるのですよ、バニング。ベルリンに。我々は今晩イギリスを征服したのです」
こいつには真相がわかっていないのだ。だがおれにはわかっている。「あんたと言いあってもはじまらん。上の連中に話を持っていってもらおうじゃないか。ウィーンにいまいる奴で、誰でもいい、ちゃんと手の打てる奴に連絡しろ」。おれは立ち上がる。「俺は向こうのアパートにいる。今夜交換したい、と伝えろ。待つ気はない、とな」。おれは彼のかたわらを通りすぎる。我々の肩と肩がぶつかる。表に出ると、さっきのスパイがさっきと同じ街灯のところで待っている。おれを見て、スパイはあとずさりする。そして明かりのついた窓を見上げる。「向こうのアパートに帰る」とおれはスパイに教えてやる。一瞬間を置いて、スパイはこっくりうなずく。

大嵐横丁に戻ると、お前はいなくなっている。

荷物をまとめて立ち去った、というのではない。どのみちお前は荷物なんか持っていなかった。一本の口紅、あれも捨ててしまったにちがいない。もしかしたらおれのコートを一着持っていって、いまごろはそれを肩に巻きつけて街を歩いているかもしれない。

彼はまだ部屋の隅にいる。おれが近づいていくと、ますます隅っこに身を隠すばかりだ。「知らないのか」とおれは彼に言う。「あんたの戦争は終わったんだぜ」。おれは椅子に腰かけ、待つ。「ちゃんとシャツを着てろよ」

一時間半が経って、街じゅうの騒ぎに混じって、その車の音が聞こえる気がする。そしてドアが開くのが聞こえる。もっともどこの家でも、ドアは一晩じゅう開いたり閉じたりしている。だが階段の足音までは間違いようがない。ホルツのノックは乱暴で、せわしげだ。

彼はおれがドアを開けるのを待ちもしない。それで結構、こっちはどのみち開けてやる気なんかないんだから。が、明かりをつけたその男は、ホルツではない。

ドアのところに立った兵士たちが銃を向ける。

「俺に危害を加えるのはまずかろうぜ」とおれは奴らに言う。「あんたたちのボスが気を悪くするんじゃないかね」。おれは部屋の片隅をさし示す。彼が毎晩毎晩うずくまっていた片隅。そこには誰もいない。

時おりおれには、何もかもがはっきり見えることがある。すべてを明断に見通せることがある。ホテルに向かう途中、人々は車のボンネットをばんばんと叩く。中のドイツ人たちは車を加速さ

せ、人々はあわてて脇によける。勝利の果実のおこぼれにオーストリア人がどの程度あずかれるのか、それはまだわからない。車はホテル・インペリアルに到着し、おれは四年前と同じ裏口を通される。我々はエレベーターに乗り込み、最上階近くのフロアで下りる。兵士たちはおれを貴賓室に連れていく。

何もかもがはっきりと、明晰に見える。いまこの時点で、おれが思い出すことのうち、間違いなく現実だと思えるのは、親父の馬小屋で馬たちの世話をしたクリスマスの日のことだけだ。そしていまおれは貴賓室の一番奥にいる。反対側には足掛け台のついた巨大な窓があり、その向こうにウィーンの旧市街が見える。シュテファン聖堂が、一本の短剣のように夜空に突き刺さっている。窓は開いている。むっとする八月の暑さ。反対側の壁にはもうひとつのドアがあり、そのまわりにソファや椅子が数脚、机がひとつある。ソファと椅子には三、四人の将校が座っている。今夜のイギリスでの事態を考えると、これだけお偉方が集まっただけでも大したものだ。机の向こうに、髪の黒い小男が一人いる。新聞で見る写真より少なくとも七歳は老けている。かつてこの男はおれの依頼人だった。かつてこの男はおれのために働いていた。彼は悪い足を引きずりながら、机を回っておれの方にやって来る。

おれのいるところに部屋半分の距離まで来ると、彼は立ちどまる。おれにあまり近づきたくないのだ。おれと並んで立ったところで、自分の背の低さがあらわになるだけなのだから。そして彼は指を一本上げ、昆虫の死骸みたいにちっぽけでじっと動かない目をこっちに向けて、一言「嫉妬ではありません」と言う。その言葉を強調するかのように、指はずっと持ち上げられたままだ。し

ばらく経って、彼はようやく手を下ろして、足を引きずり、何か考えごとをしながら部屋の中を歩きまわる。そして立ちどまり、「御紹介しましょう」と言って、将校連中の名を並べる。それから「もちろんホルツ大佐は御存知ですね」と言い足して、おれの後ろを指さす。おれがふり向くと、ホルツが椅子に座っている。一瞬のあいだ、ホルツの様子がどこかおかしいように思える。そしておれの目はホルツの姿に釘付けになる。指は青く、目も動かず、まばたきひとつしない。開いたままの口から蝿が出入りしている。右目から二センチばかり上に、黒い穴がひとつ開いている。インクのような脳味噌の中身が、額から鼻にかけてたらたら流れている。おれの後ろで、将校たちがくすくす笑う。だがXは笑わない。ほとんどびくついているような顔で、じっとホルツを見ている。

「嫉妬ではありません」とXはふたたび、きっぱりと言う。「たしかに彼女は私にとって非常に魅力的な女性でした。それは認めます。だが」と、机の向こう側から身を乗り出して彼は言う。「彼女に対する私の気持ちにしたところで、私が彼を愛する思いに較べれば、物の数ではありません。もし彼女があの人を幸福にできたなら、誰よりもこの私が喜んだでしょう。彼女を自分のものにしたとしても、それ以上に喜びはしなかったろうと思います」。彼はそこで言葉を切る。「私の話がわかりますか?」。おれは答えない。彼としてもどっちだっていいのだ。彼は窓のところに行って、街の彼方を見つめる。「ごらんなさい」と彼はうって変わって明るい声で叫ぶ。「大きな観覧車じゃありませんか」そう言いながら彼はプラーターの方角を指す。今度は将校たちに向かって喋っている。「子供たちを連れてあれに乗ってね……たしか去年だった。去年だか、おととしだか、どっちかだ。下の方の子はまだ小さすぎたがね、上の子たちは大喜びしていたよ」。ふたたび足を引き

CamScannerでスキャン

ずっておれの方に歩いてきながら、彼は微笑んで言う。「子供たち。わが家では六番目が生まれたばかりでしてね」。彼は立ちどまる。おれのそばに寄ることに、さっきほど気後れしていない。いまやほとんど、おれの方が図体はずっと大きいくせに無力であることをからかっているような態度だ。「娘たち」と彼は笑顔で言う。

街が我々の下で怒濤のような声を上げる。おれは立つことも座ることもできない。吐き気がする。

「私はずっと前に知ったのです」彼の声が、おれの頭の中の血が立てるしゅうしゅうという音の向こうから聞こえてくる。「あの人の意志が不可侵であることを。それを軽んじてはならないのです」。将校たちはぼんやり注意をそらしてしまわぬよう精一杯気を張り、椅子に収まった体をもぞもぞ動かす。おれの後ろで音がする。将校たちはそちらを向く。立てかけてあったホルツの体がずり落ちたのだろう。おれはそれを自分の目で確かめる気になれない。Xは何も気がついていない。

「恥ずかしいことに」と彼は言葉をつづける。「私は大きな代償を払ってそれを学びました。もう二十年近く前のことです。生意気な若僧だった私は、ある問題に関し党内であの人に反対したのです。ところが勝利を収めたあの人は、敗れた私を暖かく迎えてくれました。そんなところからも、あの人の度量の大きさがうかがえようというものです。その問題というのが何だったかおわかりですか、ヘア・ジェーンライト?」

「いいえ」とおれはどうにか言う。声を出すのもやっとだが、いまなら何を訊かれても喜んで答えるだろう。

「ソビエトですよ、ヘア・ジェーンライト」と彼は言う。おれはすっかり混乱してしまっていて、それがどういう意味なのかもよくわからないが、とにかくうなずく。彼は肩をすくめる。「さて、彼女をどうしたものか」と彼の声が聞こえる。「つまり、あなたをどうしたものか」。彼は椅子のところに戻り、腰を下ろす。その頭は椅子の背のてっぺんにも届かない。彼は両手で顔をごしごしする。おれは窓と、将校たちと、ドアのところに立った兵士たちを見ている。

「俺はこの街を出るよ」とおれはささやく。そして恐る恐る、彼女たちの名前を口にするのも怖くて、「家族も一緒につれて」と言い足す。

「とんでもない。冗談じゃありません、ヘア・ジェーンライト」と彼は答える。「そんなことをしても何も解決しません。あの人にどう説明したらいいのです？　『彼らを逃してやりました』とでも言えと？　だいいちあなた方はどこへ行くのです？　どこが残っています？　あなた、本気でソビエトに行きたいと思いますか？　どうせあの人に連れ戻されるのが関の山です。あるいはアメリカとでも？」。彼は首を横に振る。「そして、率直に申し上げて、あなたを射殺するわけにも行かない」。彼はおれに向けて指を振り上げる。「私以外の人間だったらたぶんそうするでしょうが。その辺は感謝していただきたいですね。いいですか、ドイツは今日、世界の半分を支配している。それにはいくつも理由がありますが、最大の理由はこういうことだ。我々は人々の神話を支配するに至ったのです。我々は人々が信じていた神話の意味を、別の意味に置き換えて、それを彼らに信じ込ませたのです。そして、ひとつの神話を射殺することとの問題点は、死によってその意味が凍結してしま

うことなのです」

「俺が神話を変えてやるよ」

彼はおれの頭の悪さに心底うんざりし、文字どおり両手を天に上げる。「マイン・ヘア、そのくらい我々が考えなかったとお思いで？」彼はかんかんになって言う。「あの人をごまかせばいいとでもお考えで？　あなたは私のことを何だとお思いです、あの人をおとしめようと策略をめぐらす反逆者の仲間だとでも？　何なら映画を見せてあげてもいい、ピアノ線で肉屋のフックから吊された反逆者たちを撮った映画を。あの人を裏切るくらいなら、この手で自分の喉にコードを巻きつけた方がどれほどましか！　いったいあなたは」懸命に怒りを抑えながら彼は問いつめる。「これがあなたの神話だと思っているのですか？　これはあなたの神話なんかじゃない、ヘア・ジェーンライト、あなたが創ったものじゃないんだ。これはあの人の神話なのです。彼女が死んで以来、十一年のあいだ毎晩毎晩彼の夢のどこかに眠っていたんだ。それは我々の歴史、我々の時間の夢の中で眠っていたんだ」。彼は椅子にどさりと座り込む。「あなたはその中にたまたま迷い込んだだけです。暗闇の中を手探りでうろうろしていた、大きすぎる図体のアメリカ人のでくのぼうにすぎないあなたが、偶然そこに迷い込んで、その夢を目覚めさせたんです。そしてあなたはいまもそれを目覚めさせつづけている。あなたを射殺することはできません。追放することもできない。できるのはただ、あなたの脚、あなたの腕を折ってやること、あなたの舌を切ってやることだけだ。もちろん文字通りにじゃありません。いまや時代は新たな栄光の日々を迎えています。残虐行為だって新しい、より輝かしいかたちを取るのです。だから私は、あの人の神話が生きている場所を歩く脚を

CamScannerでスキャン

切り、そこで伸びる腕を切り、そこで喋る舌を切ってやらねばなりません。私はあなたを、この世界で一番悲しい人間にしてやらねばなりません。生きた人間の体の中に囚われた、死んだ人間に」

手を切り落とすんだったら、胴も切り落とさぬわけには行くまい。どこまで行ったらやめられる？「いいからそうしてくれ」とおれはささやく。「何でもいい、俺はどうなってもいい、頼むからやってくれ」

彼は長いあいだ黙っている。おれの言葉が耳に入らなかったのだろうか。「ソビエト、それが問題だったのです」と彼はようやく言う。「あの人はほぼ二十年前、ソビエトを手にしなければならない、と主張した。私はそれを……間違いだと思った。正しかったのはあの人で、間違っていたのは私だった。だがいま我々はソビエトを持っていない。あの人の不可侵の意志は侵されてしまった。東の国境で、我々は落着かない同盟関係を抱え込んでいる。それについて手を打つにはもう遅すぎるかもしれない。我々はいま現在、ヨーロッパのみならず、アジアをも支配しようと考えている。日本と一緒に……あるいは日本抜きで。アメリカを利用する、というのが妥当な解決策でしょう」。さらに彼は言う。「もちろん、あなたを痛めつけたりはしません。マイン・ヘア、あなたは何も聞いていないのですね」。そして彼は指で机の上をとんとん叩き、ドアの横にいる見張り兵の方を向いて、何か合図をする。ドアが開き、少し間があいてから、その兵士がおれの妻と娘を連れてくる。

おれは何も言えずに立っている。メーガンは茫然とした顔でおれを見る。そばかすからさえ血の気が失せている。コートニーは四歳の女の子特有の傲慢な勇敢さを示し、何度も顔を上げて兵士を

CamScannerでスキャン

睨みつけ、非礼を詫びる言葉を待っている。メーガンは彼女を自分のスカートに引きよせる。二人をこの瞬間の外に出してやれるものなら、おれは喜んでこれ以前、これ以後のあらゆる瞬間を捨てるだろう。だがもう手遅れだ。とうに若さを失ってから、世の中には取返しのつかないことも存在することを人は悟るのだ。小男は悪い足を引きずって、メーガンとコートニーの方へ行く。メーガンには目もくれず、もっぱらコートニーを見ている。そして片手を彼女の髪の中にさし入れる。それから彼は、二人に背中を向ける。と、兵士がコートニーを母親から引き離す。兵士は彼女を窓の足掛け台の上に押し上げ、次に窓枠の上に押し上げる。メーガンが恐怖の悲鳴を上げる。「娘たち」とXは一人言のようにつぶやき、首を横に振る。窓枠に乗ったコートニーが、ふり向いておれを見る。おれが屋上で彼女をぶら下げたあらゆる瞬間、彼女が生き、所有したあらゆる高い場所が、おれと彼女を隔てる空間をみたす。兵士が押し、彼女は外に出る。

　この瞬間を時から切り離せるのなら、おれのあらゆる瞬間を捧げるものを。時間が一瞬凍りつくように思える。と、身長百四十センチのメーガンが、ちょうどおれが彼女を知った最初の夜にあの場を支配したのと同じように、おれが彼女を知る最後の瞬間において、またしてもドイツ人で一杯の部屋を支配する。兵士の静止をふり切って、その瞬間が過ぎ去らないうちに、彼女は窓の外に飛び出す。そしてこの一瞬の時間の残り糸を投げ出し、コートニーをからめ取り、自分の胸に引き寄せる。もちろん彼女を救うことは問題外だ。助けられる見込みなどありはしない。そのことはメーガンも知っている、みんなが知っている。それはただ、そばかすの小娘が、独りぼっちで長い道のりを下りていかずに済むようにするためなのだ。それはただ、短かった四年間のあと、この瞬間が

どんなに長く持続しようとも、それがあまりに淋しくならぬよう、黒いウィーンの夜の中、小さな足の下にひろがる巨大な夜の中で、それがあまりに淋しくならぬようにするためなのだ。この瞬間の最後の一断片に、メーガンはふり向き、挑むような目で我々を睨む。そしてその瞬間が、おれが今後知るであろうあらゆる他の瞬間と結びつく。おれがそれと引き換えようと頭の中で叫びつづけるあらゆる瞬間と。どこへ行くにも、おれはその瞬間を連れていく。メーガンがおれたちの娘を抱きしめ、彼女たち二人が窓の向こうに宙づりになったように思える瞬間を。

そして二人はいなくなる。次の瞬間、窓の向こうには、静まりかえったウィーンの街があるだけだ。

胴も切り落としてしまうべきだったのだ。

彼はおれの両手のあいだに崩れ落ちる……誰かが何かでおれを殴っている。たぶん銃を持った兵士たちだろう。きっとなかなか愉快な眺めにちがいない。おれは殴られ、Xはおれの指のあいだから、撃つな、撃つな、とうめき声を上げている。そして、とうとう彼の目から生命が流出しはじめると、ついに彼は言う。撃て、と。兵士たちはいささか面喰らっている。彼らは銃床で何度も何度もおれを殴る。血がXの髪や目に流れ込む。しばらくすると、おれはもう何も見えなくなる。

実際、奴らはちゃんと胴も切り落としたのだ。実際、奴らはすべてを切り落としたのだ、それともおれは自分から何もかも手渡したのだろうか、ずっと昔に？

81

一九四三年。

82

一九四四年。

83

一九四五年。煙が見える。

84

一九四六年。

85

一九四七年。私はある日の午後、散歩をしている最中にその場所に行きあたる。散歩をしているときの方が、ずっと簡単に迷子になれる。私はもう長いこと、毎日散歩をつづけている。その場所はいま、私の目の前、歩道の上にある。ここでそれが起きたという手がかりは何ひとつない。だが、行き先など意識せずに歩いていても、私にはすぐにわかる。ここがその場所なのだ。私は一歩後ろへ退き、あたりを見回す。そして自分があのホテルの前にいることに気がつく。はるか頭上に並ぶいくつもの窓。そのうちのひとつがほかならぬあの窓なのだ。私は歩道の上のその場所に目

を向ける。そしてホテルの石に自分の体を力一杯ぶつけ、建物の尖った縁に手首を叩きつける。そうやって血管を切り開いて、穢れた雑種の母親の血を街じゅうに流し、それによってこの街を穢し、それを通して彼を穢し、彼がこの街にもたらした屈辱を穢そうと。そう、彼はこの街を汚し辱めることによって、おのれの悲惨な、住むところもなく女もいなかった若き日々を神聖化しようとした。十六年前にこの街に彼女を奪われた事実を無化しようとした。そうした企てすべてを穢そうと、私は自分を痛めつける。じきにあたり一面が血の海になる。人々が飛んできて私を止める。五、六人が私を引きずり倒す。だがその前に、取り押さえられ血だらけの体をよじらせながら、私は私を生んだインディアンの黒い血の声で、環状道路に輪を描く。彼らは私を引きずり倒す。どこからともなく現われ、私を私自身から護ってくれる守護神たち。彼が生きている限り、彼の瞬間が私の瞬間と結びついている限り、つねに私とともにある守護神たち。

86

散歩をしているときの方が、ずっと簡単に迷子になれる。
一九四八年。春、だと思う。
戦争はいまだつづいている。戦死した兵士たちがメキシコから戻ってきて、ホーフブルクの壁の中に埋め込まれる。自分が愛し、憎む街に対する、Zの最後の復讐。占領したユカタンの砂漠でもってウィーンを埋めつくすよりも、死体で埋めつくす方が彼には好ましいのだ。どの体も死後硬直がはじまっていて、奇妙な姿勢に凍りついている。旧ウィーンの壁に塗られた新しいセメントか

CamScannerでスキャン

ら、死んだ肱や死んだ膝がつき出ている。

週に一度、Zがラジオで全ヨーロッパに向けて演説を行なう。たいていの場合、それは明らかに十年前の演説の録音である。声も力強く、澄んでいる。何か特にニュースがあるときに限って、彼らはあえて新しい演説を流す。彼の舌はもつれ、声も途切れ途切れ、センテンスが終わらぬまま消えてしまう。ベルリンからはひっきりなしに噂が伝わってくる。軍部が主導権を握ったようだ。党幹部はその多くが姿を消した。公式発表は行なわれていないが、どうやらXも死んだらしい。この俺が殺したんだ、そう考えて私は気をよくする。そう確信できるほどあの晩のことをはっきり覚えてはいない。冷静に考えてみれば、連中がそこまで私を放っておいたとも思えない。が、可能性としてゼロじゃない。まわりで見ていたあの将校連中が、たがいに顔を見あわせ、いいんじゃないかね？　と言いあっている……そうとも。ちゃんと筋は通る。

私はもう何も書いていない。もちろんそれはXの意図通りだ。だがほかの連中には連中なりの考えがあるらしく、奴らはいまだに私を犬嵐横丁に住まわせている。下っ端役人が定期的にやって来ては、私にへいこらおべっかを使ったり、罵倒していったりする。私が拷問を恐れていないことを彼らは知っている。死も恐れていないことも知っている。Zの情熱を脅かす危険さえなかったら、連中はとっくに、私を始末することを検討しているだろう。すっかり萎えてしまったとはいえ、Zの熱情はいまなお大ドイツを呪縛しつづけている。だが山岳地帯にはゲリラが暗躍し、都市では暴動が頻発している。彼らとしてもこれ以上危険を冒すわけには行かないのだ。私にしてみれば、連中が何をしようと一向に構いはしない。二週間に一度、部屋に封筒が届く。私はドイツ・マルクで

支払いを受けている。

同盟関係も依然として不安を抱えている。Zが原爆投下の準備を進めている最中に、アメリカに原爆を横流ししたのも、ほかならぬロシアだったという噂まである。コートニーが生きていれば、いまごろ十歳だ。

私は……三十一？　メーガンは三十五歳だろう。

今日、お前の住んでいた通りが見つかった。

十一年間、何度も捜して、いままでは地上から姿を消してしまったとしか思えなかったのに、それが今日、わが家の玄関にたどり着くみたいな具合に、そこに行きあたったのだ。あの日とまったく同じ蝋燭店が通りの向かいにあって、いまも人々が出入りしている。私がお前を見た窓には、鎧戸が閉まっている。そこに十五分あまり立って眺めてから、私は通りを横切り、ドアをノックする。誰も出てこないので、ドアを開けて中に入り、階段を上って二階に行く。お前の部屋の前で私はしばし立ちどまり、それから中に入る。

部屋の中は空っぽだ。必要最低限の家具があるだけ。右手のバスルームから何か音がする以外、人が住んでいる形跡はない。私はベッドを迂回して、バスルームのドアの前に行く。一瞬のあいだ、誰かいるのが見えたような気がする。鏡に映る誰かの姿が見えたような気がする。でもそこに見つかるのは、洗面台を流れる水だけだ。

「ゲリ？」

沈黙がそれに答える。私は窓を押し上げ、鎧戸を開ける。お前があの日に見ていたのと同じよう

に、眼下の通りが見える。もっとも今日は黒ブーツの連中もいない。いまごろはもう銀行でも経営しているのだ。あるいは刑務所に入っている。大半はあとの方だ。

「どなた？」と誰かが背後で言う。ふり向くと、年配の女がドアのところに立っている。「お部屋をご覧にいらしたのですか？」

「ここは長いこと空部屋なんですか？」

「ほんの数日前からです」と女は答える。「最近は簡単に借り手がつくんですよ。特に旧市街では。ここももう何人か見にいらっしゃいました」。そして彼女は言い足す。「でも一応お名前をうかがっておきましょうか。ほかの方がお断りになるかもしれませんし」

私は室内を見回す。「前は誰が住んでいたんです？」

「実は主人の兄でして。何週間か前に亡くなったのです」

「こういうアパートをたくさんお持ちですか？」

「ええ」と女は答える。「でもいま空いているのはここだけです」

「この建物はずっと前からお持ちで？」

「二十年になります」と彼女は言う。「主人と二人で買ったんです、恐慌が来る前の年に。幸運でした」

「十一年前にここに一人の娘が住んでいたんだ。たぶん家族も一緒だったと思います。陽光の糸みたいな髪をした娘」。私はそこで口をつぐむ。「いやつまり、濃いめの金髪ということです。それに青い瞳」。私はまた口をつぐむ。「いやつまり、茶色い目」

CamScannerでスキャン

「どうやらロシア人親子のことをおっしゃっておられるようで」と女はそっけなく言う。
「ロシア人親子？」
「男はロシアから逃げてきた亡命者で、アフリカでしばらく暮らしていたって言ってました。それからウィーンに来たんです。娘が一人いました。奥さんはいません」
「ええ、たぶんその人たちです」
女はきっぱりと言う。「追い返されました」
「追い返された？」
「五年ほど前です。新条約が結ばれたときです。ロシア側の要請で追い出されたのです」
「いや」と私は少ししてから答える。「たぶんいまはロシアにいないと思うんですが」
「あなたまさか、あの人たちの親戚じゃないでしょうね」と女は言う。そして釈明するかのように、「要するにあいつらはドイツの敵だったんですからね」と言い足す。
「そうなんですか？」
「そうに決まってますよ、絶対。そうじゃなかったら、どうして追い出されなんかするもんで――」
「まったく、おっしゃる通りです」。私は窓から最後の一瞥を投げる。女は疑ぐり深そうに私をじっと見ている。
「お客様のお名前を」と彼女は言う。まさしく忠実なる市民。
「バニング・ジェーンライト」

「何系のお名前ですか、それは？」。女は両手を組んでいる。
「イギリス系です」
「イギリス人はいまではドイツ人です」
「らしいですな」
「だからそれもいまではドイツ系の名前です」
「いいえ。絶対にドイツ系の名にはなりません」。私は彼女のかたわらを通りすぎる。そして彼女の方に向き直る。「その気になりゃここにだって住めるんだがね」。私はそう言い残して階段を下りはじめる。女は階段の上からドイツ流の別れの挨拶を送る。彼の名をたたえ、敬礼するのだ。私は一言、「あんな野郎、地獄に堕ちればいい」と答えるだけだ。だが、女のぎょっとした顔を見ても、少しも気持ちは晴れない。たとえ女が私のことを通報したところで警察は何の手段も講じまい、そう考えても少しも気持ちは晴れない。私はそっと後ろ手に玄関のドアを閉める。
お前が美しかったかどうか訊くのを忘れた。お前が歌うのを聞いたことがあるか訊くのを忘れた。
私は旧市街の曲がりくねった街路を歩きまわる。街の壁から、斃れた戦士たちの辱められた関節がはみ出ている。新帝国の黒と赤のねじれた十文字が、あらゆる建物に掛けられた旗竿から顔をのぞかせ、あらゆる尖塔の上で舞っている。旗の大半は古び、ぼろぼろになっている。帝国は荒廃しつつある。二年前に建設中だった新しい高架鉄道も、中空で停止したままになっている。いたるところに憲兵が立っている。あらゆる四つ角に奴らの姿が見える。それでもなお、夜になると、地下

室や塔に隠れた反乱分子たちの銃声が聞こえてくる。私は運河を渡りプラーターの遊園地めざして歩いていく。

今日の遊園地はそれほど混んでいない。家族連れがいて、恋人たちがいて、休暇中のドイツ人兵士たちがいる。ドイツ人将校はウィーン娘を連れて歩き、乗り物の列の一番前に割り込む。ビックリハウスの壁には、反アメリカのスローガンの上に重ねて、反ベルリンのスローガンがペンキで書いてある。いくつもあるブースの中には、ボール投げや射的の標的に、アメリカの大統領の顔を使っているところもある。私には見覚えのない顔だ。小さな映画館で、メキシコ前線の報道映画が上映されている。私は観覧車の切符を一枚買うが、思い直して売り場に戻り、切符をまるごと一束買い足す。そしてほかの数人の客と一緒にケージに乗り込む。観覧車が回り出す。一周するのにだいたい十分かかる。地上に戻ってきて、ほかの連中が下りると、私は係の男にもう一枚切符を渡す。もう一度お並び下さい、と男は威張って言う。私は拒否する。こんな下っ端に引きずりおろされてたまるか。男は警察に電話をかけ、私のことを通報する。やって来た警官はやる気まんまんである。必要とあらば銃を抜くのも辞さない張り切りようだ。私は静かに警官に言う。俺の名前はバニング・ジェーンライト、何か問題があるんだったらお前の上司に相談しな、と。上司に相談するまでもない。警官はしばし茫然とした目で私を眺め、それからわずかにうなずく。帰りぎわに、警官は係の男をこっぴどく叱りつけていく。私は男に切符の束をそっくり渡す。もしよかったらこのケージは貸切りにしてほしいんだがね、と私は言う。男は頬を赤くして、憎々しげにゲートを閉める。私は次第に暗くなってきた空に上がってゆく。お前が美しかったかどうか訊くのを忘れた。お

前が歌うのを聞いたことがあるか訊くのを忘れた。熱にうなされ焼きつくされるような決定的瞬間から見下ろすと、ウィーンの街が私の足元から西に広がっている。街は夕暮れに襲われて萎え、ドナウ川とともに見る見るしぼんでいく。ハプスブルク家の宮殿が、風と花崗岩に囲まれて、リングの縁にそびえ立つ。南の方で、黒いフードをかぶって自転車に乗る人々の一団が橋を渡る。街じゅうのあらゆる窓が、何も知らない飛び出し気味の目で無表情に私を見返す。もしも私がこの観覧車に乗ったまま、十分長いあいだ、十分数多く回っていれば、十分速く、そして十分永久に回っていれば、もしかしたら私はいまなお、私の瞬間の彼方、お前の瞬間の彼方へと投げ飛ばしてもらえるかもしれない。丸い女の月に向かって穿(うが)たれた白く熱い一点のしみとなって、島の向こう側を流れる世紀へと飛んでいけるかもしれないのだ。

87

三年後、上りゆく月がバニング・ジェーンライトの二十世紀からもうひとつの二十世紀へとひそかに移動する。月は川のはるか上空を飛ぶ。そして川では、四本の杭で水上に立つ小さな木造の小屋の中で、もうひとりの大男が眠っている。小屋の中に大した物はない。ベッドと、テーブルと椅子が一脚ずつ、細々と炎を吐き出す古びた石油ランプ、石炭の燃え殻がいくらか残っているだけの小さな鉄製のストーブ、それだけだ。時刻はもう午前零時を過ぎているにちがいない。小屋にゆっくり近づいてくるボートの音以外、川はひっそり静まり返っている。フェリーボートではない、手漕ぎのボートである。手漕ぎのボートに乗った男は、闇に包まれた船着場に自分の船を残してきた

のだ。男はオールをこっそりと、しかし確信をもって操る。膝にはガソリンとぼろ布が置かれ、愛の炎を上げている。小屋の中の大男は、おのれの死の音が自分に向かって水上を近づいてくるなか、何も知らずに眠ったままだ。かりにもし大男がこの瞬間に目を覚まして小屋の入口に行き、小さな縁側まで出てみたとしても、そしてもし縁側の手すりから身を乗り出し、砕け散った真珠のような白い月の光を頼りに水中を覗き込んでみたとしても、どのみちボートが彼の目に入ったかどうかは疑わしい。おそらく彼は、その日の午後の情景にもう一度見入っただけだったろう。あのとき彼はここに立ち、水の中を覗き込み、彼女を見たのだ。まず見えたのは顔だった。それはただ水中をぼんやり漂っているように見えた。だが漂っているのではなかった。彼女が自分の方に進んできていることがじきにわかった。そして、まさに彼女が彼に向かって水上に浮上した瞬間、彼は身をかがめ、両腕をさしのべた。水の中から、彼女がさっと飛び上がった。彼の手が彼女の手をとらえ、そのままその体を引き上げた。両腕に彼女を引き寄せながら、彼はあやうく転んでしまうところだった。そしていま、彼はその記憶を抱えて眠っている。もし眠りの中でボートがやってくる音が聞こえたとしても、それは記憶の音でしかないだろう。月が小屋の入口から完全に姿を消すまで、彼は目を覚ますまい。月が出ていることさえわからなくなるまで、目を覚ますまい。そうなって初めて、彼は煙の匂いに気がつくだろう。こんなに大きな炎がいったいどこから来たのかと、茫然とするだろう。

五十六年後、世紀がすでに数を使い尽くし、だが決して死なない運命をおのれが背負い込んでいることにようやく気づきはじめた頃、生まれた日以来ずっと髪の白かった男が、家に帰ってくる。

帰ってくるのもこれで最後だ。何年も前、自分自身を追放し、家と逃避とのあいだを毎日くり返し船で往復する生活をはじめた夜にもそうしたように、あるいは三年前、青いドレスを着たカーラという名の娘を捜しに来た夜にもそうしたように、男はいま、自分が生まれ育ったホテルの階段を上ってゆく。青いドレスを着た娘をどれくらい長いこと捜しつづけてきたのか、彼にはもうわからなくなってしまっている。わからなくなってしまったことはほかにもたくさんあることを、彼はふと実感する。階段を上る男は、年老いてもいないし、若くもない。彼はもうほかの男たちの声や、男たちの物語を聞いたりはしない。いま彼は、自分が小さかった頃そのままの母親の声を聞きに来ている。小さかった頃、彼にとっても母親にとっても何の興味もない物語を、ただ母親がそれを読む声が聞きたいがために読んでもらったときの声を聞きに来ている。階段の上に立った彼は、いまこれから、自分が生まれ出てきた暗闇、彼の髪の色を吸い取った暗闇と向きあう覚悟でいる。彼は知っている。町の中国人たちが、死ぬ前に彼女が自分の名を叫ぶ声を聞こうと待ち構えていることを。彼らはすでに木を一本、彼女のために特別に用意してある。ホテルの外は中国人で一杯だ。やがて彼らはこっそり建物の中に、一人また一人と入っていく。ドアがかろうじて蝶番にしがみつき、窓ガラスはすっかりなくなってしまった、いまや彼女以外誰一人住んでいない、マネージャーさえも住んでいない建物の中に入っていく。五十六年にわたって、白人女はこのホテルで暮らしてきた。その大半の年月、彼女はホテルの唯一の住人だった。死肉に群がるハゲタカのように、中国人たちは略奪の時を待つ。どのみち無価値な彼女の所持品なんかではなく、彼女そのものの神秘と結びついた、その目、耳、指を奪う時を待つ。彼はそれを許すつもりはない。俺の死体ならまだい

CamScannerでスキャン

い、と彼は胸のうちで言う。だが母親にそんな真似はさせるものか。階段の上に立ち、廊下から見ると、母親の部屋のドアは開いている。一瞬のあいだ、母さん、と彼は口にしかける。ドアの角を曲がったところで、ベッドにいる母親に自分の声が届くようにと。だがその代わりに、彼は母親を名前で呼ぶ。ドアの角を曲がり、枕の上に横たわる白い髪を見た彼は、一秒の何分の一かのあいだ、それを自分の髪だと信じる。「デーニア？」と彼は呼びかける。

一九一七年の暮れ、馬に乗った男がサンクトペテルブルクの三十キロ郊外で汽車を追いかけている。エンジンの蒸気が夜の中で銀色に、月を背にして黒光りする。つねに一時間先にある一時間のように、汽車は彼の追跡を確実に逃れつづける。背後では革命軍の兵士たちがみずからの馬に拍車をあて、彼のあとを追う。彼の耳には革命の不可避性があふれている。すでにほぼ彼らに追いつかれてしまったかのように、その不可避性が一瞬一瞬ごとに耳の中で鳴り響く。だが、革命軍が自己の正当なる権利として主張するその不可避性に対し、彼は反逆を挑むことを決めている。混沌の使者として、歴史の中に走り込んでいく決意でいる。彼は信じている。歴史というものに少しでも意志があるならば、誰であろうと、歴史を永久に変えてしまうように要する瞬間以上にわたってそれを所有することなどできはしない、と。いままたその決意を思い出し、彼はいっそう馬を駆り立てる。いままたおのれの決意を思い出し、彼は彼らの追跡の不可避性からみずからを解き放ち、汽車が彼の追跡を逃れるその逃れ方からみずからを解き放つ。彼は馬を鞭打ち、馬のたてがみに向かって叫び、鞍袋に手を伸ばしてその中身がきちんと縛りつけてあることを確かめる。そして彼は自分の時間から脱出し、その時間を越え、つねに一時間離れているはずの一時間に到達する。線路の前で、

CamScannerでスキャン

馬が後ろ脚を上げる。ロシア人の男は最後から二番目の車両に飛びつき、すでに後方に消えかけている見捨てられた動物のために、祈りの言葉をつぶやく。激しく吹きつける風を背に受け、鞍袋を体に巻きつけたまま、男はどうにかして車両の中に入っていく。そしてしばらくのあいだ、入口のところに座り込み、町外れから自分を追ってきた革命軍の騎馬憲兵たちを眺めている。もし奴らが本当に歴史の力なのだとしたら、と彼はぜいぜい喘ぎながら考える。もし奴らが本当に歴史の力なのだとしたら、きっとこの汽車にだって追いついてしまうだろう。もしそうなったらこの鞍袋の中身をどこへ隠したらいいだろう。だがじきに、そうなりはしないことが明白になる。じきに彼らが、彼の馬と同じように、夜の中に消えていくのが見える。疾走する汽車の轟音に混じって、彼らの銃声の音が聞こえるような気がする。彼はもう少しのところで高らかに笑い出しかける。だが事実笑い出すほど傲慢な人間ではない。しばらくして彼は重い身を引きずって立ち上がり、暗い、轟音を立てて走る汽車の通路を進んでいく。そして誰もいない車室を見つけ、鞍袋を胸に抱きかかえたまま、一眠りしようと座席に倒れ込む。片手は袋の中に入れ、銃を握っている。彼は、金髪のロシア人は、少しのあいだうとうとしながら、今夜は誰かを撃つことになるのだろうか、と考える。

真夜中も過ぎた頃になって、車室のドアが出し抜けに開く。彼はさっと身を起こし、すんでのところで入口に鉛の雨を降らせそうになる。ほんの一瞬が、そこに立っている女を救う。暗がりの中でもその髪の黒さがわかる。おそらくスラブ系か、地中海系だろう。女は別の車両から移って来た。

男の顔に浮かぶ表情、撃つのをやめる決断を下す直前の表情が女の目に飛び込む。だがその表情には、何かを延期しようという様子はいっさい浮かんでいない。男の手が入った鞍袋が女の目に入

る。そして女は直感的に悟る。いまこそ死がその袋の中で待ちうけ、彼女の生全体を支配していることを。しばし待って、死の支配が訪れないことを悟ると、まるでそれが実際訪れたかのように、女は大人しくその事実を受け入れる。そして大きく息を吸い込み、男の向かいの席に腰を下ろす。彼女を三十秒も見つめないうちに、男の腰部のどこかで最初の煙が立ちのぼる。六年後に、彼の娘となるはずの煙が。

88

プヌドゥール・クレーターの中央で一家揃って暮らしはじめて十四年経ったいま、デーニアはもはや、クレーターの縁が動いているのではないかという可能性を無視することができなかった。彼女のまわりで、その鉛色の隆起線は、ゆっくりと、だが見逃しようもなく回っているのだ。頭上の黒雲がドーベルマン犬のように左に疾走していくなか、隆起線は右回りに動きつづけていた。十四年目の一年間、彼女と両親、それに弟の一家四人は、居留地に住むヨーロッパからの亡命者仲間と一緒に移動をつづけた。クレーターの縁にそって、雨と暑さとに応じて、あるときは上方に、あるときは下方に移っていった。木立があって、井戸もいくつか掘られている南側のカーブが一番住みやすかった。夕暮れが木々の枝の中で、まるで樹齢千年の木の黒い幹から茂る葉のように低く垂れこめていた。秋のなかばに、彼女は森の中の並木道を歩いてまわった。あたかも夕暮れそれ自体が死にかけているかのように、白い葉が次々に降ってきた。彼女は地面に横たわり、落葉で自分の体を覆った。そして、弟が捜しにくると、白い姿をわっと爆発させて弟の肝を潰した。背景に広がる

ブスドゥールの灰に埋もれてほとんど見えなくなっている灰色のテントに戻る道すがら、すっかり脅えてしまった幼い弟を彼女はさんざんからかった。何日か経ったあとも、彼女の意志に反して、白い落葉の小さな切れ端が体じゅうにこびりついていた。それは彼女のなかにひそんでいる若い、秘密の野蛮さの証しだった。彼女は自分をその野蛮さの中で育てていこうと決めていた。季節の変化を、この野蛮さによって区切っていた。

何年もあとになって、ニューヨークの夜の街並を、必死に追いかけてくる恋人の大きな重い足音を背に聞きながら一人で走り抜けているとき、恐怖に包まれた彼女は、生まれて初めて、子供時代の亡命生活を疑いの目でふり返ることになる。パリから、マドリッドから、ブリュッセルから、作家や地質学者や退屈な官僚たちが、何らかの陰謀に身の危険を感じ、祖国を捨てて居留地に逃げてきた。彼女が十三のとき、ベルリンから一人の若い医者がやって来た。一日半が経って、彼女は医者に恋していた。彼は二十代後半で、彼女の母親と同じ黒い髪、瞳は青かった。いかなる犯罪が彼を東スーダンに追いやったのかは定かでなかった。実は野蛮人とともに暮らしに来た宣教師かもしれなかった。あたしも野蛮人よ、と彼女は医者に何度となく言った。医者は間違いようのない渇望の目で彼女を見つめたが、決してその距離を崩すことはなかった。この人はあたしに対して紳士的にふるまおうとしてるんだわ、そう考えて彼女はうんざりした。まるで叔父さんか、お兄さんみたいに。医者は名をライメスといった。ごきげんよう、ドクター・ライメス、と彼女はすれ違いざまに言った。ドクターという言葉を、吐き捨てるようにして皮肉たっぷりと。彼が申し分ない紳士であることを彼女は軽蔑した。何年も前、ロシアで汽車に乗っていたとき、彼女の母親は一晩のうち

に、やがては彼女の父親となる男と一緒にアフリカへ行く決意をした。その事実を彼女は母親について何よりも鮮明に、あたかも彼女自身その場に居合わせたかのように鮮明に記憶するようになっていた。その事実を母親について何よりも素晴らしく思っていた。それこそが、母親が成し遂げた一番立派な行ないであるように思えた。

父親がスーダンに逃れてきたのが、古い鞍袋に巻いてしまってある一枚の青写真と関係があることを、彼女はやがて知るようになった。青写真のことはほかには誰も知らなかった。クレーターが眼下で自転をつづけるなか、一家がその西のカーブに住んでいた頃に、ある晩彼女は偶然それを目にしたのだった。テントの屋根から吊り下げられて揺れるランプの光の下で、父親はその青写真を机の上に広げていた。五分か十分のあいだ、彼女は影の中に立ち、ランプの光が、最近めっきり艶のなくなってきた父の髪の前を右に左によぎるのを見守っていた。父親は一心不乱に青写真を見つめていた。彼女が影から歩み出ても、しばらくは気づかないほどだった。父はひどく驚いた。こんなに驚いた父親を見るのは初めてだった。「それ、地図？」と彼女は訊いた。父はいくらか肩を落とし、にっこり微笑んだ。そうだよ、と父は言った。地図みたいなものだよ。彼女はもう少し前に歩み出て、さらに間近にその青写真を眺め、「これ、家？」と訊いた。そうだよ、と父は答えた。家みたいなものだよ。青写真には、居住の空間と、食事の空間と、寝室がいくつかと、トイレが描かれていた。屋根裏と、地下室もあった。一階の玄関からは壁に秘密の通路が通じていて、二階の寝室のひとつにつながっている。そしてもう一本、地下室から屋根裏にも、途中の階をいっさい通らずに行き来できる通路があった。青写真の上には、薄い、半透明の紙が何枚か重なっていた。そ

れらの紙にもそれぞれ線が引かれていた。だが、何年もあとに、彼女がそれらの図面を仔細に検討してみると、一枚一枚に引かれた線はほかの紙の線とどうやっても一致しなかったし、オリジナルの青写真の線とも合致しなかった。それが家ではないことを、彼女はだんだんと理解するようになった。家みたいないいなものだって言ったろう、とのちに父親は説明にならない説明をした。「これもしかして」初めて青写真を見たこの晩、彼女は訊いた。「これもしかして、あたしたちがいつか暮らすおうち？」。テントの上から吊られて揺れるランプの光に照らされて、父の顔に浮かぶ皺が初めて見えた。やがてその顔は悲しい微笑に変わり、父は答えた。だって娘や、私たちはもうそこに住んでいるんだよ。

89

白墨のようにのっぺりした色彩のクレーターにあって、彼女はひときわ目立つ色をしていた。父親の若き日々の遺伝子からかすめ取られた褐色のしみ。居住地のほかの住民が持つ色といえば、ヨーロッパ人の白とグレーか、彼女の母親や弟の髪、ドイツ人ライメスの髪のような黒だけ。あるいはアフリカ人の肌の、濃いグレー。月が宗教上の許可を与えるときにのみクレーターを訪れる原住民たちの色。彼らはブヌドゥールのことを、空から落ちてきた月のかけらだと信じている。だから軽々しく入ってはならないのだ。色の脱けた、クレーターの渦巻く縁を背景に、彼女が踊る姿を誰もが見ることができた。彼女が六歳になったとき、父親は彼女を、貴族の出という触れ込みのフランス人のところへ連れていった。いかなる醜聞なり恥辱なりがこのフランス人をここへもたらし

たかは定かでないが、かつてはパリでバレエを教えていたという話だった。フランス人はロシア人とその薄汚い娘を見て、こんな卑しい奴らを相手にしてたまるかと思った。「とにかくよく動く子なんだ」とロシア人は言った。「踊れるかどうか見てやってくれ」。まるでよく動けば踊れるのが当然だと言わんばかりに。

踊れるもんか、とフランス人は一時間後に胸のうちでつぶやく。彼らは草原のまん中にいる。二つの岩のあいだに立てた一本の棒切れのまわりで、幼いデーニアがポーズを取る。見るがいい、バランス感覚が全然ないじゃないか！　フランス人は声を立てて笑い出したい気分だった。傲慢な父親に一刻も早く見せつけてやりかった。午後になり、クレーターから乾いた泥が吹き上がりはじめた。あまりの土埃に、時として娘は白い空気の中の黄金色のきらめきにしか見えなかった。遠くから父親が見守っているのではないかと、フランス人はそっと後ろをふり返った。結構、この餓鬼はいまにも転んじまうはずだ。そうすれば父親も思い知るだろう。だが彼女は転ばなかった。クレーターの縁に叩きつける風が、吹いてはまた止んだ。風が吹いているときでも、彼女はよろけなかった。どうなってるんだ、とフランス人は思った。どう見たってバランス感覚ゼロなのに。地面との関連であの動きを見てみるがいい。まるっきりふらふらじゃないか。だが娘は地面との関連で動いているのではなかった。彼女は瞬間との関連で動いていた。よろめくよう運命づけられたそれぞれの瞬間から、踊ることによってそこを脱け出たのだ。その踊りにはこれといって優美なところは何もなかった。人が見てリズムとわかるようなリズムもなかった。それはフランス人がいままで見たどの子供とも違う動き、違う踊りだった。彼は憤慨した。彼女が転ばないことの生意気さが、ひど

CamScannerでスキャン

く腹立たしかった。

一方、小さな金髪の娘は、埃の中からフランス人を横目で見ていた。この人はあたしが転ぶのを待っているんだわ、と彼女は思った。時おり、男をぬか喜びさせてやろうと、彼女はわざと、特に危なっかしい格好によろけてみせ、転ぶ寸前に未来からわが身を引き戻した。「どうだい、言った通りだろう?」とロシア人はフランス人に言った。「それにこの子はいずれ美人にもなる。誰が見たってわかることだ」。もしかりに運命というものがあるなら、娘は踊りを踊る運命ではあったが、美人となる運命ではなかった。フランス人がそれを知ることができたなら、そこにささやかな慰めを見出したことだろう。

若いドイツ人の医者が居住地に来てからは、彼女は彼のために踊るようになった。白いクレーターの中の薄汚い黄金。木蔭に隠れみずからの意志に反して彼女を見つめている医者の姿が、目の端から見えた。ある夜、父親のテントに行ってみると、そこに彼がいた。ほかには誰もいなかった。「道に迷ったの?」と彼女は言った。背後に彼女の声を聞いて、医者はさっとふり向いた。「間違って入ってきちゃったの?」テントの闇の中でなら、自分にありもしない美しさを呼びおこすことができる気がした。もし場所さえあったなら、彼女は踊ったことだろう。踊りによって彼を屈服させたことだろう。あたりは暗く、彼が顔を赤らめたかどうかもよくわからなかった。彼は彼女に向けて片手をさし出し、またあわてて引っ込めた。彼の考えていることがほとんど聞こえるような気がした。何てことだ、この子はまだ血も流していないじゃないか、と。「血だったら十分あるわよ」と彼女は暗闇の中でぼそっと言った。「ジャングルじゃそんなにたくさん血は要らないのよ」。

CamScannerでスキャン

さして遠くない過去に父親が青い地図を読んでいるのを見つけたテントの中で、医者は出口を捜してあたふたと動きまわった。「あなたそれでもお医者さん？」ほうほうのていで外に逃げ出した医者の背に向かって、彼女はからかうように言った。「血を見るのが怖いなんて」。やがて彼女は一人でそこに立っていた。それともあたしの血を見るのが怖いだけなのかしら——自分の美しくないことを嘆きながら、彼女はそう考えた。

90

スーダンで二十年間の亡命生活を送ったのち、デーニアの父は、家族をヨーロッパに連れて帰る時期が来たという決断に達した。夫がウィーンへ移る準備を進めているのを知って、妻は愕然とした。「ウィーンなんて、ソビエトから目と鼻の先じゃありませんか！」と訴える妻に、「まさにその通り」と彼は答えた。目と鼻の先だからこそ向こうも捜すまい、というのが彼の理屈だった。「パリやロンドンには連中だって目を光らせる。きっと一週間と経たないうちに捕まってしまうよ」。二十年にわたってアフリカを離れたいと願いつづけてきたあと、デーニアの母親はにわかにアフリカ脱出を恐れはじめた。「ウィーン、ウィーン」と母は何度も何度も一人でつぶやいていた。だが父親は着々と手はずを整えていった。計画によれば、一家はジャングルを抜けてエジプトまで出て、そこから船でイタリアに行くことになっていた。

居住者たちがクレーターの縁を移動しつづけた最後の五年間、デーニアは時おり、クレーターの北西の窪みにある洞穴を見にいった。それは小さな坂のてっぺんにあった。坂自体はすそ広がりに

CamScannerでスキャン

下に伸び、クレーターの皿状の底面につながっている。その四年目のこと、彼女はあるとき弟と一緒に出かけていって、洞穴の中を覗き込んでみた。と、不思議なことに、北極のように冷たい突風が中から吹き出てきた。二人は驚いて目をみはり、穴の暗闇の中にさらに顔をつっ込んで、向こう側から光がさしてくるのを待った。そのときすでに、彼女の耳にはっきりと、ひづめの轟きが聞こえた。姉と弟は転げるように坂を駆け下り、岩をよじ上って、居住地のある平原に戻っていった。その年にはまだ、洞穴からは何も出てこなかった。ほぼ一年後、クレーターがちょうど一回転した頃に、二人はまた洞穴を見にいった。アフリカらしい穏やかな冬の日で、大地の端の光も、彼女の髪と同じ色に染まっていた。二人がまだクレーターの底にも着かぬうちに、光のない出入口から野牛たちが飛び出してきた。全部で百頭はいたにちがいない、それが一斉に群れをなして出現したのだ。スーダンじゅうがその音を聞き、その振動を感じただろうと思われた。野牛たちの毛は短く、奇妙な銀色に光っていた。だがそれ以上に不思議だったのは、牛たちが熱い砂漠を暴れまわるさなかにも、四メートルあまり頭上の崖から見守るデーニアの目に、雪の白い斑点が溶けもせずに彼らの体表に張りついているのがはっきりと見えたことだった。デーニアにとっては、生まれて初めて見る雪だった。子供たちがテントに帰ってみると、彼らを愕然とさせたことに、居住地の誰一人として野牛の音を聞いてはいなかったし、その振動を感じてもいなかった。自分の目で見てみようと、父親が彼らと一緒に崖に行ってくれたが、銀色の疾走が立てた土埃さえもはや残っていなかった。

このことがあってから間もなく、一家が木立のそばの南側のカーブに戻ってザヌドゥール最後の

日々を送っているとき、デーニアはある晩、野牛を聞き、野牛を感じて目を覚ます。すぐそこまで来ているんだわ、と彼女は恐怖に包まれてベッドから飛び出し、テントの入口に立つ。居住地じゅうの誰もが眠っている。理由もなくみんなを起こしたらきっと笑われるわ、そう思った彼女は、テントの中をふり返り、眠っている弟に目をやる。弟を起こそうかと彼女は思う。弟にも野牛を聞き、感じてほしい。彼女は何度も、平板な夜の闇の中をちらちらと覗き込む。そして自分のテントを出て、火の消えたキャンプファイアーのかたわらを通り、両親のテントの方に歩いていく。彼らのテントの前で、彼女は立ちどまる。中で二人の立てる音が聞こえる。よりによってこんなときに愛しあってるなんて。と、ふと自分のテントの方をふり返ったまさにその次の瞬間、大地が裂けるような音がする。彼女の体がくるくる回り、クレーターの深淵に呑み込まれそうになる。夜があっという間にその色を失う。野牛の群れの到来はあまりに速く、誰一人悲鳴を上げる暇さえない。牛たちの体が夜の中で銀色に光る。両親のもとへ走っていくべきか、弟のところへ行くべきか、木蔭に避難すべきか、どうしたらいいかわからずにデーニアは立ちつくす。獣たちは居住地を容赦なく貫通し、テントを引き裂き、灰色のカンバス布をまとい幽霊のような姿となってテントから出てくる。彼らの音、彼らの匂いが彼女を圧倒する。まわりじゅういたるところで、ずたずたに引き裂かれて風にはためくテントが空中に吹き上げられていく。その到来と同じくらい唐突に、野牛の群れは突如また姿を消し、テントが次々とパラシュートのように空から降りてくる。彼女は愕然とした思いに捉えられている。なぜなら、走る野牛も降ってくるテントも、何もかもが彼女のまわりで、あたかも彼女がそこにいることを否定するかのように、彼女を少しも巻き込むことなく起こったか

らだ。いまや何の音も聞こえない。茫然としたまま、彼女は自分のテントがあった場所に向かって足を引きずっていく。その数メートル手前まで来たところで、弟のベッドか、自分のベッドかが見つかる。どちらだかははっきりわからない。ほかの人々の死体が、まるで眠ったまま死んでしまったかのように、なかば土に埋もれて横たわっている。その眠った顔の歪み方、口の開き方だけが、それが眠りなんかではないことを告げている。彼女はフランス人バレエ教師の遺体を見つける。そこから五メートル離れたところに、弟が見つかる。彼女は弟のかたわらにひざまずき、お願い、生きていて、とすがるように叫び、ぴくりとも動かないことを責めてその体を激しく叩く。とうとう彼女が泣き出したとき、踏みにじられた村全体から、ひとつの塊と化した音が立ちのぼる。鳥の群れが大地に降り立つような、うつろに明るい、哀しみに染められた音。喉からではなく、心臓の下から出てくる音。犠牲に供されたのではなく、しゅうしゅうという邪悪な音に変えられた生命。ぴくりとも動かないことを責めて彼女はなおも弟を叩いている。と、父親の両手が彼女をその小さな体から引き離す。二人は一緒に居住地をよろよろと歩く。ウィーン、ウィーン、とついさっき父の上に乗った母は叫んでいた。まるで愛を交わすことによって父の中にあるウィーンを吸い出してしまおうとするかのように。そしてその数秒後、野牛がテントに突入し、母をキャンプファイアーの燃えさしの中に引きずり込んだのだ。唖然としたまま消えゆくその生命が、ウィーン、というささやきとなってしたたり落ちる。母の生命を逃すまいと、ドクター・ライメスが必死に手を尽くす。だがそれも空しい努力だ。翌日、母親と弟は、踏み荒らされた居住地のほかの犠牲者たちとともに埋葬される。アフリカの雨の降る下、数十人の原住民がクレーターの上から重々しい顔で見守る。

埋葬のあと、テーニアは木という木に力一杯体当りしてまわり、白い葉を一枚残らず地面に叩き落とそうとする。そして落葉の中に体を埋め、あたかも死それ自体を装うかのようにじっと静かに横たわる。彼女を捜す父が、その名を呼びながら木立をさまよう。

91

埋葬されたかのように横たわりながら、彼女は三つの瞬間の中に同時に存在している。スーダンの森の落葉の下に埋もれ、ウィーンのアパートのベッドに横たわり、ダヴンホール島の岸辺の手漕ぎボートの底に横たわっている。眠っているのでもないし、夢を見ているのでもない。意識は完全に目覚め、すべてを知覚している。彼女は思い出している。昨夜見た毛の短い銀色の野牛たちのことを、今日の午後に窓の下で起きた乱闘のことを、朝早くに浜辺に走っていって川の上に立つ小さな木の小屋が燃えているのを見たことを。これらどの瞬間においても、彼女は恋人を待っている。ジャングルで愛した男、ドクター・ライメスを待つ。都市で愛した男、ホアキン・ヤングという名のダンサーを待つ。島の上で、時間を越え空間を越えいつも彼女を愛してきた男を待つ。雨がアフリカの落葉に、オーストリアの屋根に、ボートに掛けられた防水シートに叩きつける。三つの違った瞬間、彼女が同時に生きている三つの瞬間において、雨はみな同じである。彼女の頭ががんがん痛む。昨夜の野牛の轟音に痛む。今日の午後に当たった石で痛む。三十歳になる前に老いてしまった女、向こう側などありはしないルビコン川の向こう側のチャイナタウンに暮らす女の罪悪感と戸惑いに痛む。痛みに我慢できなくなって、彼女はベッドの上で身を起こす。窓の外にウィーンの街

CamScannerでスキャン

の灯が見える。隣の部屋で、父が老人のようないびきを立てている。腫れ上がった傷の痛みで目が覚めたものと思って、彼女は顔の側面をなでてみる。石から顔をそむけたからよかったものの、そうでなかったらきっとまともに口に命中し、肉が裂けていただろう。歯の一本もなくしたかもしれないし、唇にあざができたかもしれない。少なくとも血は出ただろう。これで目が覚めたのだと信じつつ、彼女はそういったことを考えている。と、彼女は気づく。目が覚めたのはそういうことのせいではない。もっと別の何かなのだ。部屋の中に誰かがいることに彼女は気づく。そして闇の中に彼を捜す。何と呼べばいいのかわかるものなら、きっと彼に呼びかけもするだろう。気のせいとは思えない。暗闇の中で、彼の姿がぼんやりと見えてくる。彼は大きい。とてつもなく大きい。そのぬっとそびえるような大きさに、彼女は身震いする。彼女が待っていたような恋人とは全然違う。この初めての恋人の無名性に憤慨すべきか、それとも喜ぶべきか、彼女は決めかねている。彼を受け入れる準備ができているかどうかもよくわからない。彼女の体を裂くようにして彼は中に入ってくる。ベッドの柱を握りしめる暇もなく、何が起きているのかを完全に理解する間もないまま、自分の中に入ってきた彼の存在に彼女は息を呑む。彼にファックされるうちに、彼女の体が熟していく。ベッドの柱にしがみついた彼女は、彼の顔に触れる余裕もなく、彼がどんな顔をしているのかもわからない。朝目覚めたとき、彼女はなかば確信する。あれは夢だったのだ、と。だが違う。彼女の体は裂け、太腿には自分の血と彼の糊がこびりついている。父親が起きてくる前に体を洗わなくては。乱雑に荒らされたウィーンのベッドの中から、ブヌドゥール・クレーターの白い葉が出てきて、彼女を仰天させる。これではまるで、子宮をめぐる蛮行のさなかに、彼女みずからそ

れらの類を生み落としたみたいではないか。

92

ウィーン旧市街のはずれの、蠟燭店の向かいのアパートに父と二人で暮らしはじめてから一か月経って、仕事が見つかった。家族を失くしてすっかり打ちひしがれ、蓄えも乏しかった父は、口先だけの反対を唱えただけだった。デーニアは十五歳になっていた。四か国語に堪能で、ほかにも二か国語をまずまず話すことができた。ジャングルで長いこと暮らしているうちに、居住地じゅうのあらゆる言語が、いわば彼女の中でひとつの言語に融合していた。カールスプラッツの反対側にあるダンス・スクールで見つけた仕事は、はじめこそ単純労働だったが、語学力のおかげですぐにオフィスの仕事がまわってきた。六、七か月が経って、彼女は勇気を奮いおこし、ダンス・スクールの入学審査のオーディションを申し込んだ。どう対処したものか、審査委員会はいささか困惑してしまった。だがそれと同時に、かつては世界最良のダンサーを生み出していたロシアが、いまこうして卑しい難民を吐き出すようになったのだと思うと、彼らにとって大きな満足の種でもあった。

スクールの生徒の一人に、ホアキン・ヤングという名の、二十代前半の若者がいた。ヤングは学校の花形生徒で、自分でも一、二のクラスを教えていた。イタリア国籍で、父はイギリス人、スペイン系の名をもつヤングは、八年前に、天才少年という触れ込みでローマからやって来た。スクールの教師たちはみな彼をちやほやした。オーストリアの市民権を受け入れてくれるよう頼み込みもした。だが彼は断った。といってもその理由は、この一年後にはオーストリアはもう存在しなくなる

から、といったような政治的先見の明とは何も関係なかった。それは要するに、いかにも彼を利用しようという魂胆が見えすいた学校側の態度にうんざりし、嫌悪していたからだった。ヤングにしてみれば、利用するのは自分の方であって、学校は利用される側にすぎない。同じように八か月前にも、ヤングはウィーン・バレエ団の誘いを断っていた。これによっていまや彼は伝説的存在となっていた。彼はこう言ってのけた。そりゃ僕はバレエ団のオーディションをパスしたさ。でもバレエ団が僕のオーディションに落ちたんだよ。百年前のダンスなんかやらされるのは御免だね。

デーニアが踊るのを見て、ホアキン・ヤングは理解した。そういう言葉では考えなかったかもしれないが、彼女が歴史に抗して踊っていることを彼は理解した。二十年前、歴史の力があれほど欲しがった青写真を抱えて馬を走らせた彼女の父が、自分をロシアから連れ出してくれる汽車を追って、取返しのつかない一時間を走り越えたのと同じように、彼女もまた歴史に逆らって踊っていた。瞬間瞬間を我がものとすべく踊っていた。審査委員会の教師連中は、彼女の踊りをけんもほろろに酷評した。だがヤングは見抜いていた。もし連中の意見が正しいとしたら、彼女はほかにももっとたくさん、ターンやステップやジェスチャーにおいて誤りを犯したはずだ。だが事実は違う。彼女は本能的に、自分の体をコントロールしようとするのではなく、コントロールを失おうと努めているのだ。体をどこへ持っていこうとも、銀色に光る野牛たちの轟音が響きわたる自分の魂の中のどこへ体を運んでいこうとも、彼女はそれを制御しようとはしていなかった。「しかし、彼女のフォームには体系がないじゃないか」と委員の一人は主張した。あるいは、彼女の体系にはフォームがない、と言ったのかもしれない。ヤングはあざ笑った。「彼女は自分自身の体系をその

場その場で創っているんだ。あなたにはそれがわからないんですか?」。自分たちに認識できない体系は体系でないと思い込んでいる彼らの頑迷さに、彼はほとほと愛想が尽きた。金髪の娘が頭を垂れ、両腕を毅然と組み、煮えくり返るような思いでフロアの真ん中に立っているなか、議論は沸騰した。まるで彼女などそこにいないかのような激しい議論だった。結局ヤングは多数決に押し切られた。だが委員たちは内心穏やかでなかった。何日か経ってもまだ、人々はホールでデーニアのダンスのことを噂しあっていた。これからどうするんだい? それが彼女に向かって彼が言った最初の一言だった。オーディションの最中は直接彼女に話しかける機会がなかったのだ。またオフィスで手紙の翻訳に逆戻りね、と彼女が答えると、それじゃ君の想像力も知れたものだね、と彼は言った。あなたの想像力はどこかへ踊っていってしまったのね、と彼女も負けずに言い返した。その晩彼女はオーディションを受けたフロアに戻り、自分のステップの意味について考えてみた。

二人がふたたび口をきいたのは数か月後のことだった。彼女が道を歩いていると、ヤングが後ろから追いついてきて、僕はウィーンを出る、と告げた。ジャングルであまりに長いことと若きドクター・ライメスに恋焦がれていたデーニアには、もういまここでホアキン・ヤングに恋焦がれる必要なんかないように思えた。彼がいなくなってから三週間経って、アムステルダムから手紙が届いた。僕のもとに来てくれ、とそこには書いてあった。はじめからそのつもりだったんだわ、と彼女は考えた。あたしを自分のところに来させる計画だったんだわ。彼はあたしを一緒に連れていこうとはしなかった。三週間前に道で会ったときも、僕と一緒に来てくれ、とは言わなかった。三週間後に手紙を出して、僕のもとに来てくれと書けるように、さよなら、と言っただけ。彼女は手紙を

CamScannerでスキャン

枕の下に置き、窓辺に行った。そして、まだそのことについて考えている最中に、下の通りであの小ぜりあいがはじまったのだ。彼のところに行こう、ほとんど挑むような思いで彼女がそう決心した次の瞬間、彼女は横を向き、石がその顔をかすめたのだった。翌日、彼女の目の下に大きな打ち傷が残っていた。彼女はそれにろくすっぽ気づいてもいなかった。頭にあるのはただ、昨夜やって来た恋人のせいで脚のあいだにいまだ火が燃えていること、それだけだった。「こりゃひどい」娘の顔を見て父親はうめくように言った。昨日通りで起こった乱闘のことを彼女は父に話して聞かせた。

父はもはや、かつて彼女が生まれる前に、サンクトペテルブルクの郊外で歴史を出し抜いたさっそうたる騎手には見えなかった。父は目を伏せた。父が泣き出すと、彼女も泣き出した。「父さん」と彼女は駆けよって、父の手を握った。私は家族からすべてを奪ってしまったんだ、と父は言った。ウィーン行きは我ながら名案だと思っていたのに、それがこのざまだ。母さんのことを言ってるんだわ、と彼女は思った。もしウィーンのことを口に出さなかったら、母さんもあの晩父さんの上に乗ったりはしなかったろう。ウィーン、ウィーン、と呪文のように何度も唱えて、父さんの中にあるウイーンの呪いを自分の内に吸い寄せようとすることもなく、いつもと同じように父さんの下にいただろう。そうしたら自分が母さんを銀色の野牛から守ってあげられたのに、父さんはそう言っているのだ。「私は思ったんだよ」と父親は吐き捨てるように言った。「歴史の鼻のすぐ下で暮らしてやろうと。それが歴史の口の中に飛び込んじまったんだ。それもいったい何のために?」。そして父は、まるでウィーンじゅうに見張られているかのようにブラインドをきっちりと

CamScannerでスキャン

閉め、床板を一枚持ち上げて、アフリカの土埃を立てながらあの古ぼけた鞍袋を取り出し、袋の中から古い青写真を出してテーブルの上に広げた。一瞬のあいだ、父親は開かれた青い地図の上にかがみ込んだままだった。そしてぶるっと身震いをして、アフリカの埃にごほごほと咳き込んだ。彼女は父親の両肩に手を置き、発作が鎮まるまでそうしていた。それにつづいた沈黙の中で、父は片手を図面の上に走らせ、じっと何か考え込んでいた。とうとう彼女が訊ねた。「これは何なの、父さん?」。はじめ父はその言葉が聞こえないみたいだった。

「二十世紀の地図だ」と父はようやく答えた。そして青写真を食い入るように見つめ出した。「秘密の部屋がどうしても見つからないんだ」。あらためて驚いたように、父親は首を横に振った。「もうずっと前から捜している。どこかこのへんにあるはずなんだ」。そして上にかかった紙をぱらぱらとめくり、そこに引かれた線を一本一本指でなぞった。「通路にも、廊下にもない。たいていはそういうところにあるものなんだが」と父親は言って、その言葉を強調するかのように線をなぞっていた指を持ち上げた。「どの寝室にもない。寝室じゃないかと思ったんだが。屋根裏部屋かなとも思った。地下室も」父は片手で顎をさすった。「いや、地下室じゃ意味がないな。地下室に秘密の部屋があったって、どこへ通じるというんだ? 屋根裏にある秘密の部屋だったら、少なくとも外には出られる」。二十世紀の外に? と彼女は考え、父親の胸の内を思ってぞっとした。「でも秘密の部屋には何があるの」と彼女はそっと訊ねた。しばらく間を置いてから、父はようやく「良心だ」と答えた。彼女は自分の手を年老いた父親の額に滑らせ、クレーターの埃を拭ってやった。彼女が森の落葉をこっそり身につけてきたのと同じように、父もまた、かの地の土埃を身につけてい

CamScannerでスキャン

る。優しい眼差しで、彼女は父親の狂気を見つめた。この人は二十年間、これが二十世紀の見取図だと信じてきたのだ。どこかにその良心の隠し部屋があるはずの、二十世紀の見取図だと。この人を追いかけてきた連中も同じくらい狂っていたのかしら。そもそも本当に誰かこの人のことを追いかけていたんだろうか。

これをアムステルダムに持っていきなさい、と父が言った。彼女はぎょっとした。アムステルダムのことなんか、まだ何も話していないのに。娘や、手紙を読むつもりじゃなかったんだ、と父は静かに言った。今日お前が仕事に出かけているあいだに部屋を掃除していたんだよ。だとすればシーツの血と白い落葉も見つけただろう、と彼女は思った。だがそうだとしても、それについて父は何も言わなかった。彼女を除いて家族全員を失ったとはいえ、この人は、世間によくいるたぐいの、ただ単に娘をずっと自分のものにしていたいがゆえに娘が女となったことに怒り狂う父親とは違うのだ。持っていかないわ、と彼女は答えた。また帰ってくるもの。父はその言葉を信じなかった。また帰ってくるわ、と彼女は言った。そしたら一緒に秘密の部屋を捜しましょうよ。見つかったらあたしそこで踊るわ。もしそこに踊る場所があればね。

93

アムステルダムに着く前の晩に、恋人がふたたび現われた。それは夜行列車の旅の二晩目だった。午前一時を過ぎていて、汽車はいましがたパリを出たところだった。ミュンヘン経由で行くのだけはやめておくれ、と父親にせがまれたために、旅は本来よりほぼまる一日長くかかっていた。

CamScannerでスキャン

彼女は食堂車から戻ってきたところだった。食堂車では一人でテーブルに座り、サンドイッチを食べてワインを飲んだ。テーブルクロスの上に置かれたワインの壜が、レールの継ぎ目の揺れに合わせてせわしなく跳ねた。小さな赤いしみがクロスに残った。薄暗い光の下に座って新聞を読んでいた年老いたバーテンが、読み終えた新聞を彼女に譲ってくれた。列車はいくつかの村を通過した。通過駅のプラットホームで、駅員がカンテラを振った。彼女はようやくテーブルを立ち、自分の車両に戻った。さっきまで同じコンパートメントにいた母娘はもういなくなっている。残ったのは彼女一人だ。午前二時半、蛇のようにヨーロッパをくねくねと走る列車の人気のない通路に彼女は立っていた。開いた窓から入ってくる風が、彼女の顔の、治りかけてかすかに黄色くなっている部分に吹きつけた。汽車の壁に掛かったカンテラががたがたと揺れている。顔が冷えてくると、彼女は座席に戻って、新聞紙にくるまって横になり、寝つくのを待った。

あれは眠っているあいだに起きたことなんだ、だから夢なんだ、と彼女は自分に言い聞かせようとした。でも自分でもそれを本気にしてはいなかった。ウィーンの部屋にいたときと同じように、コンパートメントの中に誰かいる、と気づいてはっと目を覚ましたその瞬間からずっと、そんな気休めなど信じてはいなかった。中は暗かったが、真っ暗ではなかった。彼の大きな影が、自分の上にぬっとそびえているのが見えた。「何の用なの?」彼女はたしかにそう言った。説明しようとでも思ったのか、彼の動きが一瞬止まった。それから彼女は何かが裂ける音を聞いた。ドレスの腿のあたりが破られたのだ。もう一度裂ける音を聞いて、彼女は身をすくませた。そして彼の動きを阻もうとするかのように、体をまっすぐに起こした。ドレスのボタンが床の上に飛び散った。彼女

はよろよろと立ち上がった。が、通路の窓から入ってくる冷たい空気を浴びて、彼に何もかもはぎ取られてしまったことを思い知っただけだった。むき出しの体がコンパートメントの窓にぶつかった。体の熱がガラスの冷たさを追い散らした。彼女は片足を床に置き、もう一方の膝を座席について、両腕で胸を覆っていた。まだ何かは守れるかもしれない、そう思っているかのように。腕を胸から離せ、と彼は彼女に言った。コンパートメントの凍てつく光の中で、彼女は彼の方を向いて立ち上がった。彼の目の輪郭が溶けて、いつしかそれが二つの視力のないガラスの炎に変わっていった。そのガラスの向こうに、彼の背後に広がる夜が見えた。ガラスの目の彼方に、通りすぎていく小さな柵や、青いサイロや、明かりの灯った小さな家々が見えた。その目の瞼が閉じると、自分の両脚の頂点がぎらっと光るのを彼女は感じた。彼は口をそこにあて、彼女の両足首を赤いベルベットの座席に押さえつけた。冷たい月の光を浴びながら、彼女は座席をげんこつで激しく叩いた。彼は彼女を引きずり下ろした。あのときベッドの柱にしがみついたように、彼女は座席の肱掛けにしがみついた。汽車がごとんごとんと揺れた。彼が中に入ってくるのが感じられた。いまにもぱっと光が光って、彼が霞み、消えてしまうことを彼女は期待しつづけた。ちょうどそれは、夜中に目を覚まして、体の一部分が麻痺しているのに気づき、まるで腕か脚を失くしたような気分になって、その部分の感覚が暖かいうずきとともに戻ってくるのを待っているときみたいな感じだった。彼女は肱掛けを手離した。新聞が胸の下でがさがさ鳴った。彼女がガラスを力一杯叩くと、彼は彼女の両手を押さえつけた。彼は彼女の中心をあふれさせた。彼女は座席に顔をつっ込んで悲鳴を上げ、ふたたび彼に向かって体を開いた。

やがて目が覚めた。あたしはたぶん十五分くらい眠っていたのだろう、と彼女は思った。暗闇の中、彼女の体はまだ、赤いベルベットの座席の上に折りたたまれたままだった。彼が彼女の中から流れ出ていく匂い、そして彼女の背中についた彼の汗の匂いが、彼女の鼻を刺した。彼女はよじれた体をまっすぐにし、もう一度熱く燃えた。汽車はベルギーのどこかを走っていた。彼女はのろのろと服を着て、脚を洗いに車両の端の洗面所まで歩いていった。そしてぜいぜい喘ぎながら、トイレの便器に座りこんだ。洗面所を出た彼女は、廊下にたたずんで窓の外を眺めた。オランダふうの川がいくつも、目の前を飛ぶように過ぎていく。しばらくすると、汽車は小さな駅に止まった。ことによるともうオランダに入っているかもしれない。彼女は唯一の荷物である小さな鞄を手にとり、汽車を降りて、プラットホームの散漫な光の中を横切っていった。駅を抜けると、フランドルふうの小さな村に出た。そこにある一本きりの道を何分か歩くと、背の高い草の茂った、水面を上下に揺れるハウスボートの見える川辺に出た。風車がひとつ、夜を背にして立っている。彼女は一度後ろをふり返り、それから月光を頼りに草の中に入っていった。汽車が出発する音が聞こえてきた。十分あまり、汽車がアムステルダムに向かって消えていくのを聞きながら、ゆっくりとした足どりで、川をめざして草の中を歩いていった。雲が頭上で舞っていた。彼女はダンス・スクールのオフィスで女たちがよく歌っていた歌を口笛で吹いた。背の高い草を抜け出ると、川に並行して木の柵が見えた。南の方には村の家並がある。村は暗かった。それぞれの家に、小さな明かりがぽつんとひとつ灯っているだけ。それはオランダの熱い夜に道に迷ったよそ者のために灯された明かりだ。もう一度後ろをふり向きながら、彼女は破れたドレスを体に引き寄せた。一瞬のあいだ、あ

そこには誰もいないかもしれないという気がして彼女の心は沈んだが、次の瞬間にはもう気を取り直していた。小さなボートたちが、彼女の数メートル手前で、川の上に漂っていた。村の家とは違い、ボートには明かりが灯っていない。草と水の匂いが彼の匂いと混じりあい、それが彼女には快かった。柵のところで、彼女の足が水の中に沈んだ。彼がすぐ後ろまで近づいてきたときも、彼女はなおも川の方を見つめていた。彼女はふり返らなかった。ずたずたに裂けたドレスが、風に吹かれて彼女の体にからみついた。彼は彼女の体を開いた。柵の手すりに寄りかかった彼女の顔を覆った髪が、背の高い草をなでた。腕を伸ばした彼に胸をつかまれて、彼女は草に向かってうめき声を上げた。ずたずたのドレスが柵に引っかかり、髪が風でぐしゃぐしゃに乱れた。彼は彼女に向かって何か言っていた。黙っていてほしかった。彼が中に入っているあいだ、彼女はずっと柵から離れず、手で髪をかき上げただけだった。風車の翼が風を受けて回っている。草地の上、彼らから数メートルのところでゆらゆらと回っている。もうそれ以上彼が立てる音に我慢できなくなったとき、もうそれ以上彼が言う言葉に我慢できなくなったとき、彼女はとうとう体を動かした。「いい加減にしてよ」と彼女は彼の方を向き、その顔に唾を飛ばしながら、噛みつくように言った。「あたしの目は茶色よ、青じゃないわ。それにあたしはそんな名前じゃないわよ」

94

ホアキン・ヤングはアムステルダムのダムラーク通りの北、とある運河に浮かぶハウスボートに住んでいた。デーニアを見て彼は驚いた。そしてそれは彼と一緒にキャビンから出てきた、あふれ

るような黒髪の女にしても同じだった。運河の縁にデーニアを待たせて、ホアキンはデッキの上に立ち、黙ってシャツのボタンをはめた。こんなに早く彼女に会えて嬉しいのか、そもそも彼女に会えたこと自体本当に嬉しいのか、彼は自分でも決めかねていた。おそらく彼が楽しんでいたのは彼女を呼びよせるという行為であって、彼女が来るという事態ではなかったのだろう。たどたどしいオランダ語で、彼は黒髪の娘に何か言った。娘はボートを降り、新たに現われたライバルのかたわらを、まるでそんな競争なんかどうでもいいと言わんばかりの顔でさっさと通りすぎていった。ホアキンは娘のことをデーニアに説明しなかったし、デーニアも説明を求めたりはしなかった。二人は一緒にレストランへ行って食事をした。まわりから聞こえてくる話といえば、ドイツの話、何とか脱出しようと企てているもろもろのドイツ人の話ばかりだった。それは彼には何の興味もない話題だった。ホアキンは手紙の中の彼とはまるっきり違っていた。現実に彼を前にしていると、彼女は自分がまだ小娘にすぎないような気持ちになった。自分でダンス・カンパニーをはじめようと思っているんだ、とホアキンは言った。君みたいに踊りたい人、強い意志と怒りに包まれて踊る人たちのための舞踊団にしたいんだ。すると彼女は訊ねた。あたしたちが何に対して怒ってるっていうの？　と。彼は呆然と、表情を失って彼女を見つめた。

ハウスボートの貧しい光の中で、彼女の脚と腹に残った激しい凌辱の跡を、彼は見た。もうひとりの男の匂い、男が彼女を貪った匂いを嗅ぎとった。二人はほろ酔い気分で街を歩きながら、ボートに戻ってきていた。だがいまや彼の酔いも醒め、水に揺れるボートに合わせてしなやかに揺れたいなんていう気分ではなくなっていた。君は処女だと思っていたのに、と彼はほとんど叫ぶ

CamScannerでスキャン

ように言ったた。そうだったわよ、あなたがあたしを知っていたときはね、と彼女は冷ややかに答えた。ボートが大きく揺れ、彼は彼女の上に倒れかかった。そして愕然とした表情で、彼女の体を眺めた。彼はさっと彼女から身を引いた。彼女は言った、まさかあなた、ほかの女の子はみんなバージンだったなんて言うつもりじゃないでしょうね。彼はそれを否定も肯定もしなかった。怒っている、というよりもむしろ彼は傷ついていた。セックスの欲求も消えうせていた。いまここで彼女が彼に触れたところで、事態はますます悪化するだけだろう。彼らは頂点に達することなく眠った。

翌日になって、彼女は荷物をまとめて出ていく支度をした。行くなよ、と彼は言った。だがしばらくしてから言い直した。いや、行ってくれ。彼は彼女を駅まで送っていった。彼女の内部は死んだようにうつろだった。いまはただ、できるだけ早く汽車に乗って、明るい陽を浴びたコンパートメントを一人占めにして泣きたかった。駅までの道のりを半分くらい来たところで、ようやく怒りが彼に訪れた。怒って彼女の体をつき飛ばす彼はまるで子供だった。彼女は思わず笑ってしまったほどだった。可笑しいことなんか何ひとつありはしないのに。彼女は知らん顔で歩きつづけた。自分が歩き去るのを彼が立ちどまって見守っているかどうか、ふり向いて確かめようともしなかった。駅の構内で、彼女は切符に書かれた言葉を読んだ。まるでそこに、こういう男たちなんかに純粋な情熱を捧げる値打ちなどありはしないのだ、とでも書いてあるかのように。こういう男たち、というのがホアキン・ヤングとドクター・ライメス以外に誰をさすのか、自分でもよくわからなかった。

二日後、ウィーンで、一分ごとに老いていく彼女の父親は、一斤のパンを抱えてよろめく足でア

CamScannerでスキャン

パートに戻り、娘が帰ってきているのを見てひどく驚いた。彼女はウォッカの罎を抱え、部屋の真ん中をよたよたと歩いていた。何があったんだね？ と父は訊ねた。いつ帰ったんだね？ ではなく。あたしは美人じゃないのよ、と彼女は酔った声で答えた。もう二度とそのことを、自分が美人じゃないってことを、悔やむつもりはないわ。そのために今晩それを全部体の外に追い出してしまうのよ。あたしは美人じゃないのよ、あたしは美人じゃないのよ。娘や、と父は言った。いままでに何人の男がお前を愛している？ 一人も、と彼女は答えた。そんなはずはない、と父は言った。何人がお前を完全に愛しているかとか、優しく愛しているかとか訊いたんじゃない。気高く愛してるかとか、利己心抜きで愛してるかとか、そんなことはどうでもよろしい。私はただ、何人がお前を愛しているか、と訊いたんだよ。私自身、少なくとも二人は知っておる。わかったわ、二人よ、と彼女は答えた。そしてちょっと考えて、わかったわ、三人よ、と言い直した。そしてもう一度考えた。四人。ウォッカを抱えたまま、彼女はどさりと椅子に座り込んだ。父親が寄ってきて、酒罎を取り上げ、化粧だんすの上に置いた。そして父はパンをテーブルに置き、身をかがめて彼女の目を覗き込み、その目に微笑を生じさせた。だが、そうやって彼女をじっと見ているうちに、父自身の目はさっと険しくなった。父は指で彼女の唇に触れた。だが娘よ、と父は眉間に皺を寄せて訊いた。このあざはどこでついたのかね？ ウォッカの酔いに包まれて彼女はしばらくぼうっとしていたが、やがてよろよろとバスルームに行き、鏡の中を覗きこんだ。そして鏡の前で、父がしたように、指を持ち上げ、口もとの小さな白いあざの上に滑らせた。いままでこんなところにあざなんかなかったのに。バスルームの光を浴びて、それはダイアモンドの入れ歯のように輝いた。だけど

血を流した覚えもないのに、と彼女は判然としない思いで考えた。これはあたしの心よ、と彼女は父親に言った。心自身も知らない言葉が、あたしの顔のひびわれの中に入り込むのよ。あたしは自分が吐き出せない言葉を顔にくっつけているのよ、と。あとになって、ベッドで何時間か眠ってから、ようやく彼女は、去りゆくウォッカの波が彼女の脳に残していった問いとともに目を覚ます。

「四人?」

95

一年後、父娘はもはや存在しない国に住んでいた。その次の一年間、父はドイツ人が娘を連れていってしまうのではという恐怖とともに生きていた。母親譲りの熱いスラブの血を煮えたぎらせている娘が、ほかのスラブ人やジプシーやユダヤ人と一緒に収容所に連れていかれてしまうのではないかと。たまに人に訊ねられると、娘はこの上なく純粋なロシア人の血統です、と彼は主張した。生存の望みをつなぐためのささやかな戦術。だがさらに一年が過ぎ、世界中の予想に反してドイツとソビエトが同盟関係を結ぶに至って、その望みも消えうせた。もはや同僚たちも信頼できなくなって、デーニアはダンス・スクールの仕事を辞めた。ドイツ軍につかまったら、亡命者である彼らは祖国に送り返されてしまう。以前から祖国は彼らを捜しまわっているのだから。彼女は毎日、父とともにほとんど一日中アパートに閉じこもっていた。父親は自分たちがアフリカにとどまらなかったことを嘆き、デーニアがアムステルダムにとどまらなかったことを嘆いた。デーニアの方は、ソビエトが自分たちを追いまわしているなんて信じられなかった。四半世紀を費やして二十世紀の

見取図を捜している人間がいるとは思えなかった。この年月のあいだ、彼女の恋人は、時計じかけのように規則的にやって来た。彼女は次第に、彼がそこにいることさえろくに意識しないようになっていった。彼は時おり友人を一人連れてきた。彼らが来ているあいだずっと、彼女が眠りっぱなしということも多くなった。朝方の精液だけが、夜の記憶の唯一の名残りだった。彼女がベッドに入ると、もうすでに彼とその友人が来て待っていることもあった。まるでそこに住んでいるかのように二人がふるまうこともあった。そういう晩、彼女は彼にまたがった。彼女は歴史にとっての女悪霊(リリス)だった。歴史がみずからを、見捨てられ、独りぼっちの身だと感じる晩に、その寝床を訪れる悪霊だった。彼女は彼の上に乗り、彼が抱え込んだ年月を彼女の中に噴出させた。そんなとき、彼女は思った。もしも本当に二十世紀の見取図があるとして、そこに秘密の部屋が隠れているとしたら、それは良心が住む部屋なんかじゃない。それはこの部屋なのだ。もう存在しなくなった国の首都に隠れた、あたしが歴史と交わり歴史を所有しているこの部屋なのだ。そう考えながら、彼女は四つんばいになって部屋の中を歩きまわり、父の青写真に印された、世紀の外に出るための秘密の抜け道を捜した。ベッドの下を覗き、ヘッドボードの奥を見た。バスルームの床のタイルをはがし、壁に指を滑らせた。秘密の操作手段があるのではと、絵を左右に動かしてもみた。

　一九四一年の夏の第一夜、彼女の父はアパートを出る支度をした。これまでの人生において彼はいくつもの危険な旅を敢行し、三つの大陸にまたがって何千キロもの道を旅してきた。そのどれよりも危険である今回の旅の目的地は、街の反対側であった。三年間にわたって、しかもそのうちの二年間はドイツとソビエトが同盟関係にあったにもかかわらず、彼ら父娘はドイツ軍の目を逃

れていた。アパートのおかみが彼らのことを密告しようかと何度も思案してきたことは、彼も気づいていた。こっちを見るときの目つきを見ればわかる。いまだにそれを実行していないのは、自分に面倒がふりかかるのをおかみが恐れているからにすぎない。だが、戦争の進行状況からみて、もはやこれ以上おかみの臆病さを当てにするわけには行かないと彼は判断した。もちろん、いまから四十八時間後に、バルバロッサと呼ばれる作戦に基づいてドイツがソビエトに侵入し、すべてが一変してしまうことになるなど、彼には知るよしもない。自分がアパートを出ようとしていることも、あるいはまた青写真をイギリス経由でアメリカに送る手はずを整えたことも、デーニアには黙っていた。真夜中、娘が眠っているあいだに、彼はそっとアパートを出た。そして旧市街の中心部に入っていき、ホーフブルク宮の裏通りを近道していった。陽気のいい晩でよかった、と彼は思った。だが目的地の半分くらいしか来ないうちに、もうくたくたになってしまっていた。自分を乗せてサンクトペテルブルク郊外の草原を走った馬のことを、彼は思い出した。肉体の限界を超えてわが身を前へ前へと押し進め、横断を拒む一時間を横断したあの馬。彼の過去と彼の未来とのあいだに横たわる一時間、決定された歴史と、もしも一人の男がその気になればそれを元通りにできる歴史とのあいだに横たわる一時間を横断したあの馬。その馬を思い出しつつ、宮殿の裏手の、カフェ・セントラルからさして遠くない一本の角を彼が曲がったとき、歴史は彼を元通りに戻すことを決めた。

彼女がベッドで恋人とことを終えようとしていると、父が出ていくのが聞こえた。彼女はシーツをはね、大急ぎで服を着て部屋から走り出た。月光を浴びたウィーンの街路を走るなか、熱い精子

が彼女から流れ出て、道の上に一筋の跡を残していった。父親を見つけるのに大して時間はかからなかった。街の向こう側まで行くあいだずっと、彼女は少し離れたところから父を見守っていた。そしてその最後の角に来て、父親が死ぬのを見た。彼女が立っているところからは父親が見えるだけで、もう一人の姿は見えなかった。銃が発砲されたこともわからなかった。衝撃で父が後方にはね飛ばされた時点で、ようやく彼女は理解した。父が古い鞍袋に手を入れて取り出したのが銃であることを。二十四年前に汽車の中で危うく母親を撃ってしまうところだった銃であることを。持ち主の男と同じほど古びてはいないにせよ、間違いなく鞍袋と同じくらい古びているその銃は、引き金がうまく動かず、発射しなかった。父親は路上に倒れていた。通りの上の窓はどこもわざとらしく暗いままだ。父親が撃たれた光景を見て、彼女は一瞬足を止めかけたが、またすぐ気を取り直し死体めざして歩きつづけた。月明かりに血が黒かった。煙を上げている銃を手に持ったもう一人の男の姿が目に入ったのはそのときだった。父の銃は、その死んだ、開いた指から一メートル半のところに横たわっていた。彼女はひたすらその銃に目を向けていた。もう一人の男は鞍袋の中をかき回し、青写真を捜し出した。月光の中で男はそれを広げ、夢中になって見入っている。彼女は父親の銃のところに歩いていき、それを拾い上げた。そのときようやく男が顔を上げ、彼女の方を向いた。彼女を見て、男の顔色がさっと変わった。この人はやっぱりずっとあたしのことを欲しがっていたんだわ、と彼女は思った。プヌドゥール・クレーターの青白い灰に包まれて、薄汚れた黄金のかけらのように踊るあたしを見つめながら、この人はあたしのことを欲しがっていたんだわ。彼女は男に銃をつきつけた。「あなたは血を見るのが怖いんだと思ってたなんてね」と彼女は

言った。男の目は昔と同じ澄んだ色をしていた。

男は青写真を持って立ち上がった。街灯がその頭上で燃えていた。男の背後、通りの奥に夜が広がる。男はひどく悲しそうな顔をしていた。でもそれはたぶん、と彼女は思った。でもそれはたぶん、父さんを殺したからじゃなくて、父さんを殺したのが自分だということをあたしに知られて悲しいんだわ。彼女自身は、ドナウ川から吹いてくる風のように冷ややかな気持ちだった。殺された父親の遺体を見て感じた怒りは、いまこの時点ではずっと後ろの方に抑えられていた。いまこの時点の彼女は、可能な限り感情を排して物事を見ていた。彼女は何度も銃を持ち替えた。「弾は出ないよ、デーニア」とライメスがやっとのことで喉をつまらせながら言った。「古い銃だからね。私だって撃ちたくはなかったんだ。彼が銃に手を伸ばしさえしなければ、私も——」

「嘘よ」と彼女は言った。「はじめから殺すつもりだったのよ。そのくらいわかってるはずよ、あなただってあたしだって」

「君に何がわかる」と彼は怒って言った。「若い娘にそんなことがわかるものか。知ったかぶりはやめて、もうしばらく若い娘のままでいたまえ」。彼女が銃を持ち替えるのを彼は見つめていた。

「済まない」穏やかな口調になって彼は言った。「これは私の政治的任務だったんだ」。ソビエトのため、それともドイツのため？　そう彼女は訊きかけたが、どうでもいいことだと思い直した。彼はちょっと考えてから、早口でこうつけ足した。「だからといって、私が君を欲しがっていなかったということじゃないんだよ」。こう言われて、彼女の顔にある表情が浮かぶのを彼は見た。そして彼はそれを誤解し、言葉をつづけた。「あの晩テントの中で君に見つかったとき、たしかに私は

これを捜していた」彼は青写真を手で示した。「でも、そうじゃなかったら、あのときと同じような晩にきっと君を捜していただろうよ。それは信じてくれていい」

「あなた、そんなこと考えてるの」と彼女は言った。「あなたが欲しがっていたのが地図であってあたしじゃなかったことを、あたしが怒っていると？　あたしたちはここで、たったいまあなたに殺されたあたしの父さんの死体を前にしているっていうのに、あなたはそんなことを考えてるの？」。怒りはいまやそれほど後方にはいなかった。

「デーニア」。彼は青写真を握った手で、銃を握った彼女の手を指した。「それは古い銃なんだよ、デーニア」。なだめるような口調。「壊れているんだ。弾は出ないよ。それはもう時代遅れなんだよ」

「あらそう？」と彼女は言って、彼の体にまともに穴を開けた。

彼の二、三メートル後ろで、何かがどさっと落ちるのが聞こえた。背中から飛び出した内臓が、路上の丸い敷石の上に跳ね落ちた。彼の顔に戸惑いの表情が浮かんだ。彼女の銃が立てた音にいまなお耳を澄ませているみたいな表情だった。ちょうどさっき彼女が、いまはもう父親のかたわらに鞍袋と並んで横たわっている彼の銃が立てた音に耳を澄ませたのと同じように。それはまるで、銃の言葉を素直に信じることができず、何とかして自分でその音を解明しようとしているかのような表情だった。それから彼は下を向いた。自分の体に開いた穴が見えた。だが彼女ほどそれをはっきりと見ることはできなかった。彼女は彼の体を通して、道の奥に広がるウィーンの夜を見渡すことができた。あたかも黒い空の一部、そしてそこに位置する星々が、彼の中心に据えつけられたかのの

CamScannerでスキャン

ように見えた。彼は胃袋の代わりに夜を抱えていた。それはアムステルダム行きの汽車で恋人の素通しの目を見たときと似ていた。ほかの部分は何も見えない恋人の、その澄みわたった炎の中に、小さな柵や、サイロや、家並が通りすぎていくのを見たときと。ライメスはしばらくのあいだ路上にふらふら立っていた。そして何度も「何だか体が……何だか体が……」と言ったが、どうしても最後まで言い終えることができなかった。彼の後ろで、地面に落ちた内臓がかたちを失い、どろどろに溶けはじめた。ライメスは一瞬横を向き、ある店のウィンドウを見た。ウィンドウに映った自分の鏡像の中心に、自分の背後のもうひとつの店のもうひとつのウィンドウが映っているのが見えた。「何だか体が……」。彼は前によろめいた。ウィンドウが粉々に割れる音は、彼女が彼を殺した銃の立てた音よりもはるかに騒々しかった。彼女は銃を投げ捨て、つかつかとその死体に歩みよった。怒りはいまやずっと前方に出てきていた。彼女は割れたガラスにつき刺さった彼の指を開き、青写真を引きはがそうとした。あたしはこれをこの手から奪わなくては、と機械的に自分に言い聞かせながら。それがやって来る前にここを離れなくては、と。やって来つつあるのは怒りだ。怒りがもうじきここに来るのだ。彼女は地図を手にとった。そして、もう一度ふり返って父の姿を見ようとしたが、思い直してやめにした。彼女は足早に、しかし少しもあわてずにその場を離れ、道の奥へ向かって歩き去った。ついさっき、彼女が初めて愛した男の心臓の下で、国をなくした夜が彼女に光を放っていた方へ向かって。

恋人たちはもうあまり来なくなった。朝になって彼らの跡が残っていることもなくなった。その後の数年間、デーニアはウィーンの街を転々として暮らした。彼女に寝ぐらを提供してくれた男のところにしばらく居候することもあれば、ダンス・スクール時代の同僚にかくまってもらうこともあった。警察やスパイに追われているかもしれなかったが、確かなことはわからなかった。戦局がドイツに不利になってくると、街頭に立つ兵士たちの見張りは前よりずっといい加減になった。街の誰もが、終わりが近づいてきたことを実感した。一九四四年の末頃には、空襲が定期的に街を見舞うようになった。ドナウ川や運河に掛かった橋が、破壊された無残な姿をさらしていた。包囲されたウィーン市民たちは、ほかの都市の住民たちと同じように、空から運ばれてくる死の叫び声に慣れっこになっていった。ある日の午後デーニアは、置き去りにされた黒い馬車の中に閉じ込められた一人の子供を救い出そうとしていた。と、ようやく子供を引きずり出したところですさまじい爆風が起こり、二人とも道端のビルの入口に叩きつけられた。ふり返ってみると、馬車はなくなっていた。煙を上げている肉と木の塊と、道路をころころと転がっていく車輪がひとつ残っているだけだった。冬のあいだずっと、人々は凍えた両手を、おのれの人生の燃えがらの上にかざして暖めた。翌年の四月にソビエト軍が侵入してきて、デーニアはさらに新種の難民、さらに新種の征服されざる者となった。その二週間後に戦争が終わった。

二十二歳になっていた彼女は、かつて父親と暮らしていたアパートに戻り、もう一人の女性と共同で、前と同じ部屋を借りた。ほかのウィーン市民と同じく、アパートのおかみはいまや手のひらを返したようにドイツ人の悪口を並べたて、自分の街がソビエト、フランス、イギリス、アメリ

カの兵士たちに占領されたことを讃えた。幸い、このアパートがある地域はイギリス軍の管轄下にあった。だがそれでも、昼間に街を歩くとき、デーニアは注意を怠らなかった。区域の境界線には何の印もないし、境界を完璧に記憶してでもいない限り、いつ望ましくない地域に入り込んでしまうかわからない。そしてデーニアの場合、望ましくない地域とはソビエト軍の管轄区域である。夜になると、ソビエト軍はイギリス、フランスの区域に、そして時にはアメリカの区域にまで秘密のパトロール部隊を送り出し、道行く人々を連行していった。だからデーニアも夜のあいだは絶対外に出なかった。そしてオーストリアを出ようと、彼女は三年間さんざん手を尽くした。そして、ロンドンにいるホアキン・ヤングから来た手紙のおかげで、ようやく出国許可を得ることができた。ホアキンは目下ロンドンで新しい舞踊団を主宰していた。手紙の中で彼は、団員としての地位を彼女に保証してくれていたのである。その頃には彼女は一人暮らしだった。ルームメートはしばらく前にインディアナ出身の兵士と結婚し、夫とともにアメリカに渡っていた。デーニアはわずかな荷物をまとめて、一足先にイギリスへ送った。ホアキンを愛することなど彼女の念頭にはなかった。彼女の心を浮き立たせたのはそんなことではなかった。十一年住んでいたこの街の殺戮と傷心からやっと逃れられる、とにかくそれが嬉しかった。最後の日、空っぽになったアパートを見回しながら、彼女はその部屋を恋人たちの部屋として考えはしなかった。彼女にとってその部屋は何よりも、父親が死ぬまで住んでいた部屋だった。空っぽの、明かりの消えたアパートで、彼女は両手で顔を覆い、激しく、侘しくすすり泣いた。デーニア、と彼女は涙を止めようとしてやっとのことで言った。そしてバスルームに行き、洗面台の水を出して、顔を洗った。涙を洗

CamScannerでスキャン

い流すのに一生懸命になっていたせいで、かりにドアが開いたとしてもその音は彼女には聞こえなかったろう。

だが、誰かがある名前を呼ぶ声が聞こえたことはほぼ確信できた。かつて背の高い草の茂るオランダの川辺で、風車の影の前で聞いたことを彼女が覚えていたかもしれない名前。でもそれは彼女の名前ではなかった。

部屋に戻ると、窓のブラインドが大きく開いていた。一瞬のあいだ、窓辺に誰かの姿が見えたような気がした。

だがそこには誰もいない。彼女は急いで出国許可の書類をまとめ、小さな鞄を手にとって、まるで市場へ買物に行くかフォルクス公園まで散歩に行くかのような足どりで部屋を出る。階段を降りる途中、アパートのおかみと鉢合わせになる。おかみは目をそらし、「お元気で（マイン・フロイライン）」と言うだけだ。デーニアは一瞬、これまで何年ものあいだこの女が企んできた数々の裏切りを非難してやろうかと思う。が、企むことと実行することのあいだには大きな差があるのだ、と思い直し、「さようなら（アウフ・ヴィーダーゼーン）」とだけ答えて、そのまま階段を下りてゆく。旧市街の曲がりくねった道を、彼女は歩きつづける。壁は瓦礫の山と化し、人々は食料配給の行列に並んでいる。あちこちの窓でユニオン・ジャックが舞っている。駅にたどり着いた彼女は、同じようにウィーンを出ようとしている人々と一緒になって待つ。そしてついに、係の役人に出国許可証を提示する。係官は書類に判を押し、彼女に返す。そして自分の乗るべき汽車をしかるべきプラットホームに見つけ、あたしは本当に出ていくのだ、と実感したとき、彼女は初めて後ろをふり返った。西駅の窓を通してウィーンの街が

CamScannerでスキャン

見える。こみ上げてくる思いに圧倒されて、彼女は一瞬その場から消滅する。たぶん彼女は、一人きりになるためにどこかへ行ったのだろう。私はそう思う。だが確かなことは私にもわからない。この世には隠されたままの光景があり、人が誰にも見られずに泣くときがあるのだ。

97

彼女がロンドンに着いたのは、それから十か月以上先のことだった。勝利をかちとったロンドンの姿は、その荒廃ぶりにおいて、敗北したウィーンと区別がつかなかった。かつて彼女がアムステルダムに現われたときと同じ驚きをもって、ホアキン・ヤングはデーニアを迎えた。今回の手紙を書いたとき、よもやそれが彼女のもとに届くとは思っていなかったのである。その上、彼女はすっかり大人になっていた。十五歳と二十五歳のあいだの隔たりは、彼の場合の二十二歳と三十二歳のあいだの隔たりよりもずっと大きい。彼に会っていまだに胸がときめく自分を、彼女は情けなく思った。ドクター・ライメスの体に穴を開けたあの晩、彼女はもう、愛情の気まぐれからみずからを追放したつもりでいた。これまで自分が、人生の数多くのことから追放されてきたのと同じように。「あなたを愛する心づもりは少しもないわ」と彼女はヤングに言った。傲慢な気分のときであれば、彼はその言葉をあざ笑っていただろう。だが彼は十一年間にわたって、ハウスボートで彼女と過ごしたたった一夜の不能とともに生き、彼女の体に残るほかの男たちの跡とともに生きてきたのだった。

ロンドンに到着したこの日から、その十か月後にホアキン・ヤング舞踊団がニューヨークへ向け

CamScannerでスキャン

て船旅に出るまでのあいだに、彼女はポールという名のもう一人のダンサーと知りあい、戦争が終わって以来初めて男と寝た。ヤングが尊大で策略家であるのに対し、ポールは無邪気でひ弱だった。髪の黒いフランス人の若者で、彼女より二歳年下。地下鉄の崩れたトンネルを二人は歩いた。両手にシリング貨を一杯抱え、二十分ごとにコインを入れなければならないストーブにくっついて眠った。ポールなど取るに足らぬ相手と見くびっていたホアキンは、デーニアが彼と恋愛しているのを知ってひどく腹を立てた。確かにカリスマ的存在としては、ポールなどホアキンには遠く及ばない。だが、夜に一人の女の相手をする分には、その肉体に一応不足はなかったし、とにかく純情な若者だったから、彼女が引きずっているほかの男たちの痕跡に気づきもしなかった。あるいは気づいたとしても気にしなかった。「それなら僕のことは愛さなくていい」とホアキンはデーニアに言った。「心づもりがあろうとなかろうと。君はただ踊ってくれればいい、僕が前に見たのと同じように踊ってくれれば」。こう宣言して、デーニアが望もうと望むまいと断固彼女の心を取り戻す決意で、ホアキンは彼女のために一篇のダンスを書いた。

98

彼女は踊り、男たちが死んだ。彼らはニューヨークじゅうで死んだ。時には豪奢なマンションの最上階で死に、時にはベッドを壁に収納した独身者用アパートで死んだ。彼らは独り身のよそ者として、無気力な諦念の中に安楽を見出すようになった中年男として、死んでいった。かりに彼らが街なかで彼女を見かけたとしても、彼女のことを美しいとは思わなかっただろう。だがもし彼女

が踊るところを見たなら。その踊りに釘付けにされてしまったことだろう。けれど踊るのを見る必要もなかった。ただ単に彼女が踊るという事実が生じただけで。ひとつのターンのある瞬間において、何キロも離れたところで男たちが床に崩れ落ちるのだ。まるで彼らが飲んだワインに毒が入っていて、それがいまこの瞬間しゅうしゅう音を立てながら内臓と血液に侵入していったかのように。彼らはみな、絨毯の上に大きな紫色の輪を描いて倒れていた。空っぽのゴブレットがかたわらに力なく転がっていた。彼女の行くところ、紫の輪に包まれた中年のよそ者たちがあとに残った。だが彼女はそのことを知らなかった。ダヴンホール島の霧のただなか、目的地も出発点も見えなくなる場所で探偵に聞かされるまで、何も知らなかった。

これは彼女がアメリカに来てから二年後のことである。その二年間、彼女はずっと踊りつづけていた。これはかつていつも自分につきまとっていた恋人のことを彼女が忘れてから二年後のことである。二年が経ったそのとき、彼女は徐々に、恋人がふたたびつきまといはじめたことに気づくようになった。戦争を生き抜き、亡命のジャングルと難民の都市からわが身を解放したあげくに、恋人がまたも自分につきまとっているのだ。以前とは違い、今度は彼の影まで感じることができた。かつては彼が自分の中に入っているときでさえ影なんか感じなかったのに。それは大きな影だった。この頃には、ホアキンとポールとの仲は厄介なものになっていた。時おり彼女は、これじゃもうどれが誰の影なのかもよくわからないじゃないの、と自分を偽ってみたりもした。ある晩、舞踊団が公演中の劇場を出た彼女は、ブリーカーと七番街の角の店に立ち寄って、サンドイッチを買った。そしてそこで、アメリカに来て二年経って初めて、影を感じたのだった。影は彼女のあとにつ

いて、七番街を下ってハウストンに向かった。彼女としてはハウストンまで出れば、自分のアパートがあるアップタウンに向かうタクシーも拾いやすいだろうと思っていた。彼女はこつこつと規則的に歩いた。一ブロック先まで来て、サンドイッチを投げ捨てた。そしてこっそりあたりを見回し、いよいよとなったら誰か助けてくれそうな人を捜した。古い、空き家になったビルに逃げ込んだ瞬間に、それが間違いだったことを彼女は悟った。やれやれ、ここじゃタクシーも拾えそうもないわね、と彼女は後悔した。ビルの奥まで走っていき、階段を駆け上がるなか、彼女はますます奥の角に自分を追いつめていき、やがてもう曲がるべき角さえなくなってしまった。ビルの上方の、ガラスのない窓が街を見渡す階でもうひとつの角を曲がったとき、彼女は一瞬思い出した。かつて自分の父親が、これと同じような角を曲がって、次の角に到達せずに終わってしまったことを。その瞬間、暗闇の中から誰かががらんとしたフロアに歩み出て、彼女に声をかけた。不気味な、失われた、ハローという言葉。彼女は気を失った。気絶したのは生涯であとにも先にもこのときだけだった。目が覚めると、彼女はベンチに横たわっていた。時刻はすでに午前零時をまわっていて、頭の上でおそろしく明るい街灯が煌々と輝いていた。そこはリバーサイド・ドライブのずっと北の方、彼女のアパートからそう遠くないところだった。見知らぬ男の見慣れぬコートが彼女の体をくるんでいた。大きなコートだった。

こっちがいくら成長しても依然大きすぎるコートのように、かつてスーダンのジャングルで標榜した野蛮さは、いまの彼女には大きすぎるように思えた。どう頑張ってもその野蛮さにふさわしい大きさにはなれない気がした。これはいささか受け入れがたい事実だった。何といっても彼女は、

ウィーンの街なかで一人の男を射殺したこともある人間なのだ。しばらくのあいだ、彼女は怪しげな連中と一緒にアップタウンをうろついて過ごした。完全かつ絶対的な悪を完全かつ絶対的に打ち負かした戦争の残光にも照らされることのない、最後の暗い街並にどこからともなく現われる連中。それが彼女の仲間だった。あるいはまた、一人の少年が運転するオートバイの後ろに乗って、マンハッタンじゅうを走りまわったりもした。少年は彼女に薄汚いぶち猫をくれた。彼女はその猫をドッグと名づけた。まるっきり犬みたいに、いろんな物をくわえてきたり、年じゅう彼女にくっついてまわったりしたからだ。でもこれくらいのことではとても野蛮とはいえない。彼女は大酒を飲んだ。ウォッカの空壜がアパートの片隅に山と積まれた。天窓の下に座りこみ、父親がジャングルで歌っていたロシア民謡を思い出そうとした。だがこれも野蛮というには程遠い。自分の行為の薄っぺらなロマンチシズムを彼女は嫌悪した。芸術家連中の薄っぺらなロマンチシズムに対して抱くのと同じ軽蔑を自分にも抱いた。「ねえデーニア、いったい何のつもり?」ある晩、自分が一人泣いているのに気づいたとき、彼女は苛立ってそうささやいた。なぜ泣いているのか、自分でもわからなかった。「美人じゃないからってことじゃないし、愛されないからってことじゃないし」。部屋の隅のウォッカがまた一本増える。ウォッカの酩酊の中で、彼女はドッグと一緒に丸まって眠った。そういう晩がますます多くなっていった。頭上の天窓の向こうで、街は精神の構築物になっていった。そこには彼女につきまとう男たちもいれば、彼女が踊ると死ぬ男たちもいた。つきまとう男たちの存在を、彼女が感じることはまれだった。死ぬ男たちについては、かりにその存在を感じたとしても、おそらくそれを否定したことだろう。地平線は日本の向日葵（ひまわり）の姿で埋めつくされ

た。五年前に花開き、いまようやくここでも見えるようになった日本の向日葵。花は閃光を放ち、アパートの廊下を照らし出す。その瞬間、彼女は考えた。野蛮な世紀をつなぐ鎖が放たれたのは、ウィーンの部屋の窓辺に立つという行為によってではなく、そこにいるのを見られるという行為によってだったのだと。

その後まもなく、彼女は舞踊団を退団した。二人の男との関係はどうしようもなくこんがらがってしまっていた。ほかにも大勢女がいながら、ホアキンは年じゅう策略を弄していた。彼女はふと思った。この人を苛んでいるのは本物の情熱なんかじゃない、過去の性的敗北なんだ。ほかの女たちを百人征服したところで、あたしとの敗北の代償にはならないんだわ。一方ポールは本物の情熱の奴隷と化して、ホアキン以上に耐えがたかった。崇拝というに近い愛は、ますますうっとうしくなってきた。あるときなど、彼女の中でもっとも欠陥ある一センチ、口もとの、年とともにあざがますます白くなっていく傷ものの領域を、ポールは熱烈な言葉で賞めたたえた。それを聞いて、ポールに対する彼女の情愛は息苦しさに変わった。「それじゃこの指はどうなの」と彼女は訊ねた。「ある晩ウィーンの街で引き金を引いたこの指、あんたはこれも愛してくれるの?」。デーニアを熱愛するポールを、ホアキンは舞踊団から追い出した。いくらホアキンとはいえ、ずいぶん卑劣な真似である。自分が巻き起こすいざこざに、彼女はほとほとうんざりした。舞踊団にはイングリッドという名の仲のいい女友だちがいた。デーニアは自分の部屋を引き払い、ドッグを連れてイングリッドのアパートに転がり込んだ。そしてグリニッチ・ヴィレッジの書店に仕事を見つけた。こうして、あたかも落とし戸の中に落ちていくように、彼女はホアキンとポール両方の生活から姿

CamScannerでスキャン

を消した。しばらくして、ポールのひ弱さを気に病んだ彼女は、彼に電話をかけた。会ってほしい、とポールは哀れっぽく言った。彼女は拒絶し、やがて折れた。それは間違いだった。そしてまた拒絶し、また折れた。それも間違いだった。そしてまた拒絶した。自分の人生がどうなるべきなのか、彼女には見当もつかなかった。もしかしたらどうなるべきでもないのかもしれない、と内心恐れてもいた。時おり彼女は、みんなが帰ってしまうまで劇場の外で待ち、それから、いまも持っている鍵を使って裏口から中に入り、十二階のスタジオに上っていった。ダンサーたちは朝と昼にここでリハーサルをする。ひとつの壁はまるまる窓になっていて、マンハッタンの街並を見下ろしている。その反対側の壁には鏡がいくつも並んでいる。彼女は一人で、あざのある百人のダンサーを前に、自分だけのために書かれたダンスを踊った。

ある日の黄昏どき、彼女は書店を出た。そして次の四つ角に来たあたりで、例によって後ろをふり返ってみた。あたりは急速に暗くなってきていた。時おり彼女は歩調をゆるめ、立ちどまり、後ろをふり返った。それから表通りに出て、タクシーを拾った。後部席に座った彼女は、ウィンドウごしに後ろを見て彼の姿を捜したが、誰もいなかった。イングリッドのアパートに直行する代わりに、彼女は運転手に指示して回り道をさせた。「ここで止めて」アパートのあるブロックの角まで来たところで彼女は言った。そして運転手に料金を払い、車を降りた。もし本当に誰かにつけられているとしたら、自分の住んでいるところを知られてはまずいからだ。イングリッドのアパートまでの道のりを半分くらい行ったところで、彼女はぴたっと立ちどまった——初めて彼の足音が聞こえたのだ。いままで何年ものあいだ、足音を聞いたことなんか一度もなかった。彼の愛を感じたこ

とはあったし、ウィーンでは時に彼の愛を身にまとい、それが自分から離れていくのを感じたこともあった。でもこんなふうに、足音を聞いたことはなかった。彼女はアパートに戻らずに、通りの反対側にあるホテルに向かった。その一階はコーヒーショップになっていた。彼女は中に入った。それからゆっくりと立ちどまって後ろを向き、あたりをじっくり見渡した。コーヒーショップには誰もいなかった。奥はバーになっている。バーにも誰もいない。彼女はコーヒーショップを抜け、バーを抜けていった。一番奥までたどり着いたところで、表に通じるドアが開くのが聞こえた。彼女はふり向き、バーかコーヒーショップの薄暗い照明の中に誰かが現われるのを待った。「ホアキン?」と彼女は呼びかけた。答えはなかった。ホテルのロビーは小さく、誰もいなかった。フロントデスクの向こう側も空っぽだった。デスクの後ろのメールボックスもみな小さく、何も入っていなかった。彼女はロビーを横切り、階段を何段か上りはじめた。

こんなところに来ちゃ駄目よ、そう彼女は思った。こんなことしちゃ駄目じゃないの。これじゃあの晩、七番街の古い空きビルに入っていったときと同じじゃない。誰かがそこにいて、あたしが気絶したときと同じじゃないの。彼女はあらためて、気絶してしまった自分を叱りつけた。だが彼女はいま、ふたたび階段を上っていた。取り返しのつかない歩みを進めながら、時おり立ちどまっては、自分がいま来た方向をじっと見つめ、耳を澄ました。しばらくは死んだような沈黙があった。が、やがてまた彼の足音が聞こえてきた。彼女は急ぎ足で暗い階段を上った。二階にたどり着き、真っ暗な廊下を進み、電灯のスイッチを捜して必死に壁をなでまわした。廊下の終わりまで来て、もう行くところがなくなってしまっても、スイッチはまだ見つからなかった。彼女はふり返っ

た。階段の下の薄暗い光を受けて、彼の姿が廊下の奥にぼんやり影絵のように浮かんだ。「ホアキン」と彼女は言った。「ポール」と彼女は言った。それが本当にホアキンかポールだと思っていたわけではない。影絵はホアキンやポールにしては大きすぎた。「あたしたちはもう終わったのよ」と彼女は暗闇の中で言った。「戦争は終わったのよ。ウィーンは終わったのよ。何の用なの?」。彼女は一番近いドアの把手をつかんでがちゃがちゃ回した。非情にも鍵のかかったドアは、いくら引っぱっても開かなかった。彼女は彼の方をふり返り、待った。暗闇の中で、一瞬のあいだ何も起こらなかった。それから、彼女があんなに必死で捜しても見つからなかったスイッチに触れて、彼が明かりをつけた。

99

「大丈夫かい?」と彼は言った。

彼は予想していたより齢をとっていた。こんな感じの人間を予想していたのかどうか、自分でもよくわからなかった。彼はそれ以上近づこうとはせず、立ちどまって待っていた。「私をつけていたの?」と彼女はようやく言った。声が震えていた。

彼はふり返り、後ろを見た。そして何歩かあと戻りして、階段を見渡した。両腕がだらんと横に垂れている。しばらくして、「誰もいないよ」と彼は言った。階段が無人であることを確認するのに数秒を要した様子だ。どうやら何ごとにつけ少しずつのろい人間らしい。それから彼は、廊下に立っている彼女の方に向き直った。彼女は一歩あとずさりした。

CamScannerでスキャン

「それ以上来ないで」と彼女は言った。

「誰もいないよ」と彼はもう一度言った。そしてポケットに手をつっ込み、一個の鍵を引っぱり出した。「私の部屋なんだ」彼女がさっき開けようとしたドアを指さしながら彼は言った。彼女がそれを信じていないのは彼にもわかった。「ほら、開けてごらんよ」。彼は鍵を投げてよこした。彼女はためらいがちに鍵を受け取り、目は彼から離さずに、それを鍵穴に差し込み、回した。ドアがさっと開いた。彼はドアに向かって歩み出た。彼女はふたたび一歩あとずさりした。それでかえって、廊下の奥に追いつめられた格好になってしまった。と、彼が片手を上げた。「見ていてごらん」。彼女が呆然と見守るなか、大男は床の上にうつぶせに横たわり、両手をぴんと前に伸ばした。廊下のカーペットに向けられた、くぐもった声が聞こえてきた。「ほらね」と彼は説明するように言った。「私は床に伏せている。ね？　君はこの横を通りなさい。私の手が見えるだろう。もし私が何かしようとしたら、君は部屋に駆け込んで、中から鍵をかけてしまえばいい。何なら警察に電話してもいいし」。この途方もない場面が進行しているあいだ、彼女は事実、男の横をゆっくりと進んでいた。「ね、私は床に伏せてるだろう」彼女が廊下の反対の端、階段の前までたどり着いたときも、彼はまだそう言っていた。彼女は階段の下の暗闇を覗きこみ、足音がしないかどうか耳を澄ませた。「もう階段の前まで行ったかい？」と彼は床から、口をカーペットにくっつけたまま呼びかけた。それから少し間を置いて言った。「もし行くのが怖いんだったら、しばらく私の部屋で待っていなさい。中から鍵をかけるといい。私は一階に行って、誰かいるかどうか見てきてあげよう。ね、とにかくいま私はこうやって床に伏せているよ」

CamScannerでスキャン

彼女はまだ暗闇に戻りたくなかった。それで部屋の方に引き返していった。そしてドアのところでふり返り、彼が床に伏せているのを眺めた。この人きっと少し足りないんだわ、と彼女は思った。彼女は明かりをつけた。これといって見栄えのしない部屋だ。古めかしい青の壁紙、窓ぎわに小さな机がある。窓はイングリッドのアパートと向かい合わせになっているが、イングリッドの部屋の方がここより何階か上だ。「もう伏せてなくていいわ」と彼女はようやく言った。

十秒ばかり経って、彼はのろのろと、ぎこちなく立ち上がった。そして部屋の中に入ってきて、ちょっとのあいだ、次に何をしたらいいかわからずにいる様子だった。が、やがて机の前まで行って、椅子に腰かけた。それからまた立ち上がり、彼女に別の椅子を勧め、ふたたび机の前に戻った。コートを脱ぎもしなかったし、ほかにも我が家に帰ってきてくつろごうとするような素振りはいっさい見せなかった。かりにもし彼の話し方や仕草がもっと単調だったら、彼女は恐怖を感じたかもしれない。だが彼女は勧められた椅子に腰かけ、彼の背後の窓から見える、向かいの建物を眺めた。しばらくのあいだ二人とも何も言わなかった。大男が机の上の電話を指さした。「電話したければどうぞ」

「いいえ、もうじき失礼するわ。実をいうと」彼女はそこでちょっと考えたが、結局先をつづけた。「私、すぐ向かいに住んでるの。イングリッドっていう子と」。彼は後ろを向いて、通りの反対側の建物を見た。「住んでるところをその男に知られたくないのよ」。彼女は言葉を切った。「もう知られてるかもしれないけど」

「そいつはいつもつけてくるのかい?」と大男は訊いた。

CamScannerでスキャン

「ええ。毎日、もうずいぶん長いことつづいてる気がするわ。仕事の行き帰りに」
「警察に連絡した方がいいんじゃないかな」
彼女は部屋の中を見回して時計を捜したが、どこにも見つからなかった。街灯の明かりが差し込んで、彼の顔に切り傷の血が赤くこびりついているのが見えた。酒の匂いがした。「もう失礼するわ」
「そこまで送っていこうか？」と彼は言った。
「いいえ、結構よ」。少しのあいだ、彼女はその場を動かなかった。それからゆっくり立ち上がった。相変わらず視線だけは彼から離さなかった。開いたままのドアのところで、彼女は言った。
「その必要はないわ。でもとにかくありがとう」
「どういたしまして」
「もしよかったら……」
「いいとも」
「もしよかったら」と彼女は先をつづけた。「私が通りを渡るところを窓から見ていてくださる？私がちゃんと通りの向こう側に着くのを見届けてほしいの」
「いいとも」
「そうしてくださる？　見ていてくれる？」
薄暗い部屋の中で、彼は机から動いていない。両手は平べったく膝の上に載っている。「いいよ、そうするよ」と彼は言った。階段を下り、ホテルの玄関まで来て、彼女はドアの外に出た。そ

して通りの左右を見回した。それから、毅然と腕を組み、道の反対側へ歩いていった。アパートの入口まで来たところで、ふり返って、ブレーンの部屋の窓を見上げた。明かりがついていた。それからまたドアの方に向き直り、建物の中に消えていった。向かいの部屋の窓で、彼の影の前にカーテンが垂れた。

100

ブレーンはこの部屋に文字通り住んでいるわけではなかった。このホテルに陣取ったのは、デーニアを見張る仕事を依頼され、彼女が自分のアパートを引き払ってイングリッドのところに移ってきてからである。デーニアが前に住んでいたアップタウンのアパートからさして遠くないリバーサイド・ドライブの一画で、ある夜自分のコートを彼女にかけてやったのもブレーンだった。その夜を境に、彼は依頼人のために働くのをやめた。その夜を境に、依頼された事件はまったく別の事件に変わった。依頼人はその晩に言った。こんな馬鹿な、この女は美人でさえないじゃないか、と。だがブレーンの目には、彼女はいままでに見たなかで明らかに一番美しい女として映った。彼女が踊るのをブレーンは何度も見ていた。そして彼は、彼女が踊るたびに何か恐ろしいことが起きるのを発見していた。彼自身のように、のろまの、齢をとりかけた男の身に恐ろしいことが起きるのを。そのダンスにどういう意味があるのか、彼にはわからなかった。いままで彼が見たダンスといえば、クラブや映画で目にするようなたぐいのものだけだった。彼よりも頭がよく、彼よりも洗練されたホアキン・ヤングと同じように、ブレーンもまた、彼女が彼の記憶のよみがえりに合わせて

踊っていること、あらかじめ永久に排除された可能性に合わせて踊っていることを、意識の上で理解することはできなかった。そもそもブレーンは、それらの可能性を逃してしまったずっとあとまで、可能性などというものがあることにすらろくに気がつかなかった。ダンスが終わったときに彼女の赤く濡れた唇にくっついているほつれ髪のように、ブレーンはデーニアの生み出す瞬間に捉えられていた。誰もがいずれは知るあの予感が、彼を暗澹たる思いにさせていた。誰にもやがて訪れる、この世には取り返しのつかないものがあるのだという実感。それが訪れる瞬間こそ、人がおのれの魂を救うか、あるいは魂が肉体と首を並べて死んでいくのを眺めるか、その瀬戸際となるのだ。

彼女のあとをつけて自分の部屋のドアの前まで行った日の翌朝、ブレーンは仕事に出かける彼女のあとにふたたびついていった。彼女がふとふり返ると、彼は片手を上げて振った。その姿を見て、彼女は何となくほっとした。もう誰かにつけられているような気持ちもなくなっていた。あたしはダンサーなの、と彼女が打ち明けると、私が知ってるダンサーはクラブとか映画の中だけだな、と彼は答えた。でももうダンスはやめたのよ、と彼女は言った。八時間後、書店の外の歩道に立ったブレーンは、新聞の切抜きを詰め込んだコートのポケットに両手をつっ込んだまま、なぜやめたんだろう、となおもしきりに考えていた。あるひとつのダンスを踊っていたのよ、とワシントン広場で彼女は説明しようとした。一本の木の蔭からもう一本の木の蔭へと、彼女は動きつづけた。インクで真っ黒になった両手をポケットにつっ込んで立っているブレーンのまわりを、彼女はぐるぐる回った。彼女の言葉がちゃんと聞こえるときもあったし、その声だけしか聞こえないと

きもあった。彼女は自分なりのやり方で、彼よりもむしろ自分自身を納得させるために話していた。このダンスはあたしのために書かれたものだったのよ、と言って彼女は言葉を切った。そしてこう言った。そのダンスにはどこかしら危険なところがあったのよ。それはあたしの中にある危険な何ものかのために書かれたものだったの。彼女は言葉を切った。彼女の姿が見えなくなった。そうよ、あたしにはわかっていたわ、それが危険だっていうことが。だからこそあたしはそれが大好きだった。彼女は木蔭から歩み出て、広場の明かりの中に立った。そしてブレーンの方を向いた。彼女の美しい顔を、ブレーンはこれまでになくはっきりと見ることができた。でもそのうちに好きじゃなくなっちゃったの、と彼女は言いながら、また彼のまわりをそれとなく回りはじめた。あまりにもたくさんの人を傷つけてしまったから。そしてそのダンスをやめたとき、もうダンスはいっさいやめたのよ。

もうダンスはいっさいやめたのよ、アパートの玄関の蔭の暗闇で、ブレーンが立ち去るのを聞きながら彼女は自分にそう言う。ワシントン広場以来ずっと、帰り道の沈黙の中で、自分にそう言いつづけてきたのだ。だが彼女にはわかっている。自分がそれを信じていないことを。彼女にはわかっている。その危険がいまも自分を魅了していることを。そのやくざな、麻薬のような興奮が、決意の反対側に自分を手招きしていることを。そして彼女は、イングリッドの部屋へ向かって階段を三歩も上らないうちに、また下へ戻っていき、玄関のドアからこっそり顔を出してあたりを見回して、もう一度夜と街の中へ自分を解き放つ。ブレーンに見られていないことを確かめようと、彼女は向かいの部屋の窓を見上げる。明かりはまだついていない。きっとまだ部屋にたどり着いてい

ないのだ。彼女は通りを歩き、劇場の方角に曲がる。半分くらい来たあたりで、彼らみんなの足音が聞こえてくる。一人や二人ではなく、無数の恋人たちの群れの足音が。劇場に着くと、彼女は裏口に回り、十二階までの階段を上っていく。八階に上った頃にはもう、ドレスを脱ごうと頭の上まで引っぱりあげている。暗いスタジオに入り、マンハッタンを見渡す横長の窓の前に立ったとき、彼女はもう裸になっている。天井についたたったひとつの照明の下で、彼女はまったく一人きりだ。踊りはじめるなか、ホアキンとポールがそこにいることにも気づかない。そしてホアキンとポールもまた、たがいに相手の存在に気づいていない。それどころか、彼女の存在さえほとんど意識していない。彼らは何よりも、自分の身に迫った危険を感じている。ほかの多くの男たちがそう思っているように、彼女に関係があると思っているその危険を、何よりもはっきりと感じている。二人は彼女にじわじわと近づく。その動きはどこか凍りついて、彼らの動きに何か関連があることを暗示しているように見える。やがて彼らは自分でもその関連に気がつき、そのとき初めてそこに敵意が生じる。もしかりに二人のどちらかの存在に気づいているとしても、彼女はそれを表に出さない。もしかしたら彼女は、決して見ることのできない恋人に愛されることを愛したように、いまもまた、彼らを意識しないことに悦びを見出しているのかもしれない。あたかもこの瞬間に値する人間、この危険に値する人間など一人としてありえないかのように。彼女は鏡に映った自分の鏡像のまわりを回る。窓の外に広がる夜と街とを背に睨みあうホアキンとポールの姿が、おぼろげながら彼女の目に入る。やがて彼らは、たがいの体をつかみあったまま、あっさり彼女のダンスの外に飛び去る。窓が粉々に割れる音が、和音を途中でさえぎる。彼女は踊るのをやめ、しばし茫然と立

CamScannerでスキャン

ちつくす。そして思う。ついさっきまでここにいた男たちが、いまはもういなくなってしまったのだ、と。窓の向こうには何もない。静かなマンハッタンの夜が彼女めがけて突進してくるだけだ。

新聞の切抜きを見るのに、ブレーンは部屋の明かりをつける必要もなかった。彼は机の前に座り、太く浅黒い指でポケットから切抜きの束を取り出し、机の上に広げた。もうこれまでに何度もくり返し見ていたから、かたちを見ただけでどれがどれだか区別できる。もしここで明かりをつけて、むき出しの光の中でそれらと向きあえば、きっとまた後ろめたい気持ちになるだろう。そうなればきっと酒が飲みたくなるだろう。もうしばらく前から飲まないように努力はしていたものの、もしこの瞬間、ふと窓の外に目をやってデーニアが通りを歩いていくのを見なかったら、きっと酒の誘惑に屈していたことだろう。ブレーンが通りに出た頃には、彼女の姿はもう見当たらなかった。十五分ばかりあたりを捜したが、どこにも見つからなかった。ほかに思いつく場所はただひとつ、いままで何度も彼女を見張ってきたあの場所だけだ。劇場の前まで来て、ブレーンははるか頭上のスタジオの窓を見上げた。彼女が下りてくるまで大人しく待っているつもりだった。いうまでもなく、二人の男がガラスのしぶきに包まれて夜空に飛び出してくる姿は、彼にとっておよそ初めて目にする光景だった。奇妙なことに、落下していくにつれ、取っ組みあっていたときには忘れていたバレエの優雅さを、二人は次第に取り戻していった。だがブレーンにはそういうことはよくわからない。彼らは物音一つ立てずに落ちていった。叫び声ひとつ上げなかった。おそらくブレーンの心の中で、彼の心の中だけで、ガラスが砕ける反響音が響いたことだろう。彼は二人の落下を目で追った。二人の男が踊りながら落ちていくのを見守った。数秒のあいだ沈黙があった。地面に落

CamScannerでスキャン

ちたあとも、頭上十二階からの小さな音しか聞こえなかった。しばらくして、ようやく彼はその音に気がついた。

彼女は窓を見ていない。床に膝をついて、考えている。自分の中から出てくる奇妙な音に囲まれて、考えている。いったい黒い時計がどんなふうに回ったせいで、あたしはこんな役を演じているのだろう？　彼女はようやく立ち上がり、そして窓を離れる。彼女はまだ窓を見ない。ほぼ十年前に、路上に倒れた父を見ることもなく、ガラスに埋もれたライメスを見ることもなく立ち去ったときと同じように。彼女は鏡に映った自分を見ない。またしても踊りたい欲求を抑えられなかった女を見て何になる？　彼女はエレベーターに乗らずに、歩いて十二階分の階段を下る。六階まで下りたあたりで、またドレスを着なくっちゃ、と思う。三階に来たあたりで、サイレンが聞こえてくる。いったいこの出来事を他人にどう説明したらいいのか、見当もつかない。一階までたどり着いたとき、サイレンはまだ遠くで鳴っている。街で生じたどの惨事に応えて鳴っているのか、彼女には知るよしもない。彼女は劇場の裏口のドアを開け、敷居をまたいで外に歩み出る。と、潮が満ちてきているのが見える。我々の眠りの中でマンハッタンに寄せる潮が、居並ぶ建物を暗く濡らし、我々のはるか頭上に水位線の跡を残していくのが見える。彼女は通りに飛び出す。黒く、冷たく、滑るように歩く彼女のかたわらを、文明の根源が漂い流れてゆく。

101

その依頼人はある日の夕方にブレーンの事務所を訪れた。ブラインドごしに流れ込んでくる黄昏(たそがれ)

の光を浴びて、椅子に座った依頼人の体は金色の縞模様を帯びていた。齢は六十近く、顔のあたりにようやく肉のたるみが現われかけている。ちょっと見たところは身だしなみもよく、服も上等のようだったが、洒落た上着の襟首がだいぶくたびれているのがまもなくブレーンの目にとまった。どうやら相当の年代物である。ブレーンは想像力に富んだ方ではなかったし、自分があまり賢くはないということを自覚できる程度の賢さを持ちあわせているにすぎなかったが、何年も訓練を積んだおかげで、観察眼だけは身についていた。だからこのときも、依頼人の服装がくたびれているのを見逃さなかったわけだが、もしブレーンにもっと想像力があったなら、男の話もどこかくたびれているることを見抜いていただろう。依頼というのはこうだった。ガールフレンドが一年半前から誰かにつけ回されているから、彼女を見張ってほしい、必要とあらば護ってやってほしい、というのだ。そして男は、くたびれたスーツを着ている人間にしては相当な金をブレーンの机の上に置いた。男は名を名乗らなかったし、ブレーンも訊かなかった。それにブレーンはまた、誰かが誰かを一年半もつけ回して何も起こらないっていうのはちょっと長すぎやしませんか、と訊いたりもしなかった。こまごま厄介な問題には立ち入らない主義なのだ。探偵を仕事とする者にありがちな、真実を知りたいという欲求には彼は無縁だった。金を受け取り、仕事をする。よほどのことがない限り、それだけだ。一人で探偵事務所をやっていると自然にそうなってくる。ある事件をめぐって相棒と喧嘩別れして以来、彼は一人で仕事をしていた。それがどんな事件だったのかも、もういまでは思い出せなかった。時おり誰かが、その事件の話を持ち出すことがあった。そうするとブレーンはひどく落着かなくなった。そういうとき彼は、いっそのことこう言ってやりたかった。そうか

い、それじゃあんた、一から俺に説明してくれんかね、何しろこっちはもうすっかり忘れちまったもんでね、と。だがこれもあまり気のきいた科白とは思えなかった。とにかく彼が覚えているのは、一九三〇年代の残りと、戦時中とを、西五十九丁目にある酒場の片隅で過ごしたということだけだった。酒場は名を〈一寸先は闇〉といって、入口のドアの上にその名がくねくねと浮き上がっていた。あるときブレーンは、午前四時にタイムズ・スクェアを歩いていた。あたりは閑散としていた。花嫁衣裳につける細長いピンクのベールが、交差点の真ん中をふわふわ漂っているだけで、やがてそのベールも、通りがかりの車のフェンダーに引っかかって、轟音とともに運び去られてしまった。酸(す)えたような酒の匂いに胸がむかつき、ブレーンは道端で吐いた。この酔っ払いどもの匂いから逃れようと、重い体を引きずって何ブロックか歩いたが、匂いを離れることはできなかった。アパートに帰っても、匂いはまだそこにあった。熱いシャワーでその巨体を洗うと、湯気の中に匂いが立ちのぼった。彼はその匂いが自分の中からにじみ出ていることを悟った。自分の体から〈一寸先は闇〉の匂いがにじみ出ているのだ。彼は意を決して、探偵事務所を開業した。それはけち臭い仕事だった。見栄も怒りもそこにはなかった。怒りなどはもう、彼の中で長いこと埋もれたまま、訳のわからないもつれた感情になってしまっていて、いまでは怒りという言葉を聞いても、何のことだかピンと来なかった。自分がなぜ小物なのか、なぜこれからも小物でありつづけるにちがいないのか、みずからに説明しようとも思わなかった。彼はしばらく酒を断った。百晩のうち九十九晩は一人だった。残りの一夜はどこかの知らない女と過ごした。女は、あんた探偵なんだったらバッジはつけてるの、トレンチコートとか何か着るわけ、錠前を開けたりもするの、と質問を

浴びせた。戦争が終わると、生臭い事件はますます生臭くなり、ますます気狂いじみてきた。もちろん開業当時から生臭い事件はあった。だがその頃はまだ、一応正常な罪悪の枠内に収まっているように思えたものだ。まっとうな人間がまっとうな戒律を破っているという感じ。神さえ思いつかぬ罪悪なんてものじゃなかった。

たとえばこの一件だ。このダンサーは依頼人のガールフレンドなんかじゃない。彼女はこんな男を見たこともすらないのだ。誰かが彼女をつけ回しているから見張ってやってくれ、とブレーンに依頼しておきながら、自分こそ一年半のあいだ彼女をつけ回していた張本人なのだ。古びた暗い空きビルの中で、ブレーンはあの晩思った。まるっきり筋が通らん話じゃないか、と。あの最後の晩、依頼人は気を失ったダンサーのぐったりした体を片腕に抱え、もう一方の手に拳銃を握っていた。暗がりの中で、依頼人は何度も女の顔を覗き込み、それから天井を仰いだ。顔には苦悩の色を浮かべていた。これまで欲しいものを何でも手に入れてきた男が、とうとう本当に欲しいたったひとつのものを見つけ出し、それをみずからの両腕に抱えていながら、どうしてもそれに触れることができずにいる——そんな感じの苦悩だった。こんな馬鹿な、この女は美人でさえないじゃないか、と暗がりの中で男が言うのをブレーンは聞いた。いったい俺はどうなっちまったんだろう、と依頼人は言った。どうして何もかも変わっちまったんだ？　あんた、この女が踊るところを見たか？　と彼はブレーンに訊ねた。ええ、見ましたよ、とブレーンは答えた。依頼人は言った。ついこないだまで俺は世界を動かしている人間の一人だった。そう、ほんの二、三年前まで。翌日の新聞に、男はかつてアッパーウェスト・サイドでクラブを経営していたと書いてあった。ブレーン自身、そこ

CamScannerでスキャン

へ行ったことがあるかもしれない。ねえ、ずっと前にあんたに会ったような気がするんだがね、と
その夜ブレーンは言ってみた。俺たちいっぺんどっかで会わなかったかな。そしてその数秒後、銃声が轟き、暗闇の中にあの匂いが立ちのぼったのだった。ブレーンがずっと昔に飲んだ酒よりも強い唯一の匂い、脳味噌と発砲の匂い。死んだ男の両腕から、彼は意識を失った娘を引きはがし、七番街とハウストンの角まで抱えていって、タクシーを拾い、ハドソン川に沿って北へ走らせた。

それを境に、依頼された事件はまったく別の事件に変わった。絨毯の上で紫の輪を描いて死んでいる、一人暮らしの中年男たちの事件になったのだ。ブレーンがその事実を発見したのは、いつものように依頼人が切符を取っておいてくれた一番後ろの席に座って彼女が踊るのを見た三回目の晩の翌朝のことだった。ベッドを壁に収納した独身者用のアパートで、一人の会計監査官が原因不明の死を遂げたことが新聞で報じられていた。その次に彼女が踊った夜の翌朝、今度は富豪の男が豪奢なマンションの最上階で死んだという記事が載っていた。ブレーンが調査を進めれば進めるほど、彼女が踊るたびに男たちが死ぬという事実がますます明らかになっていった。彼らは一見毒殺されたように見えた。手にはワイングラスを抱えて倒れているし、目にも毒殺特有の奇妙な表情が浮かんでいた。だが毒物は発見されなかった。ブレーンはダンサーを調査し、そのボーイフレンドと舞踊団の座長を調査した。ブレーンの思考力はごく月並だったから、この事件に対し単なる事実の次元を超えた説明があり得るなどとは想像もつかなかった。だがそれでも、依頼人と同じく、いまや彼も憑かれていた。事実の次元ではそれが説明しきれないことを、直観的に悟っていた。かりに事態がそのまま進展していたら、踊って男たちを死なせる彼女の能力を素直に受け入れる心境に

さえなっていたかもしれない。だが、彼女を見るのもこれで八回目か九回目というある晩、今夜は誰なんだろう、いまごろどこの男がワインの栓を抜いているんだろう、そう考えながら劇場への道を歩いているとき、彼は理解した。かりに自分が、それが誰になるのかを知っていたとしても、かりに自分が世界一頭のいい探偵で、いまここでタクシーを拾って街の反対側まですっ飛ばして男の命を救うチャンスがあったとしても、あるいは通りを渡って電話ボックスに十セント貨を入れて男に知らせてやることができたとしても、自分はそれをしないだろうということを。そんなことをしたら、彼女を見つめていられる時間が一分間減ってしまうかもしれないからだ。そんな自分の気持ちを思い知って、彼はひどく不安になった。彼は翌朝の新聞を恐れた。ようやく新聞を開き、記事を見つけたときも、彼はそれを、事件をすでに予見していた人間の目で読んだ。それを阻止できたかもしれない、しかし阻止しなかった人間の目で。ちょうどこの時期、ホアキンとポールとのトラブルでにっちもさっちも行かなくなったデーニアが、舞踊団を退団したのだった。ブレーンは新聞を読むのをやめた。彼女の姿を一目見ようと、あてもなく劇場のまわりをうろついた。彼女はいっこうに現われなかった。だがしばらく経ったある晩、夜も更けてから、デーニアが戻ってきた。誰もいなくなった劇場の、十二階のスタジオで一人きりで踊るために。この少し前から、ブレーンはまた酒を飲み出していた。〈一寸先は闇〉に住みつき、オフィスにはろくに出かけなくなっていた。商売はゼロ同然になっていた。

彼女が引っ越してきたアパートの向かいのホテルに移ったとき、ブレーンはもう一度酒を断ち、商売を再開した。スタジオの窓からホアキンとポールが虚空に飛び出してくるのを見て、彼はすぐ

さま劇場の裏手に走っていった。が、ドアは大きく開いていて、彼女はもういなくなっていた。彼はタクシーを拾い、イングリッドのアパートに向かった。サイレンを鳴らした車に途中何台もすれ違った。アパートにはデーニアもイングリッドもいなかった。ブレーンは錠をこじ開けて中に入った。そしてしばらく部屋の中を見回し、デーニアが現われるのを待った。一匹の薄汚いぶち猫が、部屋から部屋へ彼にくっついて来た。三十分が過ぎ、ブレーンは向かいのホテルの自室に帰った。デーニアが戻ってこないはずはない、と彼は踏んでいた。見たところ荷物もそのまま残っているように思えたからだ。彼は机の前に、向かいの建物の方を向いて座り、さっき見つけた、彼女の所持品の中で唯一興味を惹かれたものを眺めながらその夜を過ごした。それは一枚の青い地図だった。その後の数時間、彼の想像力はいつになく飛翔し、自分とデーニアがこの地図に記された家で一緒に暮らしている時間の中へ入り込んでいった。想像の中で家具を揃え、書斎には木製の棚を並べて古い本で埋めつくし――読書三昧ってのも悪くない――楽譜を積み上げ、古時計を置いた。書斎には窓も据えた。外には暗い、不毛な感じの風景が広がり、ところどころに緑がぽつんと見えている。きっとそこはノヴァ・スコシアの海岸ぞいだ。ブレーンは書斎の中央にいて、どっしりと大きな椅子に腰かけている。椅子は赤紫色、テーブルの上のデカンタに入ったワインの色ともマッチしている。窓辺にはピアノがある。と、ドアのところに、風呂から上がった彼女が裸のまま現われる。彼は片手にグラスを持ち、彼女の方を見る。そしてワインを一口すする。やがて夜が明け、ブレーンは地図を丸めて一階のコーヒーショップに下りていき、通りに面したテーブルで食事をした。食べ終わると部屋に戻り、また机の前に座った。そして夕方になるまでそこで待ち、ふたた

びコーヒーショップに下りていった。バーに立ちよったりはしなかった。彼はまた食事をとり、発泡スチロールの蓋つきカップに入ったコーヒーを何杯か買って帰った。へとへとに疲れていた。もう一日半以上眠っていないのだ。一人の女が向かいの建物に入っていった。イングリッドかもしれない、とブレーンは思った。何分か経ってから、彼はアパートの電話機に書いてあった番号を回した。いつの日かデーニアと一緒に住むはずの家の見取図の裏側に書きとめておいたのだ。イングリッドが電話に出た。デーニアはいますか、と彼は訊ねた。いまはいません、どちら様ですか、とイングリッドが言うと、ブレーンは電話を切った。それから二十分ほど経って、一台の車がアパートの前に止まった。二人の男が車から降りた。二人が警部であることをブレーンは一目で見抜いた。彼らは約四十五分アパートの中にいてから、また出てきて、帰っていった。

ブレーンは自分の部屋に閉じこもり、三週間のあいだデーニアを待った。時には眠ってしまうこともあったから、もしかしたら彼女がこっそり戻ってきたところを見逃してしまっている可能性もあった。だがとにかく三週間が経ち、さすがに彼も、デーニアは戻ってこないのだという結論にしぶしぶ到達しはじめていた。荷物を持たずにいなくなることはあるまい、という一点に賭けたのは失敗だったのだ。そしていま、マンハッタンの鉄道駅やバスターミナルで聞込みをしてまわりながら、その賭けで失ったものの大きさを彼は思い知らされた。三週間前の客のことを覚えている駅員や車掌など一人もいなかったからだ。彼は部屋に戻り、しばらくじっとしていた。昔のパートナーのジョンソンに電話をしてみようかとも思った。自分たちがどうして仲間割れしたのか思い出せたらいいのに、と彼は思った。きっと俺の方が何か悪いことをしたのだろう。さらに一日か二日、

何もせずに部屋で過ごしてから、前にも錠をこじ開けて入ったイングリッドのアパートに彼はもう一度侵入した。そしてアパートじゅうを見てまわった。このあいだとは違って、デーニアの衣服が箱詰めしてあった。こまごまとした持ち物が入れてあった引出しは乱雑に散らかっていた。電話のかたわらにはおよそ一週間分の伝言がメモしてあったが、彼女の名前はどこにもなかった。だが、メモ用紙の三枚目になぐり書きしてあった言葉が、ブレーンの注意を惹いた。青写真。その晩、アパートに帰ってきたイングリッドは、長いこと酒を飲みつづけた匂いを発散させている大男が、猫のドッグを膝に乗せて自分の部屋にいる光景に出くわすことになる。驚いた彼女が悲鳴を上げる間もないうちに、男は言った。彼女に伝えろ、青写真は俺が持っていると。その二晩後、ホテルのブレーンの部屋の電話が鳴った。もしもし？　とブレーンは言った。彼女が電話してきたわ、とイングリッドが言った。言われた通り伝えたわよ。それで？　悪態をついて電話を切ったわ。でも——でも何だ？　でもオペレーターが、どこから電話してきたか記録してくれていたのよ。コレクト・コールだったから。

ブレーンは青写真を持ってオフィスに行き、洗面所に置いた金庫から金を取り出した。そして戦前に作られた車を借りて、大陸横断の旅に出た。オハイオまで来たところで、青写真をオフィスの机の上に置いてきたことを思い出した。俺は薄馬鹿のでくのぼうだ、と彼は胸のうちでつぶやいた。彼女と一緒に住む家の見取図を忘れてきちまうなんて。デーニアがイングリッドに電話をかけてきた町に彼が着いたとき、彼女はもうそこにいなかった。だがこの町のバス・ステーションの人たちの方が記憶力もよかったし、彼女を見たのももっと最近のことだった。ブレーンはさらに西

へ進んだ。国土の大半はいまや道路と、プールだけだった。いまだ建てられていない家屋の一部となるはずのプール。まだ建てられていない家々の青写真はきっとまだ百枚くらい、いや、何千枚とあるはずだ、と彼は自分に言い聞かせた。あれと同じくらいいいのを見つければいいさ。彼女と俺とで。建設中の景観道路の骨組が、戦争を終えたアメリカの上空高くにそびえていた。青い、見捨てられたプールがそこらじゅうに散在し、彼が丘を越えるたびにちらちらとゆらめく光を投げかけた。彼女が滞在していた町に着くたびに、彼は何も書いていない白い葉書を出した。マンハッタンの、自分の住所と名前だけを書いて。旅に出てから一年後、彼ははるか西、こんなに西に行きつづければいずれ東に着いてしまうだろうと思っていたくらい西から、最後の葉書を出した。そこはサムソンという町だった。果てしなくつづくように見える川の向こう岸に、その町はあった。サムソンで会った一人の旅行者が、三十キロ離れたところにあるダヴンホールという島のことを教えてくれたのだった。

102

ブレーンは桟橋に立って渡し船を待った。川を包む霧の中から、船はぼんやり漂うようにやって来た。船頭は明るい金ボタンがついた丈の長い青色の外套を着た、髪の黒いギリシャ人の若者だった。ブレーンを見て、彼はいい顔をしなかった。あんた、ギャングか何かかい？　と船頭は訊いた。いいや、とブレーンは答えた。あんた、都会から来たのかい？　と船頭はさらに訊ねる。どの都会のことかね、と少し間を置いてからブレーンは言った。俺はいろんな都会にいたからね。一人

の女を捜してるんだよ。船はふたたび川を渡りはじめた。というとつまり、と船頭は言った。ずっと一人の女を追いかけまわしてきたってことかな？　そうだよ、と大男はあっさりした口調で答えた。彼は船の端に立ち、両手を手すりに載せて霧の中を見ていた。ブレーンの隣にいると、若きジーノはひどく小柄に見えた。やがて、霧の中を半分も来たかというあたりで、本土も島も見えなくなった。遠いのか？　とブレーンはようやく口を開いた。

頭の中で策を練りながら、ジーノは言った。うん、そうなんだ、遠いんだよ。すごく遠いんだ。ちょっとした旅行だね、島まで行くのは。この大男は少し頭が足りないのだとジーノは思っていた。だからもしかしたらね、と若い船頭はつづけた。ここで引き返した方がいいかもしれないよ。それともあそこの家で降ろしてやろうか。霧が晴れるまで待ってるといい。そう言いながらジーノは北の方角を指さした。霧の中に、四本の杭の上に立っている粗末な小屋の輪郭が見えた。中にはストーブとベッドもあるんだよ。あとで町から食べ物を持ってきてやろう。あそこにいれば、霧が晴れたときそのぶん島に近いからね。まあ本土に戻りたきゃそれでもいいけど。

実を言うとね、とジーノはつけ加えた。あんたが言ってるような女、俺は見たことないね。一人もないな。たぶん骨折り損だと思うよ、わざわざ捜しに行っても。

自分で確かめるよ、とブレーンは言った。彼はしばらく霧を見つめ、島の姿を捜した。オーケー、とブレーンは言った。あそこの家で待つことにする。

家というほどの場所ではなかった。ジーノが彼を縁側に置き去りにし、船とともに消えてしまうと、そこはもう、灰色の霧と、川だけの世界になった。それはまるで、時間のただ中にぽつんと

CamScannerでスキャン

置かれた小さな部屋という感じだった。隠された、図面にも載っていない部屋。中にはベッドがあり、薪が一、二本と石炭のかけらが数個あるだけのストーブがあり、テーブルと椅子、それに石油ランプがあった。ブレーンはランプに火をつけ、両手を膝の上に置いてベッドに腰かけた。一時間ばかり経って、彼は立ち上がった。そして、霧はもう晴れただろうか、船頭はまだ来ないだろうかと、ふたたび縁側に出ていった。

さらに何時間かが経った。もうじきあたりは暗くなるだろう。ブレーンはいまや自分が囚われの身であることを思い知った。霧深い川の真ん中に取り残され、誰かに救い出してもらうのを待つしかないのだ。ニューヨークで、デーニアが住むアパートの向かいのホテルの部屋の机を離れなかったときと同じく、いままた彼は縁側を離れなかった。じっと立ったまま、水の音に耳を澄ました。それから手すりごしにぐっと身を乗り出して、川の中を見ようと目を凝らした。水の中で、デーニアが、文明の根源のかたわらを黒く、冷たく、滑るように泳いでいた。上から覗き込んでいる彼の姿が、彼女の目に入った。彼女は水面に上がってきた。そしてさっと舞い上がり、彼女を引き上げようと待ち構えている彼の熊みたいに大きな手の中に飛び込んできた。彼女を引き上げたとき、彼は危うく一緒になって水中に落ちてしまうところだった。彼は長いことそこに立ったまま彼女を抱きしめていた。時おり思い切って視線を下げ、彼女の顔にへばりついた濡れた髪や、体にぴったりくっついた質素なサーモンピンクのドレスを見つめた。彼女は顔を彼の胸に押しつけて、ぶるぶる震えていた。彼は彼女を抱きしめた。まるでちょっとでも動いたら彼女を失ってしまうとでも思っているかのように、両腕に彼女を抱いたまま身動きひとつしなかった。彼はその瞬間に悟った。自

CamScannerでスキャン

分たちがいかなる青写真に基づく家にも一緒に住みはしないだろうと。かつてないほど近くに、これからもないほど近くに彼女を抱きよせながら、彼はあの晩に依頼人が感じた絶望を知った。あの最後の夜、この女を抱きしめながらも彼女が決して自分のものにはならないことを知った、両腕の中にいても決して触れることさえできないことを知った、あの依頼人の絶望を。やがて彼女の震えがひどくなった。彼は小屋の中に彼女を連れていき、ベッドからはがした毛布で体をくるんでやり、自分は椅子に腰かけた。彼女はベッドの上で、歯をがたがた震わせながら縮こまっていた。

「渡し船の男が、来るって言ったのに来なかったんだ」とブレーンは彼女に言った。「あいつは俺をここに置き去りにしたんだ。俺が死ねばいいと思ってるんだよ」

「そんなことないと思うわ」と彼女は言った。そして少し経ってから、説明するように言った。

「あの人はあたしを護っているつもりだったのよ」

「あいつも君を愛してるんだな」ブレーンは納得してうなずいた。

「どうしてここに来たの？」

「家の見取図を届けようと思って」

「ありがとう」

「オハイオまで来たところで」とブレーンは言った。「ニューヨークに忘れてきたことを思い出したんだ」

少しのあいだ、彼女はひどく不愉快そうな顔をした。だがやがて笑顔を浮かべ、声を立てて笑った。「ふうん」。それから今度は、「どうやってあたしを見つけたの？」と訊いた。

「勘だよ」
「ふうん」彼女はまた笑った。
「勘はあまりいい方じゃないんだけどね」と彼は言った。
彼女はなおも笑っていた。それからやっと、「結局あなたが一番不思議な人だったわね」と言った。「たくさんの不思議な男たちの中でも一番不思議よ」
「毎晩君を見ていた」と彼は言った。「毎晩君が踊るのを。ダンサーなんて俺が知ってるのは——」
「クラブとか映画の中だけ」
「俺はただ単に、人がやってはいけないこと、でもどのみちいままでずっとやってきたことについて、ちょっとばかり知ってるってだけの人間だった。要するに他人の秘密をいろいろ知っていたんだ」と彼は言った。「でもそういう秘密とかかわってると、ときどきふっと何が何だかわからなくなっちまう。急に何もわからなくなるんだよ。俺は君が踊るのを見た。それでそこに何か秘密があることがわかったんだ」
彼女は毛布をさらに引き寄せた。彼女が何か別のことを考えているのが彼にはわかった。男たちのことを話そうかと彼は思ったが、決心がつかなかった。「あなたの名前は?」と彼女が訊いた。
「ブレーン」と彼は言った。「男たちのことだけどさ」
「男たち?」
「君が踊ったときに死んだ男たちのこと」。二人だけじゃないんだよ、と彼女を見つめながら彼は

思った。なぜなら彼女が、窓をつき破って空から落ちてきた二人のことを考えているのがわかったからだ。「ほかの男たちだよ。新聞に載っていた」

「ほかの男たちって？」と彼女はなおも考えたまま訊いた。「ほかにもいたの？」と少し経ってから彼女は言った。それから彼女は泣き出した。彼女が泣き出すと、彼は顔をそむけた。ここで同情してはまずいと思ったからだ。

「君が踊るたびに」

「あなた知ってる？」ようやく泣きやんだときに彼女は言った。「あたしずっと前から、誰かがやって来てあたしを責めるのを待っていたのよ。あたしはもう、男たちの夢であることに疲れたのよ。ポールの夢であることにも、ホアキンの夢であることにも。あなたの夢であることにも疲れたのよ、自分があなたの夢だったことさえ知らなかったけどね。あたしは他人の夢なんかになるつもりはなかった。自分自身の夢になろうと思っていたのよ。あたしが誰かの夢を踊るとしたら、それが自分の夢でもなくちゃいけないのかしら？」。彼女の震えが止まった。毛布が体から落ちた。それとともに彼女がずっと前から抱えていた何かが落ちた。「それはあなたの夢だったのよ」。彼女はベッドから立ち上がり、両手を顔の上に滑らせ、濡れた髪を押し上げた。「踊ったのはあたしかもしれない。でも見ていたのはあなたなのよ」

ブレーンは訳がわからなかった。彼女が縁側に戻っていくのを、彼はただ見つめていた。彼女はもう、ふたたび冷たい川に飛び込み島まで泳いで帰るつもりになっていた。「俺の夢？」と彼はぽかんとして言った。

CamScannerでスキャン

彼女は縁側から言った。「ジーノに言っておくわ、あなたを迎えに行くようにって。明日の朝になっちゃうかもしれないけど」。彼女は霧の方を向いてうなずいた。「あなたが町まで泳いでいきたいっていうなら別だけど」

ブレーンはなおも理解しようとしていた。「でも――」

「わからないの?」と彼女は苛立って言った。「あたしなんか全然関係なかったかもしれないのよ。何から何まで、あなた以外何も関係なかったのかもしれないのよ」。彼女は水の方に目をやり、それからまた彼の方を向いた。「あたしが踊るたびに、いま誰かが死んでる、とあなたは思ってた。でも全然そうじゃなかったかもしれないのよ」と彼女は言った。「もしかしたら」と水中に消える前に彼女は言った。「あたしが踊るのをあなたが見るたびに誰かが死んでいたのかもしれないのよ」

彼は縁側に飛び出していった。彼女を川から引き戻すためではなく、とにかく彼女がいままでここにいたのだということを自分に納得させるために。彼女がいたのだという証拠を自分に与えるために。水面に浮かぶかすかなさざ波、それだけで十分なのだ。が、小屋の中に戻っても、彼はまだ確信が持てなかった。さざ波ははっきりと見えた。彼女の影が黒い川の深みの中に消えていくのまで見えたような気がした。小屋の空気はいまだ彼女の存在で重く、彼女が発した音で重い。にもかかわらず、彼は確信が持てなかった。だがおそらくそれは、彼女の問題というよりもむしろ彼の問題であっただろう。彼女も言おうとしていたように、もしも男たちが、血もあり肉もある彼女の体を、彼らがかつてたがいに交わし、そして破った約束の亡霊として見たいというのなら、つま

るところ裏切りは彼ら男たちのものであり、彼女のものではないのだ。彼はその晩、川の上の小屋で眠った。ぐっすりと安らかに眠った。そして、この世の生の終わり間際のある瞬間に、この愚鈍な、頭の回転の遅い、神が思いつきもしなかった二十世紀の罪を理解するほどの洗練とは無縁の善良なる男は、ついに何かを理解した。彼女に言われた言葉が、最後の言葉としていまなお彼の心に残っていた。「わかったぞ」目を開けた彼は、自分に向かってただ一言そう言った。火事に邪魔されなかったら、そのまま自分がわかったことをきちんと把握し、手にとり、じっくり眺めることもできたかもしれない。彼はベッドの上で身を起こし、四方も頭上も炎に包まれた小屋の中を眺めわたした。そのときにはもうわからなくなってしまっていた。彼としてはできることならもう一度わかりたかったことだろう。だがもうその時間はなかった。「もうどうでもいいんだ」と彼はようやく言った。やがて、彼がこれまでずっと暮らしてきた秘密の部屋も燃え落ち、一人の人間よりもずっと小さくなってしまった。

103

夜明けに彼女は煙を見た。本通りの一番手前から、町の住人たちとともにそれを見た。その頃にはもう、川の上の炎は燃えつきていた。夜のあいだ彼女は、燃える小屋を見ようと人々がぞくぞく島の端まで走っていく音にも目覚めることなく、ぐっすり眠っていた。ホテルのベッドで何度も寝返りを打って眠る彼女の夢のそこらじゅうに、窓の下で響くあわただしい音が入り込んでいた。煙を見たとたん、彼女は川辺に飛んでいった。そして小屋の黒い残骸へボートを出そうとして、中国

人たちに押しとどめられた。警察の監視船が二隻、のろのろとその場を通りかかった。もう調査すべきこともあまりなかった。霧が深く立ちこめるなか、彼女はボートに腰かけて様子をうかがい、監視船に引き上げられて尋問されるのを待った。あの男を知っていたのか、と彼らは訊ねるだろう。目撃者もいるんだぞ、と彼らは言うだろう。だが警察は何もしなかった。しばらく経って彼女はボートの底に横たわり、そのまま眠りに落ちた。目が覚めると、ボートの上に掛けた防水シートに雨が打ちつける音が聞こえた。その日のずっとあとか、あるいは翌日になってから、彼女はようやく黒髪の若いギリシャ人船頭を見かけた。船頭が彼女と目を合わせようとしないのを見て、島に来た第一日目に自分が彼に言った言葉を彼女は思い出した。こう言ったのだ。あの男がつけて来られないところに連れていってちょうだい、と。そして恋に落ちたジーノが船を出したのだ。いまふたたびジーノに会って、彼女は「何てことしたのよ?」と声を殺して言った。彼は後ろめたそうに、こっそりとあたりを見回した。彼が口を開こうとすると、彼女はそれをさえぎり、「あたしのためにやったなんて言わないでちょうだい」と乞うように言って、そのまま町へ戻っていった。

その晩、ライメスとホアキンとポールとジーノとブレーンのことを考えながら、この人たちみんないったいどうなっちゃってるのかしら、と彼女は思った。みんなあたしのことを美人だとでも思ってるのかしら？　いままで一度だって美人だったことがあったとでも？　どうかお願い、と彼女は暗闇の中で祈った。死体が見つかりませんように。あそこの川に、あの男の痕跡が何ひとつ見つかりませんように。あの男の最後の跡が煙でありますように。

彼女はひと月ぶんのホテル代を払い、もう一か月そこに滞在し、しばらくのあいだ通りの向か

いの酒場で働いた。彼女が島に来てから一年あまり経ったある晩、大きな腹を抱えたメキシコ人の娘が酒場に転がりこんできた。半狂乱の表情を浮かべた顔からは血の気も失せ、あとはただ赤ん坊を、女の子を生みたいという願いが残っているばかりだった。付き添いの男もいなかった。秘密の子供をできるだけ人に知られることなく生みたいという理由以外、娘がこんな島に来る必然性は何もなかった。子供は数時間後に生まれ、母親は翌朝死んだ。午後になると、中国人たちはひょろひょろのユーカリの木を刈り込み、彼女を吊す準備をした。デーニアはたった一人で彼らの前に立ちはだかった。キルトに包まれて本通りに横たわる娘の死体のまわりで土埃が立ちのぼり、川向こうに落ちていく太陽の赤い光の中に吸い込まれていった。「この娘の名前はコンスエロ・ガルシアだったのよ」とデーニアは中国人たちに言った。出まかせだろう、と彼らは言った。「亡くなる寸前にあたしにそう言ったのよ」コンスエロ・ガルシアの赤ん坊を抱えたままデーニアはそう答えた。いつか見た映画に出てきた娘の名前をとって、デーニアは赤ん坊をジュディと名づけた。物心がついて、自分の誕生のいきさつが理解できるようになってからも、デーニアが母親の名前をでっち上げたのかどうか、ジュディにはどうしてもわからなかった。デーニアは年若い母親を製氷機の蔭に埋葬し、死体が掘り出されないようにと何日も見張りに立っていた。私たちだって野蛮人じゃないんですよ、と一人の中国人女が彼女に言った。島で暮らす小さな女の子となったジュディは、時おりジーノにくっついて川を渡った。ジーノは彼女をリトル・グリークと呼んだ。そんなこと言ったら混乱しちゃうわよ、とデーニアは彼に言ったかもしれない——ジーノがブレーンを焼き殺した晩以降、もし彼女がふたたび彼と口をきいたなら。

CamScannerでスキャン

何年ものあいだ一人でホテルに住み、誰にも触れられることなく暮らした末、ある晩恋人が彼女のもとに戻ってきた。彼らはもう二人とも齢をとっていた。彼らの愛も齢をとっていた。彼女が目覚めると、彼はベッドのかたわらに腰かけて彼女の手を握り、その手首をなでていた。次の訪問の際には、彼女の頭が彼の胸の上に置かれていた。彼女は暗闇の中で手を伸ばし、彼の顔に指をあてた。このようにして彼は時を超えて現われた。彼女はときどき、彼を聞き手にひたすら話をした。自分の身に起きたことを、何から何まで話した。彼はベッドのかたわらの椅子に座ってそれを聞いていた。彼らの肉欲は減退していた。でもそれは齢をとったからでも興味を失ったからでもなく、かつてそれがあまりに無限であまりに無尽蔵だったからだった。何も喋らないでいいのよ、と彼女は彼に言った。あなたが黙ってるのはいつだって素敵だったわ。どのみち俺はいつも間違ったことしか言わなかったからね。君の目の色も間違えたし、名前も間違っていた。どんな名前でも間違ってたでしょうよ、と彼女は言った。彼女が言おうとしていたのは、あたしたち二人が一緒にしたことに名前をつけるなんてできやしない、ということだった。あたしたちの愛には顔しかなかったわ。あたしたちの愛にはそれ自体の不思議な肉体があって、それが真ん中から花開いて男と女に分かれたのよ。歴史はあたしたちの愛のしもべだったのよ。ある晩、彼女が眠っているとき、恋人は友人を連れてきた。友人はいまやひどく老いていた。彼女が眠っているあいだ、かつて自分たちが反逆した歴史に対し何かを返すときが来たことを悟った恋人は、彼女の中に友人の一部を置いていった。朝になると、そうしたやりとりの跡は何も残っていなかった。体から精液が流れ出た

りはしなかったし、良心の呵責に皮膚がうずくこともなかった。頭が少しぼうっとするだけだった。

ぼうっとした感覚は二週間つづいた。彼女はもう五十歳に近づいていた。体の具合が悪いのよ、と彼女はある日の午後ジュディに言った。十八歳になっていたジュディは、それから七年後に自分が相続することになる本通りの酒場で働いていた。その日、ジュディは半日休みをとって、かつて自分の母親が町の人々によって木に吊されるのを体を張って防いでくれた女性に付き添い、ジーノの渡し船に乗って一緒に川を渡った。ジーノをひどく悲しませたことに、デーニアはいまだに彼と口をきこうとしなかった。本土に着くと、女と娘はバスに乗ってサムソンの町へ行った。半世紀にあと一歩という年齢に達した女は思った。あたしは父さんよりももっと遠くまで流れついて、結局のところ亡命者の暮らしを選びとったのだ——空間的な住居の見取図も、時間的な住居の見取図も持つことなしに。サムソン行きのバスに乗っている最中、彼女は、男を射殺し、女を埋葬し、子供を分娩させてきた手を眺めた。人々を呪縛し、因襲を冒瀆した足を眺めた。彼女が触れうる唯一のあざに触れた。彼女は知らなかったけれども、口もとにあるそのあざは、いま現在彼女の子宮の底をくすぐり、落着かなくさせているのと同じ手によって、そこに与えられたものだった。バスはハイウェイを転がるように進み、二十世紀はみずからの意志にしたがって少しずつ少しずつ時間を放棄していった。サムソンで女と娘は医院のオフィスに座って待ち、世紀の時間がさらにまたわずかに過ぎていった。やがて医者が彼女を検査し、三人全員を驚かせたことに、彼女が妊娠しているのを発見した。

104

私は彼女に子供を与えた。

これが私の復讐のはじまりである。これまで何年ものあいだ、復讐ができるなんて思ってもみなかった。そんな機会が訪れるとは思えなかったし、かりに訪れたとしても、十分に相応しい復讐などあり得るとも思えなかった。これまで何年ものあいだ、自分以外の誰かに復讐する資格が私にあるなんて、思ってもみなかった。いま私にわかることは、復讐が果たされることを復讐それ自体が強く要求していること、そしてその機会が現在私の手中にあるということだけだ。私自身がいかに値打ちのない、罪深い人間であろうと、二十五年前に死んだ私の妻と娘を否定し去ることはできない。この復讐は、彼の年老いた瞳を喪失の悲しみで照らすことだろう。そう思うとわくわくして夜も眠れない。まさか彼だって、目から涙を流せなくなるほど老いてはいないだろう。胸がはり裂けなくなるほど人生の果てまで来てしまってはいないだろう。一生涯でもっとも恐ろしい悲しみを味わうにちょうど足りるだけの生命が、まだ彼の中に残っているはずだ。海の底の小さな部屋で、私は一人復讐の念に包まれ、卑しい、熱い悦びとともに拳をふり上げる。

105

わがままな翼をつけた私の記憶は、勝手気ままに飛翔する。ここがどこなのかを知るずっと前から、私はこの部屋で暮らしていた。ここ二十年間の大半の年月について、私には何の記憶もない。

時おり、自分の名前を口にするのが怖くなる。何も聞こえないいんじゃないか、と思ってしまうのだ。いつ自分がふたたび彼らのために書きはじめたのか、なぜふたたび書きはじめたのか、私には思い出せない。何年ものあいだ私は拒絶しつづけた。それからまたある日、この小さなテーブルに向かって書きはじめたのだ。その頃にはもう彼女ははるか遠くに行ってしまっていて、呼び戻すのにずいぶん時間がかかった。それまで彼女がどこにいたのか、何をしていたのか、私は知らない。あの晩、犬嵐横丁の私たちのアパートの階段のてっぺんから彼女に呼びかけられて以来、私は彼女に会っていなかった。戻ってきた彼女は少しも変わっていなかった。私はそう確信している。いまはもう彼女の姿も、かつてのようにはっきりとは見えない。だが私は自信をもって言える、彼女が一日たりとも齢をとっていないことを。かつて自分たちが行なった多くのことを私たちは忘れてしまった。でも私たちが、私たち三人が、たがいに愛しあっていたことは忘れていない。自分の顔に生えた毛の感触や、朝起きたときの足のこわばり具合から判断して、いまの私は少なくとも五十歳は過ぎているだろう。ということは現在は少なくとも一九六七年である。海の波は部屋を揺さぶり、壁に当たって低くうなる。遠くで漁師たちの声がする。私は時おり、日の光を見せろと要求する。ただ単に日光を見て、その匂いを吸い込みたいのだ。ここ数年のあいだにようやく、自分がイタリアの沈みゆく街に閉じ込められているのだということがわかってきた。番兵を別とすれば、ここに住んでいるのは私一人しかいないように思える。街は空っぽだ。ドイツ軍によって街は空からカムフラージュされている。道路も運河もすべて覆いを掛けられ、街全体が青い屋根に覆われたひとつの巨大な迷路になっている。敵の目をごまかすためだ。決して荷を降ろすことのない、広大な

迷路のごとき船。日の光を見せろ、と私は番兵たちに断固要求する。彼らに連れられて、空っぽの橋や家、空っぽの広場を過ぎ、ある塔まで出かけていく。そこから五分間、外を見ることを許される。海のように見せかけた、街を覆う巨大な青い防水シートを私は眺める。その瞬間に、私は気づく。この街に住んでいるのは私だけではないことに。その瞬間に私は気づく。彼もここにいるのだ、と。五分間が過ぎ、時間だ、と番兵が告げる。

106

塔に上った瞬間まで、彼がまだ生きているかもしれないなんて考えてみたこともなかった。彼らにウィーンから連れ出されたときに、その可能性を私はあの街に置き去りにしてきたのだ。それがいつのことだったか、確かなことは何もわからない。それがいつ、どのようにして起きたのか、まるで思い出せない。ドイツ軍は依然として彼の演説を放送している。でもそれもてっきり、いまや彼がひとつの神話になってしまっていて、世界が彼の死を許さないからだとばかり思っていた。時おり私は、島に住む漁師たちがこっそり持ってきてくれた小さなテレビを見る。画面にはつねに、ずっと若かった頃の彼の写真が現われ、それにかぶさって彼の声が流れる。声をどのように処理して新しいのを作り、雑音を取り除くのだろう。自分の部屋で、私は彼女のことを書きつづける。でもまさか、いまなお自分が彼のために書いているとは思わなかった。たぶん誰かほかの人間がまた彼女に恋したんだろう、くらいに考えていた。いままでにも無数の男を誘惑してきた女なのだから。私

は毎日書く。そして毎晩、誰かがそれを取りにくる。ずっと昔のホルッと同じように。我々の情熱は、たいていの情熱がそうであるように、いまや一種機械的なものになっている。私はあたかも家を建てるように情熱を組み立てる。私はその技に誰よりも長けている。建築学に反逆する家を私は建てる。私のヴィジョンに適合させるべく、歴史の風景を変更する。私はその作業を、誰からも見られない、盲点ともいうべき地点から行なうが、人はいずれ私の存在にいやでも気がつく。番兵がやって来て、十ページであれ一ページであれ、一センテンスであれ一語であれ、書き上がったものを持っていく。誰一人コメントもしないし、手を入れもしないし、文句も言わない。たぶんこれは私が死ぬまでつづくのだろう。誘惑された男が満ち足りた境地に達するチャンスなど、まずありそうもないのだから。

107

部屋が海の底にあるせいで、テレビの映りもあまりよくない。どのみちテレビなんか信じられんよ、と漁師たちは言う。ドイツ側の解説者の話を聞いていると、ドイツの勝利は間近であるような感じである。もう二十年くらい前から間近でありつづけてきたのだ。ときどき、アメリカ側の海賊放送が入ってくる。ドイツに向けてアフリカから発信されているのだ。じきにドイツが妨害電波を送り出して、それも聞こえなくなるのだが、情勢は方向転換しつつあるとアメリカ側は主張している。戦争は世紀と同じくらい果てしない。ついこのあいだ私は、どこから来たともわからない電波を受信した。潜水服を着た男が一人、黒い海の中を漂っている。体についた命綱がどこか見えない

場所につながっている。男のまわりには球形の物体がいくつもふわふわ動いている。潜水夫はしばらくのあいだ水中を漂っていた。強大な光、およそ想像しがたい何ものかから発した強大な光が、ヘルメットの目の部分に反射していた。その陰になって、男の顔は暗い空白だった。私はその男が私自身なのだと想像してみた。どこからともなく送られてきたその映像のよいところは、誰が見ても潜水夫を自分自身だと想像できることだった。その後、アフリカからの放送もドイツからの放送も、この電波については何も言わなかった。漁師たちも何も知らなかった。その潜水夫について考えるとき、私は、かつて二叉(ふたまた)に分岐した、過ぎ去った時の川のことを思い出す。

108

私にテレビを持ってきてくれたのは、ジョルジョという漁師である。北イタリアの人間の多くがそうであるように髪は金髪、まんまるの顔が黄昏どきの太陽のように赤く輝く。ドイツ軍の知らないトンネルを通って、ジョルジョは文字通りこの部屋の床下から現われた。トンネルは街の端まで伸びていて、荒れ果てた広場に出る。広場は沼に面している。ドイツ軍の知らないこの種のトンネルが、どうやら何百とあるらしい。漁師たちはドイツ軍をはなから馬鹿にしている。ドイツが世界を支配するなんて、彼らにしてみればまるっきりのお笑いぐさだ。ドイツ軍がさんざん首をひねるのをよそに、漁師たちは沼を好き放題に行き来している。私がアメリカ人だと知ると、ジョルジョたちはいっそう友好的になった。自分がここで何をしているのか、彼らに言うわけには行かない。政治犯だと思わせるわけにも行かない。そんな偽善は私には耐えられない。このトンネルを通っ

CamScannerでスキャン

て、ジョルジョとその友人たちは、私に食べ物やテレビを持ってきてくれたし、話し相手にもなってくれた。その気になれば、私を島まで連れ出すことくらい、連中にとっては訳ないことだ。そんなことをしたらドイツ軍に見つかってしまうよ、そうしたら君たちの身まで危なくなる、と私は反対する。きっと私は街のどこかほかの、トンネルがひとつもないところに移されるだろう、そうしたらもう君たちにも会えなくなってしまうよ、と。そんなことあるもんか、とジョルジョは熱っぽく反論するが、ひとまずは私の議論を、私の高潔さの紛(まが)うかたなき証しとして受け入れてくれる。私のことをそんなに立派な人間だと思ってくれるなんて、ほとんど耐えがたいくらいだ。私はね、二十世紀をもってしても救済することのできない人間なんだよ、と私は釈明する。でも本当はただ、たとえ逃げられたとしても、どうしたら彼女から自由に生きられるかわからないからなのだ。そして最近では、復讐が私をここに引きとめている。それでもやはり、ジョルジョたちと一緒にボートで外に出られるチャンスは捨てがたい。だから時たま夜になると、関節炎を病む古びた巨体を引きずって、床下に降り、彼らにくっついて荒れ果てた広場まで出かけていく。我々は三十分ばかり、沼の黒い水の上をぐるぐる回る。ドイツ軍のサーチライトがあたりをのそのそと照らすが、どうせ奴らには何も見えない。私はボートの舳先(へさき)に座る。沼を四方から囲む百あまりの桟橋で、琥珀色の光が輝く。私は蚊と風の音に耳を澄ませ、しばしのあいだ何の記憶も所有しない。やがて我々は部屋に帰る。その晩、眠りの中で、私は沼全体の濡れた舳先に横たわっている。そこは記憶が私を所有する場だ。暗闇の中で私は目を覚ます。自分自身の人生という孤島に流れついた船乗り。

CamScannerでスキャン

109

自分の不実を救済しようというつもりはない。何かを救済するために私はここに来たのではない。私は荒馬のように歴史を走る。馬は救済を追って走るうち、救済が復讐に取って代わられた世紀へ入り込んでしまったのだ。私は二人の女を知った。彼女たちを二人とも必要とした自分の弱さが悔やまれる。もしも私が彼女を裏切って妻と一緒になったりしなければ、妻だって裏切りの代償を払わずに済んだかもしれないのだ。救済と不実の結託から生まれた子を両腕に抱きしめた妻が、ウィーンの夜の中に飛び込んだりせずに済んだかもしれないのだ。だがここでひとつだけつけ加えておきたい。私は自分をよく思ってもらおうとして言うのではない。これは彼女たちのために言うのだ。それが本当だから言うのだ。それはこういうことである。不実という視点から見れば、私がそれぞれの女と結んだ関係は、もう一方の女との関係を偽りの結びつきにしてしまうものであったろう。だが実際には、それぞれの女と私が共有したものは、それ自身において真実だったのだ。だからといって、私に対する人々の軽蔑が減ってくれるだろうとは思わない。私の指を染める血を少しでも大目に見てもらえるとは思わない。この世紀は無垢という言葉を辱め、名誉という言葉を汚(けが)す。それらの言葉を自分に当てはめて、これ以上恥辱の上塗りをするつもりはない。私の娘がいま生きていれば、三十歳になっているだろう。生きていれば、彼女もまた、消えることのない百の罪を抱えているはずなのだ。

CamScannerでスキャン

110

というわけで、ここが私が何年も前から暮らしてきたところである。窓のない小さな部屋、海鳴りが壁から聞こえる部屋。はじめのうちはともかく、じきにみんな、私が何のためにここにいるのか忘れてしまったようだ。番兵たちは特に友好的でも親切でもないが、かといって理不尽に意地悪でもない。どちらにしろ私にあまり注意を払っている様子はない。去年あたりから時おり、部屋の鍵をかけずに出ていってしまうこともある。はじめ私はこれを、軽蔑のしるしと受けとめた。こんな無害な奴はこの程度の監視で十分だ、という意思表示であると。まさか私に、ドアを開けて外に出るだけの度胸があるとは予想していないのだろうと思った。だがいまあらためて考えてみると、たぶん彼らはそれを予想していたのだ。それどころか、それを前提に行動していたのだ。いまあらためてふり返ってみると、きっとすべては計算通りに、起こるべくして起こったのだ。最初の二回は、番兵たちはあっという間に私に追いついた。近頃では私の動きも昔ほど敏捷ではない。廊下の角も曲らぬうちに早々と取り押さえられてしまった。だが八か月前のこと、偶然にか、あるいは意図的にか、彼らは私に追いつかなかったのだ。ある日の午後、私はドアを押して開け、廊下に出て、前に逃げたのとは逆の方向にのそのそと歩いていった。どうせそのうち番兵の一人とばったり鉢合わせになるだろうと思っていた。いまにして思えば、最初の二回に取り押さえられたのは、私が間違った方向に進んでいたからなのだ。その日、廊下を先へ進むにつれて、あたりは暗くなっていった。五分ほど経って、私は、一本の通路に出た。壁のくぼみにカンテラが埋め込まれている。

CamScannerでスキャン

歩き疲れというよりも、廊下のむっとする空気に私は圧倒された。さらに先へ進むと、青い光に照らされたもうひとつの通路に出た。顔を上げると、街を覆う青い防水シートが見える。いますぐにでも番兵が連れ戻しにくるだろう。私は少しのあいだ立ちどまって、彼らが来るのを待ちさえした。こんな遠くまで出てこられるなんて思ってもみなかった。だいたいこんなに遠くまで行ってみたいとも思っていなかったのだ。もう部屋を出てから十分は経ったにちがいない。と、ドイツ語の声が聞こえてきた。通路の壁に寄りかかって、その外国語にしばらく耳を澄ませていると、やがてその言葉はまったくの外国語にも聞こえなくなってきた。ドイツ語なら私もそこそこにわかる。なおも耳を澄ませているうちに、とうとう私は、それがけさ自分で書いたばかりの言葉の独訳であることを理解した。私は声のする方に歩いていった。階段をひとしきり上り、青い廊下が私の部屋の前と同じように黒くなってから、私は老人と、年下の男が住んでいる部屋に行きついた。

111

彼らの部屋は私の部屋と大して変わらない大きさで、殺風景さにおいても似たりよったりだ。それでも、位置が高いので、こちらには天井近くに窓がひとつある。窓の縁から水がしみ込んできて、時おりひどい悪臭がする。窓からは別に何かが見えるわけではないが、とにかく光は入ってくる。私にはそれがうらやましい。だが彼らは気づいてもいないみたいだ。ずいぶん前から、私はこの部屋を定期的に訪れるようになっている。二人はいつも同じ場所に座っている。老人は部屋の真ん中のテーブルの前に座り、椅子に埋もれ背を丸くして、正面をぽかんと見つめながら、もう一人

の朗読を聞いている。老人はいつも同じ黒いスーツを着ている。齢は八十歳くらい、髪は薄くて白い。口髭などはあまりに真っ白で貧弱なため、あるかないかもよくわからないくらいだ。老人が私を認識しているとは思えない。無理もない、ずっと前に一度会ったことがあるだけなのだから。私だって写真を見るまで彼だとはわからなかった。老人の常として、彼もまたさまざまな思い出の品に囲まれて暮らしている。はじめは私も、それらはみな年老いたドイツ人の常として彼のドイツ精神の証しの品なのだろうくらいに思っていた。制服を着た彼の写真、軍隊の先頭に立つ彼の写真、政治家たちと一緒にポーズをとる彼、自分の崇拝者たちに向かって叫ぶ彼。しばらくしてやっと、私はこの老人が、おのれの神の写真を貯め込んだそこらの老いぼれドイツ人とは違うことに気づいた。この男は自分の写真を抱えた神その人なのだ。だがそのことを私に教えたのはもう一枚の写真、彼を写したのではない唯一の写真である。それは彼のベッドのそばの小さなテーブルの上に、一枚ぽつんと置かれていた。茶色に枯れた花が一輪、重たい真鍮のフレームから垂れ下がっている。はじめ私は、それが彼女だとはわからなかった。どこかの、見たこともない娘の写真だとしか思わなかった。けれども、献辞を見て、彼女の名前を見て、私ははっきり思い出した。これが彼女であることをはっきり思い出した。そうだ、と私は自分に言った。これこそまさに彼女なのだ。青い目、陽光の糸のような髪、私はそれをありありと思い出す。彼女の口もとにある何かをよく見ようと、私がその写真を手にとったとたん、老人はいっぺんに恐怖に陥った。無力な老人の常として、彼はもはや恐怖を伝える言葉を見つけることができなかった。恐怖はすべて彼の目の中に現われていた。そしてそのとき、私は悟ったのだ。私は写真を下ろした。あんたか、と私は彼に言っ

た。

112

あなたですね、と若い方の男が私に向かって言った。薄黒いグレーのコートを着た彼は、私と同じく中年だった。痩せて、柔らかな物腰。だが目は別だ。目は憎悪をたぎらせて私を睨みつけている。老人と同じく、彼もまた、首から下には何の生命も残っていないように見えた。まるで自分の座っているところに糊づけされているかのようだった。生まれて初めて、憎悪によって彼は力強さを得ていた。彼には存在感がみなぎっていた。おそらくそれは、ずっと前に、老人から引き渡されたものなのだろう。この瞬間のペーターの目には、依頼人の目に宿っているといつも聞かされてきた、あの力が宿っていた。この瞬間のペーターの目には、ドイツを支配する力が宿っていた。この瞬間、彼は、私を殺すにふさわしい、十分理性的な境地に達しようとしていた。力を失ってしまうほど憎悪から離れてもいない、しかし殺害の計画を練るに十分冷静な境地に達しようとしていた。依頼人が長年にわたってゲリを悼み王国を悼んできたのと同じように、そして私がメーガンとコートニーと私の良心とを悼んできたのと同じように、おそらくはペーターもまた、クローネヘルムを悼んできたのだろう。彼はもう長いこと翻訳をつづけている。昔もいまも、つねに変わらぬ正確さで翻訳をつづけている。もしも彼が訳文を捏造したり歪曲したりしていたなら、いまこれほどのすさまじい憎悪がその目に浮かんだりはしないだろう。むしろそこには、後ろめたさや狡猾さが見えるはずだ。これはすべて、私が初めてその小さな部屋に迷い込んだときに起きたことである。我々

三人は、憎悪と、恐怖と、驚きの目で、たがいに見つめあっていた。足のほうはじわじわと弱ってきているとはいえ、私の手はまだ昔通りの頼もしさだ。その気になれば、蛆虫の憤怒をたぎらせたペーターの首の骨をへし折り、それから老人を絞め殺すことくらい造作ない。そうしながらメーガンの名を口にし、コートニーの名を口にすることもできるだろう。ワルシャワからロンドンまでの、トレブリンカからマウトハウゼンまでの、彼らすべての名を口にすることもできるだろう。だが私にはわかっていた。兵士たちが飛び込んできて私を射殺する前に、それらの名を口にしながら彼を殺すことができたとしても、六万、十万、十二万、何万であれ彼がおのれの悪を測るべく時のページに書き込んだ名前を口にしながら彼を殺しつづけることができたとしても、結局のところ、たったひとつのちっぽけな命を仕返しとして絞殺することができるにすぎないのだ。それではとても復讐には足りない。たとえこれから三十年間、毎晩この部屋に入り込むことができて、夜ごとに少しずつ彼を殺すことができたとしても、しょせんたった一人の、年老いて耄碌し、記憶も失った男のみじめな生命を奪うだけであることに変わりはない。たとえその皺だらけのちっぽけな顔に向かってあらゆる犠牲者の名前をどなりつけてやったとしても、もはやこの男にとって、自分自身の悪は何の意味も持たないのだ。おのれの悪を忘れてしまった男を殺して、それが何の復讐になるだろう？　その第一回の訪問のとき、ちょうど兵士たちが私の無害さに侮りを示すように、私もまたペーターの視線に背中を向け、部屋を出た。そして何日か経った晩、もう一度ここにやって来た。それ以降、私は毎晩ここに来ている。これはすべて誰かの計算通りなのだ、という疑いが私の頭をかすめる。もし私がZを殺したとしても、兵士たちは誰も飛び込んでくるまい、という疑いが私の

頭をかすめる。どこか秘密の場所に隠れたまま、一部始終を見守るだけではあるまいか、と。あの夜、ホテル・インペリアルで、私がXを殺すのを彼らが意図的に容認したという可能性もある。それと同じに、今度もまた、私が彼を殺すのを止めないのではあるまいか。それでもなお、毎晩私はこの問題について考える。毎晩私の両手は万全の態勢を保っている。一方、煮えたぎるばかりで決して行動に移されることのないペーターの憎悪は、だんだんと私を退屈させるようになってきた。それと同じく私の憎悪がZを退屈させるようにならないうちに、彼がいまどんな霧の底に沈んで生きているにせよ、私は彼の注意を引くに足る復讐を考えつかねばならないのだ。

113

かくして私たち三人、歴史の地獄神と、彼の夢の作者と、その翻訳者は、年老いて体の動きもままならず、正気を失くし、誰にも見られることなく、イタリアのどこかのじめじめした地下室で暮らしていた。私を何よりも嫌悪させたのは、時間が依頼人の悪を弱々しいものにしてしまったことだった。それによって、彼の悪は非人間的なものなのだという幻想が打ち砕かれてしまったことだった。それはどこまでも人間的な悪なのだ。医者がやって来て、Zの服を替えてやり、汚してしまった体を綺麗にしてやったとき、私はその人間性を思い知った。Zは自分の体を汚した。だがそれは彼が年老いたことの帰結であって、彼の悪の帰結ではない。彼の糞は悪臭を放つ。だがそれは人間の悪臭であって、悪の悪臭ではない。時間と年齢は、彼という人間を衰えさせただけでなく、彼の邪悪な神性を衰えさせ、彼独自の怪物性を衰えさせたのだ。彼は私たち二人、ペーターと私と

CamScannerでスキャン

に怯えきって生きていた。自分の人生がすり抜けていく痛み、混乱が押し寄せてくる痛みとともに生きていた。恐怖に包まれ、生の痛みをひしひしと感じていた。だからこそますます彼を殺すわけには行かない、と私は思うようになった。でもときどき、彼を殴ってしまうことがあった。そうせずにはいられなかったのだ。それにひとつには、状況に探りを入れてみたくもあった。見えないところから我々を見張っている奴らが、兵隊を送ってよこして私を止めるかどうか、試してみたかったのだ。老人は血まで臭った。力の失せた、毒のような臭い。私が彼を殴ると、ペーターは一瞬我を忘れ、笑みを浮かべた。おまえの番だ、と私は顎で老人を指しながらペーターに言った。一発喰らわせてやれよ。ペーターは言われた通りにした。彼なりの、力ないやり方で。老人の顔から血が吹き出し、おろおろした哀れっぽい悲鳴が上がると、ペーターはあわてて身を引いた。だがそれは世界の支配者を殴ったからではないと思う。それはむしろ、私と徒党を組んでしまったからだと思う。私の誘惑に乗ってしまってからというもの、ペーターはますます私に対する憎悪を募らせるようになった。時が経つにつれて、Zは外見も臭いもいっそうおぞましくなっていった。私は懸命に信じようとした。これは彼の魂の悪臭が、肉体をつき抜けて立ちのぼってきているのだと。だが彼の弱々しさを見れば、それが嘘っぱちであることは明白だった。こうした人間性の証拠を、歴史はいかにして耐えるのか、私にはわからない。歴史はもうずいぶん長いこと、あらゆる人間は救済可能であると主張しつづけてきた。だがそもそも救済ということを、人はこの後どうやって信じうるのか、私にはわからない。ここにいるのは、絶対に救済できない一人の人間だ。しかし、かつてのさまざまな出来事をめぐる私の記憶の中で、私はいまや、彼以上に彼になっている。だからここに

いるのは、二人の人間、その汚らしさにおいて否定しがたく人間的な、しかしその人間性すべてをもってしても決して救済することのできない二人の人間だ。救済という信仰にしがみつくあまり、歴史は私たちのことを、怪物として片付けようとするかもしれない。だが見るがいい、神のパンツには人間の糞がついているのだ。医者が彼の服を替えにやってくる。殴られて腫れ上がったZの顔を見ても、医者は何も言わない。血についても何も言わない。こうして私は悟った。Zは私のものなのだ。どう扱おうと私の自由なのだ。どうやら従者どもには、自分たちの神を殺すだけの度胸がないらしい。だから自分たちに代わって、神自身の神に殺してもらおうと思っているのだ。

114

何か月ものあいだ、十分に相応しい復讐が思い浮かばない。もどかしい気持ちで、私は闇の中に悶々と横たわっていた。それが昨晩、ベッドの上で、とうとう思いついたのだ。目を覚ますと、ある思いつきがはっきり頭に浮かんでいた。はじめはほとんど信じられないくらいだった。私は重い体を持ち上げ、机の前まで歩いていった。それは三十秒で片付いた。その前置きとして、快楽の行為を加えたりはしなかった。たとえもし八十歳の肉体にそんな力が残っているとしても、彼に快楽の満足を味わわせてやる気はない。考えてみれば、犬嵐横丁の部屋の片隅から眺めさせてやったことを除けば、いままでだって彼に、彼女の快楽を与えてやったことは一度もないのだ。私は神の神である。だからいかなる快楽の行為も必要としない。ペニスもなし、花粉もなしで、彼女の卵に触れることができる。ペンによって、文によって、彼女の卵に触れることができるのだ。生命が彼女

の中核に宿る、と私は書く。誕生まであと九か月、と。

115

翌日、原稿を取りにきた彼らに、自分で届けることにした、と私は宣言する。番兵たちはわざとらしく、まさかという顔をしてみせ、そんなことは不可能だと主張する。この部屋のドアの鍵はもう八か月もかかっていないままだというのに。よかろう、それなら今日は何も渡すものはない、と私は答える。番兵たちはひそひそ声で話しあう。その中の一人が、上司に相談しに出ていく。ややあってそいつが戻ってくる。我々があなたをZの部屋まで護送します、と彼は言う。

116

ペーターに反逆の余地を与えるわけには行かない。だから彼がその一文を依頼人に向かって翻訳するとき、私もそこにいなくてはならない。いつもと何か違うことをペーターは即座に感じとる。彼はその文を正確に翻訳する。老人がそれを理解したのかどうか、にわかには見定めがたい。「わかったのか？」と私は彼にドイツ語で訊ねる。ペーターが抗議する。「そういうふうに話しかけては困ります」と彼は英語で言う。「彼に話しかけるのは私一人です。言いたいことがあったら私を通して下さい」。わかったのか、と私はもう一度Zに訊ねる。「子供なんだよ」と私は彼に言う。「おめでただよ」。ペーターがふたたび抗議する。大声で、ドイツ語でもって。老人は混乱した面持ちでペーターと私を交互に見る。私はなおも彼に話しかけ、ペーターはますます声を張り上げる。

とうとう私は依頼人から目を離し、英語でペーターに答える。「静かにしろ」と私は言う。「可哀想に爺さん、すっかり混乱しちまってるじゃないか。だいいち番兵に聞かれたらどうする。そうしたら我々三人ともまずいことになるぞ」。「あんた一人にとって、だろう」とペーターは答える。私は言う。「違うね。この中でお前の立場が一番軽いってことくらい、誰が見たってはっきりしてるじゃないか。静かにしないんだったら、番兵を呼んでお前を引っぱっていってもらってもいいんだぜ」。彼は無言のまま、ぎらぎらとした目で私を睨みつける。しばらくのあいだ、我々は何も言わずに睨みあう。やがて私がふたたびZの方を向く。Zはまだおろおろしている。今日の午後がいつもの午後と違うことに怯えている。「あんたの子供なんだよ」と私は彼に言う。ペーターは怒りではち切れんばかりになって、なおも私を睨みつけているが、何も言わない。「わかったのかい?」と私は老人に訊く。「あんたとゲリの子供なんだよ。あんたが前々から持つことになってた子供だよ。彼女もすごく喜んでる。あんたの素晴らしい種をもらえて、名誉だと思っている。いずれあんたはこの息子を――絶対保証する、間違いなく男の子だよ――この息子を教育して、世界の支配者の地位を継がせるんだ。そうすれば、あんたがいなくなってからも世界がつづくってのも、そう悪い話じゃないだろう?」。こう聞かされて、老人の顔が、小さな、明るい笑顔で輝きはじめる。ひどく老いた目が、まさしく私の予想通りの光を放つ。いまからはっきり想像できる。九か月後、私が復讐を完成したときにそれらの目が示すにちがいない暗い、打ち砕かれた絶望が。ぼんやりとした霧の中にいながらも、彼は早くも、生まれてくる子供がどんなに美しいかを考えている。きっと母親譲りの美しい子にちがいない、と考えている。目的の見えなくなっていた生に、最後の意義が

CamScannerでスキャン

にわかに現われたのだ。彼はいまや永遠に不滅性と結びついている。単に世界の記憶においてだけでなく、肉体において結びついている。それは彼の神聖さの証しであり、と同時に人間性の証しである。ぼんやりと、霧に包まれながらも、彼はしくしくと泣き出す。何ならここでぶん殴ってやったっていい。今日私からもらった贈り物がもたらした幸福感は、殴られたぐらいじゃ消えるまい。しばらくして、彼は椅子から立ち上がる。私が初めて見る光景だ。あまりの興奮にぐったりして、彼は寝台の上に横になる。そして古めかしい、絞めつけられた言葉で、彼女に向かって感謝の念を叫ぶ。安らかな、と同時に恍惚に浸った心で、彼は眠りにつく。こちらとしてはただ、安心と興奮に浸りきった彼が、こっちの用事が済まぬうちに死んでしまわないよう祈るばかりだ。

117

私は何日か間を置き、そのあいだ部屋から一歩も出ない。番兵たちは怪訝そうな顔をして、狼狽の表情さえ浮かべる。夜になると、遠くから彼の声が聞こえる。独りぼっちの犬の遠吠えみたいな声だ。ようやく私が姿を現わすと、老人は哀願の眼差しを向ける。あの悦ばしい知らせは嘘だったのではないか、そんな疑念が彼の中で頭をもたげはじめている。私はそれを鎮めてやる。その後何日も、ペーターが彼に向かって朗読するあいだ、私はそばに座って、翻訳が妙な具合にならぬように見張っている。身動きの取れないペーターは、ただただ怒りをたぎらせるばかりだ。一方Zは、少し驚いたことに少しずつ外に心を開くようにさえなってきた。彼なりの気狂いじみた話し方で、少しは話もするようになった。時おり短い言葉をはさんだり、将来について一言、二言語ったりするの

だ。たとえばバイエルンのアルプスにある別荘へ息子を連れていく計画とか。その別荘ではいまなおすべてが彼の支配下にあるらしい。過去とその記憶が彼の顔に奔流のように戻ってくる。それを見て私は大いに満足する。こっちの望み通り、彼は少しずつ、自分が誰なのか、自分が何をしたのかを思い出してきている。あたかも彼の頭の中で、過去とその記憶とが、彼の未来、彼女の中で育っている子供、それと共生して成長し、やがて両者が融合して、ひとつの現在となって彼女の脚のあいだから現われる……そんな感じである。時が経つにつれて彼はますます元気になっていき、場合によっては昔の自分をまあそこそこに模倣してみせたりもする。もともと何ひとつわかっていなかった事柄について、ああだこうだと無茶苦茶を並べ立てるのだ。私は時おり一緒になって冗談に興じる。大人が子供と戯れるように、あるいはペットの鼻先に紐を垂らして遊ぶように、彼の眼前に、彼女の中の生命が鼓動し、お腹を蹴る感触をぶら下げてみせる。小さな動物そのままに彼は目を血走らせ、それを取ろうと手を伸ばす。私は笑いながらそれを引っ込める。ペーターは私に対する憎しみの力の中に深く深く沈み込んでしまっている。行き場のない力は煮えたぎる衰弱と化し、いまや目までどんより濁ってきた。何週間かが経ち、何か月かが経つ。私は昼間を依頼人と翻訳者とともに過ごし、晩はジョルジョと沼へくり出す。私はジョルジョに言う。もうじき君と一緒に島へ行くよ、と。そうとも、とジョルジョは言う。絶対見つかりっこないって。

118

夜になると私は、彼女の内部を探索しに出かける。彼女の中の運河を上り、水路をさまよって、

いまから数か月後に彼女が出産するはずの生き物を作る場所を捜す。やがて子宮の岸辺に肥沃な平地が見つかり、私は仕事に取りかかる。時間はもうあまりない。急がなければ。材料は揃っている。私は鋳型で型をとり、モルタルを混ぜあわせる。それから彼女の中の浜辺に穴を掘り、腹部全体をひとつの大釜に仕立て上げる。そして次に、生まれてくるはずの生き物の原汁（げんじゅう）を調合する。私はそこに百もの材料を入れる。彼の命令によって、叫び声も遺品も残さずに霧の中に消えていった者たち、あとに残され彼らの行方を思案する人々に何の手がかりも与えずに消えていった者たちの沈黙を入れる。銃殺され雪の中に顔をつっ込んで死んだ者たちの下に残された粉っぽい赤色の氷を入れる。またたく間に銃弾の炎と化し、次の瞬間にはもう明るい午後の静寂の中に溶け込んでいた子供たちの怯えた悲鳴を入れる。ゲットーのジプシーたち、穴の中に横たわるユダヤ人の裸の死体を入れる。彼が餓死させた者たちを私は入れる。彼らの骨の髄によって、私が作るこの生き物が立つことになるのだ。彼がガスで殺した者たちを私は入れる。彼らの肉の小さなひだに残ったガスによって、私が作るこの生き物が震え、よたよたと動くのだ。彼が焼き殺した者たちを私は入れる。彼らの灰が放つ耐えがたい臭気によって、私が作るこの生き物が、楽園の隅々まで臭うのだ。そして私は、彼が彼らの顔から引き抜いた歯、彼らの腰部からはぎ取った生殖器、自分が彼らを殺したことを何度でも確認できるよう開けたままにしておいた目、それらを細かく砕いて入れる。私は悪の残飯をつくり上げる。その父親は彼だ。男としての情熱も性もなしに、彼はその父となったのだ。私は何度もくじけそうになる。立ちのぼる悪煙に何度も手を止める。そしてこれらすべてを入れ終わり、それらが大釜のおぞましい渦巻の中に吸い込まれるのを見届けると、最後に私は、

CamScannerでスキャン

ウィーンの虚空を落ちていくメーガンと小さなコートニーを入れる。少し経って、私は思う。駄目だ、もうこれ以上できない、と。だがそんなことはない、できるとも。いまからそれほど遠くない日、彼がついに自分の息子を目にする日を思えば、彼女の中でつくり上げたこの生き物を彼に贈る日を思えば、きっとできる。彼は震える指を伸ばし、赤ん坊の絹のように柔らかな肌に触れようとして、そこに固いうろこを見出すだろう。息子の青い瞳を見つめようと首をつき出して、そこに針先ほどの大きさの千の黒い目を見るだろう。柔らかい無垢な髪をおのれの老いた胸に抱きよせようとして、震える触角のちくちくとした痛みを感じるだろう。きっとやってみせるよ、メーガン。きっとやってみせるよ、コートニー。できるとも、神の年老いた顔が、神としての自分の種子が生んだものを凝視する瞬間を思えば。胎芽（たいが）や胎児から成長したものでもなく、神にふさわしく星から成長したものでもなく、幼虫から成長したものを凝視する瞬間を思えば。その瞬間、彼はそれを殺すだろう。あるいはそれが彼を殺すだろう。あるいはまた、彼は恐怖に包まれてそれを床に落としてしまうだろう。するとそれは百の脚でもって床を這い、彼の足元に寄ってきて、愛を求めてその触手で彼にぴくぴくと触れるだろう。愛せるものなら愛してみるがいい。やがて彼に奪い取られた子供たちをその母や父がひしと抱きしめたように、できるものならそれを両腕にかき抱くがいい。それにキリスト教的な、まっとうな響きの名をつけるがいい。それを見せびらかして、おのれの千年聖堂の中をパレードして回るがいい。

119

CamScannerでスキャン

ダウンホールの本通りを渡ってホテルの部屋に向かうデーニアは、自分の中で何が育っているのかを知らない。知っているのはただ、それが彼女のものではないこと、彼女の肉体と魂に属さない何ものかが彼女の中で作られつつあること、それだけだ。酒場での仕事はまだ何とかつづけているが、仕事中何度か、心臓が止まってしまいそうなほどの激しい嘔吐と痛みが彼女を襲う。はじめのうちは、何といっても自分はもう五十歳なのだから、と考えていた。そもそも赤ん坊を生むのは初めてだし、こうした激痛ももしかしたらお産にはつきものかもしれないのだ。だが、すでに何か月かが過ぎたいま、彼女は直感的に理解している。彼女の中のこの何ものかは、彼女自身のものではない意志によってかたちづくられ、生まれようとしているのだと。本通りの真ん中、かつてコンスエロ・ガルシアの死体を守ったところからさして遠くない地点で、彼女は声に出して言う。嫌だ、と。嫌だ、と彼女は声に出して言う。これまで何年もずっと、姿も見せず好きなときだけあたしのもとにやって来た恋人。でも今度だけは勝たせてなるものか。あたしの中にあるのは、あたしのものだ。あたしはこれをあたしの中に受け入れることを拒んでもよかったかもしれない。でもいまとなってはこれ以上何も手放すつもりはない。彼女は心の中で言う。たぶん男たちはみな、そして男たちの歴史はみな、あたしのことを、自分たちの悪夢を放り込むための場だと思っていたのだ。自分たちはそれから自由になるために、あたしという場所にそれぞれの悪夢を好き勝手に捨てていったのだ。きっとみんなそういう傲慢を、いまあたしのお腹の中にあるこの生き物にまで拡げられると思っているのだろう。嫌だ。絶対嫌だ。絶対に、絶対に、絶対に嫌だ。嫌だ。彼女は自分の部屋にたどり着き、横になる。そしてみずからの腹部に触れ、その中の動きを感じる。窓の向こうの

木々を通って差し込む陽光だけを意識しつつ、彼女は戦いの準備を整える。

120

雪が降り出す。ある朝私は、そのくぐもった音で目を覚ます。雪は街の防水シートの上に、柔らかく、ひそやかに降る。だが街の空っぽさのせいで、それさえもこだまとなって響きわたるのだ。部屋のスチームを入れさせるにも、私は何日ものあいだ番兵たちとやり合わねばならない。爺さんの部屋はどうなんだ？ と連中に説くと、はじめ彼らは何も答えない。やがて一人が、閣下のお部屋は暖かです、と宣言する。その日の午後、依頼人に会いにいくと、部屋は寒い。だが依頼人もペーターもそれに気づいている様子はない。窓から入る光と同じことである。私は冷えた手をごしごしこすり合わせているのに、二人はいつもと同じく部屋の中央に座り、陰気な顔でじっとしているだけだ。子供についての知らせ以外、老人は何ひとつ興味を示さない。そのことだったら心配は要らんよ、と私は請けあう。抜かりなく手は打ってあるからさ。何もかも順調に進んでいるよ、と。どうやらZが寒さで死ぬ心配はなさそうだ。燃えるように生き生きとしているのだから。まさに息子のために生きているのだ。ペーターはもう私を見ようともしない。きっと自分自身の破滅を見つめるのに忙しいのだろう。いまやそれはさして遠くないところから彼に向かって手をさし伸べ、じわじわと近づいてきている。雪のこだまは二週間ばかりつづく。それから雪がやみ、太陽が顔を出して、氷が溶けて防水シートに流れ込むのを照らす。空っぽの青い街の通路や広場を、薄気味悪い虹が覆う。靄のかかったその色の中から、何年ものあいだ街の天井の下に閉じ込められて

CamScannerでスキャン

きた鳥たちの群れが飛び出してくる。鳥たちは老いている。湿った空気の中で、翼が重たくはためく。今度聞こえてくるこだまは、外に出ようと鳥たちが空しく体を打ちつける音だ。

121

私は昼も夜も働く。彼女の子宮の岸辺はあかあかと燃える松明に照らされている。時おり、仕事中にうとうとと寝入ってしまうことがある。はっと目を覚ますと、幼虫に与えるべき泥の塊が私の手の中で冷めかけている。時にはまた、彼女の宇宙全体が反逆を起こし、激しくその身を揺り動かす。幼虫は成長をつづける。それがすでに動きはじめているのが私には見える。生まれる準備は万全だ。昼間、老人とペーターに会いにいくとき、いくら手を洗っても、どす黒い仕事の跡は落ち切らない。でもどうやらその臭いを感じているのは私だけらしい。冬が過ぎて春が来る。やがて春が過ぎて初夏が来る。ジョルジョが食べ物を抱えて床下から上がってくる。どす黒い指でそれを受けとるのが恥ずかしい。

122

老人は今日、まんまとペーターに不意打ちを食わせた。私はいまだにそれを思い出しては、つくづく感心して首を横に振る。要するにペーターは状況を読み違えたのだ。怒りに我を忘れ、冷静さを失ってしまったのだ。我々はいつものように部屋にいた。ペーターが朗読し、老人は椅子に座って、彼女の写真と枯れた茶色の花を収めた真鍮の額縁を握りしめながらそれを聞いていた。

と、ペーターはもうそれ以上読みつづけられなくなった。体をひきつらせ、ぶるぶる震えながら顔を上げ、彼は依頼人に言った。「閣下、これは嘘です」。老人は聞こえた素振りを示さなかった。ペーターはもう一度、「これは嘘です、閣下」と言って、それから私を見た。こんなやり方じゃ無理だ。こんなふうに俺を陥れようとしたってうまく行きやしない、と私は落着き払って思った。まあ考えてみれば、もっとましな手を考えつくほど想像力に富んだ男ではないのだ。それから我々は二人して老人を見た。老人は相変わらず手に持った写真に見入っているようだった。が、やがてゆっくり顔を上げ、翻訳者の方を向いた。「これは嘘です」やっと相手の注意を引いたペーターはきっぱりと言った。「これは残酷な冗談なのです。おわかりですか？　この馬鹿な大男があなたに冗談を仕掛けているのです。この男は冗談が好きなのです」。その通りだ。私はいつだって気のきいた冗談が好きだったのだ。ずっと昔聞いた、愉快なジョークを私は思い出す。私の父親が息子について言った愉快なジョークを。老人は彼女の写真を両手に抱えたまま、目をしばたたかさせてペーターを見るばかりだ。「子供などいないのです、閣下」目に涙を浮かべ、首を横に振りながらペーターは言う。「閣下は父上におなりにはならないのです、お気の毒ですが」。老人はなおも目をしばたたかせながらペーターを見る。ペーターはなおも同じ言葉を何度もくり返す。子供などいないのです、閣下は父上におなりにはならないのです、これは馬鹿げた冗談なのです。言えば言うほど彼は取り乱し、いまにも泣き出しそうになる。Zは座ったまま相変わらず目をぱちくりさせて彼を見つめている。聞かされたことを何ひとつ呑み込めていない様子だ。そしてそれから、思ってもみなかったすばやさで、老人は彼女の写真を頭上に持ち上げ、その重たい真鍮の額縁をペーターの

CamScannerでスキャン

頭めがけて振り下ろしたのだ。うめき声ひとつ立てず、身震いひとつせず、ペーターは床に崩れ落ちた。その一撃で、彼の中にあった全生命がいっぺんに外に飛び出してしまった。彼はそこに倒れて、私を見上げていた。額（ひたい）の、額縁が当たった部分がかすかに変色していた。やがて血が髪や顔の上に流れ出した。ペーターの頭に散乱した、額縁のガラスの破片や写真の上にも血は流れた。穴のあいた彼女の顔が、彼の顔の上に載っていた。茶色の枯れた花の断片がひらひらと宙に舞っていた。私は腹を抱えて笑った。あまり大笑いしたものだから、このままでは窒息してしまうんじゃないかと思ったほどだ。それから番兵たちが入ってきて、恐怖と驚きの目でペーターを見た。老人はただ椅子に座ったまま、彼女の破れた写真を見つめるだけだった。私もあえて説明を試みたりはしなかった。八十歳とはいえこの男はその気になりゃ人一人くらい殺せるんだぜ、などと言ってみてもはじまらない。奴らがそれくらいすでにわかっていないとしたら、要するに何もわかっていないに等しいのだから。「閣下はこの紳士の服務をこれ以上必要とされていないと思います」と私は言った。番兵たちは老人を見て、それから私を見た。やがて、そのうちの一人がほかの者たちに向かってぱちんと指を鳴らし、哀れなペーターを引きずっていった。彼らが行ってしまうと、私は老人を見た。神妙な顔をしていようと思ったのだが、それでもやっぱりまた笑ってしまった。私は笑いながら彼の背中を叩き、「子供たちに聞かせてやる話ができたね」と言った。しばらく経ってから、彼はにっこりと笑顔を返した。

123

ペーターがいなくなって、私は作品を自分で翻訳して依頼人に聞かせるようになった。連中は新しい翻訳者を雇いたがったが、私に反対されて、結局は折れて出た。私としてはこの時点に至って第三者を導入するわけには行かない。危険が大きすぎる。私のドイツ語はペーターに較べれば粗雑で、ペーターのような正確さも欠いているが、とりあえずは十分役に立つ。まもなく私ははじめからドイツ語で書くようになる。アメリカを離れて三十年になるが、そうするのはこれが初めてだ。ドイツ語で書くことによって、いちだんと彼自身の声に近い声で書けるようになった。私は彼の言葉で書く。彼が発するあらゆる言葉の下にひそむ野獣のうなり声で書く。

124

ペーターが死んでから二週間後、彼らは私を老人の部屋に移そうとした。これだけのあいだ待っていたというのは、儀礼上しかるべき間合いを置いたというより、要するに頭が鈍くていまになってやっと思いついたということだろう。まあどちらでもいい。私は拒否した。我々二人が違った場所で暮らし、眠っているということ。私にとってはそれだけが、彼と私が分離していることの、唯一残された証しなのだから。兵士たちと我々二人以外は誰もいない、地下に埋もれた沈みゆく空っぽの街で、彼と同じ十平方メートル以内で暮らすつもりはない。そんなことをしたら街は病み、じわじわと腐ってしまうだろう。昼間は爺さんと一緒で構わない。夜も爺さんの子供を作る。だがそれとは別に、この汚れた手の臭いを抱えて、一人きりになる場所と時間が必要なのだ。それにジョルジョがやって来るのもこの部屋の床下からである。自分と顔をつき合わせるのにうんざりしたと

き、私はいまも彼と一緒に遊びに出かけるのだ。

125

近づいていくにつれ、そこがひどく暗くなっていることに私は驚く。私は彼女の中をなおも先へ進み、彼女の岸辺の明かりを捜す。見えるのはただ、彼女を満たしているこの生き物の輪郭だけだ。これほどの大仕事になるとは、私自身も予想していなかった。幼虫はいまやとてつもなく大きくなっている。ほかのあらゆるものの場所を塞いでしまっていて、私が子宮の入江に行くのもままならない。一瞬のあいだ、私はすべてを後悔する。一瞬のあいだ私は、この生き物を作る材料に使った臭いが、彼の悪の臭いであることを忘れてしまう。私はそれを、私自身の不実と混同してしまう。メーガンとコートニーのことを思い出すまで、私は一瞬おのれの決心を忘れてしまう。この世界にいささかなりとも救済が残されていようとも、それを復讐のために犠牲にするのだという決心を。そして私の記憶は、私がお前を愛したウィーンでの夜に所有される。私は回れ右し、もと来た道を引き返す。誰かが呼びかける。呼んでいるのは彼か、私か？「ゲリ」

デーニアは悲鳴を上げる。汗でぐっしょり濡れたベッドで、彼女はまっすぐ身を起こす。向かいの酒場から観光客たちの声が聞こえる。彼女は時計を見る。もう午前零時を過ぎている。いまこの時点でなぜ大声を上げたのか、自分でもよくわからない。可能性としてはいくつも考えられる。彼女の中にいるものが何であれ、それが痙攣を起こしたのかもしれない。無数の痙攣のうちのひとつ。彼女は腹に両手を当ててみる。怪物を産む夢を見たのかもしれない。無数の夢のうちのひと

う。彼女は首を横に振り、夢の残像を払い落とそうとする。だが彼女は、いまの悲鳴はおそらくそのどちらのせいでもないと思っている。それは彼女を呼ぶ声のせいだったのだ。彼女が受け入れるわけには行かない名前で、彼女を呼ぶ声のせいだったのだ。彼女はよろよろとベッドから這い出て、またしても嘔吐する。ふつうなら嘔吐の時期はとっくに過ぎている。もう八か月目なのだから。あたしはまだ戦い方が甘い、と彼女は思う。できることなら体の中に手をつっ込んで、そいつと取っ組み合ってでも自分のものにするのに。必死に武器を捜して、彼女の意志があたりをさまよう。

126

今日の夕方、塔からの帰り道に、老人が私の部屋に寄っていった。我々は午後に一緒に塔へ出かけたのだ。番兵たちに先導され、くねくねと曲がった道を抜け、橋を渡った。長歩きでZはくたくたに疲れていた。塔のてっぺんに上ったときなど、最後まで息をぜいぜい言わせていた。塔行きは私の発案である。連中を説き伏せたのも私である。来たるべき瞬間も近づいてきたことだし、彼がなるべく疲れている方が私としては望ましいのだ。海と空を五分間味わったあと、我々は帰路についた。途中、彼が休めるよう空っぽのカフェで止まらねばならなかった。彼は時おり何か言う。何と言っているのか、私にはわからない。兵士たちに話しかけることもあるが、連中も何を言われているのかわからないようだ。はい閣下これです、はい閣下あれです、そう答えるだけだ。彼らにとって、彼は何の威厳も有していない。三十年前に彼が引き起こした一種のヒステリーは、もうこ

れっぽちも残っていない。帰り道、私の部屋の前まで来たところで、自分でも驚いたことに、私は兵士たちに、彼にここで一、二時間休んでもらってはどうかと提案する。たしか今夜は放送があるはずだ。それを見せておくのも悪くあるまい。来たるべき瞬間のために、彼がなるたけ自信満々でいる方が私としては望ましいのだ。かくして我々は私の部屋に入る。私はベッドの上に腰かけ、仕事用の椅子に彼を座らせる。放送中に眠ってしまわれては困るからだ。私はドアを閉め、番兵たちがどこかへ消えるか居眠りをはじめるかするのを待つ。それからテレビを引っぱり出す。スイッチを入れ、放送の開始を待つ。まもなく彼の顔が見えるだろう。彼がずっと昔に行なった演説を再編集した画像が流されるだろう。自分の部屋に飾られた一連の写真が彼を誇りで包んでいるように、この放送によって彼の中に誇りを一杯詰め込んでやろうというのが私の目論見である。だが彼はただじっとテレビを見据えるだけだ。何も言わないし、何も理解していない。やがて放送がはじまる。いまよりずっと若かった日の彼の像が現われる。誰もが彼のことを堂々たる存在、救世主と考えていた頃の彼。彼は話しはじめる。じきにまた画面は真っ白になる。それから、前と同じようにどこからともなく、潜水服を着た男が現われる。ただし今度は、ただ単に海中を漂っているのではなく、どうやら海の底を歩いているらしい。背景には奇妙なかたちをした船が見える。海の底に、男はアメリカの国旗を据えつける。これがあんたの戦争のなれの果てだよ、と私は老人に言う。海の底で軍隊が勝手に勝利を宣言しているのさ。あいつらはいまこの瞬間、あそこのアドリア海の底にいて、旗を据えたり小さな板を埋め込んだりしてるんだよ。Zは呆然とその情景に見とれている。私はテレビのスイッチを切り、機器を隠す。番兵たちが彼を部屋に連れ戻す。

CamScannerでスキャン

127

私は今夜、ジョルジョとその友人たちと一緒に彼らの島へ出かけた。沼を横断するにはおよそ一時間かかる。何だか雨が降り出す前の空気みたいな気分だ。島の人々は私のことを、何十年ぶりかに帰ってきた家族の一員のように歓迎してくれる。島は何の天井にも覆われていない。星空の下、家々の窓からの明かりに照らされながら、我々は通りを歩く。小さな家はどこもきちんと手入れされ、華やかな色に塗られている。ジョルジョの説明によると、ドイツ軍はこの島のみならず近隣の島々に覆いを掛けようとしたのだが、島民たちの妨害行為に遭ってことごとく失敗に終わったという。ドイツ軍が彼らを逮捕しにやって来ても、私が住む街と同じように、誰一人いない空っぽの村があるばかり。こう聞かされて私はふと、ひょっとしたら私の街も実は空っぽじゃないのかもしれない、と思った。この島の人々と同じく、あの街の人々も、歴史によって勝利を運命づけられたと思い込んでいる傲慢な奴らに打ち負かされてはいないのかもしれない、と。この島の人々とともに暮らすことは、戦争が存在していない場所と時間の中で生きることだ。ここでは人々が戦争など存在しないふりをしている、というのではない。彼らにとって、戦争は何の意味ももたないのだ。彼らを支配しているはずのドイツ軍は、彼らにとって物笑いの種でしかない。漁師たちは私を一軒のレストランに連れていく。そこにはすでに食べ物とワインが用意してある。ジョルジョという名の漁師がもう一人いて、こちらは私の半分くらいの背丈の小男、美しいテナーの声をしている。私は一人ひとりに紹介され、暖かい歓迎の抱擁を受けてまわる。どうやら彼らの半分はジョルジョとい

CamScannerでスキャン

う名前らしい。ブルーノも十人ばかりいる。女たちはみなマリアだ。もしかしたら私がワインを飲み出す前は別の名前だったかもしれないが、一時間も経つともうみんなマリアになってしまう。暖かく、肉づきのいい、暗い神秘とは無縁のマリアたち。しばらくすると魚が出され、漁師たちは今日の水揚げを祝って船頭の歌を歌い出す。水の上での孤独な暮らしを歌い、都市の時代を歌う。彼らは歌う、お前の燃えるキッスをおくれ、と。耐えがたいほどの美しさだ。私はどす黒い両手を膝の内側にしっかりしまい込み、晩の仕事の臭いが洩れないようにする。だが私の隣に座ったマリアがその手を無理やり引っぱり出し、それを自分の口にもっていく。彼女の唇が私の手に触れる。私は愕然とするが、彼女は握った手をいっこうに離そうとしない。私は泣き出す。誰も私に、なぜ泣くのかなどと訊いたりはしない。私の雨が降りはじめる。本物の人生からあまりに長く離れて暮らしていたせいで、人生がもつ力強さを私はすっかり忘れてしまっていたのだ。アドリア海の風が吹き寄せる小さなレストランで、漁師たちは次々に歌う。島で一緒に暮らそう、と彼らは私を誘う。あんな沈みかけた都会に戻ることなんかないよ。もし沼の外の世界に出たいんだったら、それだってやろうと思えばやれるんだよ。長いあいだ自由に生きてきた彼らには、それが不可能だということ、たとえ私が逃げ出したいと思ってもその道はないのだということが、おそらく理解できないだろう。私は彼らに言う。私を助けたりしたら、君たちまでドイツ軍につかまってしまうよ。いったいどうやって奴らから逃げおおせる？　漁師たちは笑い、私のワインを注ぎ足し、自分たちのワインを注ぎ足し、それからレガッタのことを話してくれる。またたく間に沼に千ものボートが浮かぶのだ、と彼らは説明する。千のボートをドイツ軍がどうやって捜索できるかね？　とジョルジョた

ちの中の一人が言う。一隻や二隻、まあ十隻くらいならそれもできる。だけど千隻なんてできっこないさ。ワインがなくなると、我々はみんなして千鳥足で桟橋まで歩いていき、街へ戻る。ワインにすっかり上気した私は、ジョルジョのボートの舳先に寝転がる。さっき聞いた歌が海の中から聞こえてくるように思える。潜水服を着た男たちの歌声があたりを満たすように思える。お前の燃えるキッスをおくれ。そしてそのときだ。あたかも彼らの歌に応えるかのように、彼女の初めての叫び、絞めつけられるような陣痛の最初の音が聞こえてくるのは。

128

デーニアはジュディと合図を決めてある。その時が来たら、向かいの酒場で働いているジュディに見えるよう、窓辺でカンテラを振ることになっているのだ。ジュディはそれを見たらすぐに駆けつける約束である。そしていま、激しい痛みが、痙攣のように、白熱の光を伴ってデーニアの体内を駆けめぐる。彼女はよろよろと窓辺に向かう。どうにかわが身をベッドに乗せ、窓から下の地面に落ちてしまわぬようにするのがやっとだ。はじめからこんなに痛むなんて、彼女には信じられない。もしこれがほんのはじまりだとしたら、出産のときはいったいどうなるのだろう？　恐怖が無限に拡がる。もちろん恐れているのは痛みだけではない。自分の体から出てくる生き物の姿を恐れているのだ。彼女はベッドの上でのたうちまわる。窓辺で振ろうとしたカンテラが床に落ちる。ガラスが割れて火事になったりしないといいけど、と彼女は思う。すでに彼女の中で何か異常な事態が起こりかけている。収縮の間隔が、早くも相当短くなってきているのだ。彼女は一度、そして

もう一度悲鳴を上げる。デーニアの部屋の壁に光が不気味に揺れるのを見たジュディは、すでに通りに飛び出している。ジュディはホテルに走り込み、階段を駆け上がって部屋に飛び込む。それと時を同じくして、自分の真ん中が裂けるのをデーニアは感じる。中にいるものを解き放つべく、真ん中がぐっと拡がるのを感じる。私の目の前で彼女は夜のように体を開く。ボートの舳先に横たわった私は、彼女の音と痛みによって、酔いも一気に覚めてしまう。彼女の中から流れ出る薄黒い幼虫のかたわらで、夜が燦然（さんぜん）ときらめく。湯気を立てて流れる悪の奔流に包まれて、彼女の中から二十世紀が生まれ出ようとしている。Zの卵から孵（かえ）った子が、彼女の体をもぞもぞと噛むように進んでいく。その後ろ脚に、おのれの父の悲惨を感じた千二百万の顔の後産（あとざん）を引きずりながら。それは彼女の中から這い出て、青い街の裂け目をじわじわ前進し、光を恐れながらZの部屋につづく廊下をそそくさと下っていくだろう。そしてZの腕をよじ上り、Zの胸にたどり着き、その千の黒い目で彼を凝視し、彼を眠りから覚ますだろう。後産が後ろからくっついていく。我々は桟橋にボートを停める。老いて言うことを聞かなくなった足に鞭打ち、私は広場のトンネルを全速力で走り抜ける。その瞬間を見逃してしまうなんて考えられない。メーガンとコートニーと私がその場に居合わせないなんて考えられない。彼女の中から現われ出る、黒い触手の最初の先端を私は見届けねばならない。やがて私は、床を上って自分の部屋に出る。怒濤のような轟音が私の耳に響く。狂ったように叫ぶ私自身の声だ。あるいは彼女の声かもしれない。そいつの顔だちを見逃してしまうなんて考えられない。彼を見届けなくては。彼を父として生まれてきた顔の中に、まごうかたなき彼の顔、父の輪郭を見届けなくては。彼女が叫びを上げる。その叫び声のなか、生まれつつある

ものが世界の光に向かって前進してゆくにつれ、父親のかたきを取ってドクター・ライメスを殺したときの憤怒もなく、ダウンホール島の川を渡ったときの決意もなく、ほかのあらゆる武器を奪われ、戦いの手立てをすべてなくした彼女にとって、選ぶべき道はあとひとつしかない。それを愛することだ。自分の中から何が出てくるにせよ、それがどんなに醜くおぞましいものであるにせよ、彼女はそれを愛するほかないのだ。何ともみじめな武器にはちがいない。あとになって彼女は、本当にそんな武器があったんだろうか、とみずからに問うことになる。あとになって彼女は、本当にそれは、小さな秘密の部屋の何もない床の上にひっそり大人しく横たわっていたのだろうか、とみずからに問うことになる。あとになって、あれは理論的な愛にすぎなかったのだ、と彼女は考えることになる。あんなに深くそれを愛することが本当に可能だったんだろうか、と彼女はみずからに問うことになる。だがその瞬間にあっては、それは可能であるばかりか、不可避でさえあるのだ。ひとつのささやかでちっぽけな愛、それしか道はない。それはおよそ純粋とは言いがたい愛である。完全な愛とも、聖なる愛とも言いがたい愛である。汚れなき愛などではもとよりない。それに付随した人間性によって徴をつけられ、傷つけられ、苦しめられ、疑われ、否定された愛である。かくも巨大な悪の前にあって、それは無に等しいものでしかない。だが、この最後の叫び声の奈落にあっては、それだけが唯一残されたものなのだ。彼女は身をかがめ、それを拾い上げ、抱きしめる。使い古された、壊れた、ちっぽけな武器。一生涯にわたる無数の空薬莢に、たった一発火薬の入った薬莢、それすら本当にあるのかどうかわかりはしない。武器が音を立てる。平べったい、ささやきのような音。みずからの叫び声、そしてみずからの愛の立てる音の中で、彼女はぼんやり

CamScannerでスキャン

と、かたわらにジュディがいることに気づいている。みずからの愛の音の中で、彼女はその生き物を体外に押し出しはじめる。彼女の愛の音の中で、生き物が一瞬、彼女から追放された混乱に立ちどまるように思える。彼女は誓う。もしあたしがこれと同じものたちの大群を解き放つことになろうとも、これと同じもので部屋を一杯に満たすことになろうとも、あたしは愛の音を立てながらそうするだろう。平べったい、ささやきのような、みじめったらしい音を立てながらそうするだろう。つかの間の混乱に陥った世紀が、それ自身の時間の中で立ちどまる。彼女の中でしばし立ちどまった世紀が、それ自身の時間を、すなわちそれ自身を貪り食う。だがやがてそれは、ふたたび外部に向かって成長をつづける。悪が川のようにそのかたわらを流れすぎていく。自分から生まれつつあるものを取り出すよう、デーニアはジュディに命じる。それをあたしにちょうだい、何だっていい、どんなにおぞましくてもいい、それをあたしの胸まで持ち上げてちょうだい。ジュディは言われた通りにする。デーニアはみずからの子宮がそれから解放されるのを感じる。みずからたったいま産んだものが、自分の胸に、自分の腕に抱かれて横たわるのを感じる。そのべとべとした、ぬめぬめした感触に、やっぱりこれは化け物なのだと彼女は確信する。やがて彼女の目がはっきりしてくる。彼女は彼を見る。人間の男の子が、後産と血に包まれた、ごく当たり前の姿を。異様というほかないこの出産の唯一の徴も、いまはまだ目につかない。何週間かが経って、赤ん坊の小さな頭に、いっさいの色の抜けた髪の毛が生えてくる。

129

彼女が産んだものが、私が彼女の中でつくり上げたものではないのを見て、私は愕然とする。信じられない。たったひとつの、ささやかな、一人の意志に基づく行為が、世紀全体の魂がその真の、暗い、ありのままのかたちを見出そうとする企てに打ち勝つなんて。彼女が人間の子供を産んだのを見て、私は思う。それなら俺はこの子を殺さなくてはなるまい、と。出産において彼女が世紀に打ち勝ったからといって、私の復讐まで否定されはしない。子供を殺すことによって、父親を殺してやるのだ。わが子を失った悲しみに、父親は死んでしまうだろう。悲しみなら私だって知っている。誕生の神秘は私には謎めいたものでしかないが、悲しみなら謎でも何でもない。私はペンを手に取り、それを実行するのに必要な記憶を喚び起こす。思い出すのは簡単だ。私は子供を見て、父親と似たところを捜す。たしかにこの子は母親似だ。だがそれでも父の面影だって十分ある。これだけあれば十分だ。父親の面影も、私の記憶も、これだけあれば十分なのだ。

130

私はこの子供を殺すのだ。殺す決意はできている。いままでだってさんざんいろんなものを殺してきた。あと一人くらい殺したってどうということはない。赤ん坊の頭は私の手のひらにすっぽり収まる大きさだ。手のひらに、すっぽりと。私の指が赤ん坊の小さな頭蓋骨の上で弧を描く。この小さな頭蓋骨を軽く一押ししてやればいい。私みたいな悪党には訳ないことだ。それによって成し遂げられる復讐を思えば、大して難しいことじゃない。

131

私はこの子を殺すつもりだ。あと少しだけ待ってほしい。約束するよ、メーガン。約束するよ、コートニー。あと少し待っておくれ。だいたいこの子は、よく見るとそれほど母親に似ちゃいない。結構父親に似ているし、結構私に似ている。そう思うとずっとやり易い。決意はできている。

132

決意はできている。私はもう慈悲の届かないところまで来てしまっている。だいいちもともと私の中に慈悲なんてものがあったかどうかも疑わしい。きっとやってみせる。

133

私にはできる。できるはずだ。

134

できない。

135

私はペンを捨てる。私の顔が空っぽの両手の中に落ちる。体に力が入らない。光を浴びて、心臓

がびくっと震える。お前の燃えるキッスをおくれ。打ちひしがれて、私はみじめな思いに浸る。

136

三日後、ジョルジョが床下から私の部屋に上ってくる。私はベッドの上に横たわっている。混じりけなしに邪悪な行ないに復讐することもかなわず、私の両手が体の両側に力なく垂れている。私はベッドの上に横になり、誰もが知る、父たる身の上に思いを巡らしている。部屋の向こう側からジョルジョが顔を出して呼びかける。いいかね、わが友よ、と彼は言う。レガッタは明日だ。もしここを出たいんだったら、いま僕と一緒に来たまえ。私は力をふり絞って身を起こし、重い両足を床に下ろす。ひとつ頼みがあるんだ、と私は彼に言う。いいとも、とジョルジョは言う。もう一人一緒に連れていきたいんだ、と私は彼に伝える。

137

私はジョルジョを部屋に待たせて、廊下を下っていく。番兵は二人とも居眠りをしている。一人が寝ぼけ眼で顔を上げ、何かもごもご言う。爺さんのところに行くんだ、と私はそいつに伝える。結構です、とそいつはぶっきら棒に答える。ほとんど寝言だ。今夜はあっちに泊まるかもしれん、と私は彼に言う。じゃなけりゃ爺さんをこっちに連れてくるかもしれん。番兵はうなずき、ふたたび眠る態勢に入る。そばで寝ているもう一人の番兵が、静かにしろと言いたげにぶつぶつ寝言を言う。私は廊下を下り、大きい方の屋根なし通路を横切る。ここが私の側の街と、依頼人の側の街と

の境目だ。壁のくぼみに埋め込まれたカンテラは、すでにいくつか燃えつきてしまっている。部屋に着くと、老人は暗闇の中でいつもの椅子に座っている。眠ってもいないし、起きてもいない。話しかけても、意味の通らないつぶやきで答えるだけだ。私に書いてもらった原稿を両腕に抱え、それをしっかりと抱き寄せる。そしてまもなく興奮気味に喋り出す。はじめ彼は子供を、アウグスト、と名づける気でいた。子供の頃のたった一人の友だちの名なのだ。だが最近では、ペーター、に傾きはじめている。私は彼の両腕を抱えて、立ち上がらせる。彼は狼狽をあらわにする。もっともこの老人はあらゆることに狼狽するのだ。とにかくこれじゃまずい。連中も見張っているだろうし。だがやがて私は、何とか彼を廊下に連れ出す。我々はのろのろと私の部屋に戻っていく。白いページが彼の握り拳の中で丸まっている。

138

まだ燃えているカンテラを、私は一つずつ吹き消していく。あたりは真っ暗になる。彼の側と私の側とを区切る青い通路は、いまや暗く深い夜の青一色だ。その端までたどり着くと、突然、すさまじい翼の音が響きわたる。街に住む老いた弱々しい鳥たちが、パニックに陥って暴れているのだ。それを見て、老人の視線が狂おしくあたりを飛びまわる。我々は私の部屋の側の通路まで来た。残り少ないカンテラが、鈍い金色の光を投げている。私はそれもみな吹き消す。番兵たちが眠りを邪魔されてもぞもぞ動き、何やらうなり声を上げるが、やがてまた眠りに戻っていく。私は部屋のドアを押して開ける。中でジョルジョが待っている。一瞬のあいだ、私は恐怖に陥る。ジョ

CamScannerでスキャン

ルジョはこの老人が誰だかわかってしまうだろう。彼は老人を認識し、私を憎むだろう。彼らはみんな私を憎むだろう、ジョルジョたち、ブルーノたち、マリアたち、私を家族同然に扱ってくれた彼らみんなが、当然の権利として私を憎むだろう。自分の部屋の入口に立ちながら、私はそう考えている。私の不実が明るみに出たら、村はどうなるだろう？ 彼らの生活はどうなるだろう？ もう二度と元通りにはなるまい。この瞬間、自分の部屋の入口に立ちながら、私は自分がひどい間違いを犯したことを確信する。またしても自分が何かを汚(けが)してしまったことを確信する。ジョルジョが逃げようと誘ってくれたとき、ただ一言、私に構わないでくれ、と答えるべきだったのだ。だがジョルジョはZを見て、そこにZのありのままの姿、一人の老人の姿を見るだけだ。ジョルジョは私を手伝って老人をベッドの上に座らせ、しばらく休ませる。私のためにジョルジョが用意してきてくれた茶色のマントを、我々はZの肩に掛けてやる。ずいぶん齢だからな、この爺さんにはしんどい旅になるかもしれん、とジョルジョは言う。でもわかるよ、と彼はつけ足す。あんたとしちゃこの人を置いてけぼりにはできんものな。とにかくやれるだけのことはやろうや。私は大人しくうなずく。ボートまで行けばあんたの分のマントもあるからさ。そして老人が数分休んだところで、ジョルジョはひどく申し訳なさそうに、もう行かなくちゃならん、と言う。私はまた黙ってうなずく。我々は老人を抱き上げるようにして立たせる。まずジョルジョがトンネルの中に下りていく。次に老人が下り、そのあとに私もつづく。

139

いま頃はもう彼らも、我々が逃げたことに気づいたはずだ。朝になって私の部屋に行き、それから彼の部屋に行って、我々が消えてしまったことに気づいたはずだ。おそらくもうすでに街じゅうをくまなく捜しまわっただろう。おそらくは部屋を捜索し、トンネルも見つけたことだろう。だが我々はすでに街を出てしまっている。午後になって、漁師たちのレガッタが開かれた。沼から上がる水しぶきを顔に浴びながら、私は自分の乗ったボートからあたりを見回した。はじめまわりには数隻のボートがある。やがてそれが何十隻、何百隻と増えていく。青い屋根に覆われた都市が、我々の背後、沼の上に浮かんでいる。私たちの東でアドリア海がきらめく。頭上ではドイツ軍のヘリコプターが何機も旋回し、私はくり返し顔を上げてそれを見る。見ちゃ駄目だよ、とジョルジョがボートの反対側から笑顔を絶やさず呼びかける。きっとジョルジョは、いまにもこの老人の正体を悟ってしまうだろう。遅かれ早かれ噂が広まり、徹底的な捜索が行なわれるだろう。事実、頭上のヘリコプターによってそれはすでにはじまっているのだ。それにしても漁師たちの言った通りだ。これだけたくさんボートがあっては、ドイツ軍としてもどうしようもあるまい。沼じゅうがボートに埋めつくされている。まさに壮観である。私はボートの中で身を丸くする。私の足元、ボートの底で、茶色のマントにくるまったZが海の寒さに震えている。いかなる青天井よりも青い空の、青そのものの青さにZはすっかり戸惑っている。私は視線を老人からジョルジョに移す。ジョルジョはにっこり笑顔を返す。私はあたりを見回し、四方でボートを漕いでいるほかのジョルジョたちを眺める。マストからはためく色とりどりの旗に、沼は目にもあでやかな眺めだ。オールに押された白い水がさっと空中に跳ね上がる。もう一度青い街をふり返ってみる気にはなれない。

CamScannerでスキャン

私たちがいなくなってしまったいま、街はきっと沈んでしまっただろう。ふり返ってみたところで、巨大な銀色の泡が一つ、海の底から浮かび上がってくるだけだろう。船に酔い、気持ちも動揺しているせいで、私はいくらか吐き気を感じている。レガッタのゴール、イタリアの本土が見えてくる。本土に着いたら、我々はきっとつかまってしまうにちがいない。私は考えている。俺はこうやってジョルジョたちやブルーノたちを利用して、世界でもっとも邪悪な男を監禁生活から救い出そうとしているのだ、と。本土はすぐそこまで来ている。岸辺にドイツ軍の兵士たちが並んでいるのが見える。ジョルジョが私に言う。岸に着いたら、きっとさよならを言う暇もないと思う。だからいまさよならを言うよ。さよなら、と私も答える。私はほかのボートに乗った漁師たちを見渡し、色とりどりのレガッタの旗を見渡す。彼らはみんな私に視線を返す。見たこともない漁師たち、どこからともなく見えない島々から現われた漁師たちまでもが、私に眼差しを返す。彼らはみんな笑顔を浮かべている。さよなら、と笑顔が言っている。

Zと私は本土に着いても逮捕されない。私は老人をボートの底から引っぱり上げ、二人一緒に陸に上がる。土手のてっぺんに立つドイツ軍兵士たちの目を逃れようと、我々はあたりをうろつく何百人ものイタリア人の中にまぎれ込む。老人も私も、茶色いマントを着て、フードをすっぽりかぶっている。まるで二人組の修道僧という感じだ。一人は小柄で痩せぎす、もう一人は巨体で足が悪い。我々は漁師たちに囲まれている。ついさっきボートから別れの笑顔を送ってくれたのと同じ

CamScannerでスキャン

漁師たち。それがいまは、我々のことなんかまるで知らないといった顔つきで、みんなさっさと町めざして歩いていく。Zと私もその後ろにくっついていく。目の前を通りすぎていく我々を、兵士たちがじっと見ている。鉄道駅まで来て、私はマントから、ジョルジョが入れておいてくれたユーロドイツの札束を取り出す。二人分の切符を買うと、その大半がなくなってしまう。駅はドイツ兵であふれている。何もかもがひどく馬鹿げているように思える。我々がいまにも逮捕されてしまうことは、火を見るよりも明らかではないか。我々はミラノ方面に向かう列車によじ上る。ミラノを越えて、かつてフランスだった属領に行く列車である。車内はぎゅうぎゅうに混雑している。誰かが老人に席を譲ってくれる。私は老人をそこに座らせる。マントの下に着た老人のコートのポケットから、汽車の切符がまっすぐつき出ている。両手には相変わらず、沈みゆく街を去る前に私が書いた最後の原稿を握りしめている。いじましいといったらない。もうとっくにインクも水に流れ、解読不可能なしみと化してしまっているというのに。私は通路に陣取る。三十分ばかり経って、我々の足元で車両がぶるんと震え、ドイツ兵がプラットホームを埋めつくす駅が、私たちの後ろに流れはじめる。さらに三十分が経つと、沼はもうずっと後方に遠のいてしまっている。ミラノまで半分くらい来たあたりで、車掌がやって来る。そして何ら不審そうな素振りも見せずに、我々の切符にはさみを入れる。

ミラノに着いても、私たちは列車を降りない。私は老人に窓側の席を見つけてやる。老人は放心状態だ。愚鈍な顔で黙り込み、ぽかんと前を見つめている。窓の外を通る弁当売りから、私はパンとワインを買う。一時間近く経って、ふたたび汽車が動き出す。彼らは国境で我々をつかまえる

だろう。そうに決まっている。私はたえず目を光らせ、役人らしい人間がいないかどうか気をつけている。大ドイツの領域内ではもはや誰もパスポートを持ち歩かない。だが属領に入るとなれば当然、身分証明の提示を求められるはずだ。時おり兵士が車両を回ってきて、我々の方をそれとなく見ながら通りすぎていく。ミラノを出て二時間も経つと、車内はふたたび満員になっている。と、車掌と、もう一人の列車乗務員と、番兵が二人、廊下をこっちへやって来る。見ればドイツ軍将校も一人一緒だ。乗客たちは恐怖の目で将校を見つめる。我々のコンパートメントに来るまでは、すべてが順調に、事務的に進む。やがて車掌が我々のところまで来て、Zに身分証明の提示を求める。Zは呆然と、何が何だかわからないという顔をしている。車掌と乗務員と二人の番兵に同行してきた将校は、私の方をじっと見ている。車掌と乗務員が、老人に向かって何やらわめき出す。それから将校が私に、あなたはこの老人の連れですか？　と訊ねる。そう推測する根拠は何もないはずだ。Zはコンパートメントの中に座っていて、私は通路に立っているのだから。私が知る限り、私が老人の連れであることを、誰もこの将校に告げてはいない。私は少し間を置いてから、そうです、私はこの老人の連れです、と答える。車掌と乗務員は私の方を向き、私に身分証明の提示を求める。私はまた少し間を置いてから、ありません、と答える。その人もありません、と私は依頼人を顎で差しながら言う。こう聞かされて、車掌と乗務員は憤ったような、と同時にひどく満足げな表情を浮かべる。番兵たちがいまにも私を逮捕しようとする。と、将校が片手を上げ、どこでこの列車に乗ったのですか？　と私に訊ねる。私はちょっと考えて、ミラノ、と言いかけるが、思い直し、真実を答えて相手を驚かしてやることにする。それを聞いて将校はうなずき、老人を見て、そ

れからふたたび私を見る。そして彼は車掌、乗務員、番兵に、次のコンパートメントへ行くよう合図を送る。彼らはみな一瞬唖然とするが、すぐに気を取り直して言われた通りにする。私のかたわらを五人が通りすぎていく。私自身もいささか唖然としている。謎を解く鍵を捜そうと、私はドイツ軍将校の顔を観察しようとする。だが彼は二度とこっちをふり向かない。

141

ニースに着き、私はジョルジョからもらった金の残りを使って、原ドイツ人の経営する食堂の裏手に小さな部屋を借りる。二階にある、殺風景でみすぼらしい部屋だが、専用の階段がついていて、裏通りに出られるようになっている。朝にはパンとコーヒーが出る。老人は一人では食事もできず、私がいちいち食べさせてやらねばならない。トイレに行かなくていいか、と私はしじゅう彼に訊く。下着を替えてやったり、体を洗ってやったりするのは御免だからだ。時おり我々は、海岸につながる通りを散歩する。通りの両側のカフェは原ドイツ人の客でいっぱいで、かつてはフランス人だった新ドイツ人が給仕している。何年も前、ここから六十キロのところにあるブドウ園が、収容所を作るために燃やされた。フランス人たちの話では、その臭いがいまだに空気中に残っていて、食べ物にもワインにもその味が染みついているそうだ。こんなところで自分たちが何をしているのか、私にはわからない。ただひとつ言えるのは、自分が何かにつき動かされているということだけだ。たぶん私は、あの青い沈みゆく都市で書くことをやめて以来、ずっと何かにつき動かされてきたのだと思う。あの出産によって、我々は二人とも解放されたのだ。私にとって書くべきこと

CamScannerでスキャン

はもう何もないし、彼にとっても読むべきものはない。我々は、私が書き彼が読むものから自由な身になったのだ。金はたちまち底をつく。私は食堂を経営しているドイツ人に、家賃代わりに店で働かせてほしいと頼み込む。世が世なら、ニースの貸し部屋といえばおそろしく高級である。我々なんか即座に追い出されてしまうだろう。だが目下のところ、ここのワインの評判はガタ落ちなのだ。収容所の味、二十年前に焼かれたブドウ園の味なんか誰も欲しがりはしない。そのドイツ人は小柄で、グレーの縮れ毛、もじゃもじゃの口髭を生やしている。給料を払って人を雇うより得と判断したか、結局彼は私の頼みを聞いてくれる。ただし条件がひとつ。老人も一緒に働けというのだ。だってこの爺さんは便所だって一人じゃ行けないんだぜ、と私はドイツ人に抗議する。そんな人間に何をしろっていうのかね？　テーブルを拭くくらいできるさ、とドイツ人は答える。世界で一番簡単なことじゃないか。テーブルの上で濡れ雑巾を動かすだけなんだから。彼は我々が原ドイツ人か新ドイツ人かを訊ねる。俺は新だよ、と私は答える。彼はそれを聞いてちょっと考え、爺さんは？　爺さんは原なのか？　と訊ねる。そうだよ、と私は答えかける。原も原、ドイツ人の本源さ、と。だがそれが事実に反することを思い出し、オーストリア人だよ、と答える。彼は私に皿洗いの仕事を課す。Zはしみだらけのエプロンを着けてつっ立ち、テーブルの表面をぼうっと眺めている。汚い雑巾から茶色い水がしみ出て、老人の指を伝って流れ落ちる。ドイツ人は彼に向かってわめき散らす。昼食を取っている観光客たちがそれを見て笑う。やがて老人は失禁してしまう。ドイツ人はますます激しくわめき散らす。糞ったれのオーストリア人めが、と彼はどなりつける。私は老人を二階に連れていき、下着を替えてやり、ベッドの上に寝かせる。お前のおかげで俺たち二

人とも追い出されちまうぞ、と私は言う。彼はベッドの横から手を伸ばし、私の腕をつかんで、私の息子は元気かね？ と訊く。何だかまるで、この私が彼の息子であるみたいな言い方で。

その後につづく冬のあいだ、我々はドイツ人の食堂の二階で暮らす。この街にも戦争の牙は伸びてくる。沖にはアメリカ軍の潜水艦がいるし、非常警戒態勢が敷かれることも珍しくない。ドイツ側も決して情勢を完璧にコントロールしてはいない。頻発する略奪も大きな問題だし、ここから北にある収容所では集団脱走事件も発生した。囚人が何人か、街外れでつかまった。皿洗いの仕事が休みの日には、私は老人を連れて海辺へ散歩にいく。老人は湾を囲んで伸びた低い塀に腰かける。椰子の木と地中海は沈泥（ちんでい）で灰色になっている。まるでアフリカのクレーターだ。私は水辺を歩く。時おり後ろをふり返って、老人がちゃんと塀の上にいることを確かめる。いままた例によって後ろを見ると、老人がよたよたと岩の上を歩き、いつもの放心状態のまま水辺に向かっている。そのまま海に入られては大変と、私はあわてて飛んでいって彼をつかまえる。「こっちへ来るんだ」と言いながら、その腕を引っぱり塀まで連れ帰る。いったいこの爺さん、海の彼方に何が見えるつもりでいるんだ？ 「ここに大人しく座ってろ」と私は言って、ふたたび彼を塀の上に降ろす。「あそこに何があると思ってるんだ？ ソビエトか？ ここがベルリンだとでも思ってるのか？ 群衆が熱狂してあんたの名前を叫んでるとでも？ いいか、もう誰も熱狂してあんたの名前を叫んだりはしないんだ。だからここに大人しく座ってろ」。老人は言われた通りに座る。その足は地面に届きもしない。冷たい風に、目からは涙が、鼻からは鼻水が出ている。「それとも何かい」と私は彼に言う。「ちょっとひと泳ぎしようとでも思ったのか？ 海でひと泳ぎして、いっちょう若返って

CamScannerでスキャン

やろうと？　何かを洗い落とせるとでも思ったのか？」。私は両手をポケットにつっ込み、彼の前に立つ。彼の目と鼻から水が流れる。ドイツ兵たちが遊歩道をそぞろ歩く。誰一人私たちに目もくれない。「何も洗い落とせるもんか、この阿呆の老いぼれ」と私は彼に言う。「お前に洗い落とせるもんなんて何もありゃしないんだ。この老いぼれの糞ったれ。あんた、老いぼれてみじめな格好になったからって、人から優しくしてもらう資格があるとでも思ってるのか？　まったくお前は、ほんとに哀れな老いぼれだよ」。私が何を言ったところで、彼はまるで理解していない。時おり、何か答えようとすることもある。でもどうせ何を言っているのか、こっちはろくにわからない。私が言ったことと関係があるかどうかだって怪しいものだ。「さぞ知恵を絞ったんだろうな」少し経ってから私はまた言う。「あんたとあんたの部下たちとで、毎晩閣僚会議を開いて、自分たちがどこまで悪になれるか、さぞ知恵を絞って考えたんだろうな。まさかいくらあんただって、生まれながらにあれほど罪深い頭を持ってやしなかっただろう？　きっとさぞ知恵を絞ったんだろうよ。誰かが何か恐ろしいことを思いつく、するとみんな言うんだ、いやいや、それじゃまだまだ恐ろしさが足りん。もっと考えよう、きっともっと恐ろしいことを思いつけるはずだ、と。将軍やら官僚やら科学者やらがみんなで頭をひねって、悪の権化でさえおぞましいと思うようなことを一生懸命考えたんだ。神の敵でさえ縮み上がってしまうようなこと。何か現代的なタッチの入ったことを」。私は首を横に振る。「いいか、あっちの方にな」と言いながら私は灰色の海、その彼方の灰色の空を顎で示す。「あっちの方にな、あんたをやっつけたもうひとつの二十世紀があるんだ。あんたを許さなかった二十世紀があるんだ。それは穴から、時計の崩れた中心から手を出して、あんたを打ち

倒し、引きずり降ろしたんだ。それはあんたを徹底的に辱めて、あんたにはもう、飛び降りて永久に落ちつづけるしか道がなくなっちまったんだ。その二十世紀はな、自分が過去と未来を貪り食ってしまったことにも挫けなかったんだ。時間と歴史と運命が善を人質にしてしまうなんて、それには信じられなかったんだよ。いいかい、あんたと俺とで」と私は言う。「友だち同士、あんたと俺とでその二十世紀を見つけにいくんだよ。存在しない二十世紀、人間がその存在を信じる必要があるという意味以外には存在しない場所。かつて人間が神を信じていたように、信じる必要のある場所。俺たちでそこに行くんだよ。荷物をまとめるんだ。俺たちはそこへ行くんだよ。爺さん。この老いぼれの糞ったれ。まるっきりの泥、糞の泥。歴史のはらわたから出てきた糞ったれの小便もらしの罰あたりの阿呆の――」。私は口から泡を飛ばし、はあはあ息をしながら彼を見る。そして彼の前にかがみ込んで、その顔にぺっと唾を吐く。彼はまばたき一つしない。大きな唾のかたまりが右目に貼りついている。私にじっと睨みつけられても、こっちを向こうともしない。唾が頬を流れ落ちるのさえ感じていない。どのみち寒さのせいで、涙やら鼻汁やらで顔じゅうびしょびしょに濡れているのだ。「糞ったれ」もうそれ以上何も言えない。彼のポケットからハンカチを取り出し、顔を拭いてやる。そして彼の腕を持ち上げるようにして、部屋まで連れて帰る。通りを歩くのにひどく長い時間がかかる。暗い部屋の中で、私は彼をベッドに連れていく。

明かりをつけもしないうちから、部屋に誰かいることを私は悟る。誰だ？　と私は暗闇の中で言う。明かりをつけると、彼らが三人、部屋の隅にうずくまっている。何も訊かなくてもわかる。昨日収容所から逃げ出したユダヤ人たちだ。十代後半の少年と少女、兄弟かもしれないし恋人同士か

CamScannerでスキャン

もしれない。それと年上の男が一人。私とだいたい同年配、見かけは私より老けているが齢は向こうの方が少し下かもしれない。今晩いるだけです、と少年がようやく言う。それ以上説明しようとはしない。私が説明を必要としていないことがわかっているからだ。彼は懸命に考えている。もし私が駄目だと言ったらどうするか、私が彼らを兵隊に引き渡そうとしたらどうするかを。私を厄介な状況に巻き込んでしまったことを彼は承知している。彼らをかくまったことがわかれば、私まで銃殺されかねない。そして彼は、自分の方が私よりずっと若いけれども、体格ではとても及ばないし、力較べとなったらまるで相手にならないことも承知している。私は彼らを見て、それからベッドの上のZを見る。彼らもベッドを見る。我々はしばらくみんなでベッドの上のZを見つめている。やがて私が、よかろう、と言う。ふと私はこの三番目の、年上の男について、途方もない考えを思いつく。昔ひとり友だちがいてね、と私は言う。そいつはパリへ行ったんだ。だが違う、この男は、カールじゃない。その晩、私は彼らのために食べ物をくすねてくる。あなたはとても勇敢で優しい人ですね、と娘が言う。頼むからそんなこと言わんでくれ、と私は娘に言う。食べ終わると娘はZのところに行き、Zの体を起こして、食べさせてやる。私はとても見ていられない。頼む、と私は言う。頼むからそんなことせんでくれ、そいつを手伝ったりせんでくれ。でもこの人は年寄りよ、と娘は言う。そいつはただの糞ったれだ、と私は娘に言う。みんなが私を見る。何も言わずに、傷ついた、ショックを受けた表情を浮かべて。私を責めるかのように、娘は敢然とZに食べさせてやりつづける。もう誰も、私の優しさや勇気を口にしようとはしない。夜のしじまのなか、朝が来る前に、三人は姿を消す。

食堂を経営するドイツ人は、仕事や部屋のことで年じゅう私たちを叱りつける。そしてある日、冬の真っ只中に、テーブル一杯に陣取った兵士たちの前で、私にクビを言い渡す。日が暮れる前に部屋を明け渡せ、とドイツ人は私と老人に命じる。が、日も暮れかけ、どうしたものかと私が部屋で思案していると、誰かがドアをノックする。ドイツ人だ。何だかひどく様子がおかしい。気が変わった、と彼は言う。お前らが望むならここにいて構わん。こうして翌日私は皿洗いの仕事に戻る。冬が終わる頃から、私は老人を連れてヨーロッパを抜け出す手段を考えはじめる。ある日、マルセイユに停泊中の汽船の船長が店にやって来る。私は彼をそっと脇に連れていき、次に船を出すときに自分たちも一緒に連れていってもらえまいかと頼み込む。金はあまりないんだ、と私は船長に言う。でも仕事はするから、それで船賃の代わりにしてもらえないだろうか、と。船長は鼻で笑って相手にしない。ところがその翌日、船長はまた店にやって来る。ついでに昼食も注文するけれども、どうやらもっぱら私と話をするのが目的で戻ってきたみたいだ。友好的になった、というのとも違うが、とにかく態度も昨日とは全然違う。彼の話では、知りあいの船がメキシコへ向けてウィンドーを出る予定だという。ウィンドーは西フランス沿岸の小さな海港である。もしよかったらそのルートで行けばいい、と船長は言う。ただし爺さんも一緒でなくちゃ駄目だ。そう船長は言うのだ。「爺さんも一緒でなくちゃ駄目だ」と。それから彼は私に二枚の鉄道切符を手渡す。ひどく驚いた私は、俺と爺さんとでウィンドーまで行くのは難しいと思うんだが、とひとまず答える

CamScannerでスキャン

のがやっとだ。当局とちょっともめ事もあってね、と私はうっかり口にしてしまう。すると船長は答える。いやいや、何も問題はないはずさ。そして彼はナプキンで口を拭き、立ち上がって店を去る。皿にはまだ半分食事が残っている。

143

ウィンドーまでの旅は二晩かかる。しじゅう老人の世話を焼かねばならないことを除けば、道中は何ごともなく過ぎる。途中誰一人として私たちに、身分証明を見せろ、書類を出せ、などと言う者はいない。三日目の朝、私たちはウィンドーの駅に着く。ウィンドーは中世からある古い町で、我々があとにしてきたイタリアの沼の沈みゆく都市と同じくらい青い。海岸にある、カンテラのような光の灯るカフェで、私はメキシコへ船を出そうとしている船長を見つける。我々が着いたのを見ても、我々が去るのを見送ったニースのドイツ人飲食店主と同じく、船長は何の感情も示さない。だがともかくも状況は承知していて、手はずも整えてくれてある。船は四十八時間後に出る、それまでは好きにしていていい、と船長は言う。でも私たちには泊まるところもないんです、と私は彼に言う。俺の知ったことか、と彼は答える。かくして我々は半日のあいだ村をさまよい歩く。やがて、船長が通りをこっちへやって来るのが見える。俺のところに泊まっていい、と船長は言う。ほかの場合と同じく、なぜ彼の気が変わったのか、私にはさっぱりわからない。出航の日の朝、老人と私は桟橋に座り、乗船の時間が来るのを待つ。と、兵士が何人か寄ってきて、我々にあれこれ質問をする。ここで何をしているのか、お前たちは誰か、身分証明は持っているか。彼らは

さらに、船長相手に訊問をはじめる。船長はそれに答えて、自分としてはこの二人を桟橋に置き去りにすることに何の異存もない、という意思をあからさまに表明する。このやりとりがしばらくつづいたところへ、相当に地位の高いドイツ人将校が姿を現わす。ミラノからニースへの汽車の将校と同じく、この将校もここで話に割って入る。いったい何の騒ぎかね、と彼は兵士たちに問う。この老いぼれどもは書類を持っておらんのです、と一人の兵士が我々を指さしながらわめく。何と、書類を持っておらんとな！　わざとらしく驚いたふりを装って、その幹部将校は叫ぶ。しかし君たち、そんなことはあり得んよ、と彼は言う。そんなことがあって、わがドイツが生き残れるわけがないではないか。彼は兵士たちをからかっているのだ。兵士たちはすっかり面喰らい、うろたえてしまっている。将校は私にはほとんど目もくれない。いいかね君たち、書類を持っておらん老人のことをそんなに気に病むのはよそうではないか。ドイツに仕えるため、われらがたがいを見るために、もっと重要な問題を捜そうではないか。兵士たちは私を見て、それから総統に仕えるために将校に敬礼を送り、その場を立ち去る。彼らがみな行ってしまってから、将校はようやく後ろをふり返って私の方を見る。やがて彼は船長を見る。船長はひどくあわてて、さっさと船に乗るよう我々に合図する。太陽がまだ頭上をよぎらぬうちに、私たちは出航する。

144

航海のあいだずっと、我々は貨物用の船倉にいる。今度の旅は、三十年前のときよりはるかに長い気がする。海が昔より広がってしまったのか、あるいは世界がそれ自身から遠ざかってしまった

のか。それとも故郷が、ひとまず故郷と呼べるような場所が、いまこうしてそこへ戻ろうとしている私にとって、前よりも近よりがたい場に思えるのか。あるいはただ単に、夜も昼もない船倉で暮らしているせいかもしれない。はじめ私は、Zが旅の終わりまで持ちこたえるだろうかと気が気でならない。が、壁をはさんですぐ船のエンジンがあるせいで、船倉はとても暖かいし、食べ物にしてもニースで八か月つづいたパンとコーヒーだけの食事よりましである。老人は船に酔ったりもしない。彼は嘔吐の水位線、彼自身の水位線の下で生きているのだ。とにもかくにもいまだ生者とともにいて、一応の生命らしきものを保っている。四月のある晩、船長が私を甲板に呼びだし、目の前に広がるカリブ海の向こうの、ユカタン半島の荒々しい岸辺を指さす。

145

我々が上陸すると、またしてもドイツ兵が待ち構えている。今回は上官が割って入るまでもない。兵士たちは老人と私に、さっさと先へ行けと手で合図するだけだ。何日かのあいだ、私たちは港の北のはずれにある小さな廃屋で過ごす。砂利道が一本、港から北に向かって伸び、その小屋の前を通っている。夜になると、老人は道を渡って崖っぷちに腰かけ、目の前のキンタナ・ロー沿岸で進行する自分の戦争を見守り、耳を澄ます。海が彼の顔の上に、珊瑚の青さと爆弾の赤を照らしかえす。彼の目はいまなお、沼の沈みゆく都市の通路にいた老いた鳥たちの描く、気狂いじみた渦巻を一杯に映し出している。次に何をしたらいいのかよくわからぬまま、私はとりあえずユカタン半島を北上してプログレーソへ向かうことにする。プログレーソは大きな海港で、ドイツ領と

マヤ領とに分断されている。毎日、私たちの住む小屋の前を、一台の黒いタクシーが通りすぎていく。運転手はいつも同じ男。男は時おり私の方を向き、手を振る。一週間経って、食べ物を恵んでもらいに港へ行ったついでに、私は黒いタクシーを捜す。そして運転手をつかまえ、老人と私を北の方に乗せていってもらえないかと頼み込む。彼は承諾してくれる。だが私はこの男を本気で信頼してはいない。彼がドイツ軍将校や兵士を乗せて基地の周辺を走っているのを見たことがあるからだ。なぜこいつが私の願いを聞いてくれるのか、私には理解できない。金は払えないということもはっきり言ってあるのだ。もしかしたらゲリラ側のスパイかもしれない、とも思う。男はメキシコ人ではないが、かといってドイツ人でもない。ブラジル人だろうか。ラテン系にはちがいないが、この半島のインディオたちよりも色白である。言い換えれば、ドイツ人にも容認しやすい無難なラテン系。私は助手席に座り、Zは後部席に座る。曲がりくねった沿岸ぞいの道路を、車はゆっくりと上っていく。この道がどこに向かっているのか、私は知らない。それは運転手も同じである。どこであれ、そこへ私たちを連れていくこと自体には異存ないようだが。車のウィンドウにへばりついた虫たちの死骸を通して、私はカリブ海を眺める。しばらくすると、西の山々から黄昏の光がさし込んできて、私はうとうと眠りに落ちる。目を覚ますと、運転手はさっきと同じ位置に座っている。両目は開き、一筋の血が喉に走っている。喉はタクシーの車体と同じくらい黒い。彼はもうそれほど色白には見えない。車は道端の、何本かの樹が作る輪に囲まれて停まっている。車のまわりには、銃を持った人間が大勢立っている。みんなどう見てもドイツ人ではなさそうだ。

ゲリラたちは半島の先端の、マホガニーの森に隠れた古いインディオ遺跡で暮らしている。老人と私は初夏、すなわちここユカタンの雨季のあいだ、そこに居候する。灰色の石灰岩でできた遺跡は、壁以外もうあまり残っていない。熱い雨の降る空の下、ゲリラたちは地上高く吊したハンモックで眠る。近くには胸壁が設けられている。指揮を取っている女は二十八歳前後、メリダの町に生まれアメリカで訓練を受けた。厳めしい、毅然たる人物で、名はルシア。ゲリラたちは当初から、ひどく疑わしそうな目で私を見る。そもそも年寄りが二人、ドイツ軍の手先とわかっている男の運転する車で、いったい何が目当てで海岸を北へ向かっていたのか、彼らにはおよそ理解できないのだ。私たちがここへ来て一か月経ってもなお、私をめぐってひっきりなしに議論が戦わされる。こいつはドイツのスパイではないのか、老いぼれの爺さんは隠れみのに使われているのではないのか、そもそもこの男をどう始末したものだろうか、と。私としては、自分たちはオーストリアからの亡命者で、イタリアとフランスを通って逃げてきたのだと説明するほかない。彼らにとってはますます信じがたい話である。それに私のアメリカ英語も具合が悪い。アメリカまで行きたいんだ、と私が彼らに言うと、彼らは肩をすくめて答える。でももうここはアメリカだよ、と。

ゲリラたちもプログレーソへ向かう途中である。そこの港と、ドイツ領メリダとを結ぶ鉄道を爆破する予定なのだ。移動は夜間に行なわれる。我々は地下の抜け道を通る。水たまりや、ぎざぎざにつき出した珊瑚が、私の悪い足にはつらい。あるいはまた、ドイツの爆撃機によって焼け野原に

された、いまだ煙の立つヘネケ麻の暗い野原を越える。山岳地帯に散在する遺跡やスペインのプランテーションの廃墟が、マヤ抵抗運動の拠点である。ルシアが言うには、時おりアメリカが兵隊を派遣してくれることもあるが、地形を理解していないという点ではアメリカ兵もドイツ軍と大差ないという。それより空から物資や銃を投下してくれた方が助かるわ、と彼女は言う。船で送ってくれてもいいし。とにかく戦うのはあたしたちに任せてほしいわよ、ヤンキーはデモインでも守ってりゃいいのよ、と。どうやら彼女は、自分たちの力を私に誇示したいらしい。かりに私がドイツのスパイだとしても、マヤ側の戦力を思い知らせればそれでいいという気のようだ。いかにドイツ軍が大勢いて、どれだけ武器や飛行機を持っていて、半島の大半を統制下に置いているつもりでも、ユカタンをよりよく知っているマヤ人は絶対にいなくならないのだ、最後のドイツ兵がウィーンの壁に塗り込まれるかあるいは生きてベルリンに帰ってお気に入りのビヤガーデンで飲んだくれるかするまで、自分たちは徹底的に戦うのだ、彼女はそう伝えたいらしい。私はときどき、私の母親もインディアンだったんだよ、とルシアに言いたい誘惑に駆られる。だがアメリカン・インディアンを母親に持つオーストリア人の亡命者なんて、そうめったにいるもんじゃない。ささいな打ちあけ話がもとで尻尾をつかまれてもつまらない。ゲリラとともに暮らしているあいだ、老人と私は、二度の戦闘、数回の小ぜりあいを生き抜く。Zは道端の溝に座って、彼の軍隊を撃つために私が武器に銃弾を込めるのを見守っている。夜中に叩き起こされることもしょっちゅうだ。ドイツ軍の偵察隊がやって来るのである。私は老人を揺り起こし、ゲリラとともに逃げる。可能な限り撤退すること、自分たちが計画し仕掛けたのではない戦闘には絶対に足をつっ込まないこと、それがゲリラの

鉄則なのだ。我々は森の中をくねくねと進み、石灰岩の平地を抜ける。そして決まって、また似たような宮殿の廃墟に行きつき、ほかのゲリラたちと合流するのである。彼らは私とはほとんど口もきかないが、老人にはいつも親切だ。スープを飲ませてやり、一番柔らかく一番がっしりしたハンモックを見つけてやる。老人をこんな状況に引きずり込んだ私を、彼らは非難の目で見る。だからある晩、海まで伸びた鉄道から半日南へ行ったところにある、廃墟と化した小さな村で、私が彼をほとんど殴り殺しかけたときも、もちろん彼らはわかってくれない。

147

きっかけはその小さな女の子の姿だ。我々は夜遅く、午前零時すぎに村に着く。村がまだ一キロ以上先にあるうちから、ゲリラたちはすでに、様子がおかしいことを悟る。臭気が漂い、ぶーんと低いうなりが聞こえる。行ってみると、それが蠅が舞う音であることがわかる。蠅たちは村じゅうを飛びまわっている。村人の死体はどれも蠅で真っ黒だ。残虐な光景には慣れっこのはずのゲリラたちも、さすがにショックを受けている。だが私にとってはショックどころではない。それは自分がいままで知ってはいたけれども見ずに済んできたあらゆるものが、いっぺんにかたちをとって現われた情景なのだ。ゲリラたちは村をこっそり見てまわり、ドイツ軍が待ち伏せしていないかどうかを確かめる。村と死体を焼き払うか、それとも時間を割いて死体を埋葬するか、ルシアは決断を下さねばならない。結局彼女は埋葬を選び、司祭を捜しに行かせに、隣の村へ偵察隊を二人送り出す。そして、男たちが穴を掘っているとき、私はその少女の死体に行きあたる。私はその少女に

ついて話したくない。彼らがその少女にした仕打ちを話したくない。私は……誰かが彼女の体にピンでメモを留めていったことだけ言えば十分だろう。私のドイツ語の知識に基づく限り、そこには

こう書いてあった――「総統のためのもう一人の処女」。少女はどう見てもせいぜい八歳というところだ。この齢に達したコートニーの姿が容易に思い浮かぶ。あと少し生きていれば、彼女もこの齢になっていたはずなのだ。私は少女に背を向ける。そのメモを外してやる気力もない。彼女を抱き上げ、墓穴まで運んでいってやる気力もない。私は彼女に背を向け、村の家並を抜けて、老人を寝かせてある開墾地へ行く。総統のためのもう一人の処女、と私は歩きながら心の中でくり返す。たぶん開墾地で横になっている老人のところまで来たときにも、まだそう胸のうちでつぶやきつづけているのだろう。黙ったまま、何も言わずに、私はただただ彼を殴りはじめる。殴られた彼は、目を飛び出させて私をぽかんと見上げる。ゲリラたちがやって来て、私を彼から引きはなす頃には、彼はもう死の一歩手前まで来ている。彼らは私を引きはなす。村の惨事を目のあたりにして、彼らは怒りに燃えている。怒りに燃える彼らの目には、いまや私は明らかに、老人や子供を惨殺するドイツ人として映っている。人でなし、とルシアが言う。彼らは私を押さえつけ、老人を介抱する。そして一人のゲリラが口を開く。副隊長を務めている、背の低いがっしりとしたマヤ人で、私が現われて以来一言も英語を喋ったことがなかったのに、いまその男が完璧な英語で言う。この男はほかの奴らとおんなじなんだ、と。彼らみんなが私を睨みつける。いままでに彼らが私の射殺を検討していたとしたら、いまほどそれがまっとうな解決法に思えたこともなかったろう。老人は私の足元に倒れて、鼻と耳から血を流している。一瞬のあいだ、私は彼らに言ってやろうかと思う。

CamScannerでスキャン

老人が誰なのかを教えてやろうと思う。信じようが信じまいが構わない、おそらくは信じないだろう、でもとにかく彼らに教えてやろうと思う。前からずっと、誰かに話す機会を私は待っていたのだ。だが次の瞬間、自分がそれを話しはしないことを私は知る。なぜなら、この私が悪者扱いされていた方がいいからだ。年老いた、弱々しい、病気の老人なんかより、生まれてずっと大男の乱暴者だった私が悪者扱いされた方がいいからだ。なぜならごくわずかな可能性がつねにあるのだ、彼らが私を信じてしまう可能性が。彼らが老人の顔を眺め、目を覗き込み、それが真実であることを悟ってしまう可能性が。そしてそうなれば、彼らの闘争の、純粋な、正義の怒りは、彼の悪の人間性と折り合いをつけねばならないだろう。彼らは来たるべき時代のために戦っている。いまの時間と空間には否定されている、心と意識の基準点が奪われてはいない時代のために戦っている。二十世紀という血まみれのロールシャッハを凝視した末に、彼らはそこにひとつの花のつぼみを見出したのだ。話しちゃいけない、と私は自分自身に言う。お前が一生に一度でもいいことをする気があるなら、いまそれをやるんだ。彼らから信念を奪うのはよせ。お前のおぞましい姿でもって、おぞましいもの、ゆえに打倒すべきものをめぐる彼らの想いを補強してやるんだよ。爺さんの弱々しい、無力な姿でもって、弱々しい無力なもの、ゆえに護ってやるべきものをめぐる彼らの想いを補強してやるんだ。自分にそう言い聞かせた私は、胴より上をぶるっと震わせて体内の暴力を呼び戻し、私を取り押さえたゲリラたちを払いのける。こうすれば彼らも挑発されて、私を撃つ気になるだろう。実際彼らは、もう少しで私を撃ちそうになる。が、私の死の一歩手前で、ルシアが命令を下す。そして彼女は私にシャベルを投げてよこす。みんなと一緒に、私は穴を掘りに村へ戻る。ほ

かの者たちに見られないうちに、私は少女の体からメモを外し、自分の手で彼女を埋葬する。

148

その後まもなく、我々はテキサスにいる。より正確に言うなら、かつてテキサスの国境だった地帯のすぐ南にいる。どうしてこうなったのか、自分でもよくわからない。たぶんこれは、私がゲリラの処刑を免れたことと結びついていると思われる。というのも、虐殺の起きた村に行きあたった翌日、我々は襲撃に遭い、私はよりによってドイツ軍の銃弾のおかげで命拾いすることになるのだ。水路の底にいた私たちを襲ったその襲撃は、迅速で、激しいものだった。ものの三分とつづかなかった急襲のさなかに、例の背の低いがっしりとした副隊長が私に狙いを定めていたのを覚えている。私は最後の瞬間にふり返り、彼の目の中にその意図を読む。彼の目は語っている。もしこの襲撃から生きて逃げられない奴が一人いるとしたら、それはお前だ、と。それから、あたかも蚊にでも刺されたみたいに、その目が苛立たしげに歪む。でもそれは蚊ではない。彼はあっけなく倒れる。その一秒後、私もまた、目に見えない一撃によって倒される。その後の何時間か、私は意識も朦朧としている。自分がトラックの荷台に乗せられていることはわかっている。手足を縛られ、ほかの捕虜とともにがたごと揺られている。たぶん老人も一緒なのだろうが、私の位置からは見えない。何人か向こうにルシアがいる。彼女も縛られている。生きているか死んでいるかはわからない。ふたたび意識が戻ると、私は相変わらず縛られたまま、今度はボートの上に寝かされている。遠くの方で爆弾や銃撃の炎が見える。あたりはすでに暗くなっている。首を伸ばすと、満月の

光の下、ボートのへり越しに、メキシコ湾とおぼしき海が見える。こんなふうに爆弾がうようよ飛び交う海を満月のときに渡るっていうのは、あんまり賢明なやり方じゃないんだろうな――そんな考えが何となく頭に浮かぶくらい、私の意識ははっきりしてきている。でももしかしたらかえってこれが正解なのかもしれない、とも私は思う。Zの姿はどこにも見えない。私はふたたびボートの底に横になる。だがその前に私は見る。あの青い都市の年老いた鳥たちが、あたかも故郷に帰ってきたかのように、湾に広がるまばゆい死の光のまわりをぐるぐる旋回するのを。もしかしたら、あの都市を去って以来毎晩ずっと心の中で鳥たちを見つめつづけてきた老人が、空に向かって目を上げ、それを鳥籠のように開き、鳥たちを解き放ったのだろうか。いずれこのボートも吹っ飛ばされてしまうにちがいない。だがそうなる前に、私は急速に眠りに落ちていく。ふたたび目を覚ましたとき、とにかく目を覚ましたことに私は驚く。そして、自分が消えかけた焚き火のかたわらに横たわっていて、すぐ隣で老人がうとうとと眠っているのを見て、私の驚きはさらにもう少し大きくなる。我々は朝の海岸にいる。ここはブラウンズヴィルの町のすぐ外だ。

149

我々は数日を費やしてガルヴェストンにたどり着く。途中、コーパス・クリスティの町で、私は街角で物乞いに立ってバス代を集める。老人は道端に座り込み、この世のものとも思えぬ不思議な音を発している。口から出ているとは思えない音。老人はもう虫の息だ。時たま誰かが食料の配給クーポンを恵んでくれる。だが食料品店の棚はいつ行っても空っぽだ。ある日、一人の女が、爆撃

で家を焼かれた人々のための救済センターのことを教えてくれる。が、老人をなだめすかしつ、三時間かけて大通りを四ブロック歩いてそこへ行ってみると、気の遠くなるくらい大勢の人波が表にあふれている。これじゃとうてい中には入れまい。私はふと、ここの街角に立っているのはドイツ兵ではなくアメリカ兵なのだということを思い起こす。だがまた、だからといって都合がいいとは限らない。ひょっとしたらよけい悪いかもしれない、とも考える。難民を北に運ぶ公営バスの中から、私は敵国の人間を収容する強制収容所を目にする。一週間後、私たちはニューオリンズに着く。

新聞によればいまは一九七〇年七月だそうである。毎日が食料クーポンを手に入れるための苦闘だ。いざクーポンが手に入っても、そこに明記された品物を置いている店を見つけるのがまた一苦労なのだ。ニューオリンズでの最後の日、私たちは思わぬ幸運に遭う。誰かが落としたクーポン帳を一冊まるごと道で拾うのだ。私はその一部を使って、缶詰のフルーツを手に入れる。私はそれをZに赤ん坊のように食べさせてやらねばならない。コーヒーはどこにもない。南アメリカからの交通網をドイツに遮断されてしまっているからだ。クーポンの残りを売って金に替え、私たちはふたたび旅に出る。戦時態勢のルイジアナのハイウェイを走るあいだ、よどんだ沼にそって鉄条網が果てしなくつづく。気温はひどく高い。黒人のバスの運転手が、何だってこんな旅に年寄りを連れてくるんだ、と私を叱りつける。バスに乗っているもう一人の老人が、窓からさし込む陽の光がつらかろうと、Zに緑の野球帽をくれる。Zは時おり缶詰の食べ物を食べる。トマトスープ、タピオカプディング、消化できるもの噛めるものなら何でも食べる。私たちは停留所に来るたびにバスを

降りる。我々が戻る前にバスが行ってしまわないといいがと気をもみつつ、私はZをトイレに連れていく。バスはアパラチア山脈の南側を貫いて走り、モンゴメリーを抜け、それからおそらくアトランタを越えたと思うのだが、そのあたり私はずっと眠っていたので、アトランタについては定かでない。Zは相変わらず奇妙なうめき声を立てて、ほかの乗客たちの注目を集める。そもそも私たちをイタリアの沼から連れ出した力が何であったにせよ、私はいまなおその力につき動かされている。あまりに長いこと真相を恐れてきたせいで、私はいまや恐れそのものをいっそう恐れるようになっている。だからいまここで真実を認めずにはいられない。すなわち、これはすべて誰かによって操られていたのだ。考えてもみるがいい。世界大戦のさなか、俺は何の書類もなしにはるかイタリアからアメリカまで、たった一人で世界一の権力者を連れ出したのだ、などと威張ってみたところで、まるっきりお話にもならないではないか。見えない誰か、あるいは何かが我々を導いて、ミラノからの列車の将校、私たちを追い出すことに関し突如気の変わったニースのドイツ人飲食店主、ウィンドーを出る手段を私たちに提供することに関し突如気の変わったマルセイユの船長、何の理由もなく我々を乗せて沿岸を北へ連れていったタクシー運転手、我々がトラックに乗せられ、それからボートで誰にも何の質問も受けることなくアメリカの海岸まで運ばれ、しかも目が覚めたらちゃんと火まで焚いてあったという事態の発端となったあのユカタンの水路での襲撃、それらすべてを経過するよう蔭で操っていたにちがいないのだ。誰か、あるいは何かによって私は、アメリカの奥の奥まで、敵を連れ出すことを許されたのだ。ひからびた、生ける屍のごとき老人、じき体もばらばらに崩れその断片がアメリカじゅうに飛び散り大地に降りたちそこに根をおろすであろ

う、一人の老人を連れ出すことを私は許されたのだ。俺は何てことをしたんだ、と真っ暗なバスの中で私は自分に向かって叫ぶ。自分が触れるものすべてに悪意のしるしがついてしまうことを思い知って、私は慄然とする。さらに何日かバスに乗ったのち、ローリーまで来て、我々はまた先へ進めるようになるまで物乞いをせねばならない。ワシントンに着くと、戒厳令のもと、街は真っ暗である。老人までがそのうめきを一瞬止める。そしてあたかも、彼の目から解き放たれた老いた鳥たちがあの湾の光の中に故郷を見出したごとく、街の黒さの中に彼自身故郷を見出したかのように、彼の顔がぱっと輝く。

150

最期の時が近づいてくると、彼の中から出てくるうめき声はさらに耐えがたいものになってくる。それはまるで、永遠の断罪に突入しかけた彼の魂が、開いたドアごしに早くもこちらへ咆哮を返しはじめているかのようだ。それがますます大きなうめき声、ますます大きな咆哮になっていくにつれ、私はそれを耳で聞くばかりか、体でまで感じるようになる。彼の魂の中の、私の魂と直結した部分から発するその咆哮が、私の体内をさざ波のように駆けめぐる。ワシントンの街を歩く人々は、あたかもサイレンが聞こえてきた方向を捜すかのように、我々の方をふり向く。それが我々から発していることは彼らにもわかっている。だがどのように発しているのかはわからない。時おり、もう我慢できなくなって、私は彼を置いてさっさと先を歩き出す。すると咆哮はなおいっそう高まり、私の足を釘付けにしてしまう。私はふり返って彼を見る。じっと私の方を凝視し、置

CamScannerでスキャン

き去りにされた身を声を限りに嘆く姿を予期しながら。だが違う、奴は私の方なんか見ちゃいない。私は大またで彼のところに戻り、縮みきった、その造作(ぞうさく)の奥に引っ込んだ彼の肉体を眺める。いまや彼に残っているのは、一連のグロテスクな突起物だけだ。鼻、耳、指。彼のかたわらの壁には一枚のポスターが貼られている。ポスターは古く、縁はぎざぎざに破れ、四隅は丸まってめくれ上がっている。彼のポスターだ。ドイツ軍のテレビ放送と同じく、そこにある男の像は、ほぼ四十年前のものである。像の上に重ねて、大きな黒いXが描かれている。男の像と、その上に重なったXの下方には、ただ一言大きな黒い文字で、NEVER（二度と許すな）と書いてある。いまや私の目の前で死にかけている老人は、緑の野球帽の縁から、自分自身の写真を上目づかいに見つめてつっ立っている。彼の咆哮が像に重ねられたXに向けられたものなのか、それとも像それ自身に向けられたものなのか、私にはわからない。私は老人をそこから引きはなす。夏の夕立が訪れ、湿った沼地がにわかにその身を開く。街路は小川となる。彼は私のかたわらで哀れっぽい泣き声を上げる。うめき声よりはいくらかましだ。

彼は最後の三十六時間をニューヨーク・シティで過ごす。どうして自分がかつてニューヨークを去ることになったのか、私にはうまく思い出せない。だがその時点ではそれなりにちゃんとした理由があったことは確かだ。そしてまた、これがかつてのニューヨーク・シティと同じではないことも確かだ。私たちはワシントン広場でしばらく時間をつぶす。それから、まるっきりぼろ着の浮浪者という感じで、目抜き通りを歩いていく。かつては彼も、征服者の侮蔑とともにこのニューヨークの目抜き通りを行進することを夢見た時があったのだ。たとえばウィーンやパリやロンドン

CamScannerでスキャン

の大通りを行進している最中に。パーク・アヴェニューの壁に、彼は誰の死体を塗り込んだことだろう？　しばらくして、もうそれ以上彼を自力で歩かせるのは不可能になる。私たちは地下鉄に乗る。彼は落書きの大渦巻の下に腰かける。何人かのティーンエイジャーが彼をいたぶる。帽子を左右につっつき、ぐいっと引き下ろす。リンカーン・センターでドアが開くと、少年たちは帽子を奪って逃げ、回転出口を走り抜ける。私たちは七十二丁目で降りる。階段を上る一歩一歩がひどく難儀だ。彼のうめき声までが、使い尽くされ、止んでしまう。私も私で、この弱った足、ここまでずっと私たちをつき動かしてきた力とはおよそ相容れぬ弱った足を、最後の力をふり絞って引きずっていかねばならない。もうじきだよ、と私は老人に言う。自分たちがどこをめざしているのか、私にははっきりわかるのだ。

我々がめざしているのは、かつて私がはじめて愛のアヴァンチュールを書き綴ったあの小さな部屋である。アマンダとモリー。きっと二人とも、私がもう彼女たちのことを忘れてしまったと思っているにちがいない。午前中の数時間を費やしただけで、私はその界隈にたどり着く。そして午後の数時間を費やしただけで、その建物を捜し出す。建物は変わっていない。少なくとも外観は。私たちはロビーに入っていく。私はもうほとんど老人を持ち上げて歩いている。いっそ花婿のように、両腕に彼を抱き上げてもいいくらいだ。私は彼を持ち上げ、エレベーターに乗せる。はじめ私は階を間違える。何度か上り下りをくり返し、結局最初の階で正しかったのだという結論に達する。間違いない、この階だ。エレベーターのドアが開く。何年も前と同じ廊下が見えることを、その向こうに私の部屋のドアが見えることを私は予想している。だがエレベーターが開くと、かつて

CamScannerでスキャン

私の部屋があったところは、オフィスになっている。私はオフィスのドアを開けてみる。そこには誰もいない。部屋は一面埃だらけ、配達されたままの郵便物が床に散乱している。ブラインドは何年も閉ざされたままだ。机の上の書類は古びてかさかさになっている。私はがっかりする。昔のままの部屋を、かつての犯行現場を見たかったのに。私が執筆に使ったテーブルを、出がらしのコーヒーの粉を貯めておいた棚を見たかったのに。私は老人を部屋の中に入れ、机の後ろの椅子に座らせる。彼は大きく息を吐き出す。信じられないくらい大きな息だ。このしなびた体の中に、こんなにたくさん息がたまっていたなんて。彼の両手が、目の前の机の平らな表面にどさりと落ちる。その指先のところには、誰かが置いていった一枚の古い青写真がある。私は窓辺に歩いていって、ブラインドを上げ、ドアのところに戻って郵便物を拾う。二十枚の、何も書いていない、白い葉書。消印を見ると、どれももう二十年近く前に郵送されたものだ。すべて同じ筆跡で表側に記された宛先以外、葉書には何も書かれていない。私はしばしオフィスの中を見渡す。ごく当たり前の、何の変哲もない部屋だ。やっぱりこの階じゃないのかもしれない、と私は考える。この建物じゃないのかもしれない。この通りじゃなかったのかもしれない。窓から差す光を頼りに古びた青写真をじっくり眺めても、変わったことは何も目につかない。それは家の青写真だ。一階があり、二階があり、地下があり、どこの家にもありそうな部屋が一通り揃っている。私が育ったがっしりと頑丈な作りの家、私が燃やした家、その青写真だといっても通用しそうだ。唯一奇妙なのは、地下の片隅にあるひとつの部屋である。その部屋の輪郭が、茶色く古びた紙の上から、文字どおり時代を超えて浮き出ているのだ。何だかまるで、それは最初からそこにあったのだが、現実の時の経過を経て

CamScannerでスキャン

初めてその姿を表わすことになっていた――そんな具合なのだ。いつそれが現われたのかはわからない。この二十年のうちのいつだったとしても不思議はないだろう。そうやってそこに立ち、窓からの光を頼りに青写真を眺めている最中、私は彼が死んだことに気づく。

151

私はただ単にそのことに気がつく。それ以上の意味をそこに見出そうとは思わない。彼の魂の中の、私の魂と直結した部分が、そっといわくありげに私を引っぱったのだ、なんていう話ではない。おそらく人間というものは、死人と同じ部屋にいると、それを直感的に悟るものなのだ。もっとも、必ずしもそうとは限らないということも、同じく直感的に私にはわかるけれど。私はふり向き、彼はそこにいる。見たところ彼の様子は、ジョルジョのボートの底にいたときや、カリブ海の岸壁に座って戦争を眺めていたときと少しも変わらない。でもとにかく私には彼が死んだことがわかる。私は彼のところに行って、脈をとってみる。でもそれは単に、私がもはや自分の直感を信用できなくなっているからにすぎない。じきに彼の目は裏返しになり、頭の中に入ってしまうだろう。私はそれを閉じてやるつもりなんかない。彼がそんな尊厳に値してたまるものか。それでもなお、何かは言わなくちゃなるまいな、と私は思う。彼の体が破れ、その内部の断片が世界中に飛散する前に、誰かには知らせなくちゃなるまい。誰かに電話をかけて、あんたたちが捜している男はマンハッタン西七十丁目あたりにいるよ、と教えてやらねばなるまい。私の計算によると、もちろん私の計算なんて怪しげもいいところだが、とにかくそれによると彼はいま八十一歳だ。私は彼を

CamScannerでスキャン

そのまま、椅子に座らせておく。ブラインドを通してさし込む黄昏どきの金色の光が、彼の体を縞模様にする。私は青写真から、地下の片隅に出現した部屋を破りとり、ピンで彼のシャツの上に留める。その真ん中に私は書く。説明でも墓碑銘でも弁明でもなく、ただの謎を書く。私なんかより謎解きに長けた人間のための、たまたまここを通りかかるであろう偶然の探偵のための、ひとつの謎。それはこういう文句だ。"Aber ich liebte sie.（だが私は彼女を愛していたのだ）―― A. H."

152

何も書かれていない白い葉書の消印をたどって、私は西へ進んでいった。ペンシルヴェニアでは一軒の家が燃えているのを見た。オハイオで、どこまでもつづく平原で、ミシシッピ川で、私は彼の痕跡を捜してまわった。風に飛ばされ、地面に落ちて根をおろした彼の断片を捜してまわった。彼が見つかるたびに、私はその根を引っこ抜いた。彼の指、土の中からにょろにょろ飛び出ている彼の口髭、蔦のように壁を這いつくばう彼の血管。私はそれらを片っ端から断ち切った。彼の悪を、それがどんな名を帯びていようとも、見つけ次第叩き落とした。歴史、革命、アメリカ、神の子、みずからを何と呼んでいようが構わず叩き落とした。あるいは正義。自由な言葉と思考を束縛する権利をおのれに与えてはばからぬ正義。魂の誕生のスケジュールを組む叡智をもって任じる正義。子供たちに愛の言語を教えるよりもまず、彼らを疫病のいけにえに捧げよと説く道徳律を奉じる正義。聖なる、純粋なる何か、人間であることの血にも唾にも精液にも汚されていない何かを、傲慢にも私物化することによって、俗悪で卑しい存在へと石化していった、一千の正義の旗手た

CamScannerでスキャン

ち。私には彼らが一目でわかった。彼らが身につけている彼の断片によって、一目でその正体を見抜いた。ある者はそれを片目につけ、ある者は爪の下につけていた。私は自分の暴力を彼らに向けはしなかった。彼らを軽蔑したり、自分の方が立派だと思ったりはしなかった。私は彼らにありのままの名前を与えた。時には誰にも聞こえないところで、誰も知らない言語で。正義を担っていると自負する悪に、私は名を与えた。そして、向こう側があるようには見えない川の向こう側で、生涯においてすでに大男を一人多く見すぎてきたらしい船頭の船に、私は乗ったのだ。

153

私はほかの観光客たちにくっついて町へ行き、本通りにあるホテルに部屋を取った。ホテルを管理している中国人の女が、裏手の部屋に籠ったままいっこうに出てこないので、私はゆっくりと階段を上り、勝手にドアを試して、最初に開いた部屋に入った。いままで私が住んできた多くの部屋と似たり寄ったりのつくりの部屋だった。私はベッドに寝そべり、誰かが私の到来に気づくのを待った。目が覚めると、ライスと豚肉の入った碗がひとつ、窓辺のテーブルに載っていた。それ以来、夕方に目を覚ますたびに必ず、テーブルの上にライスと豚肉が待っているのだ。

彼女とその息子は、ここからいくつか部屋をはさんだ、廊下の奥の部屋に住んでいる。私がこのホテルに来て一か月が経っても、誰一人私に話しかけた人間はいなかった。私が誰なのか、ここで何をしているのか、訊く者もなかった。とうとう私はある夜、寝床を出て廊下を進み、彼らの部屋のドアの前で立ちどまった。この場所、この瞬間なのだ。あの挑戦的な誕生によって、私はこの

CamScannerでスキャン

場、この時に向かってつき動かされてきたのだ。そして、それから何年も経ったいま、私はなおもそこへ向かってつき動かされている。なぜなら私は、自分がやりに来たことを実行に移すだけの勇気をいまだ見出せずにいるからだ。あれから何年も経ったいまもまた、私は彼らの部屋のドアの前に立つ。あの夜初めてこのドアの前に来て、その次の夜もここに来て、その次の夜も来て、その後の一週間ずっと来て、一か月ずっと来て、一年ずっと来て、二年、五年、十年、ずっと来つづけているのだ。私はいつでも、ドアの前に行けば勇気が訪れるものと信じている。私は彼みたいに死ぬつもりはない。誰の許しを乞うこともなく死んでいくつもりはないのだ。彼女が許しはしないだろうということ、彼女には許すことなどできないということ、それは問題ではない。問題なのは、私が許しを乞うという行為そのものだ。毎晩私は、いまにもノックしようと、ドアの前に拳をもって行く。時おり向こう側から、彼女か息子かが寝返りを打つ音が聞こえる。多くの夜、私は何時間ものあいだ、痛む足で夜どおしそこに立っている。明け方の光が階下から漂い、階段のてっぺんの青が柔らか味を帯びて、ドアの向こうから人の動きが聞こえてくると、私の度胸は萎えてしまう。私は自分の小さな部屋に戻り、ドアを閉め、次の夜を待つ。そして次の夜、ふたたび試みるのだ。

　このホテルに来てからもう十七年になる。十七年分の夜、私は片手を上げて彼女のドアの前に立ちつづけてきた。外を見る勇気が出たときなど、この部屋の窓から彼女の姿を見かけることもある。その姿はあの日、一九三七年だったか三八年だったかもうよく思い出せないあの日、彼女が

自分の部屋の窓から私を見たときと少しも変わっていない――そんな気がすることもある。彼女は一日の大半を、部屋で息子の世話をして過ごしている。時たま、子供が外で遊んでいるときなど、廊下から酒の匂いが漂ってくることがある。できることなら彼女と一緒に一杯やりたいものだ。酒の力を借りて、私はあらゆることを、話すべきあらゆることを話すだろう。いろんなことがあった末に、私たちは老いた身同士の飲み友だちになるのだ。部屋の窓から、私は時おり息子を見守る。我々の恐ろしい力に真っ向から挑んだ彼女の強烈な意志、その意志に貫かれた愛、それがかたちとなって現われた白い髪の少年。ある年の秋、雨が降って島が洪水になると、彼女はホテルから飛び出して息子を捜しにいく。水がそれ自体の恐ろしい力を帯びて、すさまじい勢いで本通りを流れていく。二人ともいっこうに帰ってこない。私はコートを羽織り、難儀しながら階段を降りて、ホテルの裏口から外に出る。雨と風の中、のろのろと通りを進み、島の北端の墓地をめざす。そこに、掘立て小屋の下にうずくまるようになって、少年が嵐にとじ込められているのを私は見つける。彼のまわりで、墓が泡のようにごぼごぼ立ちのぼる。私は水の中に入り、彼のいるところまで歩いていく。たどり着いた頃には嵐もいっそう激しくなっていて、降る雨以外ほとんど何も見えない。でも少年の所在は髪の色でわかる。彼はほとんど意識を失っている。私は彼を水から引き上げる。一瞬のあいだ、彼を両手で抱きかかえながら、昔の復讐の欲望が私に戻ってくる。私の妻と子供の恨みを晴らしたいという思いが帰ってくる。妻と子についてはもういまではほとんど何も思い出せない。覚えているのは復讐の念だけだ。その昔の欲求を私はいま感じる。だが私は少年を水から引き上げ、胸に抱きかかえ、町まで連れて帰る。そしてホテルに戻って階段を上る。この子を連れて

CamScannerでスキャン

部屋に入るとき、彼女に何と言ったらいいのだろう？　だが彼女はまだ帰っていない。私は少年をベッドの上に寝かせ、毛布を掛けてやる。と、階下でドアが開くのが聞こえる。私がかろうじて自分の部屋に戻り、ドアを閉めたのと入れ替わりに、彼女が廊下を歩く足音がする。彼女はまさに、これ以上私の足音を背後に聞かずに済ますために全生涯を生きてきたのだ。息子を見た彼女が、彼の名を叫ぶのが聞こえる。何年も前に、彼を生んだ瞬間から発射された、愛の武器の立てる音が。

155

十七年のあいだ、夜と嵐のさなか、私はホテルの裏口から出たり入ったりをくり返す。食べ物を持ってきてくれる未知の他人を別とすれば、私はこの町にとって未知であり、よそ者である。私は時間から抜け落ちてしまったのだ。時間は私を捜し、私はメキシコの遺跡に立てこもるゲリラのように身を隠す。あるいは時間はもう私を捜し出したのかもしれない。だとしても時間は私を放置し、私がおのれの妄想にかかずらうがままにさせている。私は窓から酒場を眺め、酒場を経営する女を眺め、死者を北に運んでいく中国人たちを眺める。氷と製氷機とが、遠くの方でぱちぱちと音を立てるのが聞こえる。時おり私は、ライスと豚肉を持ってきてくれるのは彼女なのだと想像してみる。時おり私は、部屋の中で酒の匂いがした気がして目を覚ます。そういった確信も、私は自分の妄想の中に放置しておく。私にはもうあまり時間がないのだ。

156

CamScannerでスキャン

私にはもうあまり時間がない。
デーニア。許しておくれ。

157

たったいま、心臓のせいで目が覚めた。私はあたりを見回す。外はもう暗いが、夜はまだ更けていない。向かいの酒場の観光客たちの声が聞こえるからだ。つまりまだ本土行きの最終の船が出ていないということだ。体を包む重みに、私はほとんど動くこともままならない。私は自分に腹を立てている。十七年間も勇気を見出せぬまま過ごしてしまった自分に腹を立てている。私にはもう時間がない。私がここにいたことを、時間ははじめからずっと知っていたのだ。いま私にあるのは瞬間だけだ。いま私に残っているのは、最後の一回の暴力のほとばしりだけだ。私はよろめくようにベッドから起き上がり、重い体を引きずってドアのところまで行く。廊下に出て、彼女の部屋のドアまでたどり着く時間が、永遠のように感じられる。あるいはそれは本当に永遠なのかもしれない。あるいはそれは、ひとりの人間の全人生が収斂（しゅうれん）する瞬間なのかもしれない。彼女の部屋のドアの前で、私はノックを試みる。だが私の手はドアの表面を滑るだけで、ノックの音は生じない。把手を回すだけで精一杯だ。ドアが開くと、彼女は部屋の真ん中に立っている。ともに待つ息子も恋人もなく、一人でそこに立っている。彼女は私の方をふり向く。私を見た彼女の顔に、どうにも読みとりようのない表情が浮かぶ。私は何らかの合図を待つ。だが彼女は何の合図も発しない。

私を許してくれるかい？

彼女の足元に横たわった私は、少年が部屋の入口にやって来たのを意識している。彼は愕然として私を見つめている。死人を見たせいだろうか？　あるいは死人であれ何であれ、母親が誰かと一緒にいるところを見たせいだろうか？　それとも私の魂の中の、彼の魂とつながった部分が、かすかに引っぱるのがわかるのだろうか？　私が彼をもう少しで殺すところだった時のことを、彼は感じているのだろうか？　私が結局彼を救った時のことを感じているのだろうか？　私が彼を創造しようとした、そのおおもとの暗闇を、私の中に認めているのだろうか？　彼は私を見て、それから母親を見て、次の瞬間部屋を飛び出す。そしてどこかで、決して与えられることのなかった許しの沈黙のさなかに、平行して流れる二十世紀のふたつの川、彼女が私を見た唯一もうひとつのあの瞬間に分岐したふたつの川が、いままたひとつに合流する。

一時間あまり混乱がつづく。町の連中や、向かいの酒場にいた観光客の連中が、次々と部屋に押しかけてくる。医者がやって来て、誰もが予期していた通りの事実を告げる。この男は間違いなく死んでいる、と。でもこいつは誰なんだ？　そうみんなが訊ねる。その日に酒場で、あるいは船の上で、私を見た覚えのある者は一人もいない。「そんな馬鹿な」と医者が言う。「こんな大男に誰も気がつかないなんて」。この男を見たことは一度もありません、と彼女は、相変わらずどうにも読みとりようのない表情を浮かべたまま人々に告げる。お前はおれを覚えているはずだ、と私は彼女を見上げながら心の中で言う。ウィーン。窓辺。町民たちは私の無名性を厳粛に受け入れ、旅行客

たちが帰ってから十二人がかりで私を引きずり出す。お世辞にも丁寧とは言いがたい運び方だ。私の頭が、ボウリングのボールみたいに、ごとん、ごとん、と階段を弾んでいく。一瞬、彼女が止めに入るような素振りを示した気がしたが、結局彼女は何もしない。酒場を経営している女もまた、一瞬止めに入るかと思えたが、やはり結局何もしない。連中は私を引きずって通りを進み、茂みをつき抜けて、墓地のある沼地にたどり着く。私の背中はもう完全にすりむけてしまっている。生きていれば、こいつらの頭蓋骨を卵みたいに一まとめに叩き割ってやるところなのだが。島の端の墓地で、荒れ狂う夜を前に、彼らは懸命に木を曲げ、地面すれすれまで引き下ろす。私を持ち上げるのは無理な相談だからだ。彼らが私を木に縛りつけ、木を押さえた手を放した瞬間、私はわが身がパチンコのように空高く発射されるのを覚悟する。だが木はうめくような音を立てながら、元の高さの半分あたりで止まってしまう。かくしてその木は、この世で私の大きさに屈した最後のものとなる。

159

私は八日間にわたって木の上にいる。正直言って、なかなか悪くない。天気はいいし、広々とした青い川も見渡せる。果てしなく伸びた線路に沿って、川のはるか上を渡っていく赤い列車が私を魅了する。プラーター公園で乗った観覧車を思い出す。陽を浴びて私の体は暖まり、鳥たちが私の胸を訪れる。ひとつのもの哀しい情景を私は思い描きつづける。すなわち、彼女がある日ここにやって来て、私を見上げ、あなたを許しますと告げる情景を。それは現実には起こらない。でも考

CamScannerでスキャン

えてみればいつだって起こりうる。いまこの瞬間にも、彼女はここへ来る途中かもしれないのだ。私に向かって、あの日のあなたを覚えています、蠟燭店の前にいたあなたを、と告げるために。

これは罰のようには思えない。

私は罰が訪れるのを待ちつづける。それが黒い鳥のかたちをとって現われ、私の目を喰らい出すのを待つ。だが鳥たちは私を喰らったりはしない。私の体にとまって川を眺めるだけで満足しているみたいだ。かくして私は罰を待つ。いつまで経っても罰が訪れないので、私は面喰らってくる。もうずいぶん前から、罰の訪れを覚悟して生きてきたのだ。もうずいぶん前から、罰に値する生を生きてきたのだ。神がこんなふうに私に執行猶予を与えるなんて、筋が通らないではないか。一秒たりとも無駄にせず罰してしかるべきではないか。私が息絶えたその瞬間、一瞬もおろそかにはできぬといったふうに、ひっつかまえてしかるべきではないか。私の時間の中では、いかなる神が存在するにせよそれが復讐の神でないと信じる根拠は何もないのだ。

復讐の世紀における復讐の神。この世紀が結局のところは救済の世紀だった、なんてとうていあり得るとは思えない。まさか。冗談じゃない。これだけ悪業を積み重ねてきた私が、どこかで、何か小さな、目につかない優しい行為、すべての罪を贖い帳消しにするささやかな善行を行なったのだ、なんてとても考えられない。そんな馬鹿な話があるものか。だがそれでも、時間と空間があらゆる基準点からみずからを解放した世紀にあって、もしかしたら、たったひとつのささいな善良な行ないが宇宙それ自体を所有しているのかもしれない。怪物のごとく醜悪な、千もの悪の世界たちが、その行ないの愛の前に、服従を余儀なくされているのかもしれない。私にはもうわからない。

CamScannerでスキャン

私はただ、川がひとつに合流する島の端にあって、神が私に罰を下すのを、あるいは彼女が私を許しに来るのを、待っているだけだ。彼女が部屋の窓から私の名をささやくのを私は待つ。私はもう少しで彼を殺すところだった。そう、もう一歩のところまで行った。彼が生まれ出ようとする瞬間、手のひらにその小さな頭を抱え込み、もうちょっとでそれを握りつぶしてしまうところだったのだ。ふっと気が抜けて、やりそこなってしまったにすぎない。私が根は善良な人間だからとか、そんなことでは全然ない。ただ気が抜けただけだ。あの洪水の日だって、ここから二十メートルと離れていないところで、すんでのところで彼を溺死させるところだったのだ。私はそこから彼を運び、ホテルまで連れ帰った。でもそれは彼を殺すだけの力がなかったからだ。それだけのことだ。私は彼を殺すつもりでいたのだ。彼を水中に押さえつけ、足元から浮かび上がる墓の最後のひとつの泡が彼のものとなるまで、放さないつもりだったのだ。彼を連れて帰ったのは弱さの表われにすぎない。善良さなんかとは何も関係ない。私を救済する神なんて糞喰らえだ。

だが神は私を信じない。おそらく私も私を信じないのだろう。

頭上に浮かぶ彼の青い、救済をたたえた顔を前に、私はもはや自分が何を求めて叫びを上げたのかも忘れてしまった。そしてその叫び自体、もはやそれ自身の名を覚えてはいない。

160

毎日午後になるとデーニアはホテルを出て、息子が戻ってくるかどうかを見に島の岸辺まで行く。時たま息子が、うつ伏せになって甲板に横たわり、船べりからじっと水中を見おろしているの

CamScannerでスキャン

が見える。船を運転しているのは、彼女がもはや口をきくのをやめた男だ。打ちひしがれて、彼女は町へ戻る。十日あまりが経って、彼女は墓地へ行く。

名前のない大男は依然として木からぶら下がっている。鳥たちが彼の指や頭のてっぺんにとまり、川の方をじっと眺めている。毎日、男がもう自分の名前を叫んだかと、町の人間が何人か様子を見に来る。毎日、男の体の重みで、木は少しずつ垂れ下がってゆく。デーニアもまた、人々と同じことを待っているかのように、毅然と腕組みをして立っている。彼女は毎日、男を仔細に観察する。中国人たちがひっきりなしに質問を浴びせてくる。いままで一度も見たことのない男よ、と彼女は答える。彼らがなぜ信じないのか、彼女には理解できない。

十日間が経ったいま、彼女はだんだんうんざりしてきている。それに死体もぞっとしない様相を呈してくる。彼女は陽なたに立ち、しばらく彼を見つめている。それからついに言う。「あの男の名前はバニング・ジェーンライトだったのよ」と。

その場に居合わせた中国人たちが、ほかの連中を呼びに町へ走る。みんなが戻ってくると、相変わらず彼を見つめたまま、彼女はくり返す。「あの男の名前はバニング・ジェーンライトだったのよ」

嘘だろう、と誰かが言う。何年も前のときとおんなじだ、あんたがあの女にコンスエロ・ガルシアとかいう名前を勝手につけたときとおんなじだよ。でたらめを言ってるんだろう。

彼女は彼らの方を向き、「そう思うんなら、あの人をあそこで腐らせとくといいわ」と言い捨てる。町に向かって歩いていく彼女の背中に、彼らは口々に呼びかける。彼女は肩をすくめる。「ど

CamScannerでスキャン

うとでも好きなようになさいな」

人々はバニング・ジェーンライトを木から降ろし、沼地に埋葬する。

161

おれの名前はバニング・ジェーンライト、とひとつの声が十五年後に彼女に語る。だがそれは結局のところ、彼女の頭の中の声にすぎない。彼にその名を与えたのも彼女自身なのだ。いまや彼女の足元には、男が死んで横たわっていたりはしない。ドアの方をふり向くと、十五年前と同じように息子がそこに立っている。彼女としては、いま自分の頭の中で聞こえている声が、彼の頭の中でも聞こえているはずだと考える理由は何もない。白い髪の水上修道士は、青いドレスの娘が母の部屋にいないのを見てとると、即座に部屋を飛び出していく。前のときと同じ、これが二度目の転落だ。もっとも今回は、それによって無垢の人生が断ち切られたとは言えないが。彼はそのまま表に走り出て、さっき大暴れした際に自分が割ったガラスの破片を踏みつけていく。グリーク・ジュディは酒場の入口に立って彼を見守る。マークが船に戻ると、乗客たちは依然脅えきって身を縮め、本土に戻る船を出してもらうのを待っている。船はおそろしい勢いで走る。酒場にいるジュディのもとに、川を包む霧の彼方から、旅行者たちの悲鳴が聞こえてくる。商売はしばらくお休みね、と彼女は考える。あるいはそう口に出しさえするかもしれない。もっともそこにはほかに誰もいないし、確かなことは何も言えないのだが。

CamScannerでスキャン

その後、彼の怒りも徐々に静まって、やがては穏やかな悲しみに変わっていった。川の上でのあの底知れぬ孤立の瞬間は、もう二度と見えなくなった。島で一夜を過ごしたあとまもなく、前の船長の遺骸の残りを船底から解放してやろうと川の中に入っていったが、そこにはもう何も残っていなかった。母親に会いに帰ろう、と彼はいつも思っていた。グリーク・ジュディが食べ物とビールを持ってきてくれた。彼の苦悶に対し、ジュディは優しい態度を示すようになった。ある夜、三年あまりのちに、ジュディは食べ物とビールではなく、知らせを持ってやって来た。彼はもう一度島へ上がっていった。ホテルの前の通りには、母親の部屋の外の廊下まで上がろうとする中国人たちがひしめき合っていた。だが、死肉を喰らおうとする鳥のように彼らが狙っているのは、母の持ち物ではなく、彼女が誰だったのかという謎だった。俺の死体ならまだいい、とマークは彼らに言った。だけど母親にそんな真似はさせるものか。階段を上りきると、母の部屋のドアが開いているのが見えた。一瞬彼は、母さん、と口にしかけた。ドアの角を曲がったところで、ベッドにいる母親に自分の声が届くようにと。だがその代わりに、彼は母親を名前で呼んだ。ドアの角を曲がり、枕の上に横たわる白い髪を見た彼は、一秒の何分の一かのあいだそれを自分の髪だと信じた。

デーニア、と彼は呼んだ。彼女がかすかに動くのが見えた。彼はその枕元に行った。彼の白い髪が彼女の白い髪ともつれ合った。彼女は老いて皺だらけになった顔を上げた。ずっと前から口もとにあったあざは、いまや無数の線のうちのひとつにすぎなくなっていた。彼女は手を伸ばして彼

の顔に触れた。目には乾いた涙が浮かんでいた。彼女はしばし、彼を生む苦しみをまざまざと生きなおしていた。彼女はしばし、プヌドゥールの森の葉蔭にいて、ウィーンのアパートの屋根の下にいて、川の上の船の防水シートの下にいた。だが彼女に降り注いでいるのは、彼女のまわりから聞こえてくるのは、雨ではなかった。それはこつこつと何かを叩く音だった。何が何を叩いているのか、彼女は知っていた。彼女の部屋のドアに触れようと、何が拳を持ち上げているのかを知っていた。息子は彼女の体をぎゅっとつかみ、何か言いかけた。だが彼女は指を息子の口へ持っていって、その言葉を押しとどめた。「あたしはもうみんなを許したのよ」長い亡命生活をついに終えた彼女は言った。「今度はみんながあたしを許してくれる番よ」

彼女は踊りながら家路についた。

163

誰も彼女を木に吊そうとはしないだろう。それは彼にもはっきりわかっていた。だが、長い年月を経たいま、墓場の沼地はほとんど満員になってしまっていた。彼女を埋葬する場所はどこにもなさそうだった。そこでマークは母親を白いシーツに包み、十五年前のあの夜に彼女のもとにやって来た男の腕の中に埋めた。といっても残っていたのは、骨と泥ばかりだったけれども。彼は母親の上に土をかけた。それから、母親がかつてジュディ・ガルシアと名づけた女と腕を組んで本通りを戻り、一人の旅行者もいない彼女の酒場で二人きりで酒を飲んだ。あの時はひっぱたいたりして悪かったわ、と最後の方になってジュディはぽつんと言った。悪かったのはこっちだよ、と彼は答え

て、悲しげに微笑んだ。あなたが微笑む顔なんて初めてだわ、と彼女は言った。悲しそうな微笑みでも素敵だわ。彼はカウンターごしに身を乗り出し、彼女の額にキスをした。彼女の顔が彼の髭の中に埋もれた。彼女はくすぐったくて笑った。その笑いを誤解した彼は、古びてボタンもなくなってしまった外套を肩にかけ、黄昏の岸辺に向かって歩き出した。船に戻ると、そこには青いドレスを着た娘が、何年も前と同じ金髪で、少しも変わらぬまま、少しも齢とらぬまま、彼を待っていた。

水上修道士と若い娘は川を渡って本土へ行き、サムソン行きの最終バスに乗った。カーラはじきに彼の肩にもたれて眠った。サムソンに着いた二人は安食堂で食事を済ませ、ハイウェイから五分行ったところにあるモーテルに部屋を取った。部屋にはベッドが二つあった。好きな方を選びな、とマークは言った。娘が一方を選び、彼がもう一方を取った。ラジオは鳴らなかったし、二つのベッドをはさんで置かれたテーブルランプの電球は切れぎれにぶんぶん音を立てた。部屋の外にはコーラの自動販売機があって、十分ごとに誰かが買っていった。マークはカーラに、いままでずっとどこにいたのかとか、何をしていたのかとか訊いたりはしなかった。自分の母親のことも話さなかった。どのみち知っているだろうと思ったからだ。二人は今後の計画を立てたりもしなかった。彼は暗闇の中でベッドに横たわり、ハイウェイの音に耳を澄ませた。子供の頃に聞いた、製氷機の音と似ていなくもない音がした。彼女が寝つくのを彼は聞いていた。そして、夜もすっかり更けてから、じきに自分も寝ついた。彼は悪夢を見た。父親についての悪夢だった。目を覚ますと、彼女が額をなでて、大丈夫、何でもないわ、と慰めてくれていた。窓ごしにハイウェイから吹いてくる

そよ風の下で、彼女はしばらくそのまま彼を慰めてくれた。やがて彼がもう一度寝つくと、今度は中西部で育っている彼女の姿を夢に見た。先生の家のポーチに立ったカーラが、空を見上げて星の名前を一つひとつ口にし、平原に埋もれた橋の向こうでそよぐ木の葉を見つめていた。夢の中で彼は娘の声を聞き、ドレスの青い生地が顔に触れるのを感じた。朝になって目が覚めて、彼は娘の名前を呼んだ。モーテルの部屋には陽がいっぱいに差していた。陽ざしの真ん中で、彼女のベッドは空っぽだった。宿代を払いにオフィスへ行った彼は、係の女から、カーラは三時間前に別のバスで発ったと教えられた。

164

銀色の野牛たちとともに暮らし、移動をつづけながら、彼は七年にわたって彼女の足跡を追った。両腕の白い毛はいっそう長くなり、前にもまして荒々しい風貌になった。顔も一面毛だらけになって、もう誰もそこに悲しげな微笑みを認められそうになかった。世界のてっぺん近くの山の上で、彼女が見つかった。天文台に住み込んで働いていた。一人で、幸せに暮らしていた。そこは彼女の頭上に浮かぶ燃える野原に、より近い場所だったのだ。彼は野牛たちと、天文台のそばの森で暮らした。彼女が一人で生きるのを選んだことを彼は尊重し、彼女に会いに行きもしなかった。彼女の住む天文台の壁の外で、彼は彼女とともに星を眺めた。外套はとうの昔に捨ててしまっていたし、外套の金ボタンはもっと昔になくなってしまっていたけれど、彼はいままたそのボタンを使って、今夜彼女がどの星を観察しているのかを賭けた。勝算としては悪くない賭けだった。彼女を脅(おびや)

かしに来た獣たちを彼は追い払った。時おり彼女は建物の入口に出てきて、そこにいるのは誰、と呼びかけた。誰もいないと彼女が確信するまで、彼はじっと身を低くしていた。さらに何年もの年月が過ぎたある日、彼はふと、しばらく前から彼女の姿を見ても聞いてもいないことに気づいた。そして、彼女が危険にさらされていないことを確かめようと、恐る恐る天文台の中に忍び込んでいった。開いたままの丸屋根の下、ほとんど眠っているかのように、彼女は床の中央に横たわっていた。望遠鏡は彼女に向けられていた。まるで今度は星たちが彼女を観察し返しているみたいだった。いくら彼女が帰属する場とはいえ、野原に彼女を委ねるわけには行かない。だから彼は、彼女をそのままそこに残していった。どのみち埋葬はもうたくさんだった。

銀色の野牛たちとともに、彼はさらに北へ移動していった。自分たちがどこへ行こうとしているのか、野牛たちはちゃんと知っているようだった。雪深い平原を越え、男と野牛の群れは霧に包まれ旅をつづけた。炭坑町もだんだんまばらになり、生命の徴候はしだいに乏しくなっていった。彼らはどこかへ向かって走っていた。その場所にたどり着いたとき、雪が降っていた。彼にはわかった。もうこれ以上彼らと一緒に進むわけには行かないことが。それは彼の場所ではないのだ。彼らが自分を置いて去っていくのを、彼は一人見送った。彼らが前進をつづけるそのすさまじい勢いを見て、行く手に居あわせるものたちを彼は憐れんだ。目もくらむような雪が降りすさぶなか、彼らが消えていく姿はもうほとんど見えなかった。だがそれでも彼は、彼らの足跡を追い、彼らの足音をたどり、北極の、とある洞穴の口までついて行った。彼らが洞穴の中に消えてゆくあいだ、そこに立って耳を澄ましていると、暗闇の中から、ジャングルのように不思議と熱い突風が、彼の顔に

CamScannerでスキャン

吹きつけてきた。
　一方の端から世紀を出た彼は、こうしてもう一方の端からふたたび世紀に入っていった。北アジアのある村にようやくたどり着いたとき、時は一九〇一年であった。彼はしばらくその村で暮らした。そして彼は、かつてそれが他人のための時間であったように、いまやこれこそが自分の時間であることを悟り、村を去って山を降り、北極海に向かっていった。やがて彼は氷にとじ込められた湾に出た。そして年老いた、白い毛に包まれた体で海中に飛び込み、一番近い氷塊まで泳いでいった。彼は最後の日々を、氷塊から氷塊へと飛びうつっては、そのたびに氷の表面に耳をくっつけて過ごした。島で暮らす子供だった頃に聞いた氷と同じく、海の氷山もまた、はっきりコチコチと音を立てている。いま彼が捜しているのは、自分の心臓の鼓動と同じリズムで融けていくはずの、たったひとつの氷塊だった。それぞれの氷について、あまりゆっくり調べるわけには行かない。ぐずぐずしていると耳が凍って氷にくっついてしまうからだ。それじゃあ木に吊されるのと大して変わらんものな、と彼は思った。とうとうその氷を見つけたとき、はじめはあまりに疲れていて、安堵の気持ちを感じる余裕さえほとんど残っていなかった。が、しばらくそこに横たわって、氷に指先とかかとが凍りつき、それから体の毛が凍りついていくうちに、彼はようやく安らぎを感じはじめた。彼はうとうとと眠りに落ちていった。南へ向かう海流に乗った氷は、次第に小さくなっていき、海流からそれて独自の進路を流れ出した。しばらくのあいだ、彼は自分がすべてを思い出すに任せていた。いろんなことが次々と頭に浮かんだ。来たるべき年月のさまざまな出来事を彼は思い出した。やがてとうとう、氷は完全に海の一部となった。最期の息の暖かい霧を通して、彼は、

百の幽霊たちの記憶がふわふわと漂うように空へ上ってゆき、ついには空しく破裂するのを見守った。

CamScannerでスキャン

Uブックス版への訳者あとがき

本書『黒い時計の旅』は一九九〇年にベネッセ（当時福武書店）から刊行され、幸い本国アメリカ以上の（と言っていいと思う）好評を得た。新聞雑誌の書評でも絶賛され、相当数の読者を得たし、九五年には文庫版も刊行されて読者層はさらに広がった。「高校のときに読んで衝撃を受けた」といったコメントを読者からいただいたことも一度ならずある。そうした傑作が何年か前から入手不能になり残念に思っていたが、それが今回白水Uブックスから再刊されることになり、訳者としてとても嬉しい。

スティーヴ・エリクソンはこれまでに七冊の長篇小説と、二冊のノンフィクション（まあこの人の場合ノンフィクションと言っても作者の幻想に相当染まっているのだが）を刊行している。そのどれもが、それぞれの特色と凄味を備えた読み応えある本ばかりであり、砂嵐のロサンゼルス、氷河期のパリ、干上がったヴェネチアといった鮮烈な情景が圧倒的な第一作『彷徨（さまよ）う日々』、さまざまな川や運河を背景に男の首を切り落とす神秘的な女性が時を超え場所を超えて登場する『ルビコン・ビーチ』、アメリカ建国の英雄トマス・ジェファソンとその奴隷だったサリー・ヘミングズとの愛を軸にアメリカの意味を問い直す第四作『Xのアーチ』、子を失った母の哀しみを基点に相変わらず時空を自在に超えて物語が展開する久々の最新作 *Our Ecstatic Days* 等々、どの作品も素晴らしい。だが、かりにまず一冊でこの作家の魅力を知っていただくには、依然としてこの第三作『黒い時計の旅』が最適ではないかと思う。

第一・二作『彷徨う日々』『ルビコン・ビーチ』も物語を描き出すカンバスの壮大さにおいて見事だったが、この『黒い時計の旅』では、それに加えて、複雑な物語がきわめて精緻に編み上げられ（しかもその精緻さは、緻密な計算によるというより、ひたすら烈しい幻視力の成せる業に思える）、とにかく話として面白い。かりにドイツが負けずヒトラーがいまだ死んでいなかったら、という「もうひとつの二十世紀」を夢想した作品、とひとまずまとめてよいだろうが、それは決して、片方の極に我々の知る現実の二十世紀があってもう一方の極に作家の幻視したもうひとつの二十世紀がある、といった静的な対比ではない。両者が複雑に絡みあい、浸食しあっていて、読んでいくうちにいつしか、我々の知るこの二十世紀こそ実は誰かの幻視した虚構なのではないのか、という気になってくる。すぐれたメタフィクションの基準が、読み手の現実感覚を揺さぶり、「この『現実』もフィクションではないのか」と思わせることだとすれば、『黒い時計の旅』はまさに最良のメタフィクションだと言ってよいと思う。

だが、「メタフィクション」という言い方が高度な知的遊戯といったようなものを連想させ、情念や愛欲などとはあまり縁のない内容を連想させるとすれば、それは大急ぎで訂正しておかねばならない。実際エリクソンほど、複雑な作品構造と、烈しい情念とが不可分に絡みあっている作家も珍しい（僕はあるところで彼のことを、ほとんど本気で「魂のポストモダニスト」と呼んだことがある）。たとえば、ある男の激しい復讐心と、子を想う母の愛とが真っ向から対立する、などといえばほとんど安手のメロドラマに聞こえそうだが、この本を読んでいただければ、まさにそうした設定が、この作品の基底を成すメタフィクション構造と必然的に織りあわさっていることがおわかりいただけると思う。

レイモンド・カーヴァーを最良の例とするリアリズム小説や、当時はニュー・ロスト・ジェネレーションなどと呼ばれもした新しいヤッピー世代の生態をいち早く捉えた風俗小説などが前面に出ていた

一九八〇年代後半のアメリカ小説界にあって、スティーヴ・エリクソンの一連の作品は、強烈な幻視力に支えられた、魂の闇に降り立った者の報告書ともいうべき迫力によってひときわ異彩を放ち、トマス・ピンチョンをはじめとする作家仲間から絶賛された。二十一世紀に入った現在、アメリカ小説はリアリズムがいくぶん下火となり、幻想の世界へと自在に飛んでいく作品が多くなっていて、その意味では時代がエリクソンに追いついてきた感があるが、エリクソンほどの強烈で壮大な想像力を持った作家は依然として稀である。二十世紀末から二十一世紀にかけての最重要アメリカ作家の一人と言って間違いないと思うが、これまでのところ本国アメリカでの評価はあまりに物足りず、日本の読者の方がずっと敏感にこの作家の凄味に反応してくれている。しかもこの八月には、エリクソン版私小説ともいうべき、ドタバタの笑いと黙示録的幻視力が不思議に混ざりあった怪作『アムニジアスコープ』の邦訳も刊行される（拙訳、集英社）。この『黒い時計の旅』復活と相まって、日本でのエリクソン読者層がさらに広がる契機になればと思う。

スティーヴ・エリクソンの著作はこれまでのところ以下の通り。

Days Between Stations（1985）小説『彷徨う日々』越川芳明訳、筑摩書房

Rubicon Beach（1986）小説『ルビコン・ビーチ』島田雅彦訳、筑摩書房

Tours of the Black Clock（1989）本書

Leap Year（1989）ノンフィクション『リープ・イヤー』谷口真理訳、筑摩書房

Arc d'X（1993）小説『Xのアーチ』柴田元幸訳、集英社

Amnesiascope（1996）小説『アムニジアスコープ』柴田元幸訳、集英社（近刊）

American Nomad（1997）ノンフィクション
The Sea Came in at Midnight（1999）小説『真夜中に海がやってきた』越川芳明訳、筑摩書房
Our Ecstatic Days（2005）

近年はカリフォルニア芸術大学で創作を教えるとともに、文芸誌*Black Clock*の編集長を務め、リチャード・パワーズ、サミュエル・R・ディレイニー、グリール・マーカスといったそうそうたるメンバーを書き手に起用して、刺激的な雑誌空間を展開してもいる。

一九八九年の時点、『黒い時計の旅』がアメリカで刊行された時点では、スティーヴ・エリクソンは僕にとって気になる存在ではあるがまだ未読である数多くの作家の一人でしかなかった。その僕に「この人すごいですから、ちょっと読んでみてください」と言ってくれて、訳者にまで抜擢（ばってき）してくださったのは、当時福武書店編集部に在籍していた城所健さんである。この場を借りて、城所さんにあらためて感謝する。また、九五年の文庫版刊行にご尽力くださった武藤誠さん、吉田元子さん、そして今回の白水Uブックス版刊行をお引き受けくださった平田紀之さんにも感謝する。

最後に、城所さんにかつて言われた科白を、僕もいま、読者の皆さんに向かって申し上げたい――この人すごいですから、ちょっと読んでみてください。

二〇〇五年八月　　柴田元幸

CamScannerでスキャン